年中行事Ⅰ（十二月～六月）

鹿児島大学卒業生　岩切公美

一、はじめに

「海の色が違う・・・」と港へ入ってゆく船で私はふと思った。それはエメラルドグリーンに近い美しい青をしていて、私が知っている港の海の色ではなかったのである。南に来たなあと実感するとともに、この土地で、この私にとって初めての土地で一体どんな話が聞けるのだろうと、期待と不安が渦巻く。日射しは強く明るく、風は強い。が、その対称に影の部分が一層印象づけられ、さらに風にゆれる木々のたてる音が寂しさをそそる。美しく、そして寂寥感のある土地だなと感じた。

さて、今回の調査テーマは「年中行事」であるが、これは前回の民具調査とかかわる部分があり、興味を抱いたので選んだテーマである。行事は実際に目で見て確かめるのが一番いいと思うのだが、今回、伝承者からどれだけのことを聞き出せるか、これが私にとっての大きな課題である。予習した事例の数々が、現在どう変化しているか、あるいは廃れてしまったか、また、新しい行事が生まれているか、新しい事例が見つけられるだろうか。漁村、農村との比較、鹿児島との比較で、南種子町を特徴づけようと調査に臨んだ。

二、調査事例報告

（一）、門木、門松（カロギ、カドマツ）

1、シイ、マテ、竹、松を使い、シメナワを張る。材料は辺りの山々から調達する。不幸のあった人の家は立てない。最近、学校、商店では、松竹梅という本土に見られるような門松をたてるようになった。〔茎永、雨田〕

2、松、竹等を使い、ユズリハを飾る。シイの木を使うこともある。〔西之、崎原〕

3、松、竹、シイ、マテを使い、玄関の両側に二本立てる。まず地面にくいを打ちつけて、そのまわりに木々をくくりつけていく。竹は大きいものは2m位あり、シメナワを張る。

シメナワにはモロバ、ダイダイ、ユズリハをつけ、炭を三つ適当にはさみこむ。〔西之、崎原〕

4、くぬぎ、マテ、松、竹を使い、家の入口に二本たて、それぞれにユズリハ、ウラジロをつけてシュエーを供えておく。門松にはシメナワを張るが、元日を迎えたら片方をはずして垂らしておく。〔西海、下立石〕

5、くぬぎ、カラタケ、松、マテ、シイ、ユズリハ、モロバを使い、玄関の入り口に二本立てる。約一m位の高さになるということである。予め打ってあるくいにまきつけるようにしてたてていき、最後は、三ケ所なわをまく。昔は三一日の満ち潮のときに、現在は夕方に男、たいていは年寄がつくるものである。女のワカシュ（若衆）は作ってはならない。シメナワにはスミはつけない

6、その家の主人がシイ、松、竹を使い、家の門口に二つ作る。昔は正月二〇日までずっとシメナワは張っておくものであったが、現在は片方を垂らしておく。〔茎永、松原〕

7、シイ、マテ、竹を家の出入り口に立てる。十二月三〇日、三一日の間につくる。高さは一m位で五ケ所をしばる。シメナワは張る。〔島間、大久保〕

8、松、竹、シイの木を立てる。中には栗の木をたてる人もいた。三ケ所を締める。シメナワは張らない。〔上中、大宇都〕

9、敷地内の道路との境にたてる。〔上中、大宇都〕

（二）、若木迎え

1、十二月三一日に、お歳暮として主人が正月用のたきぎを四把ほど馬にのせ、舅の家に持って行った。〔茎永、松原〕

（三）、シュエー取り、ケアライ

1、元日の朝に谷川に、水、小石等をとりに行く。それに竹の笹をひたし、家々にふりまき清める。ケアライとは「ワルサヲハラウ」意で、三一日の夕方に、男が海から砂をとってきて、（現在は塩水で洗い清めた砂）正月前の清めとして家々にまく。〔島間、大久保〕

2、米と酒と餅を持っていき海に供え、「竜宮の神様にあげもうそう、お潮をもらいもうそう」と言い、海水、砂、バラソー（海藻）をとる。男が行く。閉経後の女性も可。〔西海、下立石〕

（四）、若水くみ

1、元日の朝、一番ドリが鳴くのを待って共同使用の泉に汲みに行く。タンゴ（オケ）酒、餅、米を持っていき、それらを供え、文句をつぶやき、水をくむ。くんだ水で、神棚にお茶をあげ、その後、家族全員の顔を洗うのに使われる。〔西海、下立石〕

2、『水迎え』という。年が明けて、一番ドリが鳴いてからくみに行くが、各家々でその年一番の水をとろうと争って行くものであった。ダイダイ、ユズリハ、モロバ、正月の花、米を持参し、供える。くむ時に「年あらたまりて年とり男が・・・水はくまねど黄金くむ」（一部不明）と言う。〔島間、大久保〕

（五）、臼おこし

1、終戦後、しばらくの間行っていたが若い衆がいなくなってしまったり、臼そのものが使われなくなってしまったことから廃れていき、現在はしない。学校を卒業してから二五才までの青年が、公民館に集まって、それから全員で家々の土間に置いてある臼を祝ってまわる。農作業着ではない普段着でする。臼は正月前にシメ縄を張って、一升マスに米と餅を入れて飾り、祝っておく。青年衆は米を臼に入れて、「米つき始め」の文句にあわせて米をつくまねをする。〔西之、崎原〕

2、昭和三〇年代まで行われていた。文句を言いながら、それに合わせて「こっつんこっつんことこと、こっつんことこと」などと調子よくついた。ついた礼として餅をもらって帰り、最後に公民館で、みんなで煮たきして食べた。その際に使う野菜は、どの家からでも勝手に取ってよく又、家の人も何も言わず、かえって「祝いものだから」と取られたことを喜ぶものであった。〔西之、崎原〕

3、現在はない。昭和三〇年頃まで行っていた。普段使っている臼に感謝をする為の行事。正月二日の早朝、一番ドリが鳴いてから若い者が集まって、「あらたまって年の若さに米つき始むる若男が　東のこうさの北の峰にたったる　うのよの松で、臼切って、その枝々で杵切って、唐の鳥と日本の鳥と飛びあわせないうちにつかせたまえよ、せんとくとくとまんとくとくをつかせたまえよ」と言って一升マスに入っている餅と米を臼に入れて、杵で米をつくまねをする。餅はもらって帰って、公民館で煮たり焼いたりして食べた。

〔茎永、雨田〕

4、元日の晩、つまり二日の早朝に行った。倉や庭などに置かれ、ユズリハ、モロバをつけ祝いの綱（シメ縄）で祝ってある臼に米を入れ、文句を言いながら「とんとんとんかたかた」というようについた。二十四、五年頃からなくなってしまった。

〔西海、下立石〕

5、マスには餅を小さいもの七つ位入れておいた。青年（ワカイシュ）は杵にくくりつけてあるシメ縄をほどき、臼にくくり直す。そしてその家の人が起きないように、わからないようにして米をつく。このとき、決して話をしてはいけない。

〔西海、下立石〕

6、二日早朝、一時過ぎごろ、一番ドリが鳴くと始まる。まず、「おいわいをしましょうか」と青年衆が言うと、家の人は「いおうてください」と返答する。そしてとっくくとっくくと文句を言いながら米をつく。米のつき方が悪いと、家の中から年寄が怒ることもあった。精米機がでてくるとともに臼が使われなくなり、廃れてしまった。

〔茎永、松原〕

7、三一日の夕方にマスに米を入れ、その上に餅を奇数で入れて、ダイダイをのせておく。一番ドリが鳴いてから、青年団が手わけして各家々をまわる。手杵にはシメナワが二本あわせて×印にくくってあり、これをはずし、臼にくくり直してから米つきをした。まず「祝い申そう」と言って、家の人を起こさないようにしてつく。私語は厳禁であった。

〔島間、大久保〕

8、まず「お祝い申そう」と青年衆が言うと家の人は「イオーテタモレ」と返事をする。米つきが終わると「お祝い申した」と言って帰る。ついてもらった米は、家族中で食べる。

（六）、礼まいり

1、二、三日かけて家族中でかける。長男の家、嫁の実家に行く。長男の家には親戚が集まっているので、そのときに他親戚との挨拶を済ませる。その後、墓参りをし、宴会となる。

〔茎永、雨田〕

2、二日に礼言いに行く。まず嫁の実家に行き、次に自分の実家という順で、家にあがって仏様を拝み、挨拶をしてから墓参りをする。

〔西之、崎原〕

3、二日から三日に行く。子供はたいていは連れていかないが、もし連れていく場合は長男のみだそうである。一、嫁の実家、二、親戚まわりの順。

〔西之、崎原〕

4、三日にする。お餅や焼酎をもっていく。

〔西海、下立石〕

5、嫁の実家は二日に行き、三日は親戚まわりをする。「レイイー」に行く、と言う。

〔茎永、松原〕

6、嫁の実家、里親のところに行く。

〔茎永、松原〕

7、フツカイワイ（二日祝）のレーイーには米と鏡餅よりやや小ぶりの餅を二つ位持っていく。墓参りをするときには「アラーネ」

というお米を茶碗に入れ、水で浸したものを供える。
〔島間、大久保〕

8、レイに行く。
〔島間、中之町〕

9、レイユーテイク。餅、米、焼酎、魚を持っていく。
〔島間、中之町〕

（七）、パチパチ（バチバチ）

1、一月六日に、囲炉裏でカシの生シバを焼き、「オニハソト、フクハウチ」と言って鬼を追い払う。カシの生シバは、焼くとパチパチと音を立てるので、その音に驚いて鬼は逃げるという。また、家のまわりには松の葉とカシの木を一緒にしてさしこんでおく。鬼よけの意味らしい。
〔茎永、雨田〕

2、七日晩、カシの葉とダラの木を家の四すみにさし、仏壇にも供え、門松にもさす。カシの葉は家族全員で焼く。〔茎永、雨田〕

3、七日晩、カシの葉を焼く。鬼が来ないようにとダラの木を仏壇、門松に供える。十四日までさしておく。〔西之、本村〕

4、七日晩、ハマガシの葉を焼く。ダラの木とバチバチノキ（カシ）と松の葉をまとめたものを、墓、カマド、神棚、船にも飾る。
〔西海、下立石〕

5、七日夕方からジロでパチパチの木を焼く。パチパチは神棚、火の神（カマド）門松に供え、〃アクナモンが入ってこんように〃する。
〔茎永、松原〕

（八）、クサイモン（福祭文）

1、青年団（現在は人手が足りないのでＰＴＡの若い人が手伝う）が各家々を、福祭文を唱えてまわる行事。まず一人が唱えると、あとに続いて残りの人が復唱する。最初は宝満神社の方向にむかって、次に公民館に、それから二、三組に分かれて一戸一戸まわる。各家々でお礼として昔は鏡もちを、今は一戸千円位ずつわたすという。新築の家があれば、その家に最後に全員集まってごちそうを食べる（新宅祝い）

福祭文（一部）

くさいものよ　そうろうよう
いつもより今年は
門の松が栄えた
栄えたこそも道理よ
四方のすみずみに泉酒がたたえた
たたえたこそも道理よう
これの殿の御門に
千石船が浮き来た
浮き来たこそも道理よう
黄金千両積み受け
銭と金子を祝うろう
銭花はつぼうて　黄金花が咲いたろう
咲いたこそも道理よ
これの殿の御門に
鶴と亀が舞い来た
舞い来たこそも道理よー……以下略

2、七日晩、夕飯を食べてから公民館に集まってから始める。家

の入り口の門松のところで行い、焼酎、お餅を礼としてもらう。新築の家があれば新宅祝い、なければ公民館で宴会をする。

〔西之、崎原〕

3、若者、青年団を頭として、小学校の高学年以上の子供等が参加する。まず本村神社（氏神）で唱え、次に公民館、その後一戸一戸をまわる。終わると大人のみで宴会となる。本村は来年からは二つに分かれて行うそうである。〔西之、本村〕

4、青年団が氏神様に集まって御祓いをし、酒をくみかわす。その後一戸一戸まわる。各家の縁には盃が置いてあって、酒がふるまわれる。〔西海、下立石〕

5、昔は福祭文ときちんと発音するものであった。第一唱者は青年団のリーダーである。昔は男のみの行事であったが、現在は女が参加してもかまわなくなった。〔茎永、松原〕

6、七日晩、部落の青年衆が集まって、二、三組に分かれて家々の門口でうたう。一旦、うたい始めたら決して止めてはならない。家々の間が遠ければ、必死で走ってつなぐものであった。最初に豊受神社で、次に三崎神社の方向にむかってうたい、それから一戸一戸まわる。家の人は正座して聞き、礼として昔は餅をあげていたそうである。〔島間、大久保〕

（九）、系図祝い

1、昔はどこの家でもやっていた行事ということだ。祈祷師に御祓いをしてもらった「お洗米」を災難、病気がつかんようにと、家族全員でそれを噛んだ。群細は不明。〔西之、崎原〕

2、一月一一日にした。一族が本家に集まり、床の間で系図をひらき、酒を飲んだり、ごちそうを食べる、という行事

〔西之、崎原〕

（十）、船祝い

1、船主の家に船乗りが集まって宴会をする。〔西之、崎原〕

2、昔は共同で船を持っていて、その中から毎年改選する役員の家で宴会をする。あるいは個人所有の船であればその船主の家で行う。〔西海、下立石〕

3、大漁祈願の宴会を行う。〔島間、中之町〕

（十一）、道具の祝い

1、期日は不明。庭に筵をしき、鎌、鍬等、農作業に使う道具や、包丁などを並べておき、カシワイチゴの葉にカシワメシや煮しめをのせ供える。〔西之、崎原〕

2、二十日に、傷をせんようにと道具に、カシワイチゴの葉にご飯をのせたものを供える。〔西海、下立石〕

3、八日朝、鎌やその他の農具をきれいに洗って、ダイコンやツワの煮しめとごはんを供える。クワイレ祝い。〔茎永、松原〕

（十二）、十一日祝い

村落が二、三に分かれ、青年衆がめでた節を歌ってまわる。女性は参加しない。昔は一戸一戸全部歌ってまわったが、今はまわらないそうである。各家では来た人にごちそうをふるまう。食物や、酒が入ったところでめでた節を歌いだす。このめでた節には、ゆっくりと厳粛に歌われる。〔島間、大久保〕

（十三）、ダゴサシ、カーゴマー

1、十四日に餅をつき、柳の枝に四つずつさしておいたもの（ダゴ、稲穂をかたどったもの）を門口にさしておくと、子供が来てそれをとっていく。そのときに子供に水をかけて驚かせるという。カーゴマーは下中の人が来て踊ってくれるそうである。〔西之、崎原〕

2、柳の木を二〇cm位に切って、皮をはぎ、ひもを「左まき」にまきつける。それを火であぶって黒く焦がし、ひもをとると、まいてあったところが白く残る。これに団子をさし、神棚に供える。他に家の四方の柱にもさしておく。〔西海、下立石〕

3、一四日にダゴサシをする。木は柳の木に限らないが、柳の木がいいということである。この日にイワイカエといって、正月飾りの枯れたものをとりかえたりする。墓参りにも行く。カーゴマーは二〇日までには他地域から踊りにくる。〔茎永、松原〕

4、神棚、床の間の花びん、家の四方にある柱に供える。ダゴは昔は丸い餅を使っていたが、今は四角の切り餅（作るのが比較的簡単であるとのこと）を使う。〔茎永、松原〕

5、一四日晩に餅をつき、家の中心の柱に、団子をさした柳の木をさしておく。一五日には、青年団の中から代表した男の人が女装し、家に飾ってあるダゴを持って踊る（カーゴマー）〔茎永、松原〕

6、柳の木にダゴをさしたものが、「稲穂が垂れる」様子をあらわしているらしい。亭主柱、神棚、門口、床の間にもさす。団子は家の中に飾ってある分は、適当にとって食べるが、門口にさしたものは子供がとっていく。カーゴマーはない。〔島間、大久保〕

（十四）、正月の終わり

1、二〇日正月飾りの一切をとり海に流す。〔西海、下立石〕

2、一九日に門木をたおす。飾りもとる。庭のオコシバで飾りを焼く。〔島間、大久保〕

3、二〇日に正月飾りをとり、松の葉を飾る。松は、次の正月を「待つ」の意味だそうである。〔茎永、松原〕

（十五）、桃の節供（三月の節供）

墓参りをし、フツ餅（蓬餅）を作り、桃の葉をとってきて供える。〔島間、中之町〕

（十六）、五月の節供

1、団子、ツノマキ、アクマキを作る。〔島間、中之町〕

2、麦の節供であり、麦の収穫の祝いの日であった。麦の団子やふくれ菓子を作った。男の子の祝い、という日ではなかったようだ。〔島間、大久保〕

3、ツノマキ、アクマキ、カカラまんじゅう（カシワの葉で蓬餅を包んだ菓子）をつくる。コイノボリ等は昔はなかった。〔茎永、松原〕

（十七）、ウマヤキ

1、田を耕すときに、馬が怪我しないようにと、ウマの尻に　の焼印をおす。今はウマがいないので、公民館でお払いをしてもらって安全を祈る。三月下旬頃に行われた。〔茎永、松原〕

（十八）、イソアソビ

1、潮の時期をみて期日をきめる。女の人はミナ（貝）をとったり貝がらを拾ったり、個々の家でそれぞれ遊びにいったものである。村落によってはいっせいに皆行く所もあるがここでは特別な行事というわけではない。

〔島間、大久保〕

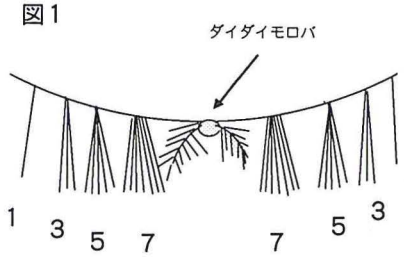
三、考察

以上の事例等から、南種子町における正月から六月までの行事を順をおってつなげてみる。

一二月の中旬頃から正月準備を始める。家や庭の掃除、墓の掃除、タキモノトリ（正月は仕事をしないのでその分のたき木をとっておく）をして、家畜の為のショウガツンクサを準備する。ショウガツギは舅の家にも持って行く。お歳暮であるが、年寄りにとってはタキモノトリは重労働であるから、一番ありがたい贈り物だったという。

三〇、三一日にシメナワや門木を作る。図1のように垂らす数は奇数である。カドギは、松、マテ、竹、シイ等が主に使われるが、マテが梅のかわりなのだという説もある。昔、この地方には梅はなかったらしい。生木を切ってはいけない、ということで今は門木をたてる人も少なくなった。配付される、門松の絵を貼るそうである。

図1



餅つきは年中、何かあるごとによくしていた。正月の餅は二八日ごろからつく。二九日はクノモチといって「苦のモチ」の意味にとられて縁起がわるいといってつかない（上中、大宇都）。神棚に供える餅、仏壇に供える餅、鏡餅などをつくる。

他にショウガツンキといって、正月に使う分のたきぎをとっておいたり、家畜用のえさのショウガツンクサも予めとっておいたりし、たきぎは、舅の家にも持っていく。

鎌、鍬など農具や、あるいは漁具、仕事に使う道具類は、筵をしいた上にきれいに洗ってのせ、ユズリハ等で祝っておく。臼にもシメ縄をつけ杵にもつける。一升マスに米と餅を入れてそばに置いておく。臼はひっくり返しておくというところもあった。他、ミソガメ、水ガメにもシメ縄をつける。玄門、門木にもつける。玄門にはつけない家もある。門木に張ると、通行に不便であることから、一度くぐったら片方は垂らしておいてよい（上中、大宇都）とか、元旦を過ぎたら片方を垂らしてよい（西海、下立石）等、たいていは垂らしておくようであるが、古くは正月が終わるまでそのままにしておくものであったという。垂らすのは左右どちらでもかまわない。

なお、法華宗の家では、寺からもらったお札を、火の神、仏壇、亭主柱等に貼る。

年とりの晩は、ニワトリのすき焼や煮しめ等、ごちそうを食べる。なかには正月の食事よりもいいごちそうがでた、という家もあった。

元旦を迎え、一番ドリが鳴くと家の主人は若水くみにでかける。それぞれの家で日常使用する水くみ場、井戸、カワ等に行き、持参した米、酒等を供え、「年あらたまりて年男が水くみ始むるときは、水はくまずに黄金くむ黄金くむ黄金くむ」（上中、大宇都）といっ

て持ってきたおけに水をくむ。共同水くみ場では、その年一番目の若水をくもうと、各家々が先を争ってくみに出かける。水はまず神棚に供え、朝になるとその水でお茶をいれたり、顔を洗うのに使用する。今でも水道の蛇口にむかって言う、という主婦がおられた。

元旦には、おすいもの、おさしみ、煮まめそれに蒲鉾や揚げもの等7品位の盛りあわせ（島間・大久保）を現在はつくるそうだが、昔はかなり質素であった。普段の日には、アワごはん、イモご飯、つけもの、カライモを食べていたというから、たとえ煮しめといっても、昔はごちそうであったのだろう。餅も楽しみのひとつであった。正月はそうしてごちそうを食べ、ゆっくり過ごす。

その晩、つまり二日の早朝、一時頃、一番ドリが鳴いてから青年衆が集まって臼おこしをする。一升マスに入れてある米と餅を臼に入れ、米をつく動作をする。家の人を起こさないようにそっとするところもあれば、会話をするところもある。餅はもらっていき、公民館でみんなで食べた。

二日、三日はレイイーに行く。まず嫁の実家に行き、次に親戚まわりをし、新年の挨拶をする。餅や酒等を持っていく。嫁の実家が遠いと、二、三日がかりで行くものであった。

四日にはもう仕事にでる人もいた。畑や田にそれぞれ田の隅に鍬を入れ、米、焼酎、鍬、鎌についているシメ縄、ユズリハ等の飾りをとってうめた。そしてお祓いをした。日にちははっきりしない。現在ではやっているところを見つけられなかった。百姓祝いといって、大根、米等を公民館に飾って、お祓いをしてもらい、今年も豊作でありますようにと願う行事は現在もしているところがあった。生業表を見ると一月はオーギの出荷時期であり、出荷割り当てがあるので正月も早くから仕事にでる人がいるが、昔、オーギ作りをしていなかった頃は農閑期で、二〇日までは仕事をしない人もいた。

七日の夕方にはバチバチ（カシの生シバを焼く）をする。家のカベに、ダラ、松、バチバチの木をさして、家によっては神棚、門松にもさした。ダラの木、松の木は、とげがあったり、鋭かったりするので、魔よけの意味であろうと思われる。囲炉裏ではカシの生シバを焼く。カシはバチバチと音を立てるので鬼が驚いて逃げていくという。そして「鬼はそと、福はうち」と言う。節分の豆まき行事に似ている。南種子町では節分が本土ほどは強く意識されなかった。それはこのバチバチがあるからであろうか。最近は豆まきをするところもあるようだ。バチバチの後はクサイモンが始まる。この日は仕事も早めにきりあげて、早めの夕飯を食べ、バチバチで団らんした後、男衆はクサイモンの為に出かける。神社、公民館に集まりそれから家々を訪れ、門口で福祭文を唱え、餅をもらう。クサイモンは雨戸も障子もしめて開けてはならず、家の中でじっと聞くものであった（島間、中之町）。新築の家がある時はその家を最後にして、あがってごちそうを食べる。〔新宅祝い〕新築の家が無い時は、公民館に集まり、もらった餅で宴会をする。

十一祝は、青年衆がめでた節を一戸一戸歌ってまわるというものである。十一日は大正月の終わりで、小正月の初めであるから意味ありげである。先述したクワイレ祝いという仕事始めの儀式は、四日が畑、十一日が田のものであるという事例だが、これは鹿児島全体でも二日～四日が畑、十一日はほとんど例外なく田の鍬入れである。

十四日は「イワイカエ」で正月飾りを新しく替えたり、餅をつき直したりする。またダゴサシをする日でもある。ダゴは家の四隅の柱とか、亭主柱、門木等にさしておく。夕方からはカーゴマー（蚕

舞）が始まる。青年団の中から一人が女装し、頭に白い布をかぶってダゴを持って踊る。養蚕はしていたが、カーゴマーのないところもあった。白い布は、蚕の姿を示し、蚕の神が家々を訪れる、という行事である。

そして二十日には正月飾りは全てとり払われ、次の正月を待つ、の意味から、松の葉を飾る。正月はここで終わる。

二月には行事が見つけられなかった。

三月の三日の節供には、墓参り、レイイーに行き、フツ餅をつくったりした。女の子の節供というようなことは昔はなかったようである。

三月十八日から二十一日は彼岸で、ヒガンバナを墓に供えたりする。

三月、四月は本土の山間部では花見のシーズンだが、南種子町では花見をした、というのをとうとう一例も聞かなかった。桜の花が少ない、というのが一つの理由であるが、もう一つは、この時期、磯遊びが行われる。又、この時期は田植えで忙しい時期でもあるからであろう。

四月十日頃には茎永、宝満神社でお田植祭りがある。女人禁の柳田の森に赤白の旗が立ち並び、ホイドン（祝殿）が赤米の苗を祭り、田植えをする。オセマチという田には男のみ、あとの神田は女もまじって田植えをする。舟の型の舟田ではシャニン（社人）の老夫婦が苗を持って舞をまう。お田植祭りには茎永の人は手伝いに出て、赤米のおにぎりや、草の葉にのせた煮しめを人々にふるまう。その後マブリ、という会があり、宴がもよおされる。

五月五日の節供は、丁度、麦ができる頃で麦を墓等に供えたりする。男の節供として、特別に何かする、ということはないが、ツノマキ、アクマキ、フツ餅等をつくる。

ウマヤキは、現在ウマがほとんどいないのでしないが、名残りとして、祈祷だけをする。三月下旬から六月までに行われる行事である。

こうして順をおって見てみると、廃れてしまって詳細が聞き出せなかった行事が多く、今さらながら残念なことである。しかしこうやって調査し報告書としてまとめてみると、正月行事は、主役となる人々が、神をあらわしているものが多い。臼起こし、これは密かに行われる、あるいは声だけを聞くので、実体の知れない神を意味したものに思えるし、クサイモンも家の人が戸をしめきっていたり、あるいは切れ目なく続く祭文、家の人の応答が儀礼的で正座してじっと聞く、等からこれも神が家々を祝ってまわる行事に思える。七日に青年団、子供組が家々を訪れて祝いの言葉や歌を唱える、という例は、大隅半島南端から種子島、屋久島、さらに三島にわたって分布している。七日正月の来訪者は、全国的に見ても珍しいそうで、何と関係があってこの行事があるのか、どうしてもわからなかった。他に門木にさしたダゴを子供が勝手にとっていくというのも豊作をもたらす神様にたとえられるし、カーゴマーの女装青年も蚕ノ宮様（コノミヤジョウ）という蚕の神である。これからの課題として残ったことであった。

次に、「弓を射る行事」について聞き回ったことだが、現在、イバ（射場）という場所を知っている人はほとんどいなかった。しかし昔、そういう場所があったらしい、という例がいくつかでてきた。西之、本村には「遠矢の碑」と書かれた石碑が田の端に立っていて、詳しくは知らないが、矢の飛ばし比べの記念碑ではないかということだった。かなり昔にはそういう行事があったと思われる。弓矢を

使ってする仕事、狩猟における仕事始めの儀式、あるいは武士の仕事始めの儀式ではなかったか。あるいは西之表地区のハマ祈祷が廃れたものなのか、推測したらきりがない。

正月の仕事始めは、二日～四日の畑の鍬入れと一一日の田の鍬入れがあるが、前者は基礎的な生活の仕事始め、言うなれば仕事始めの前の仕事始めで、一一日のものは本格的に仕事を始める仕事始めであるといえる。これは畑作から水田稲作に発達していったものかと見られなくもない。

今回の実習では漁村の行事についてはほとんど資料を得ることができなかった。ただ、食事に魚がでる、漁業特有の祝い事、行事がある、ということぐらいしかわからなかった。反省点の一つである。

南種子町と、それ以北の地域とでは、南種子町はより民族資料に恵まれていると感じる。西之表は本土との流通もあったであろうし、現在大きな町になっていて、そういったことから本土の影響をより強く受けているのではないかと考える。しかし、南種子町は、種子島本来の民俗文化を濃厚に伝承しているという意味において、より種子島的ではないだろうか。

以上、南種子町実習報告とするが、最後に反省点として、民俗調査についての知識、どう質問するか等が不十分であったこと。これについては、一緒に回った日高先輩にいろいろと教わり、とても勉強になった。次回からはもっといい質問法を身につけ、伝承者からできるだけのことを吸収したい。2番目に、予備知識のなさである。自分では、うまくフォローできていると思っていた事項が、行ってみると話が通じず、これは質問法とも関係するが、もっといい効果的学習を次回からは心がけたい。

民具・技術伝承調査の知覧実習と違って、今回はお年寄に話を聞くことがほとんどの無形民俗中心の実習だった。時には話題がそれたりしたが、話を聞くことは、決して苦痛ではなかった。むしろ、とても為になるというか、楽しいことでもあった。次回の薩摩半島調査は、もっといい調査になるよう今までの反省点を生かしてがんばりたい。

以上、H二年五月二三日

《参考文献》

下野敏見著『南西諸島の民俗Ⅰ』（一九八〇法政大学出版）
〃『タネガシマ風物誌』（一九六九未来社）
〃『種子島の民俗Ⅰ』（一九八二法政大学出版）
小野重朗著『鹿児島歳時十二月』（一九七八西日本新聞社）
文化庁内民俗文化財研究会編
『民俗文化財の手びき』（昭和五〇年第一法規）

南種子町行事一覧表

NO. 1

行事名		茎永雨田	西之崎原	西之本村	西海下立石	茎永松原	島間大久保	上中大宇都	島間中之町
若木迎え	族	●	−	−	○	○	○	−	●
門木	家	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
餅つき	家	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
シュエーとり	家	△	△	◎	◎	●	◎	●	◎
シメ縄	家	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
オーバン	家	●	●	●	●	●	●	●	●
水迎え	家	○	○	○	○	○	◎	○	◎
臼起こし	村	○	○	○	○	○	○	○	○
船祝い	村	●	○	○	●	●	●	●	○
礼言い	家	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
町祈祷	村	●	−	−	−	◎	−	○	◎
パチパチ	家	◎	◎	◎	◎	◎	●	◎	◎
福祭文	村	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎
系図祝い	族	◎	○	○	−	−	−	◎	◎
11日祝い	村	−	−	−	−	−	◎	−	◎
祝いかえ	家	−	−	−	◎	◎	◎	−	−
田の鍬入れ		○	−	−	◎	−	◎	−	○
野の鍬入れ		−	−	−	−	−	−	−	○
農具の祝い	家	◎	●	○	◎	−	◎	−	◎

NO. 2

		雨田	西之崎原	本村	下立石	松原	大久保	大宇都	中之町
穂だれひき	家	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎
タゴサシ	家	◎	●	◎	●	◎	◎	◎	◎
カーゴマー	村	◎	●	◎	●	◎	●	◎	◎
松の葉を飾る	家	－	－	－	－	◎	－	－	－
節分（まめまき）	家	●	●	●	●	●	●	●	●
３月の節供	家	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎
彼岸	家	－	－	◎	－	－	－	◎	◎
タネまきの日	－	○	○	○	○	○	○	○	○
５月の節供	家	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
ウマヤキ	村	－	○	－	－	◎	◎	－	－
ネバカ物を食べる日	－	●	●	●	●	●	●	●	●
花見	－	●	●	●	●	●	●	●	●

◎ 現在行われている

○ 以前行われていたか、現在は行われない

● 行われない（名称見られず）

－ 未調査

△ 不明

付： 表記法は日高先輩のものと同形式とした。

生活歴①　　西之（崎原）　　伝承者 浜田友衛　　1990. 3. 4調 岩切

新暦

月	田	畑	漁	年中行事
12		=サトウキビの収穫		正月準備
1		サトウキビ植え付け		元旦、パチパチ、クサイモン
2				
3	田植え			節供 彼岸
4				
5		カライモ植付		節供
6			ナガラメとり	注：　米は自家用 昔は漁にでることもあったが今はでない。 この表の他にアジ類（メコン、ヤバ、アジ、メアカ）がとれていた。昔は農よりも漁中心の村落だったのではないだろうか。サトウキビを作る前は1月は農閑期であった。
7	収穫			
8				
9			イセエビとり（月の出る日以外の毎日）	
10				
11		=カライモの収穫		

生活歴②　　茎永（管原）　　伝承者 真田サチ子　　1990.3.3調べ

新暦

月	田	畑	年中行事
12		⇓ 収穫	正月準備
1			元旦、臼おこし、クサイモン カーゴマー
2			
3	田植え		節供
4			宝満神社お田植祭
5			節供
6			↑
7	収穫		未
8			調
9		カボチャ ソラマメ	査
10		（裏作）	
11		⇓	↓

年中行事Ⅱ（六月～十二月）

鹿児島大学卒業生　有村月美

一、はじめに

種子島に来たのは今回が二度目であるが、南種子町に腰を据えて調査したのは初めてである。南種子町は三方に海をひかえ、またその面積の六割近くを林野が占めるという、まさに自然に囲まれた美しい所である。そのほか文化面からみても、鉄砲伝来の地、平山の広田遺跡など歴史的な遺産を保持している一方で、近代的な宇宙センターも存在する、調査意欲を大いに刺激する町であった。

私は今回の調査テーマとして「年中行事（六月～十二月）」を選んだ。大昔から現在まで、人々の生活とともに存在したといっても過言ではない「年中行事」を見直すというたいそうな名目のもとで始めた調査であったが、私のような若輩にはさすがに荷が重く、今回は南種子の年中行事を拾い上げる程度にとどまってしまった。しかし、年中行事の本質たるものを見出だせないにしても、せめて南種子町の年中行事、そのすばらしさを多くの人に伝えることができれば幸いである。

二、内　容

調査した村落順に、項目を分けて記載する。

(一)　下　中（里）

1．ウマヤキ

ウマヤキとは、まだ牧馬がおり、それでホイトウ（放踏、足耕）をして田畑を耕作していた時代（大昔より明治末～大正初ごろまで）にあった習俗にちなむ馬の祭りである。旧暦六月の適当な日に、村落民が決まった場所（石塔前）に集まって、ホイドンをやとって祈祷してもらい、その後、皆で酒宴を催した。「馬が一年間、けがもせず、健康でありますように」と願う気持ちで行われた行事である。

2．六月灯

この行事は県内でもあちこちで見られる民俗行事である。昔は旧暦六月、今は七月に行われており、ホイドン（神主）、役員が神社で祈祷をしたあと、村落民で飲み食いする。県内各地で見られる、子供たちが灯ろうを飾る風習は比較的最近になってからのものということである。

3．盆行事

以下、旧暦七月一日から盆行事に含めることとする。

(1)　七夕（旧暦七月七日）

今でこそ七夕は、子供達がカラタケに短ざくをつるし、家の前にたてる風習が一般的となっているが、昔は、特に仏教の家では、この日を盆の始まりと考えて、家族全員でエンガ（ほうせん花）の花を持って墓参りに行っていたという。現在でも、七夕飾りはしなくても、墓参りは必ず行くという家が多い。

(2)　七月十三日（旧暦）

家内ではこの日、「ショーロー様」を迎える準備として、仏壇の掃除、家の掃除、床の間への位牌の移しかえなどが行われる。今は行わない家もあるそうだが、昔は仏教の家で必ず、十三日までに縁側の外の隅に「ショーロー棚」と呼ばれる棚を作り、米・バショウ・エンガの花を小さく切って混ぜたものを供え、祀る人のいない、いわゆる無縁仏を祀っていたという。また、この日に「ショーロー迎

え」と称して、仏教はシキビの花を、神道は榊を持ち、墓参りをしている。

(3) 七月十四日（旧暦）

この日は特別な行事はなく、家で床の間に移した位牌の前に、様々な供え物をするだけである。神道の家では生ものを供えるという家もあるが、仏教においては精進料理が基本で、日に何度も食事を供えるそうである。その食事の一例として、①アサンカーリ（朝食前）②アサメシ③ナカイレ（朝と昼の間）④ヒルメシ⑤ヨイノナカーレ（昼と夜の間）⑥ヨーメシの順で、油揚げともやしの炒めものや、間食にはトコロテンや果物や菓子などを供えることが多いという。

(4) 七月十五日（旧暦）

この日のアサンカーリにはソーメンを供える家が多い。夕方には、モチ、マキ、焼酎、米、仏教の家はバショウ、米、シキビを細かく切って混ぜたものも持って墓参りに行く。この日にショーロー様が我が家を去って帰っていく、という考えが一般的である。位牌を仏壇に戻し、仏教の家では精進落としをする。

(5) 盆踊り（旧暦七月十六日）

仏教では、「ショーロー送り」と称して、寺に集まり踊りを奉納する。

4. 礼言い

盆の14日、または15日に、米・マキ・酒などをみやげに実家を訪れる風習である。昔は正月・五月・九月の三大節供には必ず親元へ〝礼を言い〟に訪れたものであるが、最近では正月と盆だけのものとなってしまった。

5. タノミのセク（旧八月）

はっきりした日は調査によっては得られなかった。この日は嫁の親が、娘の嫁いだ先にみやげを手に「娘を頼みます」とあいさつに行っていたそうである。

6. 十五夜（旧八月十五日）

浜に出て、青年、大人、子供が協力して網を練り、夕方から晩にかけて綱引きが行われていたが、最近では、若い人がいないので行われないということである。家では、縁側にススキ、だんごなどを供えてお祀りした。

7. ガンジョウジ（九月十五日）

ホウネンマツリ、セケンガンなどともいわれ、その年の二日のたねつけの際にたてた願をほどく祭である。八幡神社に村落民が集まり、今年の豊作を祝い、踊りを奉納した後、持ちよったごちそうを食べて祝う。

8. その他

十月以降は、校区で運動会が行われるのみで、その後は師走の正月準備になる。

(二) 西之（崎原、本村）

1. ウマヤキ

明治の頃、村落民が特定の場所に集まって酒宴を催したという。この日、耕作に使っていた馬の尾のソラにマキ（牧）の判を押したことから「ウマヤキ」といわれるそうである。旧暦六月に行われたというが定かではない。

2. 六月灯

旧暦六月二十日前後に神社に村落民が集まり、ホイドンをやとってお祀りをした。現在は七月に行われている。

3. 盆行事

旧七月一日、または旧七月七日に、エンガの花、米を持って墓参りに行く人が多い。

(1) 旧七月十三日

十三日の朝までに、家の掃除をすませ、ゴキを洗い、ショーロー棚を作る。そして位牌を床の間に移し、シキビの花、線香、ろうそくを供える。晩には〝ショーロー迎え〟と称して墓参りに行く。シキビ、ソウハギ、米、焼酎などを供える。昔は墓の前で、松の木のしんを燃やし迎え火としていた。

・ゴキアラー（御器洗い）

昔は食器のことをゴキ（御器）といい、盆の十三日に主婦は家の食器を集めて、桶に入れ木灰を入れて、日常の〝生臭さ〟を洗い清めた。このことをゴキアラーという。

・ショーロー棚（精霊棚）

縁側の外の隅に、縁より少し高めに作った棚のことで、四角に竹枠をし、竹ヘキで上下二面作り、ソテツの葉で三方に囲いをし、一面だけ開いた部屋を作る。（図1参照）バショウの幹をさいて四角く切り、細かく切ったシキビ、ソウハギと混ぜたものをミズノコといい、家への来客は皆、縁の外のショーリョー棚にこのミズノコを一つかみずつ供え、上から水をかけてお参りしてから家中へ上がる。

この棚は、自分の先祖についてきた無縁仏を祀るためであるという。

また本村では十三日の朝、いろいろ供物を持って、村落の公民館長が西村時安の供養塔をお参りする。昔は村落民全員が集まっていたという。

(2) 旧七月十四日・十五日・十六日

十四日は家中で供えものをするだけである。

①アサンカーリ（朝六時頃）……オカユ
②アサメシ……白飯・ツユ・煮しめなど
③ヒンナカレ（十時頃）……菓子、トコロテン
④チュウハン……カライモ・モチなど
⑤ヨーナカレ（三時頃）
⑥ヨーメシ（七時頃）
⑦ヨナガレ（九時頃）

以上のように、日に七回も供えものを変えるのである。供え物は家によって多少違うが、一度あげたもの、同じものは供えない。供え物を豪華にすると、地獄の先祖が極楽に行けると考えられている。

十五日は午後からミズノコ、マキを持って墓参りをし、各墓石（個人に一つずつ墓石）に一つずつ供える。帰りにマキを集めて戻る。昔は墓前で松をたいていたそうである。

十六日には、〝ショーローばなし〟と言って魚を食う風習がある。ショーロー様の嫌いなものを敢えて食べることによって、盆の終りを告げるのだという。また、酒・塩・松の花を持って墓参りする家もある。

・盆踊り

仏教ではショーロー様が十六日に寺に集まると考えられていて、ショーロー様を盛大に送り出すために、寺に門徒が集まって踊りを奉納する。

(3) その他

盆の期間中は、ショーロー様が赤トンボやセミに乗ってくる、もしくはのりうつってくると考えられているので、むやみに殺生をするなと教えられたそうである。

七月七日の七夕の日、昭和三十年頃まで、本村では道普請が行わ

れいたそうである。昼間は道路の整理、夜は磯で採れた魚で村落民全員が集まり酒宴が行われた。これは村民の団体意識を強めるための行事といえる。

4．レイイー（礼言い）

盆の十四日か十五日に、米、酒を持って親元にあいさつに行く行事である。昔は三・五・九月と節供のたびに行っていたが、今では正月と盆の二回だけである。

5．タノミのセク（旧八月一日）

娘の親が、焼酎、米を持って、ムコドンの家を訪れ、「娘を頼みます」とあいさつに行く行事である。現在は行われていない。

また、この日にショーロー様が墓に帰りつくとして、柳の花、米、焼酎を持って墓参りをする家もある。

6．十五夜（旧八月十五日）

村落民全員で綱引きをしていた。綱はニサーシ（青年）が中心となり、ワラとクズカズラをまぜて練った。昔は村落対抗戦なども行われ盛大であったが、最近では綱引きをする人がいないため行われなくなっている。

7．九月のセク（旧九月九日）

昔はこの日に、菊の花を持って墓参りをしていたそうである。

8．ホウネンマツリ（ガンジョウジ）

旧九月十九日、西之の村落中の人々が門倉押の神社に集まってお祭りをする。ホイドンを頼んで祈祷してもらったあと、「大踊り」「中踊り」を奉納する。その年の豊作を感謝する祭りである。

9．不動山の祭（旧十二月十五日）

本村には、不動山と呼ばれる、女が入ると祟りがある女人禁制の山があり、数十年前まで、責任者とその氏子達の手によって祀られていたが、氏子が野尻に移ってしまったので行われなくなった。毎月一日と十五日に、関係者が朝早く、誰にも会わないようにシュエー取りに行き、そのシュエーをワラにつめてお供えして祝詞をあげる。関係者が別地に移ってしまっていたので詳しくは聞けなかったが、不動山の石塔は今でも山中に存在するということである。

(三)　西海（上立石、下立石、大川）

1．マキの神のマツリ

昔、牧があった頃の祭りで、旧六月の適当な日を選んで行われていた。その日は酒をつくって神（石塔）に供えて、その後、村落民全員で浜に出て、その酒を飲みかわした。

2．六月灯

旧六月十五日に行われる村落の神様の祭りである。神社に供え物を持って参拝し、ホイドンをやとってはらってもらい、その後境内で皆で飲み食いをしたものである。最近は七月に行われるが、かなり簡素化されている。

3．七夕（旧七月七日）

この日はほとんどの家が、エンガの花を持って墓参りに行く。

4．盆行事（旧七月）

現在は八月に行われる。

十二日から十三日の朝にかけて、家の掃除をしたり、大きなカマに食器類を木灰と一緒に入れて煮て、その後大川で洗うゴキアラーをしたりとショーリョー様を迎える準備で忙しい。この辺りは神道が多く、神道では盆に特別に位牌を床に移したり、棚を作ったりしないそうである。家での準備が終わると、サカキ、酒などを持って墓参りに行く。墓参りは十三日だけでなく十四日、十五日も行くそ

うである。十五日の墓参りは、必ずマキを持っていく。十三日、十四日はアサンカーリ、アサメシ、ヒナカレ、チュウハン、ヨーナカレ、ヨーメシ、ヨナガレなど一日に何度も供え物をし、十五日の晩メシにはマキを供える。供え物は常に新しいもの、珍しいものをあげるように心がけるものである。また十五日の晩、神棚にはショーリョー様が乗って帰るように、船にみたてたユリの根を供える。十六日には、盆花（サカキ、シキビ）とは別の花を持って墓参りに行く家もある。また、仏教では、ショーリョー様が寺に集まるといって、寺に集まり、踊りを奉納するのである。

5．礼言い

盆の十四日、または十五日に米、焼酎を持って親元にあいさつに訪れ、墓参りをする。このことを礼に行く、礼言いなどと言う

6．十五夜（旧八月十五日）

この日、村落では子供、青年、大人もまじって綱引きが行われた。綱は青年が中心となってワラを練って作る。昔は道や、神社の前などあちこちで引いていた。昔はすもうも行われていたそうであるが、今は学校で子供達が綱引きをするだけである。

各家では、ツノマキを作って仏壇、神棚や縁側に供えた。

7．九月のセク（九月九日）

昔は娘がレイイーに帰ってきたものであったが、今では正月と盆だけになってしまっている。また、村落から嫁いだ人は、この日に米や麦のハツホ（初穂）を一つかみ持って神社に行く風習があった。

・ガンジョウジ祭り（願成就祭り）

春に作物の豊作を願ってたてた願をほどく祭りで、村落民全員が神社に集まり、ホイドンに祝詞をあげてもらった後踊りを奉納する。踊りは村落ごとに決まったものがあるそうである。昔は何種類もあったそうだが、今は一種だけで、青年が紋付き袴にセンスを持って踊る〝手踊り〟が村落の踊りということである。

8．火入れ祈祷

昔は下立石、大川では塩炊きが行われていた。上立石は塩を炊くための山（木）を与えられなかったので行われなかった。大正以前塩炊きガマが鉄鍋にかわる前は、村落民全員が交替制で石炭のカマを作っていた。石炭ガマは非常にくずれやすかったので、カマの無事を願い、塩ガマに初めて火を入れるときに「火入れ祈祷」を行った。

塩炊きに関する役は、カマジ（釜司）とよばれる責任者一人と、マスドリ（経理）から成っていた。

「火入れ祈祷」は十二月の適当な日を選んで行われ、当日カマジは朝早くシュエー（潮井）取りに行く。ツトの中にそのシュエーをいれたツトシュエーを2個作り、神社に海の幸、山の幸とともに供え、お祀りする。その後、カマジの家で酒宴が始まる。小番人の司会にそって進められ、膳のあと「まわり」と呼ばれる酒の杯のまわしがある。「まわり」には何種類もあり、途中でメデタ節も加わって盛大な式となったようである。

カマジは一年交替で選ばれ、四足二足のものを食べてはいけないとされていた。

9．その他

・川の神様の祭り

何月に行われる行事か定かではないが、毎年、二人の責任者が村落民全員から甘酒を二合ずつ集めて、川の神様（石塔）に供えていたという。昔、ヒガという女の子が寺の祭りの日にいなくなった。皆で探したが見つからず、ヒガがからっていた稲束のクズをたどっていくと、川のそばの夫婦石のところでなくなっていた。川の神様

（ガラッパ）が連れ去ったものと考え、それ以来川の神を祀るようになったそうである。

(四)　茎永（中之町・宇都浦）

1．ウマヤキ

昔、牧馬を使ってホイトウ（足耕）による馬耕をしていたころに由来する祭りであるが、現在も行われている。旧六月の適当な日に、自分の馬に焼判（目印）をした。現在では、田植え前の三月の適当な日に、ホイドンを頼んで祝詞をあげてもらったあと酒宴を催すのである。

2．六月灯（旧六月十五日）

現在は七月に行われている。村落の全員が神社を参拝し、ホイドンに祝詞をあげてもらった後持ち寄った弁当、酒で宴を催す。

3．七夕（旧七月七日）

先祖があの世をたつ日として、昔も今も必ずエンガの花を持って墓参りに行くものである。現在は八月七日の日に墓参りをする。

4．盆行事

十三日の晩にショーリョー様が帰ってくるのでその準備として、家の掃除、ゴキアライ、神棚の掃除、位牌の床への移しかえなどをします。その後ショーリョー様を迎えにサカキの花を持って墓参りに行く。ここでは神道の家しか調査できなかったので、棚などの伝承は得られなかった。

十四日はショーリョー様は帰ってきているので墓参りはせず、家で様々な新しい物珍しい物を供える。①アサンカーリ②アサメシ③ヒナカレ④チュウハン⑤ヨーナカレ⑥ヨーメシなど日に何度も供え物をする。その内容は家によって多少異なるが、三度の食事には白飯、だんご、餅など、間食には果物、菓子などを供えることが多い。しかし最近ではこのように日に何度も時間を決めて供え物をすることは少なくなったようである。

十五日は朝メシまで供えて後は適当に作ったものを供える。この日は親せきなどの来客が多いので、主婦は大忙しなのである。夕方になると、マキとソーメンを位牌の前に供えそれを持って墓参りに行き〃ショーリョー送り〃をする。床の間からマキに乗って墓に移動したショーリョー様は、マキを船にして、ソーメンを杖にしてあの世に帰っていくと考えられている。昔は墓前で松を燃やしたそうである。

十六日の朝、位牌をもとの場所に戻す。盆踊りは、中之町はほとんどの家が神道なのでなかったが、宇都浦では昔あったそうである。

5．「礼を言いにいく」「礼言い」

盆の十五日、嫁の実家にザッショウ（焼酎、米、餅）を持ってあいさつに行く。その後墓参りもする。昔は「正・五・九」の三大節供は必ず行われていたが、今は正月と盆だけになってしまった。

6．タノミのセク（旧八月一日）

嫁方の親がムコドンの所にみやげを持って「娘をお願いします」と頼みに行く行事である。現在は行われていない。

また、この日に柳の枝を持って墓参りに行くという家も多い。

7．十五夜（旧八月十五日）

ニサー（青年）が中心となって、ワラで綯った綱で綱引きをしていた。道路や学校の庭で、村落内で、または村落対抗で綱引きをし、盛大なものであった。

各家では、ツノマキを作り、縁側に台を出して、ススキや酒と共に供える。

8、ホウネンマツリ

九月九日に茎永中の人が宝満神社に集まってお祭りをする。二月にたてた願をほどく祭りで踊りを奉納した後、手前の広場で持ち寄ったもので宴会を催す。踊りは、大踊り、中踊りとあって、中踊りには棒踊り、ひょうたん踊り、弁慶踊りなどがあり、村落ごとに決まった踊りを年交替で奉納していた。祭りが盛大な頃には、処女会などが「なぎなた踊り」を奉納していたという。宝満神社の祭りの後、豊受神社（村落の神社）でホイドンを呼んでお祭りをする。宝満神社で踊った踊りを奉納し、その後皆で飲み食いを始める。以前は、宝満神社の祭りと別の日に行っていたそうであるが、最近では、同じ九月九日に行うのである。また、以前は毎年行われていたのであるが、今では二年に一度となってしまっている。

九月のセク（旧九月九日）に菊の花を持って墓参りに行くことになっているが、この辺りでは、九月九日はホウネンマツリで忙しいので前日に行くことが多いという。

(五)　平山（浜田）

1．ウマヤキ

昔、まだ牧馬によるホイトウをしていた時代、田植えが終わった後、自分の馬をマキに帰すのに目印（焼判）をしてから帰していた。カネで焼判をしていたので〝カネヤキ〟とも言う。昔は六月頃行われていたが、今は四月中旬から五月の初めにかけて行われ、行事の内容も、村落民が一ケ所に集まって宴会を催すだけのものとなっている。

2．六月灯

千座の岩屋の上に祀ってある氏神様に集まって、ホイドンを頼んで祝詞をあげてもらった後、浜辺でもち寄った物で宴を催す。昔は一戸から一人は必ず参加し、盛大なものであったが、最近は人数もかなり減ったという。

また　夏祭りと称する熊野神社の六月灯に　旧六月十五日に参拝していたとう。

3．七夕（旧七月七日）

最近になって、子供達が竹に短ざくをつるして七夕を祝うが、この日に墓参りをするという伝承は得ることができなかった。

4．盆行事

浜田には特有の石塔まつりが存在するので一般の家庭の盆行事と分けて述べる。

(1)　浜田の石塔まつり

浜田の石塔まつりは、旧七月一日から始まる。この日はショーリョー様があの世をたってくる日と考えられていて、まず浜田の仏教信者全員の手で石塔の掃除が行われる。そしてその晩から一二日の晩まで、二人一組になって、夜八時ごろから一時間、石塔のところで火を燃やし、ショーリョー様を迎えるのである。それに使うダチク（枯竹）は、子供が拾い集めておいたものである。シショウは、この間、二日に一度の割で来て経をあげる。浜田の仏教信者は毎晩この石塔にササゲ（小豆）の煮た物などを持ち寄り、簡単な宴を催す。この一日から十二日までのことを、「チャアアゲ（茶上げ）」というそうである。最近では十二日の朝に石塔を掃除し、晩に火をたき、シショウさんを頼んで経をあげてもらうだけとなっている。

浜田では、ショーリョー様は十二日に石塔にいちど立ち寄ってから、十三日に我が家に帰ってくると考えられている。

十三日にシショウさんから、「南無妙法蓮華経」と書いた札を、

家のショーリョーの数だけもらい、札代の米二合と銭を渡す。その札は竹の先をわったものにはさんで、位牌と一緒に十五日まで床の間にたてておく。

十五日、村落民（仏教信者）全員で、十三日にシショウに書いてもらった札の一枚と米、シキビとバショウを細かく切ってまぜたものとマキを持って、石塔に午前十一時頃集まりシショウさんと一緒に題目を唱えショーリョー送りをする。また、役員が前もって各戸から集めておいた豆腐と酒で宴を催した。石塔に供えたマキはシショウさんが持って帰るのが慣わしである。

以前は、二十日前後に、ショーリョー様があの世に帰りつく日と考えて、石塔に皆が米、ろうそく、線香を持ち寄って、シショウさんに経をあげてもらい、その後簡単な宴を催した。

浜田では、一日から二十日までを盆と考えられていたようである。

(2) 家庭での盆行事

各家庭では十三日にショーリョー様を迎える準備として、仏壇（神棚）を掃除したり、ゴキアライをしたりと大忙しである。この他にも「ショーリョー棚」を作り、位牌を床におろし、提灯を飾ったりする。そして午後から墓参りに行くのである。

十四日には家で様々な供え物をする。一日に何度も供え物をする家もあれば、三度だけの家もあり、家によって多少の違いがあるようである。

十五日の朝はマキとソーメンを位牌の前に供える。マキは墓参りにも持って行き、各墓石の上に一つずつ供え、帰る時には持って帰る。仏教信者の家では、石塔まつりが終わった後、マキの他に米とシキビ、バショウを細かく切って混ぜたものを持って墓参りをする、マキはショーリョー様の杖、ソーメンは盆の間にもらったごちそうを背負うときの縄がわりであると考えられている。

また、神道の家では盆の間に飾っておいた榊は二十日までは変えないものであった。これは二十日までを盆と考えていたからであろう。

盆踊りは昔は行われていたらしいが、現在は行われていない。

(3) その他

盆前（盆を含む一週間内）に亡くなった人にはすり鉢をかぶせるという言い伝えがありこれは他のショーリョーがこの世に帰ってくるのに、そのショーリョーだけあの世に旅立って行くので、はちあわせで恥ずかしいからということである。

また昔は盆の間はセミやトンボなどの小動物でも殺してはいけないと言われていたそうである。

5．レイイー（礼言い）

盆の十五日、焼酎や米などを持って親元にあいさつに行くことを「レイイー」という。現在も、正月と盆には必ず「レイイー」に行くということである。

6．タノミのセク

旧八月一日に行われていた。田が稔ったことを感謝する意味の行事で、現在は行われていない。しかしこの日は必ず柳の花を持って墓参りに行くものであった。

7．十五夜（旧八月十五日）

綱を稲ワラを練って作った。村落内で二つに分かれて綱を引いたものである。大人も子供も皆さんかする。楽しい行事だったそうであるが、今はもう行われていない。

各家庭では、ツノマキやだんごを作って仏壇や縁側に供え、月を拝んだという。これは現在でも行われている。

また、同じこの日に、大正の頃、ロケット基地沖で沈没した軍艦

〝しじき（志自岐）丸〟を記念した祭りが行われていたが、現在は行われていない。当時は、記念碑の前で式典が行われた後、広田海岸で直線競馬などが行われたそうである。

8．九月のセク（旧九月九日）

この日、菊の花を持って墓参りをするのが慣わしとなっている。

・ホウサク祝・ガンジョウジ祭り

旧九月九日に、平山の豊受神社で、「弁慶踊り」「ヤートセー」など村落毎に決まっている踊りを奉納して祝う祭りである。以前は毎年行われていたが、現在では数年に一度だけである。

(六)　上中（上野）

1．マキ祈祷

昔、牛馬で耕作をしている時代、マキの神に牛馬を飼っている人が集まって、〝牛馬が健康でありますように〟とシショウさんを頼んで祈祷した祭りである。旧暦六月頃行われたであろうとのことであるが定かではない。

2．六月灯

旧六月の適当な日の夕方から晩にかけて、村落の神社に皆あつまって参拝した。ホイドンが来て祝詞をあげた後、神社の役員と村落の役員の数人で簡単な宴を催すだけで、一般の人々は参拝するだけであった。

3．七夕（旧七月七日）

この日は必ずエンガの花を持って墓参りに行く慣わしである。子供の七夕飾りは比較的最近になってからのものである。

4．盆行事

法華宗信者は、旧七月一日をショーリョー様があの世をたつ日と考えて、この日必ず墓参りをする。そして一日から十二日まで毎晩、線香、さい銭を持って、信光寺に題目を唱えに行く。十二日の夕方から晩にかけて、お寺では寺役がごちそうをして仏前に供える。門徒達は寺にショーリョー様を迎えに行き、その後ろをショーリョー様がついてくると言われている。また十二日の晩、寺役が札を門徒に配り、門徒達はそれを家の亭主柱にはる。

十二日に、門徒達の家ではショーリョー様を迎える準備として、家の掃除、墓の掃除をしたり、水棚を作ったり、ゴキアラーをしたり、位牌を仏壇から床の間に移したりする。

・水棚

無縁仏のための棚で、縁側の外の隅に作る。竹で部屋を作り、玄関側の一面だけを開けておく。そこにミズノコと呼ばれる、バショウの茎を細かく切って米・酒とまぜたものを一つかみ供え上から水をかける。水をかけるので水びたしにならないように、底は竹ヘギで作ってあり、水はけがよい。また、水棚の手前には御飯を山盛りにした茶腕に、はしを何本も立てて、「上がらんで外で食べていけ」と言って供える。家人は家の中から、来客は家へ上がる前に外から、縁側に置いてある水の子と水で、水棚をお参りする。

十三、十四日は家で、①アサンカーリ②アサゴハン③ヒルナカレ④チュウハン⑤ヨーナカレ⑥ヨーメシ⑦ヨナガーレなど、日に何度も新しいもの、珍しいものを供える。家によっては昼・夜の供え物がきちんと決まっている場合もある。

十五日は、位牌の前にマキや白百合の根を供える。百合の根は船を表し、マキは杖や船や桶の形に作ってあるのでそれを表し、ショーリョー様が帰るときに使うとされていた。十五日の昼、水の子と墓石分のマキを持って墓参りし、各墓石に一個ずつマキを供える。昔

は墓の前で松を燃やしていたが、現在は提灯を飾る。墓参りの後、門徒は皆寺に行き、十五日の晩に寺に集まっているとされているショーリョー様を送るために盆踊りを奉納する。

十六日、門徒は寺の石塔に水の子、米・焼酎を供え、その後宴を催す。また、盆が終わった知らせとして松の葉を墓や仏壇に飾る人もいる。位牌を元に戻したり、水棚を焼くのもこの日である。

・その他

七月に亡くなった人は今年は帰らず、来年が初盆になるそうである。そういう人にはごちそうがもらえないので、人のものを盗まないようにすり鉢を頭にかぶせて埋葬したという言い伝えがある。

盆の期間中は、ショーリョー様が乗る物がなくなるので、虫（トンボ、セミなど）を殺すなと言われるものであった。

5．レイイー

盆の十五日にザッショウ（米・焼酎など）を持って親元にあいさつにくることをレイイーという。昔は「正・五・九」の節供にレイイーをしていたが、今では正月と盆だけである。

6．タノミのセク（旧八月一日）

法華宗では、この日ショーリョー様があの世にたどりつくとして、柳の花を持って墓参りをする。

嫁の親がムコの家に娘をよろしくたのみますとあいさつに行くことから「タノミのセク」と言われるようになったというが、現在は行われていない。

7．十五夜（旧八月十五日）

二サーシ（青年）が中心になり、持ち寄ったワラで練った綱で綱引きが行われる。道路で大人も子供も一緒になって引いていたそうであるが、今は行われていない。

各家では、ツノマキを作って仏壇や縁側の台に供えるものである。

8．九月のセク

菊の花を持って墓参りをする家が多い。以前は九月のセクにもレイイが行われたものである。

9．九月踊り

上野神社で、九月の決まった日に行われる願ほどきの祭りである。ホイドンを頼んで祝詞をあげてもらった後、村落の踊りを奉納する。

(七) 西之（砂坂）

・火入れ祈祷

昔、塩炊きをしていた時代から行われていた行事で、砂坂内では貝太郎側と貝次郎側の二つに分かれて行われていた。

(1) 塩炊きに関する役職

・カマジ（釜司）……塩炊きの責任者で、一年交替である。

・マスドリ……経理

(2) 火入れ祈祷

十二月の適当な日を選んで行われた。カマジはその日の朝、途中で人に会わないようにシュエー（潮井）取りに行く。そのシュエーを2つのツトに入れて、カマジ代々に伝わる釘・縄・カメ・鍛冶屋のハサミなどと伴に祀った。神社や塩小屋でのお祓いが終わった後は、マキの神でのお祓いをする。その後はカマジの家での祝宴となる。祝宴では〝三つ飲み〟〝五つ飲み〟〝七つ飲み〟〝ヒトラ（一駄）飲み〟〝タテ飲み〟などがあり、途中でメデタ節なども唄われ盛大に行われたものである。帰りには、「笹の下」と呼ばれる、玄関の外に設置された竹の囲みにゴザを敷いた場所で、一杯飲んで、祭りの終りとした。昔は、上下塩屋毎に神社も別々、祝宴も別々で、

お互い競い合ったというが、今では神社も統合され、数人の役人だけでお祓いが行われ、その後公民館で簡単な宴が催されるだけである。以前、カマを自分たちで石灰で作っていた頃の行事で、塩炊き開始の日に火入れ祈祷を行っていた。

三、考　察

1．ウマヤキ、牧祈祷（旧六月）

ウマヤキにしても、牧祈祷にしても、馬でホイトウ（放踏）し、その馬を牧に放し戻す時代の行事であるので、実際に経験した人は少なくなっている。整理してみると、(1)牧に放す前に、馬に焼判をする。(2)牧の神（石塔）または特定の場所に集まって村落民全員で宴をする。(3)枚の神（石塔）でホイドンを頼んで祝詞をあげてもらう。(4)田植え前（現在は三月の下旬）に、ホイドン又は師匠さんに祝詞をあげてもらった後、簡単な宴を催すと、以上のような型がみられる。特に(1)と(2)と(3)の型が一緒になったもの、(2)と(3)が一緒になったものが多い。ウマヤキは(1)に由来していることがわかるし、牧祈祷は(3)、または(2)を含む(3)に由来していることがわかる。実際、マキの時代に、マキ祈祷とウマヤキの行事が全く別物として存在していたかどうかはわからないが、現在、今回調査したことから考えると、どうやら二つの行事は同じ行事になってしまっているような気がする。昔はウマヤキで自分の馬に焼判をし、マキ祈祷で牧に対して感謝し、馬の健康を祈っていたであろうことが想像されるが、マキや馬が無関係になってしまった現在、この祭の意義は何であろうか。現在は行事事体が全くなくなっていたり、宴だけが催されるものであったり、(4)の型になっていたりする。(4)の型は、茎永で聞いた伝承であるが、本来の行事の要素は全く感じられないのに、「ウマヤキ」というのである。

つまり、マキや馬が自分達の生活と無関係になってしまっても、行事事体はその内容を少し変えながら残る。そして、その行事の意味もマキや馬から田（稲）へと変換し、(4)のような型が生まれたのではないかと思われる。

2．六月灯

六月灯という行事は薩摩藩特有の行事で、他の地域では見られないそうである。ここでの六月灯は〝氏神様の祭り〟という傾向が強くホイドンに祝詞をあげてもらった後、村落民皆で宴を催すというものである。

3．七夕（旧七月七日）

一般的によく知られる七夕姫説話に関する伝承は全く得られず、竹に短冊をつるして飾るのも、比較的最近になってからのことだと聞いた。また、機織の上達を願うという伝承は聞けなかったが昔はこの日、麻緒を飾る家もあったという。南種子町全域で共通していることは、この日、エンガの花（ほうせん花）を持って墓参りに行く、ということである。

南種子では、ショーリョー様があの世をたつ日は旧七月一日と考える人が多い。すると、この日の墓参りは、ショーリョー様の旅の労をねぎらうあいさつ参りとも考えられる。西之の本国寺では、七日（現在八月七日）に水棚を本堂の外に作り、この日からショーリョー迎えの題目を唱える。このように七夕と盆の関係は深い。しかし、私はこの日の墓参りは節句の日一般に見られる墓参りと見るのが適当で、あとから仏教の要素が加わったのではないかと考える。

4．盆行事

南種子の私の調査した村落には、神道の家もかなりあり、盆行事

においてもその差が少し見られたが、以前は種子島全島が法華宗であったということもあって、明確な相違点は見られなかった。

(1) 精霊迎え

法華宗においては、旧七月一日に精霊があの世をたつと考えられていて、本国寺では精霊の目印として旗を立て、浜田の村落ではこの日から十二日の晩まで石塔まつりをしていた。しかし、現在では、浜田の石塔まつりも十二日の晩から、一般家庭の盆行事も十二日、もしくは十三日から始まる。以前は、前述のように一日から既に盆であり、その終りも今のように十六日ではなく、三十一日、または精霊があの世に帰りつくとされている旧八月一日と考えられていた。

旧七月十三日は、精霊を迎える準備で、ゴキアライ、掃除、水棚（精霊棚）作りなどで忙しい。そのあと墓に精霊を迎えに行くのであるが、昔のように墓前で松明を燃やしたりせず、墓掃除をして、シキビの花（神道は榊）などを供えてかえってくるのである。

水棚は無縁仏のための棚であり、先祖霊と区別することによって、無縁仏が家の中で悪事をしないようにしたものであろうが、なぜ水棚と呼ぶのであろうか、芭蕉を細かく切ったものをなぜ水子と呼ぶのであろうか。無縁仏と〝水〟の関係には興味深いものがある。日本各地には〝盆棚〟と称して、精霊が帰るための棚を設けるところが多いが、南種子においては、床の間に台を据えるか、芭蕉の葉を敷いてその上に位牌を下ろす程度である。盆の期間中に位牌を移すのは、やはりあの世から帰ってきた精霊を、見晴らしのよい、明るいところでお迎えするためであろう。

南種子においては、新仏のための棚を特別に作ることはしないが、新仏には供え物を多く供える。

十四日は前述のように、日に六・七回の食事・間食を供える。特別に何を供えると決まっているわけではないが、ブト（トコロテン）油揚げともやしの煮物などはほとんどの家で供える。新しい物、珍しい物を供えるという家が多く、精霊の供養を怠るとバチがあたると考えられているようだ。

(2) 精霊送り

ほとんどの家で、十五日に精霊送りと称して、手製のマキを持って墓参りに行く。以前は墓前で迎え火と同様、松明を燃やしていたというが、現在はほとんど行われていない。なぜ必ずマキを持っていくのか。調査によると、マキが帰っていく精霊の杖となり、船となるからと考えるのが適当であろう。この他百合の根を供えるという家もあるが、これも同様の理由である。

仏教（法華宗）では、精霊は家→墓→寺へ、石塔まつりのある所では家→墓→石塔→寺へと移動し、最後には寺へと集まる。そして十五日、十六日、寺では盆踊りをして盛大に精霊を送るのである。西之の本国寺では、十六日の午後から〝精霊送り法要〟〝施餓鬼法要〟を行ったあと、盆踊りを行う。最近は十六日までを盆と見る家が多く、十六日には棚をこわし、位牌を元に戻す、しかし以前は、前途の浜田のように、精霊があの世に帰りつく日までを盆と見なしていたに違いない。

5．礼言い

盆の十四日、または十五日にザッショウを持って親元にあいさつに行く慣行は、現在でも南種子全域で見られた。これは種子島だけでなく本土においても、一端嫁に行った者が、節句など特別な時に親元を訪れることと同じような意味で行われていると思われるが、「レイイー」「レイユー」など、名称を持った行事として残っているのが興味深い、しかし最近では、正月・盆だけの行事となってし

まっているのは寂しいことである。

6．タノミのセク

現在は行われていないが、以前は旧八月一日に、娘親がムコの所へ「娘をたのみます」とあいさつに行っていたという。

また、この日に柳の花を持って墓参りに行くということであるが、これはセックの墓参りと見るべきか、盆行事に関連したものと見るべきか定かではない。しかし、この日に精霊があの世に帰りつくという伝承から考えると、やはり盆行事と関連したものであろうか。

7．十五夜（旧八月十五日）

南種子全域にわたって、綱引きが行われる。ニサーシが中心となってワラで綱を練り、村落全員で引くのである。村落の娯楽的行事であり、団体意識を高める行事でもあったろうが、最近は子供のためだけの行事となりつつある。

各家庭では、仏壇、神棚や縁側にちょっとした台をつくり、そこにツノマキ・餅・ススキなどを飾る。十五夜行事は、その収穫祭的性格がよくクローズアップされるが、南種子においてはそれほど顕著ではない。

8．九月のセク（旧九月九日）

以前はこの日も礼言いが行われていたが今はほとんどない。菊の花を持って墓参りをする家が多い。

9．ガンジョウジ祭り・ホウネンマツリ

神社によって違うが、旧九月の特定の日に行う願ほどき祭りである。二月のシオマツリにたてた〝豊作を願う〟願を成就されたので、感謝の意をもってほどく。ホイドンの祝詞のあと、それぞれの村落が自分たちの踊りを奉納し、宴を催すのが特徴である。

つまり、この祭りは収穫を祝い、感謝の印に踊りを奉納し、最後に神と共食するという意味をもった祭りであろう。

10．火入れ祈祷

旧十二月に、南種子の立石・砂坂等で行われていた種子島特有の行事である。砂坂は近年まで昔のままの行事を保っていたが、上下塩屋の神社が統合されてからその規模は小さくなり、最近では数人の役員と村民で行うだけのものとなってしまった。以下、砂坂の火入れ祈祷を中心に述べると、火入れ祈祷は製塩開始の日に行われる行事で、神社、塩小屋、マキの神でのお祓いが終わったあと、カマジの家で直会が男だけで行われる。この直会は小番人の司会によってすすめられ、〝三つのみ〟〝五つのみ〟〝七つのみ〟〝ヒトラオーセ（一駄負うせ）〟〝タテノミ〟など何種類もの杯の「まわり」があり、メデタ節なども加わって、非常に盛大なものであったらしい。

この行事は、昔石灰で釜を作っていた時代その釜がこわれやすいことから、釜の安全を願ってはじめられた行事で、鉄釜になってからも、〝塩が多くとれるように〟と願い続けられた。現在では、その製塩も行われなくなり、火入れ祈祷の祭りがすたれていくのは仕方のないことであろうが、残念である。

四、さいごに

南種子町も含めて、日本または世界の伝統的な年中行事が失われていく傾向にあるということは、寂しいことである。盆行事においても、水棚作り、盆踊り、石塔まつりなど以前はあったと思われる慣行が一つずつ失われていき、このままでは将来の盆行事はどうなるのか、民俗学を志す私は不安に思うのである。また礼言いやタノミのセクなど、昔の礼儀を重んじる行事も今はなくなりつつある。

年中行事は、古代暦が日本に入ってくる以前から、固定的ではな

いにしろ存在したものもあろう。それは桜井氏がおっしゃるように、にエネルギーを補給するような性格であったろうし、また一年という時の流れを自然を含めて、折々に意識するようなものであったろう。しかし最近では、その伝承者が少なくなってきたせいか、一つ一つの年中行事の本来の意味を知ることもなく、その祭事的（ショー的）部分ばかりが強調され、年中行事＝祭り（リクレーション）と考えている人も多いのではないか。

現代社会は常時変容し、伝統的なものに即応しにくくなっているのは確かだが、その現代社会に応じた、しかも伝統的要素も持つ年中行事があってもいいのではないか。そのためには、年中行事のもつ本来の意味をしっかりと理解した上で、新しい形へと変化させていくことが必要であろう。単に派手なだけで季節感や信仰色の全くない年中行事は無意味である。

年中行事をどのように意識するかが問題である。

今回の調査では、不備な点も多く、当初予定していた内容の半分もこなせなかったことに関しては、深く反省し、次回の課題としてとっておきたいと思う。

さいごに、今回の実習において、お世話になりました方々に、紙面においてではありますが、心から感謝の意を述べたいと思います。

「参考文献」

・橋浦泰雄『月ごとの祭』（一九六六年、岩崎美術社）
・大島建彦編『年中行事』（昭和五三年、有精堂）
・下野敏見著『南西諸島民俗Ⅰ』（一九八〇年、法政大学出版局）
・『日本祭祀研究集成　第二巻』（昭和五〇年、名著出版）
・遠藤元男　山中祐編『年中行事の歴史学』（昭和五六年、弘文堂）

附録

伝承者（敬称略）

有留	新内（下中	里	明治二三.	五.	二五）
有留	チマ（下中	里	大正一〇.	三.	二一）
寺内	弥六（下中	里	明治三五.	七.	三〇）
寺内	ツヤ（下中	里	明治四〇.	八.	二〇）
大脇	平蔵（西之	崎原	明治三四）		
〃	トミ（西之	崎原	明治三六.	六.	二〇）
岩坪	末也（西之	本村	明治四三.	六.	二〇）
〃	スエ（西之	本村	大正　三.	二.	二〇）
岩坪	睦男（西之	本村	昭和二〇.	二.	一）
中脇ケイ子（西之		本村	昭和一〇.	一.	一二）
広浜	タネ（西海	上立石	明治三八.	七.	六）
大川	助蔵（西海	大川	明治三六.	二.	一〇）
立石	久義（西海	上立石	明治四五.	三.	二〇）
大崎	鉄次（茎永	中之町	明治三五.	二.	一）
梶原	ミツ（茎永	中之町	明治三八.	九.	一）
柳田	トヨ（茎永	宇都浦	明治三七.	一一.	二五）
大崎	蘇市（茎永	宇都浦	明治四五.	三.	二六）
園田	ソメ（茎永	宇都浦	明治三五.	四.	二五）
山野	甚八（平山	浜田	明治四一.	三.	一）
長田	実（平山	浜田	昭和　二.	一〇.	五）
日高	伝（上中	上野	明治三四.	一一.	二〇）
古市	エミ（上中	上野	明治四四.	二.	一五）
古藤	ハル（上中	上野	明治三六.	五.	一）
砂坂	岩碩（西之	砂坂	明治四三.	二.	一九）
砂坂為次郎（西之		砂坂	明治三七.	四.	一）
河野	永源（西之	平野	昭和二〇.	一一.	二九）
〃	三枝子（西之	平野	昭和一八.	四.	三〇）

信仰 I
（村落神・屋敷神・屋内神）

（三重県）宮川医療少年院職員　園田成史

一、はじめに

種子島は大隅半島の南に位置する細長い平坦な島である。日本書紀等の古い文献にも、その名が出てくるように、古くから本土との交流があり、古い文化も数多く残っているようである。

私は今回の調査のテーマとして信仰を選んだが、種子島は古くから法華宗の盛んな島であり、そのことが人々の信仰に何らかの影響を与えているのではないか、ということが予想された。

また、もう一つ興味深いものとして、ガロー山の存在が挙げられる。これは島内でも特に南種子に多い。今回はあまり詳しく調査することができなかったのは残念であるが、それでも3か所ほどガロー山を観察し、話を聞くことができた。

二、村落別の事例

(一)　上中

1　神社

(1)　河内神社

もともとは極楽寺という寺であったが廃仏毀釈により河内神社となる。明治四十三年、豊受神社を合祀。河内の村落の神社でもあり上中校区の神社でもあり、管理は上中校区でしている。

2　屋内神

(1)　カミダナ

①河野宗得さん宅

カミノザの床の間の、向かって右側に設置されている。親や子供などのうち最近亡くなった人を祀っている。奥さんと本人が、たまに拝む。その時は柏手は打たない。珍しい物があったらそれを供える。

②古市啓喜さん宅

カミンザの床の間に、向かって左側に設置されていて、注連縄が張られている。中央に祖先、その両側に両親を祀っている。その上には大麻が祀られている。供える花はイロバナでもよいとされている。供え物をするのは、ほとんど奥さんである。三日に一度くらい柏手を打って拝む。タイヤの時などは二礼二拍の正式な拝み方をする。

カミダナに関する禁忌として、隣の家のカミダナと背中合せになる場所に設置してはいけない、というのがある。

(2)　御札

①河野宗得さん宅

テイスバシラに天津神・国津神の御札が台所の方に向けて貼られている。村落で毎年、配られるものであるが、特に拝んだりすることはない。

②古市啓喜さん宅

テイスバシラの御札は河野さん宅のものと同じで台所の方に向けて貼られている。日常は特に拝むことはないが、七～八年ぐらい前までは、トシノバンにザワリ（座割り）という注連縄をカミダナの左から台所までテイスバシラを経て張りスミ・ユズリハ・ウラジロを飾った。

ヒノカミは台所の壁に水神・火神の御札が貼られていて、女の人が水等を供えた。花を供える場合、白や黄色の花はよいが、赤い花は火と争うため供えてはならない。

これらの御札は毎年、公民館長のところで配布されるものである。

3　ガローヤマ

村落のはずれの道路脇の人家の北西に上中の山崎の尾辻さんという人が管理しているガローヤマがあり、管理者以外は寄り付かない。今でもタタルといわれ、おじさんが木を切ったため目が見えなくなったという話が残っている。木の根本に自然石が祀られていて、果物や塩が供えられていた。

また河野さんによると昔は神社の近くにもガローヤマがあり、恐いような気がした、ということである。

(二)　茎永

1　神社

(1)　上里神社

ウジガミサマとかミヤとかヒゼン神社とも呼ばれている村落の神社、昔は堀があった。戦に負けて逃げて来た人が城を構えた跡である、という話が伝わっている。春祭りと霜月の十五日にお参りに行く。

2　屋内神

(1)　カミダナ

①羽生千代松さん宅

現在千代松さんが住んでいる建物はインキョヤである。カミダナの中のものは奥さんの死後全て本宅に移している。

これはカミダナではないが、羽生さんの家には巻物をくわえたキツネの焼物があり、これが大事にされていて、現在は本宅の床の間に祀られているが、千代松さんは毎朝拝みに行くそうである。

(2)　御札

①羽生千代松さん宅

テイスバシラに天津神・国津神の御札が玄関の方に向かって貼られている。台所には火の神として奥津比古神・火産霊神・奥津比女神の御札がテイスバシラの御札と同じ方向に向かって貼られている。これらの札は毎年貼り替えられる。火の神にはサカキとツバキが供えられていて、毎朝水をやって家内安全と火事にならないように、ということを祈る。テイスバシラの御札は特に拝むことはない。

(3)　バトウカンノン

これは上里のものではないが、昔千代松さんが元気な頃、上中に行く道の途中にバトウカンノンがあり、千代松さんはそこを通る時はいつもそれを拝んだ。そしてオカミサンに千代松さんにはバトウカンノンが障っているが、それは悪いものではなく、自分を頼りにしろと言っているのである、というようなことを言われた。千代松さんはそのため病気をあまりしないそうだ。

(三) 下中

1 神社

(1) 下中八幡神社

下中全体の神社で、祭神は応神天皇と天照大神。大祭が二月十五日、六月十五日、九月十五日、十二月十五日に行われる。戦の神であるといわれている。

(2) 花峰神社

花峰小学校の裏にある。もともとは山神の神社であったが、里には神社が無かったため現在は里と山神の神社になっている。昔山神にいた山神ドンという人の墓で、七月に草払いをした後、男の長老が紋付き袴を着て的を射る行事がある。クボノミヤサマとも呼ばれている。

(3) ウジガミ

真所にも小さな神社があり、これは真所の村落の神になっている。境内に三つの石塔があり法華宗の題目と全修院日生大徳という師匠の名が彫られている。

2 屋内神

(1) カミダナ

①篠山ミエさん宅

カミノザの床の間の右に設置され、亡くなった人や先祖を祀っている。お茶と水は毎朝供える。新しく御飯を炊いた時は自分が食べる前に先にカミダナに供える。珍しいものもカミダナに供える。お盆には果物・煮物も供え、一日に三回も四回も拝むそうである。普段は様々な花を、彼岸にはヒガンバナをお盆にはサカキを供える。拝む時は柏手を打つ。

篠山さん宅にはこの他にミエさんの部屋に遠藤家の祖先のカミダナもある。ミエさんはもともと遠藤家から篠山家に嫁に来たのだが、遠藤家で祀る人がいなくなったため、カミダナをこちらに持ってきたそうで、篠山家のカミダナと同じように公平に祀っているそうだ。

②寺内弥六さん宅

昔はカミダナと呼んでいたが、現在はブツダンと呼んでいる。床の間と同じ向きではなく直角になるように設置されている。今回の調査の中でこの家だけが市販されている仏壇を使用していた。

(2) 御札

①篠山ミエさん宅

山神でも正月一日にカイタク（公民館）で御札が配られ、お祓いを受け悪い神や悪いカゼを防ぐ。御札はテイスバシラと台所に貼る。テイスバシラには正月は注連縄を巻いて、花餅・ユズリハを供える。

②寺内弥六さん宅

テイスバシラに天津神・国津神の御札と家運長久守護攸の御札が貼られている。台所には火の神として奥津比古神・火産霊神・奥津比女神の御札が貼られている。これは奥さんが供え物をして火事にならないように拝む。ブツダンの上と玄関の戸の上には法華宗の御札が貼ってある。

(3) 水神

①篠山ミエさん宅

篠山さんの家には井戸があるが、正月は家族みんなでシュエーや御神酒を供える。水神は祟るので恐いそうだ。

②寺内弥六さん宅
昔、奥さんが井戸端で洗濯をしていると、三才になる子が小便をしたらしく急に注ぎ始めた。その後足腰が立たなくなってしまい、本善寺の師匠に祈祷してもらうと治った。これは水神のトガメだということだ。

(四)　西之

1　神社

(1)　砂坂塩釜神社
上下塩屋神と貝先祖神の三社を昭和五十一年に合祀遷座したものでもとは製塩業者の神であったが、現在は砂坂の村落の氏神となっていて天照皇大神を祀っている。

(2)　エビス
砂坂神社のすぐそばにある。海の方に向かって建っている。漁業の人々の神である。

2　屋内神

(1)　カミダナ
①砂坂福丸さん宅
玄関から入って左側の部屋に奥の方に向かって設置されている。奥さんが毎日朝晩拝むが、福丸さんはほとんど手を合わせることもない。

(2)　御札
テイスバシラには天津神・国津神の御札が台所の方に向かって貼られている。台所には火の神として奥津比古神・火産霊神・奥津比女神の御札が貼られている。玄関脇にも法華宗の御札が二枚貼られている。

(3)　ガロー山
昔、老松の根本に鎌倉から製塩技師として連れて来た貝氏の死体を埋めた。そこがガロー山であり、立ち入ることを忌むそうだ。

(五)　島間

1　神社

(1)　滝口神社
祭神は滝口大明神。この地はもともと石塔と呼ばれ最初にこの地に住み着いた祖先の墓といわれ、村の守り神の聖地として祀られてきた。明治維新前には小平山十六門の百姓の田の神として祭っていたが明治十四年村全員の神として祀ることになり神社を建てかえた。

2　屋内神

(1)　カミダナ
①久保田孝男さん宅
玄関から入って左側の部屋の床の間の向かって右側に設置されている。先祖を祀っている。菊の花・サカキ・お茶等を供えている。

(2)　バトウカンノン
①久保田孝男さん宅
久保田さん宅では床の間の左側にバトウカンノンを祀っている。神体は石だそうだ。これは牛の神様で、馬の神様は隣の家で祀られている。四〇～五〇年ぐらい前までは近所で牛のお産があると

きは、その家の人が御神酒を持ってお参りにきた。現在は奥さんがお茶などを供えて毎朝拝むが、奥さんが四十五歳ぐらいまでは拝ませなかった。理由は月経があり汚れているからだそうである。

(3) 御札

①久保田孝男さん宅

毎年神主が二枚の御札を持って来る。テイシュバシラと台所に貼るが、毎年一月三日に貼り替え、古いものはお祓いをして焼く。毎朝拝むが、若い人は拝まないだろう、ということだ。

3 バトウカンノン

長谷に通じる道路脇に祀られている。管理者は久保田孝男さん。昔、牛を放牧していた所で、盆・正月・節句には久保田さん宅と、もう一軒（馬の神を祀っている家）の人が掃除をして供え物をする。この前を馬に乗って通る時は足をアブミから外さなければならない、とか月経中の女は通ってはならないという禁忌があった。

その他の村落の人々はここに拝みに来ることはないが、滝口神社にもバトウカンノンがあり、それを拝む。

4 ガローヤマ

ガローヤマとは言っていないがガローヤマに似た話を聞けたので記しておく。

小山スミさんの話によると、五～六年前、稲子泊の浜の橋のそばの山に、ある女の人が薪を拾いに行った。ところが夕方になっても帰宅しないため夫が探すと瀬の大きな岩の上にぼんやりと座っていた。夫が問いただしても何故そこに座っていたか憶えがなく、ただ山でワァーンと大きな音がしたことだけ記憶していた。その女の人はその後病気になって入院してしまったそうだ。

このことを稲子泊で畑仕事をしていた女の人に聞いてみたが、その人はその話は知らなかった。ただそこは国有林だから入ってはいけないといわれる、ということだった。

(六) 平山

1 神社

(1) 平山豊受神社

もとは善福寺という寺だったが廃仏毀釈によって神社が建てられた。平山校区全体の神社である。

2 寺

(1) 善福寺

廃仏毀釈後、西之町の善福寺から広田に師匠を連れて来てかくまっていた。そして宗教が自由になった後も広田の人々が帰したがらなかったため、ここに寺を造った。現在住職は山田妙信さんである。広田の主な法華宗の行事としては初ギトウや石塔祭があるが、善福寺で行うのは初ギトウである。明治八年の一月四日それまで埋めて隠されていた日蓮の像が掘り出された。それを祝って毎年一月四日は広田の人が集って雑煮を作って食べる。

入って左側に御宝前という祭壇が設けてあり日蓮上人が祀られている。その右には善福寺の代々の位牌、左には住職の家庭の位牌が祀られている。

3 屋内神

(1)　カミダナ

①崎田義一郎さん宅

カミザの床の間の左に設置されている。次男家であるため親の位牌は祀るが、それ以前の祖先の位牌は長男家で祀られる。牛玉根本山寶印の御札と豊受神社の御札が貼られている。

②向井二生さん宅

カミザとヨコザの間の壁に縁側の方に向かって設置されている。家族の誰もが朝拝む。子供の土産など珍しいものは一度カミダナに供えてから食べる。

③向井喜之夫さん宅

カミンザに二つのカミダナがある。床の右のカミダナは喜之夫さんがお伊勢参りをしたあとに作ったもので天照皇大神宮の御札が祀られている。ヨコザとの間の壁に設置されているカミダナはもとからあったもので、先祖の位牌・豊受神社の御札・エビスと大黒の絵等が祀られている。

④佐藤シナさん宅

床の横に設置されている。誰が祀るかは特に決まってはいないが、供え物は朝供える。新しい仏には一日三回、また信心深い人は朝晩供え物をするという。

⑤徳永実さん宅

カミザの床の間の右に設置されている。先祖を祀っている。家族の誰でも拝む。朝だけお茶と御飯を供える。

(2)　御札

①崎田義一郎さん宅

テイスバシラには何も貼っていない。台所には火不能焼・水不能漂の御札が貼ってある。カミダナの横には勧請普賢三寶大荒神(これも火の神)ともう一枚法華宗の御札が貼られている。火の神は主婦が祀るそうだ。

崎田さん宅は法華宗を厚く信仰しているそうで、神社から配られる二枚の御札は貼らずにカミダナに置いてある。また神社の行事もみんなが参加するものには参加するが、それ以外にお参りに行ったりすることはないそうである。

②向井二生さん宅

テイシュバシラには天津神・国津神の御札が台所の方に向かって貼られているが、特に供え物をしたり、拝んだりすることはない。

台所には奥津比古神・奥津比女神・火産霊神の御札が貼られ奥さんがサカキを供えて拝んでいる。

③向井喜之夫さん宅

向井二生さん宅と同じ御札をテイシュバシラと台所に貼っているが、テイシュバシラにはシダとサカキ、火の神にはサカキと水と古銭が供えてある。

④広田実さん宅

テイシュバシラには天津神・国津神の御札が台所の方に向かって貼られているが、特に供え物をしたり、拝んだりすることはない。家内安全を願って貼られている。台所には奥津比古神・火産霊神・奥津比女神の御札が貼られている。

4　水神

(1)　向井里の水神

向井里十三戸が昔、産湯から死に水まで世話になった井戸の跡に石碑を建てて祀っている。特に祭はないが、年に二回ぐらい掃除を

する。昔、向井トキオという人が石亀を捕って来て井川に投げ込んでおいたら熱が出たが翌日、その亀の死体をお祓いしたら治った、という話が伝っている。

(2) 広田の水神

広田川の橋のたもとから少し入った田の脇に豊受水神が祀られている。約五十センチ四方のコンクリートの土台に幅二十二センチ、高さ五十センチ程の石が建てられ表に「豊受水神」、裏に「平山地区公民館建立」と彫ってある。

徳永実さんによれば水神は火の神より強く、また祟ったりするという。

5 ガロー山

(1) 中畠助十ガロー

西之町の中畠泉さん宅のインキョヤを過ぎ、よく整えられた道を数十メートル行った所にあり、家から北東の方向にある。祭場の敷地は底辺二・七メートル、高さ一・六メートル程の三角形になっていて、その頂点にある椎の木の根本に幅二十七センチ、高さ五十七センチ程の自然石があり、その周りには露出しているだけでも百二十個を超えるガル石が敷きつめられている。

(2) 向井里のガローヤマ

石の小祠が建ててあり、その両側にイヌマキの木が植えている。向井里十三戸で祀っていて、ウジガミサマとも言う。

トシノバンに各戸主や跡継ぎが来て、杯、餅、ユズリハを供え一年の感謝をし、翌年のお願いをする。最近では六月燈も行う。

一年交替で係を決め、その人が掃除をしたりする。それ以外の人はあまり来ない。特に女性は立ち入らない。

(3) 岩下ガロー

徳瀬の道路脇にある。タブの木の根本に灯籠の頭の部分が置いてあり、周囲にガル石が敷きつめられ、焼酎が供えられている。岩下さんに会えなかったため詳しい話は聞けなかった。一年程前に見た時は林の中だったが、現在は周りの木が切られ、道路から丸見えの状態になってしまっている。

(4) その他のガローヤマ

徳永さんによれば、現在、広田にはガローヤマは無いが、昔はあったそうで、大きなサンタブの木があって、徳永さんのおじいさんの頃まで祀られていたそうだ。今でも近くに行くと気持ちが悪いという。

三、考察

1 神社

今回、私が調査した神社は大字（校区）の神社と小字（村落）の神社に大きく別けることができる。平山豊受神社・河内神社が前者にあたる。この二つの神社の共通点として、もともと寺院であったものが、廃仏毀釈後、神社となり校区全体の神社となった点が挙げられるだろう。今回の調査での私の感想ではこの二つの神社は住民に深く信仰されてはいるものの日常生活とはあまり密着していないような気がする。

例えば平山のある家を見てみると、御主人自身は神社に行くことはほとんどないという。神社に関する行事で校区の全員が参加するものには参加するが、それ以外で神社に行くことはない。初詣も寺に行くし、子供も平山豊受神社ではなく熊野の神社に行くという。

この事例から考えると、平山豊受神社のように政治的な力によって造られた神社というものの機能と数百年来ある寺の機能とは、若干違うのではないかと思える。

これに対して、もう一つの小字の神社の方は、花峰神社・滝口神社などがこれにあたるが、大字の神社に比べて、住民にすんなりと受け入れられているようで、ミヤとかウジガミサマとかの親しみを込めた呼称からも、そのことが推察できる。

2　屋内神

まずカミダナに関することから考えてみたい。今回の調査では一軒だけブツダンと呼んでいたが、その他はカミダナと言っていた。

本土と比較してみると、まず本土では神棚と仏壇が分離し、神棚には神様を、仏壇には先祖を祀っているのに対し、南種子のカミダナは先祖を祀ると同時に、そこに神社の御札があったりする。神道の家でそのようになっているだけでなく法華宗の家でもそうなっていた。つまり神仏混交の状態になっているのである。

ここで考えてみたいのが法華宗の影響である。山田妙信さんの話では、法華宗の題目「南無妙法蓮華経」には「南無」……「お任せします」、「法蓮華経」……「全宇宙の全ての神様」という意味があるそうだ。ある一つの神や仏ではなく全ての神仏を信仰するのであるから、祖霊と天照皇大神等をいっしょに拝んだとしてもよいわけである。

このように考えると御札についても納得がいく。法華宗の信者が神社の御札を貼っても何ら問題はないわけである。

テイシュバシラの御札は家内安全を、台所の御札は火難除けの役割を持つということはどの家でも共通していた。また台所の御札は供え物をしたり拝んだりするのに対してテイシュバシラの御札は特にそのようなことはしないというのも共通している。

3　ガローヤマ

ガローヤマは少しずつ消えつつあるようだが、それでも様々なタイプが残っている。

ガローヤマとして住民にはっきり意識されて祀られているものと、そうではないが「あそこはガローヤマらしい」と思われても、はっきりとしないものがある。畠中助十ガローや向井里のガローヤマ、河内のガローヤマなどは前者の例であるが、小平山の稲子泊での話は後者の例だろう。

前者のものは更に幾つかのタイプに分けられるのではないだろうか。一つは樹木あるいは森林に対する信仰、もう一つは氏神としての信仰である。その他にもいくつかのタイプが考えられそうだが、今回はガローヤマの管理者に話を聞く機会が一度しか無かったので今のところはそれだけを挙げる。

また管理者以外の者の視点から見るとガローヤマには防風林としての機能もあるのではないだろうか。そのため「タタル」という伝承によって樹木をみだりに切ったりすることを戒め大事にしているのではないだろうか。

4　石に対する信仰

今回の調査で気付いたことの一つに信仰の場にしばしば石が登場することである。墓・ガロー山・神社・カミダナ・バトウカンノン等あらゆる信仰の場に自然石が置かれている。その場合、ほとんどが表面はつるつるしていて全体に丸みを帯びたものが置かれている。

どのような経過でそのような石を持って来て置いているのかは分からないが、その使われ方は大きく二つに分けられている。一つは信仰の場において装飾的な感じで周りに並べられたり積まれたりしているもので、ガル石と同じような使われ方である。

もう一つは石自体が神体あるいは神の依代のように祀られているものである。こちらはアニミズム的な要素があるといえるだろう。

いったいどのような理由で自然石が信仰の対象になるのかということは今回の調査では分からなかったが、今後の課題として興味深いものである。

5　その他の信仰

(1)　水神

今回の調査では事例は少ないが、共通点としては、強い神であり、祟ることさえある、というのが挙げられる。このことは種子島以外にも事例があり、桜島でも同様の話が聞けた。

(2)　バトウカンノン

今回の調査では小平山の一列だけだったがおもしろいと思ったのは、それが一か所ではなく、牧のあった場所、滝口神社、管理者の家の四か所に分かれていて、それぞれの場所によって拝む人が異なっている点である。

もともとは牛馬の神であるのに、滝口神社・管理者の家のものは、守護神的なものに変ってきつつある。

牧のあった場所にあるバトウカンノンは、その形態はガローヤマに非常によく似ている。

このバトウカンノンの事例とガローヤマをいっしょに考えてみれば、原始的な宗教から現在のような宗教への変遷の過程を考える場合に大きなヒントが与えられるのではないだろうか。

四、最後に

今回の調査はたったの一週間で南種子を大急ぎで回ったため、南種子の信仰のおおまかなアウトラインをつかんだだけに終ってしまったようだ。あえて南種子の信仰の特徴を挙げるなら、法華宗が強力に根付いていて、そのことが祖先の祭祀やその他日常の信仰に影響を与えていることと、ガローヤマ等、古い信仰の形態が残っていて、それが日常の生活に異和感もなく溶け込んでいることの二点を挙げられるだろう。

今回は私の準備の不足や手際の悪さのため突っ込んだことがあまり聞けず残念である。ガローヤマ等は少しずつその姿を変えたり消したりしつつあるようだが、信仰・宗教の発生・発展を考える上で非常に貴重なものだと思う。是非これからも大事に残していって欲しいものだ。

最後になってしまったが、私達の調査がスムーズに行えるように尽力してくださった役場の皆様と、農繁期の忙しさにも関らず、快く話を聞かせてくださった伝承者の皆様に心から感謝致します。

〔付　伝承者〕

羽生千代松さん　茎永　上里
明治三九・四・五　神社・屋内神等

砂坂福丸さん　西之　砂坂
昭和二・九・二〇　マキ・神社等

久保田孝男さん　島間　小平山
大正一五・三・二八　バトウカンノン

小山スミさん　島間　小平山
明治四三・一・五　産育・祟り

崎田義一郎さん　平山　西之町
昭和九・一一・二四　屋内神

向井二生さん　平山　仲之町
昭和二・一・一　ガローヤマ・水神等

向井喜之夫さん　平山　仲之町
大正三・三・一三　屋内神

佐藤シナさん　平山　広田
明治四五・二・五　屋内神

山田妙信さん　平山　広田
昭和五・一・一七　法華宗

徳永実さん　平山　広田
大正一二・八・四　屋内神・ガローヤマ

徳永道子さん　平山　広田
昭和二・三・一五　屋内神・ガローヤマ

徳永ヒデさん　平山　広田
明治三三・三・一五　屋内神・ガローヤマ

河野宗得さん　上中　河内
明治四〇・五・二五　屋内神・ガローヤマ

古市啓喜さん　上中　河内
大正八・一・一　屋内神・ガローヤマ

古市美江子さん　上中　河内
大正一四・一一・七　屋内神・ガローヤマ

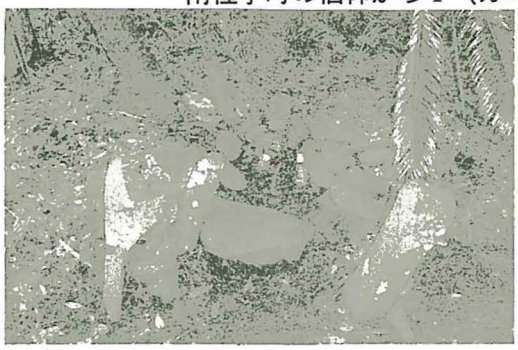
篠山ミエさん　下中　山神
明治三七・六・二八　屋内神・水神・神社

川畑シナさん　下中　山神
明治三二・三・一〇　神社・屋内神

遠藤シオさん　下中　山神
明治四〇・二・一六　神社・屋内神

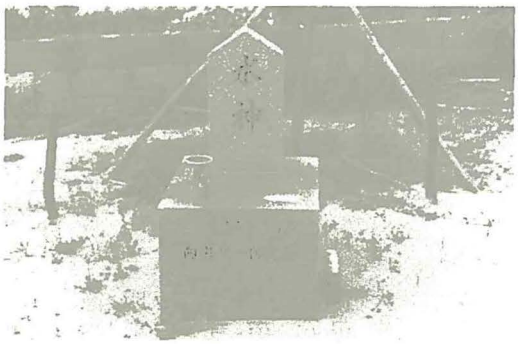
寺内弥六さん　下中　里
明治三五・七・三〇　屋内神・神社・水神等

南種子町の信仰からⅠ（ガローヤマ・牧の神・水神）



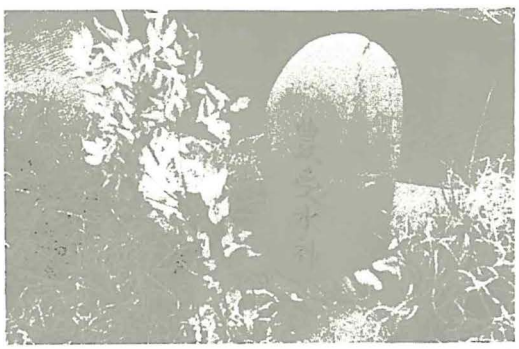
小平山のマキノカミ（牧の神）

向井里のガローヤマ

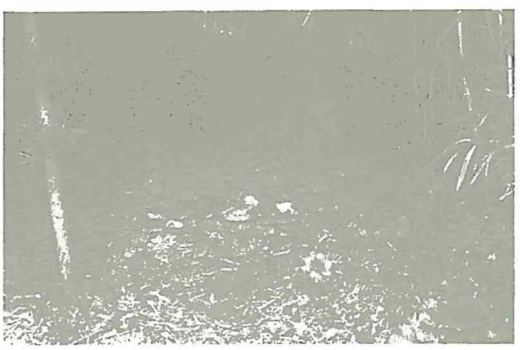


向井里の水神

河内のガローヤマ



広田の水神

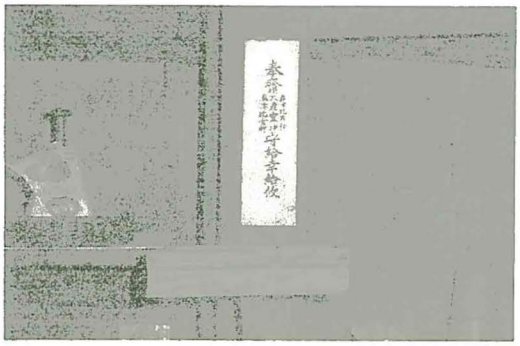


畠中助十ガロー

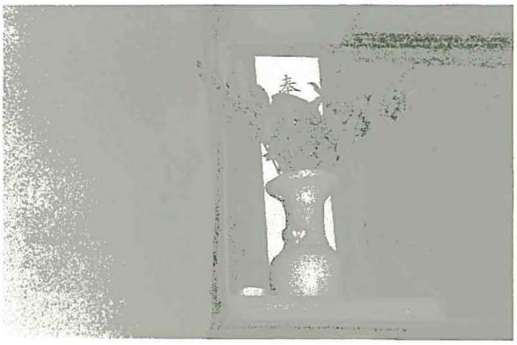
南種子町の信仰からⅡ（仏壇・神棚・亭主柱・火の神）

寺内弥六さん宅のテイシュバシラ

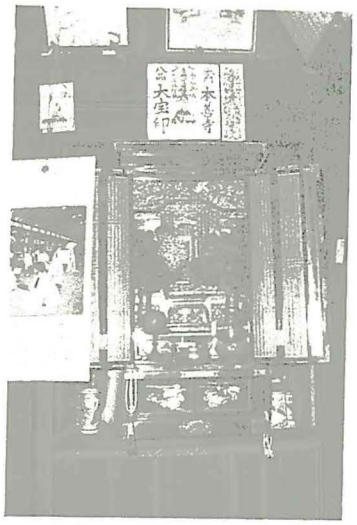
向井喜之夫さん宅の神棚



寺内弥六さん宅の火の神



向井喜之夫さん宅の火の神



寺内弥六さん宅のブツダン

向井喜之夫さん宅のテイシュバシラ

南種子町の信仰からⅢ（神棚・寺）

篠山ミエさん宅のカミダナ

善福寺の御宝前（広田）

篠山ミエさん宅にある遠藤家の先祖のカミダナ

崎田義一郎さん宅のカミダナ

信　仰　Ⅱ
（シャーニズム・民間神・墓制）

中華人民共和国長春市在住　何艶（か えん）

一、はじめに

一九九〇年三月十二日から三月二十日にかけて八日間に亘り南種子町の民俗調査をすることになった。

いろいろ昔の伝説や民俗風習の豊かな種子島で、私は主に昔から現在までの日本人の巫俗信仰と民間神と墓制について調べたのである。

物質生活の豊かな現代日本では、特に都会ではほとんど昔の姿が見られない。但し、日本人の精神生活の中の、心的活動には、まだ東洋人そのものがたくさん残っているし、ちゃんと生きていると言えるであろう。ならばそれをどのように現代社会に適応させるのか、そしてどういうふうに時代の変遷に従って進ませるのか、私は知りたいし、興味深いのである。

二、調査実態

(1)　巫俗（ふぞく）ー人神の交流者「シャーマン」

①大脇キリさん　大正十年生まれ、住所　野尻

二十八歳のとき、子供が三人なくなった。ある日カライモをきるとき一匹のへびを殺した。そのしっぽが竹をまわって動いた様子を見ると驚いて病気になったのである。手足も不自由になって一年間ぐらいかかっても治せなかった。神職の紹介で鹿児島市に住んでいる伊佐山アツコというシャーマンにあって昭和二十九年一月十日から本格的に修行に入った。週一回先生に教えてもらって巫女の練習をする。そして水をかぶって潔（みそぎ）をし、歌を歌ったり、家にたくさんの塩を撒いたり酒をふりかけたりする。大根をまず神の前に置いてそれから海にながす。三十三年に免許を取った。先生のなくなった三十七年まで一緒に歩き回ったがあとは一人で神様になった。自宅には祭壇があり、依頼者が電話で予約をするのが普通である。やり方は来訪と出訪との二種類、依頼者にはくすりをあげたりしない。その頼むことを神様に伝えて、それから神様の話を托宣する。神様の前ではきれいなほうがいいから仮衣を着る。白いシャツと水色のスカートである。本人の信仰は仏教であるが神事は御嶽教であり、その本部は熊本にある。後継者が弟かも知れないがまだ決めていない。

依頼者のお礼は普通二千円ぐらいでほかに焼酎、果物、お米などもある。

巫具は一台の太鼓と御幣と御嶽教の経書などが中心である。巫儀はまず依頼者から話し、それからシャーマン（神様）が太鼓をたたき、伝える。悩みごとがあれば何でも祈祷できる。一人の高校生の大学入試の祈祷が当ったそうである。遠いところからの依頼者が多い。

神様の供物はほとんど依頼者が持ってきたものである。朝晩祈祷する。ふだんは不潔なことをしない。占いもする。年一回祭りをするが、二月一日に信者が皆シャーマンの家に来て、一緒にご

ちそうをしたり、写真をとったり神様に祈ったりする。一人二、三千円ずつ出す。

（三月十四日）

②折戸トメさん、明治三十九年四月十二日生まれ、

住所、中種子町

ご主人が海軍なので一緒に台湾へ行った。そこで和洋裁の仕事をして、いつも教会の前を通る。いつのまにか神に憑かれて、体が急にへんになってたくさんの人の前に立ち上がり長時間話をした。

日本にもどってから鹿児島市の山さき先生についてあちこち歩きまわり、先生がなくなってから種子島に住んでいる姉のところに来て、自宅に祭壇を設けた。人の家へ行ったり依頼者が来訪したりする。飛行機できた人もいる。占いや病気治療、失いものなども当てる。太鼓、御幣、鈴の巫具があり、患者に薬はあげない。主に原因不明の患者に病気の原因を教える。信仰は御嶽教である。その経書もある。神様に歌うとき、その経書の中の内容である。修行のとき海や川に入って体を洗う。

後継はお嫁さんである。昭和五十五年ごろから一人の訪問者のすすめで、その信仰を続けていくために修行の道に入った。苦労な修行をしなかったからなかなか神様の声は聞こえない。朝晩神様の前にお母さんと一緒に声を出して御嶽教の経書を読む。金を出して免許を取ったが試験を受けない。依頼者が来たらお母さんの手伝いをする。（神様（お母さん）は耳が遠いからお嫁さんが依頼者の話を伝えてあげる）祈祷するのが中心、死霊憑きなどすぐ落ちる。女性の依頼者が多い。そして遠いところから来た人が多い。神様は足がちょっと悪くて、薬を毎日のんでいる。神に祈祷したらいいのかと聞いたとき、まあ、よくもならないし、悪くもならないと答えてくれた。話をするときは普通の人と同じで、神に祈祷するとき、仮衣に着替えて（白いシャツと水色のスカート）元気いっぱいになった。御嶽教の教本を暗誦しながら、依頼者にあんましてあげる。そして焼酎を顔や体に浴びる。

依頼者からのお礼は金なら二千円ぐらい、ほかにものでもいい。人の家に行くとき、はらいぐさ（御幣）と衣装を持って行く。家の神棚の前に儀礼をする。決った時間ではなく、夜でもひるでも、人によって違う。神様は自分の霊が出てきたような感じがするという。祈祷するときは目をつぶって、人に神の話を伝えるときは目をあける。話の内容によってやさしかったり、活発になったりする。

依頼者が電話で予約するのが多いが手紙で予約するのもいる。

（三月十七日）

③遠藤友成さん、五十五歳？住所、新町

以前は無信仰であり、四十九歳のとき交通事故で失明、精神も狂う。鹿児島県神経病院衛生センターの院長さんのすすめで、神の道にすがることで生きる力が湧く。それでこの道に入った。六年間の修行をした。夏でも冬でも水かぶりしたり、修行の内容を朝から晩まで千回くりかえして読むうちに、自分の頭に全部覚える。奥さんに最初読んでもらって、むずかしいところは録音して聞いているうちに神様の様子も目の前に現れる。信仰は御嶽教であり、奈良で六年修行、それから種子島に住んでいるおばあさんについて三年間勉強、試験を受けて、免許を取った。先生は試験の問題を出して、面接試験である。自宅の二階に祭壇があり、依頼者が来たとき、まず奥さんのところで名前と年令を書いて、それから奥さんが二階に上がって神様に伝えて、許しをもらって二階に登る。神様は占いを中心にする。耳で見る。鼻で聞く。依頼

者が来て、ほとんど依頼のことをくわしく言わないが神様は亜分かる。そして、人の話を聞くとき、その人の顔立ちや服装も分かるそうであり、祈るとき歌のように声がのびのびしている。節分のとき太鼓をたたく。占い道具がない。自分が祈祷するときはどんな感じもない、ただ目の前に神様の姿が浮かんで来る。但し、依頼者が信仰しなければ効かない。仮衣もある。白いシャツと水色の袴である。この道に入ってから病気が自然に治った。私たちと話をするときは普通の人間と同じである。祈祷のとき人間の苦労を人形に移す。そして水に流す。以前は依頼者がいつでも来てもよかったが今は健康のために朝は九時から夜六時まで占いをするという。それ以外の時間に来た人はことわる。礼金は二千円ぐらい、ほかのものでもいい。また何も持ってこない人もいる。依頼者には心配事の多い方が多い。遠藤さんの家のそばには「御嶽教教室」という大きな看板も立ってある。

（三月十八日）

(2)　民間神

①南種子町、野尻

村落神は仏であり毎年一回祭りを九月二十八日に八満宮で行なう。村落の全員参加する。主祭人は交替で男性が担当する。祭りの日には踊ったりごちそうをしたり、不幸をなくすように祈ったりする。個人の家には仏壇がある。その中に祖先の位牌も置いて、朝晩ご飯や茶を上げて、ときどき夜焼酎もあげる。新鮮な果物やお菓子などもまず仏壇の前に供える。仏壇は「カミノザ」にある。

②郡原

村落神は神道の神様であり、毎年の九月二十日ごろ神社で祭りをする。神社の係の家でごちそうをつくり、村の全員参加する。主祭者は村の年長の男性で担当するが今は年寄りがいないから若い人が担当している。

個人の家には神棚がある。先祖の位牌も一緒に供養する。毎朝ご飯と茶、夜はたまに酒をあげて、なくなったおかあさんとおとうさんと一緒に食事をするという意味であるそうだ。神棚はカミノザのへやの床のまのそばに設ける。

③田尾

村落神は仏と神様（エビス神）である。毎年の十一月神社で祭りを行ない、参加者は老人と役員であり、普通の漁民はただその日とった一番大きな魚を神様の前に供えて、それから自分の家へ持って帰ってその魚は男の子に食べさせて、女の子に食べさせない。なぜかというと、海の神は女性であるから互いにしっとしてたくさん魚がとれなくなってしまうからとのこと。この習慣はずっと昔から今まで続いている。

昔五月の節句には祭りもした。男女ともに踊ったりしたが、今はどんな祭りもしない。

個人の家にエビス神を供養する人もいるし仏と神道の神様を供養する人もいる。エビス神様の神体は一個の石である。

④島間

村落神は仏とエビス神様である。昔から半農半漁の村で両方を信仰する。祭りはお正月、三月の節句、五月の節句とお盆の日にする。村全員参加する。寺を建てるときの世話人が一年二人ずつししょ人になる。寺総代と言う。

個人の家には仏壇が設けてあり祖先の位牌と一緒に供養、朝はご飯とお茶、晩には酒だけあげる。もらったものをまず仏の前に出す。

屋敷神は二枚の銅鏡である。もう四代目であり、鏡のうらに家もんがあり、屋敷神様はその家の後に小さい神社のような建物の中に置いてある。赤い布で包む。ほかに石も置いてある。

⑤仲之町（平山）

村落神、昔は全部仏教であったが明治以後神社ができて、寺も神社に変わった。それで今は仏教と神道両方信仰する。

向井喜之夫さんの家には火の神を供えてある。台所のカマのそばにある柱の上に置いてある。一本の花瓶に木の葉をさして、柱の上に字を書いてある紙をはっている。

仏壇に祖先の位牌を一つの小さい箱に入っている。形は一枚の位牌と同じ、とても便利でいい方法だと思う。毎朝ご飯と茶、晩に酒をあげる。新鮮な果物などまず仏壇のところに置いている。場所はカミノザのとこのマの横にある。

⑥梶潟（かじがた）（中種子町）

村落の神様は神道であり、塩釜神社で年二回祭りをする。大きなのは十月十日の秋祭りである。収穫物をもって行って踊り、神社の係がししょ人になる。不幸のあった家庭の人は参加しない。

小さい祭りは春祭りであり、一年の豊作と幸せを祈祷する。踊らない。

個人の家には神棚を設ける。が、エビス神も祀祭する。この村は農業が盛んである。

⑦本村（西之）

村落神は仏と神様両方である。個人の家には仏壇と神棚がある。一人のおばあさんが息子の家に仏壇と祖先の位牌を供養するから、自分の家には仮仏壇をつくった。なぜかと聞いてみると、なければ何かおちつかないような気がするからとのことである。机の上に供物を置いて、壁に寺からもらった符をはっている。場所は寝室にある。たぶん仏といっしょにいるならよくねむれるかも知れない。

⑧茎永

村落神は村落の氏神である。毎年の旧暦九月の願成就祭りは役員はもとより村の全員が参加して祝う。

神道の家では個人の家に神棚があり、山のきれいな木の葉を神棚に置いて、花をささない。位牌をその中に置いて毎朝お茶とご飯、晩は少し酒をあげる。

(3) 墓制

①郡原

昔から今まで土葬である。葬式のとき親類と村全員参加する。男女合葬して、一人一個ずつ墓石を立てる。専門店で買うけどものによって値段が違う。だいたい十万円、三十万円、五十万円だそうであり、普通は一年忌のとき立てる。それまでに木でつくった小さい「たま屋」という家があり、墓石を立てるとき、それを取りのぞく。盆のとき墓場へ酒を持って参る。葬服は黒い色、発葬は死んだ翌日でする。ご飯も墓所へ持って行く。

②南種子町

葬式は仏教と神道の両方ある。三年忌のとき墓石を立てる人がいる。それまではたま屋を立ててある。石碑の値段も前と同じ、十万円、五十万円、三十万円ぐらいである。神道を信仰する人の石碑は南むき、仏教のほうが北むきだそうである。葬式は翌日で、馬で送り、途中で鳴いたら不幸がおこるからたくさんの草を持って行く。お盆のとき酒を墓場まで持って行く。改葬しない。男女とも同じ墓場に埋める。

③野尻

昔から土葬、神道でも仏教でも改葬しない。墓石は昔は三年忌で立てる人が多かったが、今は一年忌で立てる人もいる。値段は四、五十万円のが多い。

ヒトナヌカ、ミナヌカ、五十日、百日、一年忌、三年忌、七年忌、十三年忌など親類が集って、供養をしごちそうを食べる。

④田尾

昔から火葬、海で死んだ人はすぐ焼いて、骨を家族に渡す。ぼうさんも来て、墓石は立てないで埋めるだけ。村の人が死んだら土葬と火葬両方であり、翌日葬式をする。お茶と酒を持って行く。墓から帰ってから家でまつりを行い村の人も参加する。今は納骨堂をつくる人が多い。墓石の値段は八万円、十万円ぐらい。北むきである。墓場は山の中にあり墓参りが不便であったが、今は納骨堂が家のすぐ前にある。

⑤仲之町

昔は土葬。まるい棺に入って生前大すきだった衣裳を着させて、米や花も棺に入れる。七日、四十九日をして、それから一周忌をする。墓場は家から遠いところにあり、小さい石は子供の墓石だそうである。妊婦が死んだら子供を出さないで、そのまま埋める。昔は神道を信仰する人も石碑が北むきもあるし、東むきもある。今は納骨堂が北むきである。改葬しない。

⑥梶潟（中種子町）

昔は土葬、今は火葬が多い。そして納骨堂をつくり、一週忌が多い。納骨堂は南むき、火葬をしてから一晩家に置いて、それから納骨堂に入れる人もいるし、すぐ入れる人もいる。坐棺が習慣であった。葬服は黒の和服であり、今は簡単になったとはいうものの和服の人も多い。土葬のとき米、茶、お金など棺に入れる。昔は四十九日、五十日に祀りをしたが、今は仕事の関係で、翌日、あるいは二、三日してから四十九日、五十日祀りをする人もいる。改葬しない。妊婦は葬式の列には入れない。墓石は南むき、神道信仰。

⑦新町（中種子町）

仏教と神道両方信仰する。死者は翌日葬式、一年忌、三年忌を祀り人が普通である。

四十九年忌をしてからあとはしない。

墓石を買えない人も五、六年の間には石を立てる。今は納骨堂をつくる人が多い。仏教は北むき、神道は南むきだそうである。もし道のそばにあるなら道にむける。

⑧本村（西之）

昔は土葬、今は土葬と火葬両方である。産婦が死んだとき子供を出して別々に埋める。九カ月以下の子は墓のぐるりに埋め、生んでからの子は墓場の中に埋め、もし親が死んだらそのそばに埋め、男女とも同じ墓場で埋葬、火葬する前にまず親類に見せてからする。墓石は人によって違う。一年忌、三年忌に立てる。それまではたま屋を建てておく。昔は四十九年忌は一番大きな祀りをしたが、今はみんな仕事があるし、簡単にするのが普通である。土葬と火葬がどっちがいいか聞いてみると、土葬が人の感情はいつまでもある。火葬は死者もかわいそうであるし、生きる人との感情もなくなったと一人のおばあさんが答えてくれた。土葬の人は改葬しない。ただ納骨堂に入れるとき、骨を出す。墓場は山の中にある。

三、考察

(1) シャーマンについて

①入巫の動機

三人のシャーマンにあったが、その中の二人は病気をなおすために神にすがる思いで、修行の道に入ったのである。一人は神が憑霊したのである。

②三人とも御嶽教である。先生もいる。

③祭壇もあり、太鼓と御嶽教詞集を持っている。

④やり方も同じ依頼者が来訪と神様（シャーマン）が出訪するときもある。

⑤二人の女性シャーマンはほとんど占いをしないが、男性のほうは占いをする。

⑥職業が病気治療であるが患者に対しては薬は使わない。悪霊や死霊憑きの人のそれを落とすのが多い。

⑦道具は太鼓と御幣と鈴が中心。

⑧衣裳も同じ、白いシャツと水色のスカート或は袴である。

⑨三人のシャーマンは皆踊らない。

⑩収入もだいたい同じ一回二千円、その代りに物品もある。

⑪三人とも試験を受けて、免許を取った。

⑫二人の女性は御嶽教の本部が同じ熊本にあり、男巫の本部は京都にある。

⑬依頼者が電話で予約するのが普通である。

⑭一人だけは後継がいるが二人はまだ分からない。

(2) 民間信仰について

①村落神がある。仏教でも神道でも祭りのとき神社でするのが多い。

②同じ村でも仏教と神道を両方信仰する場合が多い。

③個人の家に必ず仏壇或いは神棚がある。

④祖先の位牌は一緒に供養して、朝晩祭祀する。

⑤仏壇、神棚の場所も皆同じカミノザのへやに設けてある。

⑥村の祭りは年二回が多い。春祭りと秋祭り。参加者は村全員。しょ者は交替で男性で担当するのも同じである。

⑦祭りのとき踊ったり、ごちそうするのは普通であり、踊らないのもあるが少ない。

⑧昔は祭りをしたが今はぜんぜんしないのは田尾という村だけのようである。

⑨仮仏壇も調査した中でただ一軒の家にあった。

⑩先祖の位牌が一枚ずつ並んでいるのが多い。一つの箱に入れるのがとても便利であるがただ一軒の家に見つかっただけである。

⑪以前は仏教信仰が多かったが明治以後、又戦後神道がだんだん増えたようである。

(3) 墓制について

①昔は土葬、今は土葬と火葬二種類がある。

②男女とも同じ墓場を使う。

③墓場の場所は昔は家まで遠かったが、今は近いほうが多い。

④墓石は一年忌、三年忌に立てるのが普通であり、値段も十万円、三十万円、五十万円ぐらいと少し差がある。ほとんど買う。

⑤墓石を立てる前にたま屋を建てる。

⑥墓石の方向は仏教は北むきが多い。神道は南むきが多い。

⑦土葬の場合は皆改葬しない。

⑧今は納骨堂をつくる人が多い。
⑨死者の葬式は仏教でも神道でも翌日する。
⑩四十九年忌をしてからあとはしない。
⑪祭りは簡素化になった。
⑫土葬なら坐棺である。
⑬祭りは一年忌、三年忌、七年忌、四十九年忌にするのが多い。

四、まとめ

以上南種子町の巫俗と民間信仰と墓制については各項ですでに述べたので、ここでは沖縄における巫女と比較してその特色を述べたい。沖縄における巫女は入巫の契機は若干の違いはあるが総じて次のパターンがみられる。即ち巫病、捜神的遍歴、憑霊「降神・啓示」である。この面から見れば、種子島南種子町のモノシリという巫女と共通しているが、男性の占い師は偶然な交通事故で生きるために修行の道に入ったのが特別な事例であろう。そして、沖縄地方ではシャーマンであるユタは民間医療のほうで活躍している。現在でもクライエントに対し止血、喀血名などの小手術を施すものもあり、とくに巫病にかかったものに与える指示、ノイローゼのものに対するカウンセラー的役割には無視しえない効能を示すことがあるのに対して、南種子町のシャーマンであるモノシリはぜんぜん薬もあげないのに手術なんかもってのほかである。ただ自宅の祭壇の前で神様の神託を患者さんに伝えるぐらいのことをする。

又、沖縄巫俗の文化複合現象も見られる。例えば易学、卜占いは現在的機能として最大の領域を占める。民間道教と密着するシャーマンの活動、シジ（セジ）タダシと祖先祭祀などの特色があるが、南種子町のモノシリはこの複合文化の特色が強く現れないようである。

南種子町であった三人のモノシリは皆御嶽教に属して、そして、やり方も似ている。巫具と巫装も似ている。そのおもしろいと思うのは、巫俗も現代社会に適応して、現代の生活道具を利用して活動するのである。例えば、電話で予約するとか、免許を取るとかは昔は思いもよらないことであろう。神様も時代によって変わりつつあるのであろう。

次に民間信仰と墓制についてまとめよう。

民間信仰と墓制はある面ではモノシリと同じように現代社会の発展に従って変わりつつある。昔のようにまじめに神様や仏を信仰する姿がいくぶん薄らいでいるように思う。一種の習慣と存在し続けているようである。だんだん簡素化、表面化になってしまっているようでもある。これはたぶん民間信仰や墓制の発展かも知れないが、やはりそれは人間の生活に重要な地位をもう占めないと言えるのであろうか。ただの伝統として続けているようにも思えるのである。この現象がいいか、悪いか、ここで言えないけれど、例えば墓制の納骨堂の出現がごく合理的に、経済的なもので、一つの社会文明の進歩ではないであろうか。そして、祖先の位牌を供養することも同じく一つの位牌を同じ箱に何枚も重ねて入れるという。その発想にとても感心するし、これも一つの進歩であろう。

又、昔は死者の四十九年忌の祀りはとても盛大であったが、今は仕事の関係とか、村の人にめいわくをかけないように、ほとんど簡単にする。或いはしない人が普通である。この変化も人間の考えを表したといえるのであろう。

以上はただ日本の南の島の調査ではあるけれど、日本全土更に現代社会における昔の伝統文化の生命力が感じられるし、その将来の

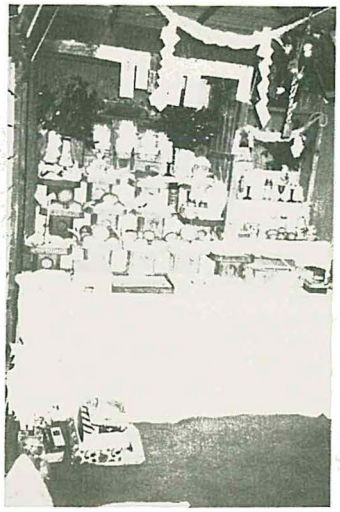
歩みも少し予想できるのではなかろうかと思っている。

〔参考文献〕

『南西諸島の民俗Ⅱ』下野敏見（一九八一年三月、法政大学出版局）

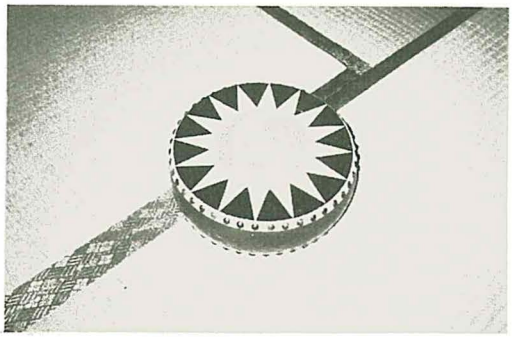
『沖縄のシャマニズム』桜井徳太郎（一九七三年七月、弘文堂）

シャーマンと巫具



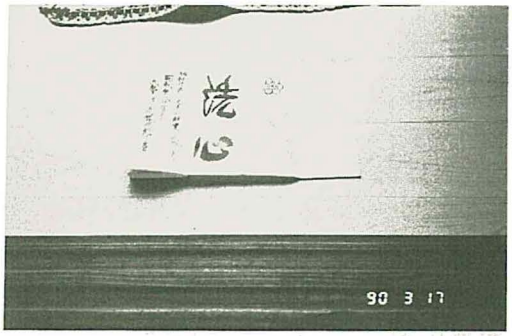
①南種子町野尻大脇キリさんの自宅の祭壇

②大脇キリさん。大正十年生まれ。
太鼓をたたきながら神様を呼び出す。

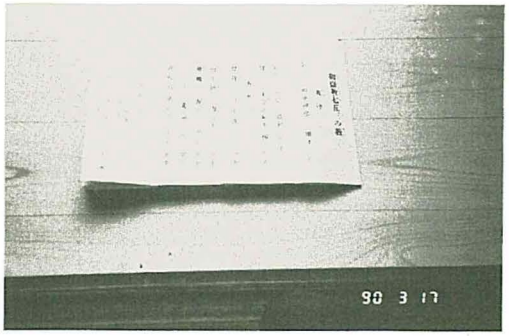


③大脇キリさんが持っている太鼓

④折戸トメさん、明治三十九年生まれ（中種子町）。
後継のお嫁さんといっしょに調査者の谷口雄三さんの祓いをしている場面

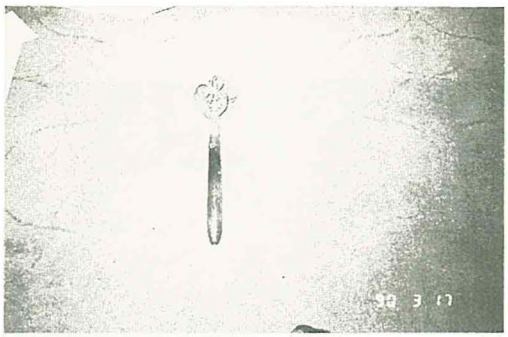


⑤折戸トメさんが使う御嶽教詞集



⑥折戸トメさんの「御嶽教七五三の教」

シャーマンと巫具・仏壇・屋敷神

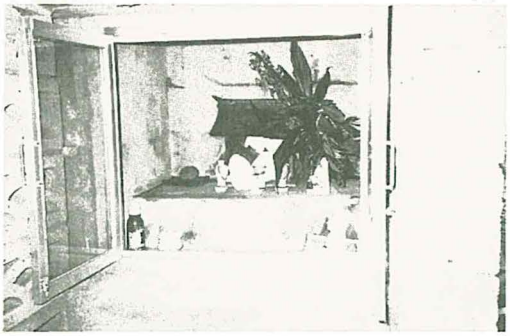


⑦折戸トメさんが神様を呼び出すのに使う鈴

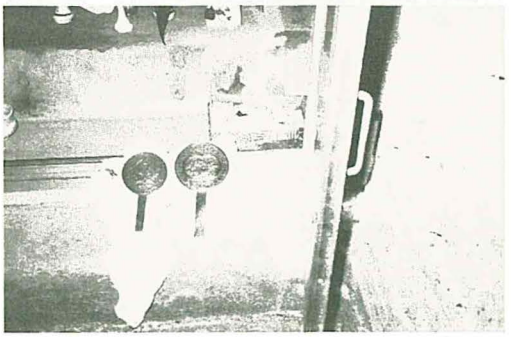
⑧遠藤友成さん（58歳、中種子町坂井新町）
自宅の祭壇に座る仮衣の姿。占師

⑨床の間のそばにある仏壇（田尾）

⑩屋敷神の家（祠）。（島間）。本宅のうらにある。

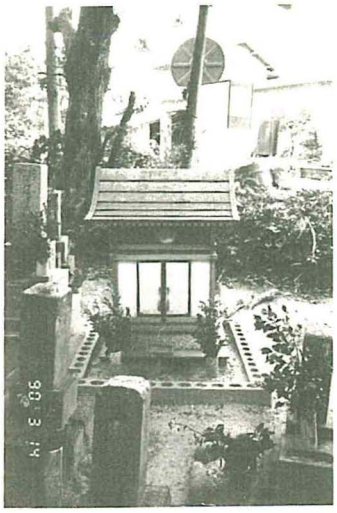


⑪屋敷神の祠の中（島間）



⑫二枚の銅鏡は屋敷神の神鏡である。
今の持主はもう四代目である（島間）

霊屋・供養石塔・墓石・納骨堂

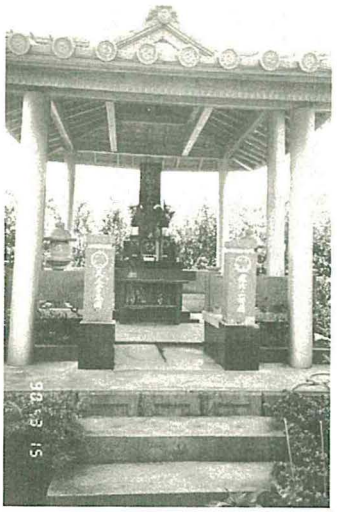


⑬砂坂にある墓場の霊屋

⑭割合簡単な石塔である。
仏教の信者の供養石塔である（砂坂）

⑮現代的な納骨堂である（田尾）

⑯▽田尾にある墓地。
仏教（法華宗）の信者の墓石塔である。



⑰▼田尾の道のそばにある「河脇」という家の
納骨堂である

信仰Ⅲ（俗信―予兆・卜占・禁忌・呪術・シャーマニズム・憑霊・妖怪・他）

鹿児島市立美術館学芸員　谷口雄三

一、はじめに

種子島と聞いて思い浮かぶものは、ふつう火縄銃とロケットセンターであろう。しかし、この二つともが南種子町に深く関わっていることはあまり意識されていないように思われる。火縄銃を積んだ南蛮船はまず、島の南端門倉岬に到着したのだし、ロケットセンターは同じく島の南部東方の茎永に位置している。

鉄砲とロケット。この二つから様々なイメージを膨らませることができる。最先端の文化がここから生まれ、本土へ向かって発射された、近代戦法が現代のそれを呼び、やがて人々は宇宙利用を目指さざるを得なくなったなどなど。

いずれにせよ。種子島は歴史の島であると同時に未来の島である。その島にあって人々は非常に精神的であるといわれている。その種子島々民の心意を、俗信という側面から探ってみたいと思う。

二、調査内容

(一)　予兆―事例

鳥鳴き

○烏が鳴くと縁起が悪い。
（島間、田尾）

○烏が群れ来るのは当然、一匹だけ屋敷内に止まって鳴くと凶。
（島間、仲之町）

○烏が奇妙な鳴き声（カウカウカウ）を出すと人が死ぬ。
（平山、広田）

○烏が鳴くと凶という（しかし実際に何か起こったことはない）。
（平山、仲之町）

○烏が鳴くと凶。
（中之上、上中）

○烏が身の回りに来て鳴けばその人は死ぬ。
（中之上、上中）

○遠くで死人があると、烏は悪い鳴き声で人に知らせる。
（西之、平野）

気象

○言葉がヅモル（どもる）と翌日雨。
○神経痛が出ると翌日雨。
（以上、中之下、里）

○屋久島に雲がかかると雨。
（島間、田尾）

○ケシコ鳥（フクロウ）が（伝承者宅から）東のガロー山で鳴くと翌日は晴れ、西のガロー山で鳴くと雨になる。
（平山、広田）

○朝、虹が出ると天気がいい。
（中之上、上中）

○七、八月にホガレ（夕焼け）があると大嵐になる。
（中之上、上中）

○虹が立つと天気。しかし雨が近い。
（西之、平野）

○夕日が手に取るように近くあると嵐。
○月に雲がかかると雨。
（以上、西之、平野）

○朝虹は人を雇うな（朝虹はしばらくして雨になるから、農繁期に人を雇っても無駄になる）、宵虹は人を雇え（翌日は晴れるから）。
○春の雨西風（春の西風は雨を運んでくる。〝片袖は濡れても、もう片袖は濡れない〟といわれるほど極端な集中豪雨である）。
（以上、西之、平野）

夢

○次の夢を見ると縁起が良い―一富士二鷹三なすび。
○夢の中で悪いことをした夢は悪い夢。（以上、中之下、里）
○死んだ夢は吉、火事の夢は凶。（西之、野尻）
○死人の夢や飯をたらふく食べた夢を見ると死人がある。（平山、広田）
○潮が満ちてくる夢、葬式の夢はよい。（平山、仲之町）
○よりつきの悪い（座りにくい）夢は悪い夢。（中之上、上中）
○大漁の夢は凶、風呂の夢、葬式の夢は吉。（中之上、上中）
○故人の夢は悪い夢、銭もうけの夢は良い夢。（西之、平野）
○雄牛に追われる夢は良い夢、ご馳走の夢は悪い夢。（西之、平野）
○自分の親、兄弟が、死んだ夢を見るとよい。元気にばりばり働く夢は縁起が悪い。（西之、平野）

その他

○海の火（メン＝妖怪がつける）は走るといわれ、それが見えると不漁である。（島間、中之町）
○魚釣りに行くとき、次のようなことがおこると、まず釣れない―イタチが懐へ右から入ってくる。大きな蛇を見る。若い女性に出会う、女性が竿に触れる、跨ぐ。（平山、中之町）
○山桃がたくさん生（な）るとその年は豊作。（中之上、上中）
○大きな南瓜が生（な）ると不幸の前兆。（西之、平野）

(一) 予兆―考察

調査者の質問のしかたに偏りがあったろうし、全国の予兆との比較をしたわけでもないので、南種子町の予兆の特色を述べるには多少気のひけるきらいもあるが、以上の如く、烏鳴き、気象、夢に関する予兆が多く見られた。

烏鳴き……多く群がって鳴く、一羽だけで鳴く、変な声で鳴くと凶という伝承の違いがある。死体や墓場の供物に群がることからの連想、現在では一羽の方が珍しいため、普段と違う鳴き声だから奇異に思うため、とそれぞれ解釈できる。いずれにせよ、マイナスのイメージを付与されている烏が、非日常的な振る舞いをするとケガレ視されるらしい。

気象……いうまでもなく気象状況は、農業に従事するものにとって常に気をつけていなければならぬ重大事だった。したがって烏鳴きの場合のような連想による予兆と違って、経験の積み重ねによる統計的な、より科学的な予兆であるといえる。むろん、例外的な予兆も見られるが。

夢……人が死ぬ夢を吉とするものもあれば凶とするものもある。同じ夢でも吉とも凶ともいわれる。これは、正夢と逆夢と関連していると考えられる。正夢はよいとしても、常識に照らして悪いことのおこる夢を良い夢とし、良いことのおこる夢を悪い夢とする逆夢をどう解釈したらよいか。単純に考えて一つには、寝起きの感覚があると思う。悪夢にうなされて目覚めた時は現実に深い安堵感を覚えようし、幸福すぎる夢から目覚めた時はみすぼらしく、色褪せた現実に落胆するだろう。一つには夢と現実の境界を越えることによって、ハレとケガレが転換するとも考えられる。（↓水死体とエビス信仰など）

要するに夢を現実と一続きのものとして促えるか、全く別の世界として促えるかで、正夢と逆夢という違いが出てくると考えられる。

逆夢的な予兆が多ければ多いほど、心の中を異界とみなす、より精神的な文化であるということもいえなくもないが、これだけの資

料ではなんともいいかねる。

(二) ト　占

ト占といっても、年中行事として定期的に行うもの、人生儀礼の折々に行うもの、日常の行為に伴うものなど、様々であるが、今回の調査では、個人的あるいは家庭的な相談事をシャーマンによって占ってもらうという形のものしか調査できなかった。年占、くじ、シャーマン以外の売ト者によるト占、いずれも聞き出すことができなかった。

そこで俗信の四要素とされる兆占忌呪のあとの五番目にシャーマニズムの項を設け、その中でト占についても触れたいと思う。

(三) 禁忌—事例

産

○妊婦はイカ・タコを食べてはいけない。
○産後、梅干しを食べてはいけない。出血がひどくなる。
（以上、中之下、里）
○産後の人、月経中の人は寺、神社、仏壇の前を通ってさえいけない。田に入ってもいけない。田の神が嫌う。
○産後33日間は玄関から出入りしない。飯を炊く釜も違える。
○妻がアカビ（産後一週間。月経は関係ない）の時、漁に出ると怪我をする。
（以上、平山、広田）
○産後33日が過ぎないと囲炉裏、釜など火を使ってはいけない。使うときは塩をのせること。
（平山、中之町）
○産後の女性は飯と梅干しだけを食べること。酢の物を食べてはいけない。
（中之上、上中）
○産後の女性は酢の入ったものを100日は食べられない。食べていいのは、別な鍋に作った粥だけ。
（中之上、上中）
○お腹の大きい人は神社に参拝してはいけない。産んだ後はよい。
（西之、平野）

葬

○葬列に加わるときは幼児をからって（背負って）はいけない。抱くこと。
○葬列が門口に差しかかったとき、そこの馬が鳴けば死んだ人が出てきて悪いことがおこる。だからその日は多くの草を食べさせて、鳴かないようにしていた。
（以上、中之下、里）
○友引のときに死人を送ってはいけない。
（西之、野原）
○祭りの供物の魚は女に食べさせてはいけない。
（島間、田尾）
○仏事中に魚を食べたらいかん。
（島間、仲之町）
○死者の着物を洗濯するときは近親のものがして、片身として一着ずつもらう。他人がしてはならん。
○死人があったときは、その家のものは神社の前を通るのさえいけない。
（以上、平山、広田）
○葬式の入棺は二つ釜で湧かした湯で体を拭く。
○湯灌した部屋は二人で掃除すること。（逆に普段は二人で掃くと縁起が悪い）
（以上、平山、仲之町）

ガロー山、その他

○ガロー山に入ると祟る。障って熱が出る。（善福寺で祈祷してもらうと治る）
（平山、広田）
○ガロー山に入ると病気をする。（そんなことはなかった）
（中之上、上中）
○ガロー山に女性が入ってはいけない。
（西之、平野）

○ガランに二mくらいの高い石があった。その下に銭が埋まっているという伝説があり、子供の頃掘ってみたことがあった。銭はなく、カラス蛇が一〇匹くらい絡み合っていた。全部殺したが何の祟りもなかった。（西之、平野）

○丑三つ時は忌まれる時間帯。（中之上、上中）

○ビワは寝息の聞こえる所に植えるな。（茎永、宇都浦）

(三) 禁忌―考察

禁忌習俗を様々な方面にわたって調査すれば、それだけで一つの大きなテーマとなりうる。俗信全般を扱う今回の調査では、主に産と葬に関わる禁忌に絞って調べてみた。

兆占忌呪の四項目中、禁忌は予兆と並んで同じく消極的な技術であり、やはり連想ということが大きく関与していると思われる。イカ、タコの食物禁忌（胎児が胎盤に癒着する。指の数の多い子が産まれる。など）梅干し、酢の物の食物禁忌（出血のイメージ）などがそれである。

産と葬の禁忌を比較してみて気付くことは、どちらもケガレ（不浄）を嫌うことにかわりはないが、産の場合、忌まれるのがその産婦、せいぜい夫までである点である。釜や鍋、ひいては火まで家族と別にされ、食物禁忌も産婦のみである。

一方、葬の場合、忌まれるのはその近親の者すべてである。食物禁忌も喪に服する者、すべてに課せられる。友人さえ引き込む友引というものまである。

この辺にも黒不浄の強さというものを感じる。絶対的な不幸である葬に比べ、生命の誕生という祝福すべき側面も併せもつ産の性格が浮かび上がってくる。

産と葬の禁忌に比べて、忌まれる土地、ガロー山の性格はまた異なる。不浄を嫌うのでなく、聖なる地を畏れる意の禁忌なのだ。前者の禁忌は現在にも残存していると思われるが、後者はほとんど顧みられない。

(四) 呪術

○友引に人を送るときは棺の中にワラ人形を入れる。（西之、野尻。中之上、上中）

○正月に法華宗の魔除けの札を貼る。仏壇、火の神、テース（亭主）柱、庭の戸口、玄関。（西之、野尻、平野）

○悪い夢を見た翌朝は、門口に出て「悪魔通れ通れ、今日はよい日」と唱える。（西之、平野）

○便所をきれいにするとよい娘が生まれる。

○じいさん、ばあさんの名を孫につけることが多い。長寿を願うため。（平山、広田）

今回の調査では、一般に行われる呪術として右の数例しか採集できなかった。これではなんの考察もし難いので、次のシャーマニズムの項で改めて触れたいと思う。

(五) シャーマニズム―事例

南種子町のシャーマニズムの生態を次の九つの観点より箇条書きにしてみようと思う。

①生年、生地、現住地、②入巫（巫病、障害、啓示）、③成巫過程（修業、成巫）、④守護霊（オヤガミ、参拝者）、⑤巫堂、⑥巫具、巫経、⑦巫術（種類、特徴）、⑧系譜（家族、先師）、⑨活動（組織、信者）

○大嵐イチ
①明治四三年一月一〇日生れ、?、西之、木原。
②啓示型の中の偶発型。(桜井徳太郎著「日本巫俗の特徴」より)農作業中に蝮を殺した際、手に巻きついたのを見て驚き、意識を失った。のちに意識は戻ったが体の動かぬまま一年を過ごす。世間の目は気になる、医者はお手上げという状態で、夫に付き添われてカミサマの所へ。(このことより以前に三人の子供がみな幼くして死んでいた。)御嶽教のカミサマ伊佐山アッコに診てもらうと、10代前に氏神を祀っていたが、捨ておいたため、4代前から早死にの家系になっているといわれた。(昭和二八・一一・一三〜一五)
③夫に強制的に入信させられる。口の中から頭の上まで塩をかけられる。着物三かさね(朝晩用、昼用、訪問着)をそろえ、修行に入る。(昭和二九・一・一〇)
祝詞の練習、潔を行う。学科・実地試験を経て、御嶽教免許状をうく。(昭和三三)しばらく師の補佐役をした後、昭和三九年九月から一人立ち。人の家のお祓いなど始める。
④御嶽教の祭神は天照大神を始め、クニノトコタチの命、オオアナムチの命、スクナヒコナの命。
⑤玄関よりは入って右側、縁側沿いの一間。奥に祭壇があり、神体は八幡の鏡。
⑥鈴、太鼓。御嶽教経典。
⑦厄祓い。紛失物・行方不明者の探索、受験校の選択など神にお伺いする。(占うといういい方を嫌う)
⑧家系にカミサマをしていた人なし。神のお告げにより入来から布教にきた伊佐山アッコ。
⑨毎年二月一日六〇〜七〇人の信者夫婦が集い、祭りをする。来訪を待ち、今は訪問をしない。一日、二日でたいていのことは解決する。布施は千円から二千円。三千円のときもある。
(以上、本人談)

○善応院—善福寺元住職。故人。男性。
①?、四国松山、—。
②法華宗僧侶であるため、啓示型の修行型と推測されるのみ。
③?
④明治四年の廃仏毀釈の際、仲之町平山神社に埋めてあった日蓮上人像を、明治八年、宗教の自由が許された頃から掘り出し、この寺に奉った。
⑤寺の正面から巫堂になっている。仏壇は左奥である。
⑥太鼓、数珠。?
⑦祈祷……まずシャーマンが仏壇へ向かい、数珠を持ち題目を唱える。その間クライエントはシャーマン後方に平伏した状態でいる。次にシャーマンがクライエント後方へ行き、何事か口走りながら気合を入れて祓う。クライエントは動かず。
占い……手相、人相を見るだけでその人の運勢がピタリとわかる。(自分が五四歳で死ぬといってその通りに亡くなった)
⑧?
⑨昔は精神病者をこの寺にかくまい、一日四、五回の祈祷を一、二ケ月も行って治したという。
現在は一月四日にオオマツリがあるという。(以上、現住職山田妙信談)

○折戸トメ
①明治三九年四月一二日生れ、宮之城、中種子町坂井梶潟。
②啓示型の偶発的である。台湾にいたとき神様の教会(何教かは

不明）にいってから入信。みんなの前で急に立ち上がり、何か口走ったという。やがて御嶽教に入信。自然と好きになったため。
③修行としては海で潔をした程度。あちこち先生が訪問して回るのについていくうちに自然とできるようになった。
④御嶽教（大嵐イチの場合と同）
⑤隠居屋にある。玄関に入って左の縁側沿いの一間である。祭壇もある。
⑥全長九五cmの数珠、三〇・五cmの鈴、五〇・五cmの祓いグサ（御幣のたくさん付いた棒）。
⑦病気や紛失物など個人的な相談事。占いはしない。病名をわからなくさせる悪霊がいる。それを祓って病名が明らかになったら、後は医者に任せる。
⑧家系でシャーマンをしていた人はないが、嫁がシャーマンの補佐役をしている。彼女も御嶽教の免許状をもっている。しかしまだお伺いは立てられない。
⑨高齢で耳が遠いため、特別な活動はしていない。相談者が来るのを待つだけ。
⑩ここで祈祷の順序について詳細にみてみたいと思う。（シャーマンをS、補佐役をA《ASS－Stant》、クライエントをCとして表す）

ⓐ祭壇に向かって左にS、右にA、二人の間少し後方にC、皆正座。ⓑS、水を飲み眼鏡をかける。Cに年齢や相談事を聞く。にこやかに談笑。ⓒ礼2回、礼2回、祓いグサで2回祓い、また礼。ⓓ二人同時に祝詞を立てる。2回拍手、2回祓う。ⓔ高天原の歌を甲高く歌う。2回拍手。ⓕ低い声聞き取れないくらいの声。〝人は水が大事、水神様を大切に。家の周りは塩で清めよ。先祖を大事に〟いっていることはだいたいそのようなこと。ⓖSとA、向き直り、Cを祓いグサで祓いながら〝人に挨拶を、先祖を大事に、火の神、水神、便所神、天道さんを大事に。みんな仲良く、円満に〟など〝ろっこんしょーじょー〟と唱えながら。ⓗCを寝かせ（仰向き、うつ伏せ）、同じようなことを唱えながら、SとA、体中に按摩をする。ⓘ縁側を向いて座らせ、S、Cの顔に焼酎を吹きつける。ⓙ〝にんぴょーとしゃーかいぜんれつざいぜん〟と唱えながら、中指・人差し指を立てた刀で空を切り、体の中の魔を爪の先から引きずり出す。ⓚとたんに二人、にこやかになって「ごくろうさん」といい、また談笑。

（①～⑨本人及び嫁の談、⑩は調査者の見聞）

○松下親法
①昭和八年九月一八日生れ、？、上中。
②入巫というほどのものでない。親兄弟もしていたので。職を転々とした後に。
③本興寺尼ケ崎学林学院で修行。
④法華宗―日蓮上人。
⑤信光寺正面。仏壇は奥。
⑥数珠、巻き物。
⑦悪霊や病を祓う祈祷。占いはしない。病人の頭上に巻き物をかざして精神的な安定感を与える。病人の肌着を祓ったりする。
⑧父、兄、弟、みな法華宗の寺の住職になっている。
⑨春、秋にお彼岸供養。盆行事など。ふだんは檀家を一軒一軒訪問。

（以上、本人談）

○遠藤友教
①？、？、上中

②啓示型の修行型といえる。昭和四九年、交通事故により失明。生きる力を失い、ノイローゼ。まともでなく人が避けていた。医者の薦めで、上中東の伊佐山アッコのもとを訪ね、神の力にすがる。③6年間の修行をした。夏も冬も毎日、水を被って潔をし、皮膚がただれた。妻がカセットに入れてくれた祝詞を何万遍ときくうちに祝詞がほどけて霊感が出てきた。やがて御嶽教の試験に通った。

④御嶽教。

⑤家の二階、よく陽の差す所。祭壇あり。

⑥太鼓。

⑦車、落成式、地鎮祭、憑き物、障り物のお祓いなど。〝耳でみる、鼻できく〟。祝詞を唱えると、相談されたことが自然と目に見えてくる。視覚的シャーマンである。

⑧家系にシャーマンはいない。先師は伊佐山アッコ。

⑨特別な祭りはいない。

（以上、本人談）

(五)　シャーマニズム―考察

以上、今回の調査では五人のシャーマンにお話しを伺った。うち三人が御嶽教、二人が法華宗僧侶であった。いずれも桜井徳太郎先生の分類される所の啓示型シャーマンであるといえる。これは盲目の幼女が目指す修行型のものに比べ、人生苦をなめた後に神の啓示を受けるという入巫過程を取る。これも二つに分けられ、神の啓示を一方的に受ける偶発型と、自ら求める修行型に分けられる。どのシャーマンがどのタイプにあたるかは各々②に示してある通り。

ト占について……五人中、四人までが占いという言葉を嫌った。唯一、故人の善応院が手相や人相を見ていたようである。御嶽教シャーマンのよくする紛失物や行方不明者の探索なども占いといえなくもないのだが、この言葉に込められた胡散臭さを神（仏）に仕えているという誇りが嫌うようである。

呪術について……むろん巫術は呪術そのものであるといえる。呪術とはそもそも「超人間的な力を操作して、目的を果たそうとする技術」だからである。しかしその力を操作あるいは利用していることは事実なのか、そもそもそのような力が存在しているのか、目的とはいったい何であるのかなどはここで問題ではない。シャーマンが現に存在し、クライエントも絶えないということが問題なのである。

(六)　憑霊―事例

○茎永でよく犬神の話はあった。一種の精神病であろう。師匠さんや真所神社の神主（ホイドン）に祓ってもらって治した。（中之下、里）

○小学三年の頃、妬み事をする精神の悪い人がインガミを使っていた。憑かされた人は病にかかり、昂じて死んだ。（西之、野尻）

○犬神はおることはおった。上中の方に。（島間、田尾）

○犬神が憑くなんということは認めない。（善福寺住職）ただ行いや祖先祭祀が悪いと精神病になる。（平山、広田）

○動物霊、生き霊、死に霊が憑などという。体がだるくなる。精神的なものだろう。お祓いをしてもらう。（中之上、上中）

○大昔はインガミというのがあった。人を取り殺すといわれた。従順な女性にいっていた。結婚もしていた。本人は知らない。（西之、平野）

○インガミは迷信みたいなものだろう。ワラ人形を使って呪ったりする。ずっと代々続いていくものである。嫁にいけない。他所（よそ）か

ら夫が来る。経済的にはかえってよい。子供たちは頭もいいし、立派な職業についている。

インガミを憑かされると、健康を崩し、若くしてボケる。占者に頼むと、石か地蔵を祀っている者が呪いをしていると教えてくれる。（西之、平野）

○インガミとはイタチのことだという。夕方、仕事から帰ってくると、「早く来い来い」と呼び寄せ、あっちへ行け、こっちへ行けと指示する。その人に悪さをすると憑かされて病気になるので、あの人に近づくなといわれた。

病気になった人は、シャーマンに誰が遣わしたインガミか見てもらい、そのインガミ使いのところへ謝りにいってハナしてもらう。終戦頃まで、この村落に二、三軒あった。（西之、平野）

○犬神使いとは友達だった。近づくなといわれたがずっと友達だった。自分より良い所があるとそれを嫌って妬む、負けず嫌いの性格だったが、人付き合いのよいとてもいい人だった。五、六〇年前、十五、六歳の頃のこと。

本人同士は好き合っていたが、結婚が駄目になった。

イタチかねずみのようなものを、一つ壺に何匹も飼っていた。餌はカライモだった。病人のように鳴き、病人のように食べた。これを妬ましく憎い女性に憑かせる。戸口を出るとき倒れて発病するといわれる。

恐がる人は恐がって、土地を買っても買いかえたりした。近所の蚕が繭を作らず、ぴたりと動かなくなったことがあった。祈祷師に祓ってもらうとまた動き出した。

八十近い人で健在。息子たちは元気で働く良い人たち。家は栄えている。（中之上、上中）

(六) 憑霊―考察

憑霊には生き霊、死に霊、動物霊など様々であるが、南種子―といわず種子島全島で犬神（インガミ、イリガミ）の話がよく聞かれる。『種子島家譜』に犬神が跳梁して困ったという記録もあるくらいである。

科学の力がまだ弱かった頃、原因不明の災厄が起こると、民俗社会はその解決に困った。そこで〝犬神〟という伝承を利用することで災厄の責任を、社会関係を乱す存在に負わせたのではないか。いわばスケープゴートであり、より陰惨なムラハチブといえる。

犬神を使っていたのは犬神使いではなく、実は社会という権力、その代弁者としてのシャーマンではなかったか。

(七) 妖怪―事例

ガラッパ

○五月と八月の彼岸の夜にガラッパがヒーヒョ、ヒーヒョといって通る。一二時頃寝ていると見に染むように鳴く。この辺りは水が難かったため、釣瓶から釣瓶へと伝い動く。鹿鳴川に住んでおり、今でも鳴く。正体は鳥だろうと思われる。（西之、平野）

○昔、郡川は橋がなかった。兄弟が馬を引いてそこを渡るとき、河童が出てきて尻を抜くといった。ぼっけもんの兄弟は、抜けるもんなら抜いてみいと悠々と渡った。何事もなかった。みてみい、河童なんかと思っていると馬の尻が抜かれていた。（西之、平野）

○カシラニイサン（長兄）は飲んべえで、酔って外に寝てしまった。茎永から里へ至る途中の夏目でふと目を覚ますと、七・八〇cmの小さい子供が百人くらい次から次へと飛びかかってきた。あれはガラッパではなかったか。〈※〉（下中、山神）

○終戦直後頃、池や川、小学校の校庭にもガラッパがいた。夜、酔って川にはまって尻を抜かれた（肛門が開くの意）者もいた。
（西之、平野）

幽霊（ヌレヨメジョウなど）

○若い女性にものをいったら返事もしないので、むっとして振り返るともういない。
（島間、田尾）

○目鼻はなく、髪は長く、裂けた口で櫛をくわえているヌレヨメジョウを見た。
（平山、中之町）

○夜道を歩いたらきれいな女性（あとにして思えばヌレヨメジョウ）が饅頭をくれた。帰ってみると馬糞だった。狸に化かされたらしい。

○花峰小学校の隅に住宅があった。人が入っては出、入っては出てゆく一室があった。ここには、雨の夜に「ここにいてはいかん、出ていきなさい」といって新入居者を追い出す美しい女性の幽霊が出るという。
（以上、西之、平野）

○白馬（神馬）に乗ったきれいな女の人が現れる。〈※〉

○椎の木陰に女の人がじっと立っている。難産して死んだ人らしい。こういうのを〝淋しいもの〟と形容する。〈※〉

○六、七〇年前、危篤の人がいたので、西之の砂坂まで医者を呼びに行くと、三叉路のところにその人が現れた。〈※〉

○女性が稲の穂の実りがとてもきれいな所に連れていってくれる。そんなときは黙って穂を二つ三つ取る。持ち帰り、米びつの中にいれておくと運が向いてくる。田を作っても立派にできる。ヌレヨメジョーは悪さもするが、いいこともする。〈※〉

○鰻取りに行って死んだ人があった。たくさんの人がそこで〝淋しいもの〟が出るのを見たという。ホイドンにお祓いをしてもらうと出なくなった。〈※〉

○橋の下中川に松林がある。昔、女の人がお産のときに死んだ所である。夜通ると赤子の鳴き声がする。〈※〉

○何年か前、夜、川のほとりを登っていると人が呼んでいるように感じた。それからずっと何度も探してみると、川に水死体があった。〈※〉（以上、下中、里。なお〈※〉の印は調査者松村利規氏）

ヒトダマ

○ヒダマはしょっちゅう出る。珍しくもない。
（平山、広田）

○ヒラマ、シトラマ、雲の上の方に出る。
（西之、野原）

○ヒダマはよく見る。リンだという説があるが、戦時中フィリピンで見たリンの燃えるのとは違う。隕石か何かかもしれない。
（西之、平野）

○ヒノタマを二回見た。三〇cmくらいあって二cmくらい尾を引いていた。一回目は稲刈りのあと、東の空から飛んできた。二回目は夜釣りのとき水平線の上に浮いていた。〈※〉
（下中、里）

〝目〟に関する妖怪譚

○魚を三、四匹買って帰る途中、小心物のその人は昼なお暗い林の所で何か音がしたため、走って逃げ帰って、魚を軒に吊るしておいた。翌朝見てみると、全部の魚が片目になっていた。
（平山、仲之町）

○魚を土産にもらい、帰ろうとすると、そこの主人が、もう遅いからと魚の目に塩をなすり付けてくれた。メンコーが目を抜くという。正体は狸と思われている。
（西之、平野）

○たくさんのガラッパが相撲を取ろうと詰め寄ってきた。あまりくどくいうので怒って棍棒で撲り、全部の片目を潰してしまった。その後、その川で取れる魚の類はみな片目となった。〈※〉（下中、里）

その他

○切り通しの道などでアバラマキが出て、道の側面から石や砂を落とす。〈※〉（下中、里）

○山神から上中へ至る坂でアバラマキが出てバラスを撒く。これに当たると病気になる。特に女性。〈※〉（下中、里）

○海に妖怪らしきものが出たときは、火をつけて投げ込んでくる。（島間、仲之町）

○チョカメン（黒ジョカ）が坂を転げ落ちたり、昇ったりする。〈※〉

○ゴローブッというメンが山から転げ落ちてきた。〈※〉（以上、下中、里）

(七) 妖怪―考察

調査前から種子島は、妖怪（メン）の跳梁跋扈（ばっこ）する島だと聞いていた。妖怪を鎮める碑さえ建立されているくらいだ。島に着いてまず感じたのは非常に強引な風だった。また植生が南島独特のものであり、思わず〝幽霊の正体見たり枯尾花〟という言葉を思い浮かべてしまった。島は平坦地のためよく強風が吹く。このことも妖怪譚作成の一因といえそうである。

ガラッパやチョカメンなどのユーモラスな妖怪（メン）も多いが、ヌレヨメジョーなどうら寂しいものもまた多く見られる。伝承者寺内弥六さんの〝妖しいもの〟〝淋しいもの〟という形容にはなかなか味がある。

目に関する妖怪譚がとても印象的であった。この地には他に目一つ五郎の伝説もある。

片目の神の伝説は全国各地に見られる。降臨してきた際に、木の枝で突いたり転んだりして片目を潰す神話である。ここに聖なる犯し難いイメージはなく、ユーモラスでトリックスター的な像が浮かび上がる。文字通り、零落した神としての妖怪像が考えられる。（目を潰す原因となったものや場所は忌まれ、それに関係する動物は祟りによって片目になる、とされる）

人の目が二つあるのは三次元を見るためである。インドの神々は目が三つあり、一つ目は妖怪になる。人は自分と異なる目の数をもつ存在に、異次元を見る能力があると考え、畏怖するのではないだろうか。

(九) その他―死人と豊漁

○母親が危篤状態であった。突然いても立ってもいられぬほど釣りがしたくなった。どうせ一晩の命だろうと、妻と嫁に任せて、釣りに出た。メバルやその他大きな魚が、当時のお金で何万円分と釣れた。喜んで戻るともう母は冷たくなっていた。（島間、田尾）

○幼い時、田舎へ帰って釣りをするというと、祖母が、取って置いた葬式の足半（なが）を履いていけという。嫌だったが、どうしてもというのでそうすると、黒ダイが二〇数匹、イザリ籠一杯釣れた。（平山、広田）

○大漁の夢は凶。（中之上、上中）

○葬列の際、肉親は霊屋に向かって米と銭を撒く。この銭で買った釣具を使うと豊漁になる。（『南種子町郷土誌』）

今回の調査で特に興味を魅かれたのが右の事例である。死人と豊漁、いったいどのような関連があるといえるのだろうか。

次のような補助線を引くとわかりやすくなる。漁師の間に、ある魚を万匹取るとその命は人一人分に相当するという伝承がそれである。猟師の間にも獣何匹分かの命を一人分に相当すると考える伝承

がある。つまり人＝大量の魚という図式が成り立つ。

海は海辺に住むものにとって異界であり、同時にあの世である。人が死ぬとあの世へ行く。つまり万匹分の魚の生命がもたらされるのである。そこであの世、海がそのお返しとしてこの世に大量の魚を恵んでくれる。

死人と豊漁の関係は、このように解釈できるのではないだろうか。

三、まとめ

多くを求めると恵みは少ない。あれもこれもと欲張った結果、満足のいくような考察はほとんどない。どんな熟練の調査者であろうと一日の調査量には限度があろう。十日間はその積み重ねだから同じことである。それをそれぞれが一つの大テーマとして独立しうるようなものを九項目にもわたって、しかも新米の私が調べようなどというのは、今にして思えば大それた考えだった。

しかし悔やんでばかりもいられない。それぞれの項目における考察の突っ込みは弱いかもしれないが、俗信全般を広く見渡すことはできたと思うからだ。

俗信を調べてきて感じたことは、人が日々暮らしていくという単純さの中にある困難さと、人々の精神の繊細さである。

人は常に異界を意識して生活している。異界といういい方がおかしいならハレ、ケガレとしてもよい。鳥や雲の動き一つに〝異〟を感じ、心の中、夢の世界も〝異〟とみなす。その〝異〟は現実のものなのか、ならばどうすればよいのかを超人間的力に判じてもらう。そして行動を慎み、また行動を起こしたりする。

人間、社会関係における〝異〟は憑霊という現象を呼び、〝異〟そのものの象徴として妖怪が出現する。

このように人というものは繊細な精神で外界へ目を向け続けている。

しかしこの過敏なまでの繊細さは決して弱さではない。なぜならそれは想像力の母体であるから。

俗信全般を広く見渡して感じることは想像力の豊かさである。憑霊や妖怪はいうに及ばず、兆・占・禁・呪さえ、深く連想能力が関与している。

今回の調査では、突っ込みが浅かったため、南種子町の地域性というようなものはつかみきれなかった。しかし人の精神の一面というのは垣間見られた気がした。

調査に当たって各村落の伝承者の方々にはたいへんお世話になった。改めてここで感謝したいと思う。ありがとうございました。

〈参与文献〉

下野敏見著『タネガシマ風物語』（一九六九、未来社）

下野敏見著『カミとシャーマンと芸能』（昭和五九年、八重岳書房）

井之口章次著『日本の俗信』（昭和五〇年、弘文堂）

共著『講座日本の民俗宗教―四、巫俗と俗信』（昭和五四年、弘文堂）

小松和彦著『憑霊信仰論―妖怪研究の試み』（一九八四年、ありな書房）

柳田國男著「一目小僧その他」『定本柳田國男集第五巻』（昭和四三年、筑摩書房）

波平恵美子著「水死体をエビス神として祀る信仰：その意味と解釈」『民俗学研究四二巻四号』（一九七八年、日本民俗学会）

その他、『南種子町郷土誌』も参考にさせていただきました。

付録、伝承者名一覧

氏名	生年月日	大字	小字
寺川キヨ	T12. 9.20	下中	郡原
有留新内	M23. 5.25	下中	里
大嵐イチ	M43. 1.10	西之	木原
峯山秀太郎	M39. 6.11	島間	田尾
川元実清	M45. 1.10	島間	仲之町
山田妙信	S 5. 1.17	平山	広田
堂原キク	M35. 3.15	平山	広田
折戸トメ	M39. 4.12	(中種子町) 坂井	梶潟
松下親法	S 8. 9.18	中之上	上中
遠藤友教		中之上	上中
岩川ミエ	M43. 1.11	中之上	上中
日高矢太郎	M34. 4. 1	平之	平野
大脇市彦	T 3.11.28	平之	平野
寺内弥六	M35. 7.30	下中	里
寺内弥吉	T10. 3.10	下中	里

多禰国府と多禰国分寺
―― 島間城をめぐって ――

鹿児島大学教授　下野敏見

一、序

先般、種子島の島間に居住しておられる河東不凡氏が筆者の所に来られて、同地に残る島間城すなわち上妻城についていろいろ語られた。

島間城については、筆者は在島一五年間にしばしば耳にし、実地も見て知っているつもりであった。ところが今回、一部を整地したときに下積み遺構が数カ所見つかったので、それについても意見を聞きたい、というご意向であった。そして、氏は、石積みの様相を図示し、説明してくださった。しかし、実地を踏まないことには何とも答えられないので渡島することにした。

島間は、多禰国府所在地説の一カ所であり、古来、要地とされてきた所だ。島間城の調査は当然多禰国府や国分寺を視野に入れたものにならざるを得ない。ここにおいて筆者は、二十数年来の住みなれた島ではあるが、島間城と似た種子島の諸城跡を全部再調査し、また主要な律宗寺院（種子島古代末～中世初）跡を調べ、これまでの多禰国府・国分寺説を洗い直してみることにし、数日間ずつ二回渡島したのであった。

(一)　多禰国府・国分寺の存在期間

(1)　多禰国府

多禰国府が存在した事実は、『続日本記』に、「和銅二年（七〇九）六月癸丑、勅して大宰率より已下品官に至るまで、事力半を減ず。ただ薩摩、多禰両国及び国師僧等は減例に在らず」とあることや続出の諸史料によって明らかである。

大宝二年（七〇二）には「薩摩多禰、化に隔り、命に逆う。ここにおいて兵を発して征討し、遂に戸を挍り、吏を置く」とあることから、多禰国府創設は七〇二年であり、そのとき置いた吏は国司であったと考えられる。

多禰国府の終焉は天長元年（八二四）であったことは「三代実録」にこの年、「多禰嶋を停めて大隅国に隷せしむ」とあることで明らかであり、多禰国は七〇二年創設以来、八二四年まで一二二年間存続したのである。

『日本記略』には「多禰嶋司を停めて大隅国に隷せしむ」とあって、『三代実録』の多禰嶋の表現とともに、国といわず嶋とある点から、多禰国は下国としての扱いをうけ、国司は嶋司であり、国分寺は島分寺であったことが分かる。島司や島分寺の表現は、『日本後紀』大同二年（八〇七）の記事や『類聚三代格』巻三諸国購読時の斉衡二年（八五五）の記事などにも散見している。もっとも、「九国三嶋」と表現されるように、太宰府管内の壱岐・対馬も多禰と同じく「嶋」の文字が使用されている。壱岐・対馬は多禰よりも後まで国府・国分寺が存続したこともあって、その故地や遺構が確認されている。筆者も両島を訪ね、その場所を実見したのであるが、ひとり多禰のみはいまだに確認されていなかったのである。

壱岐・対馬・多禰とも嶋司・嶋分寺と表現されようとも、また格が下に感ぜられようとも、やはり国司・国分寺扱いにはちがいなかった。それは、多禰について見ると、天平宝字四年（七六〇）に左

遷されてきた大伴宿禰が多褹嶋掾という肩書であることや、天平神護元年（七六五）に左遷された佐伯禰毛人を多褹嶋守と記し、宝亀元年（七七〇）に左遷された習宜朝臣阿曾麻呂を多褹嶋守と記してあることによって分かる。すなわち国司の長官である「守」の称や同じく三等官である「掾」の称が記されている点から、多褹嶋は創設以来一貫して嶋司は国司待遇であったといえる。

多褹において、「国」名が見えるのは、七〇九年の「国司及び国師僧等」のみであって、七一四年の「多褹嶋印一面を給う」の記事以後は「嶋」で表現されている。七〇九年の場合も、薩摩と並記してあるので「国」の文字を使用したとも考えられ、この点からは多褹は一貫して「嶋」であり、他の国とは違う意味の国であったようだ。その違う意味とは、本土の周辺部に存在し、防衛上の意義が大きいために、小嶋をもって国扱いにしたのだと思われる。

以上によって、七〇二年から八二四年まで一二二年の間、国司（嶋司）政庁および居館を包含する国府が島内のいずこかに存在したということを確認できた。これが多褹国府考の出発点である。

(2) 多褹国分寺

既に、七〇九年の記事に「国司及び国師僧等」と見えており、国府専任の僧がいたことが分かるが、国分寺の建立は七四一年の詔を待たねばならなかった。ところがそれが建立されると、長く続き、八二四年の多褹国廃止までは確実に存在したが、その後もあったと考えられる。初期の国師僧のころは、まだ大きな伽藍はなく、政庁の近くに小堂があった程度とみられる。

位階を授与したり、国師僧による仏教で宣撫したりした努力が実り、七三八年には島出身の僧二人が太宰府で得度し、帰島した。国分寺・国分尼寺建立の詔はその三年後である。また翌七四二年には、島出身の有力者を擬郡司に採用しているが、土着勢力を皇撫し、大和政権の末端行政の中に組み入れていった過程が分かる。多褹国分寺（嶋分寺）はこうした状況を背景として建立されたのである。

『類聚三代格』の「天平勝宝七年（七五五）、多褹等の講師（嶋師）を停止し、これより以降百余歳をへて（八五五年）、徒らに嶋分寺あり」という記事からすると、七五五年には既に嶋分寺があったわけで、実際にはそれより以前に建立されていたことになる。したがって、国分寺・国分尼寺建立の詔のあった七四一年から七五五年までの一四年間に多褹国分寺は建立された可能性が大きい。その国分寺はいったいどこにあったか。以上が多褹国分寺探しの出発点である。

(二) 多褹国府・国分寺の研究史

これまでの研究史を簡単に述べる。

(1) 国上説　これを最初に述べたのは、羽生道潔で、文化一五年（一八一八）、『種子島家年中行事』（河内和夫写）の中に、浦田港を控えた国上に大内屋敷（内裏）や大内士の家があり、また国見山もあり、京都の八瀬の里という内裏百姓村が将軍家に野老を献上するが、種子国の国上から島主へ野老を献上することの相似などを指摘し、国府が国上にあったことを示唆している。同様の考えを西村天囚が『南島偉功伝』で述べているが、これは羽生道潔の記録を踏まえて書いたものであろう。次いで、佐藤敬順氏が『ちくら五号』に「種子島島分寺考」を述べ、寺之門地名および花堂（五重の塔）、大内士の点から推定しておられる。同氏は『大隅』（一〇周年記念第二輯）にも同様のことを述べておられる。

(2) 甲女川説　『鹿児島県史』に「多褹国府の地は島北、国上方面との二説があるが、あるいは西之表附近で、甲女川の甲は国府の

訛とも考えられる」とある。島北という地名はない。北部の国上と対照させてある点からみて南部の島間のことであろう。この甲女川説は、西之表附近としてあることで、(3)の西之表説と重なるものである。甲女川説に立脚しているものに、高重義好氏の「慈遠寺の創建年代と種子島国分寺について」(『種子島研究八号』)があって、「西之表市街地一帯に、国司庁(甲女川畔)、国分寺(慈遠寺跡)、国分尼寺(大会寺跡)を配すると、みなと、川、山なみ、多褹国国府の全容が目に浮かぶのである。」と結論されている。なお、石寺の山をコーノミネということも注目すべきであろう。

(3) 西之表説　西之表の旧名赤尾木にちなみ、赤尾木説ともいう。この説は、甲女川説は、一応考慮せずに、国府・国分寺を西之表と見なすが、とくに国分寺＝慈遠寺説が重視される。河内和夫氏を筆頭に、平山武章氏・高重義好氏らがいる。平山氏は、「種子島に於ける条理制遺構について」(『種子島民俗一三号』)で、下中の市之坪および西之の一の坪を条理制遺構と断定されている。国府・国分寺については、他国では条理制施行地に近い台地にあるが、種子島の場合は例外で、交通の要地であり、地形、その後の島内宗教史から考慮して、赤尾木であると結論され、国府を「本城」の地、国分寺を現在種子島家墓地のある「御坊」の地と想定された。

『太宰管内志』によると、「島分寺今は詳ならず、此島(種子島)今はすべて法華宗なる由なれば、島分寺も其宗旨にて伝わるにや。もし島分寺今に伝はれる事あらば、必ず尼寺もそのあたりにあるべし」という見解で、島分寺が法華宗寺院に変わって存続していることを述べている。この観点に立つならば、法華宗寺院の当時の最高の寺は慈遠寺であるので、島分寺は慈遠寺となる。上妻隆直著『懐中島記』(元禄二年)によると、慈遠寺は大同四年(八〇九)創建の寺で、はじめ奈良の興福寺末寺として律宗の寺であったが、長亨二年(一四八八)法華宗に改宗したとある。この考え方からすれば、慈遠寺は、国分寺→律寺→法華宗という三段階をへて存続してきたということになる。種子島においては、律寺→法華宗の改宗において、大方の寺院はそのまま継承されたことからすれば、国分寺→律寺の移行も寺院はそのまま引き継がれたことが考えられる。また、律宗と国分寺仏教は鑑真以来関係が深いのである。このことは慈遠寺国分寺説を補強するのである。『太宰管内志』の尼寺云々は、これも慈遠寺に近い古刹を求めるとなると、大会寺(ダエンジと訛音)が適当ということになる。

『懐中島記』によると、大会寺ははじめ屋久田(甲女川畔)にあったが、草創年号不詳で律寺であった。七代島主頼時室の大禅定尼が住持であったこともあるが、この辺は尼寺の匂いが強く、古例の正月詠歌題が「霞」であったことも女性的であり、これらは国分尼寺説を補強する材料であろう。

高重義好氏は「種子島上代仏教について〈国分寺をめぐる問題点〉」と題して、『大隅』(昭和四二年)に、慈遠寺国分寺説を展開しておられる。

また、先に紹介したように、高重氏は、大会寺国分尼寺説を提唱されているのである。

(4) 中田説　この説は、小川玄三郎氏が「多褹国中田説」として『種子島民俗』一四号(昭和三六年)に発表した新説で、当時の人びとを驚かせた。小川氏によると、中田ほど国府に関係のある地名が多い所はないそうで、たとえば国ノ峰(国府の峰)、上府(上府中あるいは上国府)、屋ノ平(屋形の平すなわち国司館の平)附山(国府に付属した山)などの地名がある。水田は約八〇町歩で、国司の職

分田としての多褹（下国）の守一町六段、目一町、史生六段の総地は十分確保できるとしている。また小川氏は、第一国府が国上で、第二国府が中田であったという国府移転の可能性も考えておられる。また、中田の外港は島間であり、屋久島との連絡に当たったと述べておられる。

小川氏説は、ユニークで興味深いが、地名だけの推論である点と外港の島間港との陸路の問題や島間や島間よりむしろ屋久津港が近いことなどが限界で、さらに他の角度からの補強が必要である。氏は述べておられないが、外港として東岸の熊野港を持ち得るのは利点である。しかし、小川氏も書いておられるように、最終的には古瓦や（茅葺きであればないのだが）、礎石・法具などの発掘が決め手になろう。

(5) 島間説　明治二〇年ごろの益救神社の陳情文書に、国府政庁がかつて島間にあって、政庁官人らは島間崎から益救神社を遥拝したという内容が記されている。新しい記録であり、そのまま信用はできないけれども、口碑を踏まえたと思われるこの記事は、一応注目に価する。というのは、島間という地名からして、島と島すなわち屋久島と種子島の間であることを示している。それに、島間城すなわち上妻城という古い城郭がある上方という地が昔から重視されてきたこともある。島間説としては一般口碑のほかに、小川氏は中田国府の外港としてふれ、平山氏は多褹・益救両島間の海上交通の要地である点を指摘されている。最近、藤井重壽氏が隼人研究会において新たに島間国府説を提唱された。氏の説の要旨は次のとおりである。

①国防の前線として多褹は重要であり、その適地として島間が注目される。

②益救神社文書（前記）の島間国司政庁跡説。

③下中の「市之坪」は「一の坪」で、条理制遺構である。

④国府は、文化の中心、豊かな生産地帯、交通の結節点でなければならないが、多褹国の場合、とくに、種子島・屋久島・口永良部島三島の中心地でなければならぬ。そういう地は島間である。

⑤島間の宮松原神社（海岸の古社）に熊毛入道の伝説（日高円碩記）があること。上妻城は、国府津城が上妻城となり、上妻姓発生の元になった。

このような理由で、島間上方に国府があったというもの。氏の説の背景には、島間上方に居住し、町役場退職後、一途に島間城（上妻城）をはじめ、市之坪、その他の地名研究をしてきた河東不凡氏の研究があり、その現地資料に立脚している。島間説の難点は、傾斜地が多く、地域が狭いことである。なお、上妻氏は筑後の上妻郡から来島した一族であり、国府津城から上妻姓が発生したのではない。しかし、藤井氏の説は今までの島間説と共通する要素があるものの、新しい見解も加えて、ずばり、島間説を打ち出している点が特徴的である。筆者も自分なりの考えにしたがって島間説をとるものであるが、永年、薩摩国府や大隅国府を研究してこられた氏の説には傾聴させられる。

(6) その他の説　真所説と西之表農事試験場（本立）付近説がある。

(ア)真所説　真所は、政所の訛音であり、ここに郡衛あるいは国衛を想定する説。この説の代表は小川玄三郎氏であるが、氏は先述のごとく、あとで、国衛については中田説を打ち出した。真所には郡・郡川・市之坪・一の坪などの地名も近くにあって昔から注目されてきた。利点は、広い水田を控えていることだが、難点は、種子島の南端にあって、海上交通・陸上交通とも不便であること。

しかし、全国の国府が条理制施行地にあるのが通例だから、「市之坪」、「一の坪」、「里」を手がかりに、国府を想定してみるのも有意義である。また、「真所八幡」もあって、その前には古例の田植祭祀を営む森山もあり、少し離れて古刹峯之寺もあり、推理の条件には欠かない。

(イ)西之表農事試験場付近説、これは『鹿児島県史』に、同所付近の経路から発見された二、三の素焼土器と平安中期ごろの瑞花鴛鴦八稜鏡を、島分寺のものと推定していることを指す。しかし、島分寺の場所は分からないとしている。この地は西之表の後背地であるが、湊川沿いの細長い水田地帯で、国府や国分寺所在地としては疑問である。ただ、西の赤尾木港、東の庄司浦港を控えた格好の地ではある。

以上、多褹国府・国分寺について従来の各説を述べた。筆者はこれらの説を踏まえながら自説を展開したいと思う。まず、結論から述べると、島間説を主張するものである。しかし、のち南島宣撫が功を奏して平和が続いたが、そのうち、北方の薩摩・大隅も安定し、とくに山川経由あるいは彌寝(わじめ)(根占)経由国分への交流も多くなった。その他の事情も加えて、やがて、多褹国府・国分寺は赤尾木に移転したと考える。この点は従来の島間説と大きく違う。

二、島間説の展開

(1)(一) 多褹国府

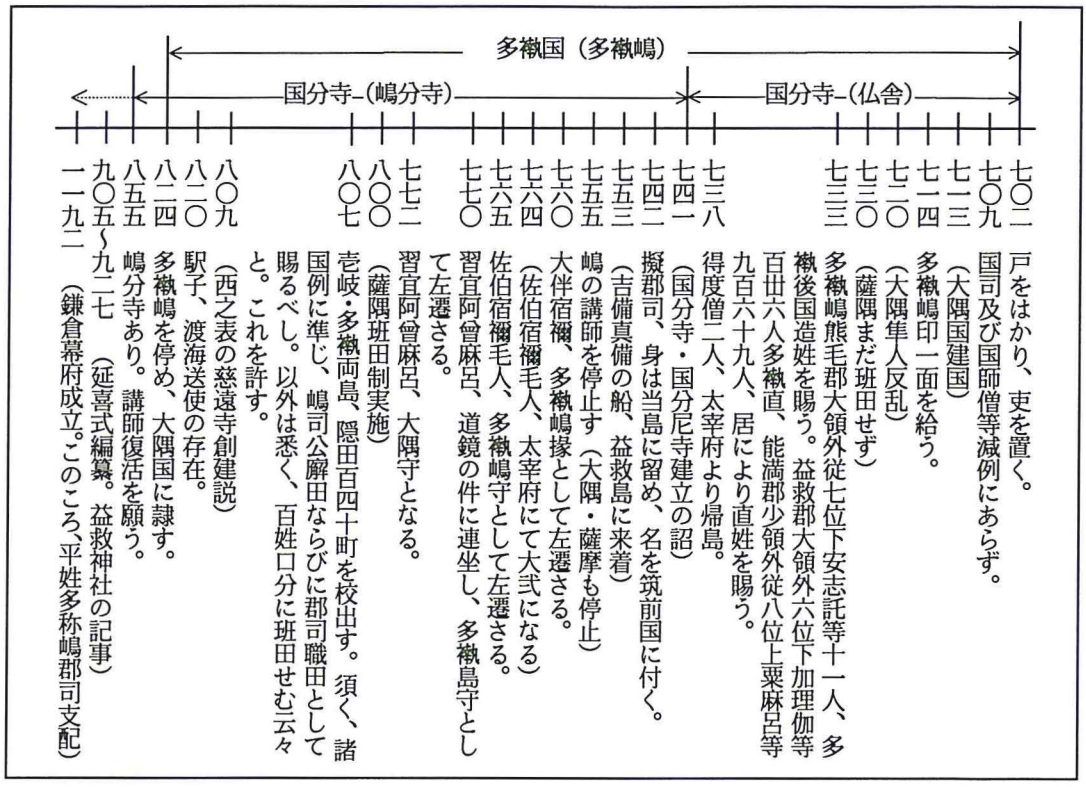
史料の検討

(1) 屋久島が『日本書紀』に初登場するのは、推古二四年(六一六)で、以後たびたび登場するのに、種子島の初登場は天武六年(六七七)で六一年も遅れている。このことは、のち『延喜式』に南島でただ一社、益救(やく)神社が記載されていることでも分かるように、九州管内第一の高山を持つ屋久島が古くから重視されたことと関係があって、種子島よりも屋久島が重視されていたこと示している。この点からも、多褹国府は屋久島に近い、また屋久島の霊山宮之浦岳を拝みやすい島間に国府を定めたと考えられる。

(2) 六七七年、種子島が登場し、まもなく、六七九年・六九八年・六九九年・七一四年・七三五年にはそれぞれ、朝廷は南島に使を遣している。南島は、沖縄に至る広い地域であり、朝廷の南島経営の積極性が読み取れる。こうした点からも島間が拠点であったとしてよい。

(3) 六七九年の種子島第一回目の遣使は倭馬飼部造連などであるが、名前からしてこの人物は牧などの畜産技術を持っていたと考えられ、後年の種子島マキ制度の基礎づくりをしたと思われる。これより五九年後の天平一〇年(七三八)には太宰府に種子島人二八人が官の馬牛の皮を納めている(『筑後国正税帳』)。種子島内で、牧の最良の適地は長谷野(はせの)であり、島間はその一角であり、長谷野牧全体を管理しやすい。

(4) 六九五年には、文忌寸博勢や訳語諸田等を種子島へ遣わし、蛮人の調査をさせているが、通訳を伴ってのこの調査行は、六九八年にも再度行かせ、しかも武器を持たせている。そして、翌年帰朝するのであるが、屋久島・奄美大島・徳之島人を伴ってきたので、主に薩南諸島、奄美諸島を調査したものであることが分かるとともに、その前進拠点として、屋久島の宮之浦・安房・種子島の島間などが適地として指摘できる。しかし、当時は既に多褹国の地図も献上され、種子島が重視されていたので、島間が最適地



とされたであろう。

(5) 南島宣撫が活発で、来朝者（帰順者）には位階を授けているのだが、それには差があることおよび位階に洩れた者などの不満、さらに開田や牧整地などの急激な経済政策への不満などが積もって、ついに大宝二年（七〇二）、多褹は薩摩とともに命に叛き征討されるのだが、このとき、初めて戸をはかり吏を置いた。このような状況での官衛は、まだ政情不安もあるので、防衛も十分に考慮した官衙（国衙）を造営して吏すなわち官人を配置したであろう。こうした点から島間の上方は適地である。

(6) 天平五年（七三三）の記事（年表に記載）は、次のように姓を賜っている。

熊毛郡	大領外従七位下	安志託等	一一人
益救郡	大領外六位下	加理伽等	一三六人
能満郡	少領外従八位上	粟麻呂等	九六九人

多褹後国造姓
多褹直姓
居により直姓

これは短い文であるが、いくつかの興味深い事実を秘めている。それを述べる前に、筆者はたとえば一一人というのは、熊毛郡内の人一一人というのではなくて、熊毛郡の安志託ほか多褹国内の一一人と解したい。そこで、

① まず最初に熊毛郡を記したのは、熊毛郡が最重要地であったからであり、国府に近い地と見なければならない。熊毛郡の場所は、(ア)島間、(イ)下中の「郡原」、(ウ)西之表の「城」の三カ所が伝承されているが、(ア)は日高円碩の想像であり、(ウ)は高野入道居住地の伝承もあるというぐあいで、残る(イ)が確実性が高いと思う。(イ)は、「里」村落・真所（政所）・郡川・郡原・市之坪など地名が集中し、古代

地方行政官庁の中心地であったことを示している。「郡」のつく地名は、中種子町増田の郡原、西之表市住吉の里の郡川にも見られる。これを整理すると、

西之表（北種子）	上之郡	住吉里
中種子	中之郡	増田郡原	能満郡
南種子	下之郡	下中郡原	熊毛郡

となる。能満郡は、現在野間の地名に継承されているが、増田はもとは野間の区域であったという伝承があるので拙著（『中種子町口碑集』―『種子島の民俗Ⅰ』）郡原は能満の行政センターとなる。上之郡の郡名は不明である。このころまではまだ能満郡に属し、一郡であったのか、別な名称があったのかも史料では判然としない。住吉の里は、良港を控え、海上交通上はよいが、後背地が山であり、上之郡全体を統轄するには適地とはいえない。したがって、住吉に郡のセンターが長期間あったとは考え難く、むしろ赤尾木が適している。住吉は、赤尾木港の避難港としての存在価値がある。ただし、益救に重点を置く当時の政策では、上之郡・中之郡を合わせて一郡とし、能満郡としたことが考えられる。赤尾木の整備はその後であろう。

②「多褹後国造」姓の「後」は、ノチか、シリか、議論の分かれるところだが、もしシリとすると、熊毛郡の位置と合って便利だが、それにはサキ（前）もないと完結しない。したがって、初期国造に対する後期国造の意味でノチと解するのがよい。『鹿児島県史』もノチの趣旨を主張している。

③『鹿児島県史』が説くように、益救郡の大領が国造の家柄を示す多褹直の姓を賜い、多褹島内の熊毛郡大領が多褹の後国造姓を賜わったのは、もともと屋久島に最初の国造がいたことを示している。それは、舒明元年（六二九）に田部連を屋久島に派遣したときにちなむのではないか。田部連は名前から見て開田使であったと思われ、屋久島だけでなく、種子島も視察したと思われる。屋久島の中心は古来、宮之浦であり、そこに後年の式内社の益救神社があるのだが、益救郡の国造は宮之浦にあって益救神社を祀ったものと考えられる。益救神社は、その後の南嶋経営・南嶋交通のもっとも重要な守護神として信仰された。それで、後世に至るまで、島間岬から国司遥拝の伝承や門倉岬からの遥拝の伝承が存続したのであろう。

多褹国創設に当たって、益救郡はこのような伝統を踏まえ、重視されたのであるが、それでも「多褹直」と多褹の文字を冠する点は、国府が多褹に存在したことを示す。かかる点から、国府は益救に近く、朝夕、宮之浦岳を遥拝でき、益救郡の国造とも烽火・便船でただちに連絡できる島間に設置されたということができる。

④ 烽火は古代においてのみでなく、近世までも重要な通信法であったが、とくに南島においては、終戦前まで、もっとも手っ取り早い通信法であり、よく用いられた（『南島の通信法』『南西諸島の民俗Ⅰ』）。種子島における烽火の山は、

島間	火合（ひあわせ）ノ峰（二〇七メートル）	島間港の上
住吉	火合ノ峰（岬の鼻）	住吉港の上
赤尾木（西之表）	火合ノ峰（一四九メートル）	花里（けり）の先

この三点があり、島間～赤尾木を結び、島を縦走する線上にある。宮之浦と島間の間は約六キロで、民謡に歌われるように「屋久の嫁女が布さらす」のが見えるくらい近い。したがって、宮之浦と結ぶ最重要地点は島間である。大隅国が成立すると、益救・島間の情報は烽火により、一時間もしないで大隅海峡をへて大隅国府まで的確に連絡できる仕組みであった。

⑤ 能満郡少領の粟麻呂の名は、粟を主作とする畑作地帯（中之郡・上之郡）らいし名である。このことは逆に見ると、対比されている熊毛郡（下之郡）が水田地帯であることを意味する。九六九人に直姓を賜っているが、これも多褹国全体にまたがる人数であろう。

(7) 下中の「市之坪」、西之の「一の坪」は、郡川と鹿鳴川の間の条理制遺構と考えられ、西之の宇都の上の城角（じょうかく）も「条」にちなむものと考えることができる。下中と西之は対比できるところから東之「里」（下中）、「西之」里（西之）のもと、条理制が展開していたことが考えられる。

市之坪の地には、聖地の森山がある。周囲一六四メートル、高さ約一三メートルの山で、田の中にあるけれども、周辺の七つが峰の一つとして自然の岩山であり、そこに木が茂った森である。開田によって他の山と切り離された。森山は、古来、真所神社田植え祭りの直会をやってきた聖地で、今でもみだりに入ってはならない。この周辺の市の坪は神田となっていて、赤米を栽培してきたが、明治以後白米にかわった。森・田植え神事・赤米というユニットは隣りの茎永の宝満神社の場合も同じである。したがって、下中や西之と時を同じくして茎永も開田されたとみなくてはならない。

近世において、これらの地で収穫された米は、中種子町南部（坂井）のものも合わせて島間に集荷され、年貢米として赤尾木へ回送されたが、島間への陸路は、いったん尾根伝いに長谷野（はせの）へ出て島間へ向かった。広大な牧地の長谷野は平坦地であり、これらの村落を連絡する地理的役目を果たした。この長谷野を媒介にして考えると、島間―下中、島間―西之、島間―茎永、島間―坂井は、扇形状に要の島間と各村落を結ぶことになり、容易に、迅速に通交し合えるのである。したがって、中・南種子の地でもっとも重要な地は陸路から見ても島間ということになる。

(8) 多褹国が設置された七〇二年には、大隅国はまだ設置されておらず、その後もしばらくは大隅東岸や錦江湾内の交通は整備されていなかったと思われる。したがって、太宰府との連絡は、薩摩国府をへて薩摩半島の坊津をへて行われたであろう。坊津と宮之浦や島間との連絡は、潮流の激しい佐多岬沖を挟んで行う坊津～赤尾木の交通よりも容易である。坊津からは、硫黄島、次いで屋久島を目指して一気に南下し、昔、田部連がなしたごとく宮之浦の益救神社に参拝し、南島皇撫成功を祈願し、次に対岸の島間めざして種子島海峡を再び一気に横切ったと考えられる。島間の港は、島間および稲子泊を含むものであったろう。

ところで、薩摩・大隅の支配はなかなか思うようにいかなかった。七二〇年には大隅隼人の抵抗があり、七三〇年に至っても薩摩・大隅とも班田を実施せず、八〇〇年に至って実施の確証が認められるありさまであった。こうした薩摩・大隅の実情に対し、多褹国を中心とする南島経営は予想外に順調に行われた。朝廷の南島経営の目的の一つは、多褹国を整備することにより、太宰府との中間の薩摩・大隅を挟み込んで制約するという狙いもあったと思われる。南島経営の趣旨からは最初は島間が国府の適地であるが、南島経営が一応

安定した七二七年（南島人叙位）を経過し、さらに南島記事の最終である七五四年（南島に牌を修復）以後になると、島間に国府を設置した意義の一つが色あせていくことになり、同時に朝廷の目は完全に同化しない薩摩・大隅に向き、多禰国府の位置の再検討も行われたと考えられる。さらに、薩摩・大隅の同化が進むと、多禰国府はこれと接触を深めたであろう。南九州の港津も坊津に対して、山川や根占・大泊・内之浦・志布志などが整備され、これらとの海運も次第に活発化したと思われる。大泊や内之浦・志布志との連絡は西風の強い冬期は種子島東岸、中でも浦田や湊・庄司浦・田之脇などを利用するのがよい。こうして、多禰国との中心勢力は、やがて島間から、条件の整った赤尾木へ移転したと考えられる。

(9) 以上述べたことをまとめると、初期多禰国においては、益救神社信仰（山岳信仰・航海の目標）・旧国造・南島経営・南島交通という益救勢力に対し、条理制・新（後）国造・水田経営・島内交通という多禰勢力の新旧勢力交替の接点として、島間は非常に重要であった。したがって初期多禰国府は当然島間に設置さるべきであった。

この新旧勢力をいっしょにして島間の重要性を考えると、第一に、広大な地域に及ぶ南島経営上、第二に屋久島を重視した場合、第三に種子島南部の水田地帯を管理する上からという点が指摘できるが、これらの理由がなくなると島間の重要性は失せてしまう。したがって、多禰国府ははじめは島間にあったが、多禰国停止前、あるいは停止後、赤尾木へ移った、と考えられる。

では、初期多禰国時代に存在したと思われる多禰国府はいったい島間のどこにあったか。

(2) 島間城（上妻城）

(1) 概観

上方にある島間城跡については、筆者は、西田善三氏という古老から昭和三〇年代に聞いて知っていたし、その後も何回か島間上方を訪れて見聞していたけれども、今回、河東不凡氏の案内で、徹底的に調査するにおよんで、その規模の大きさ、古さ、保存のよさなどについて深い感動をもって改めて理解した。なお、西田善三氏はカリヤ跡に居住しておられた。

島間城は、上（東）から数えて、通称、ミズガウエジョウ、カリヤ、ウチジョウの三つの城廓が東西に連なる連廓である。三廓とも高いタカボリ（土塁）によって囲まれ、南面・東面とも深い谷の小川でもって守られるという防禦を目的とした城であり、カリヤとウチジョウは名のごとく、役所と居館のある所である。海岸から標高二〇七メートルの火合ノ峰の中間の斜面台地に位置し、自然の地形を巧みに利用して防禦・用水等を考慮したこの城は、山城的平山城であり、古い柵形式の要素を持っている。土塁は、内側および外側の土を削り、積み重ねたもので、石は一つも使用していない。土塁の高さは場所によって異なるが、一〇メートル内外、その幅も場所によって異なるが、数メートルから十余メートル。内城の北西角面の土塁からは基盤の赤土層の上に築いた黒色土層との中間あたりの崩土から縄文土器片も拾える。これはおそらく、土塁を築いたときの黒色土の底に混っていたものであろう。

内城の通用門に当たる東南の入口を入ってくるときの土塁中からは鉄滓がいくつも出た。その鉄滓は重くて、製鉄跡かもしれない。これは、土塁を築いたのが鉄器使用以後ということになるが、砂鉄の豊富な種子島では弥生以来製鉄したことが考えられるので、いつの

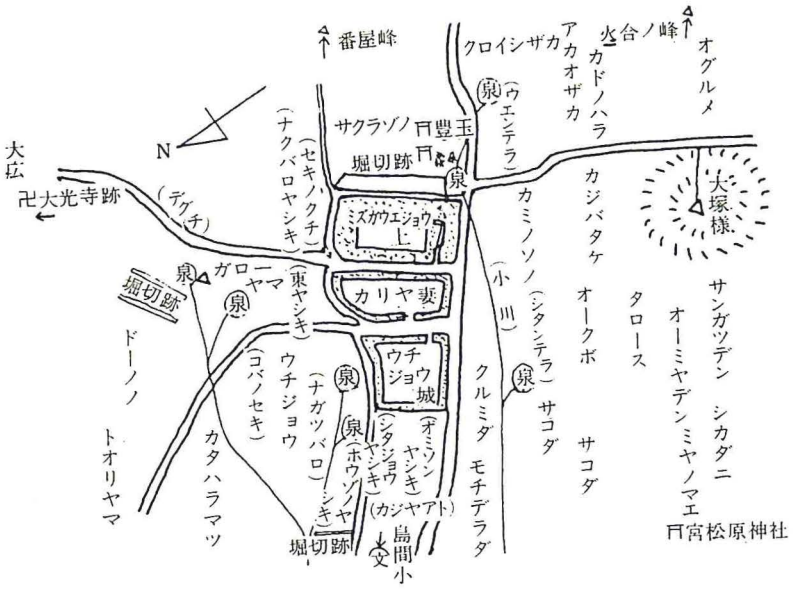


図1 島間上方図

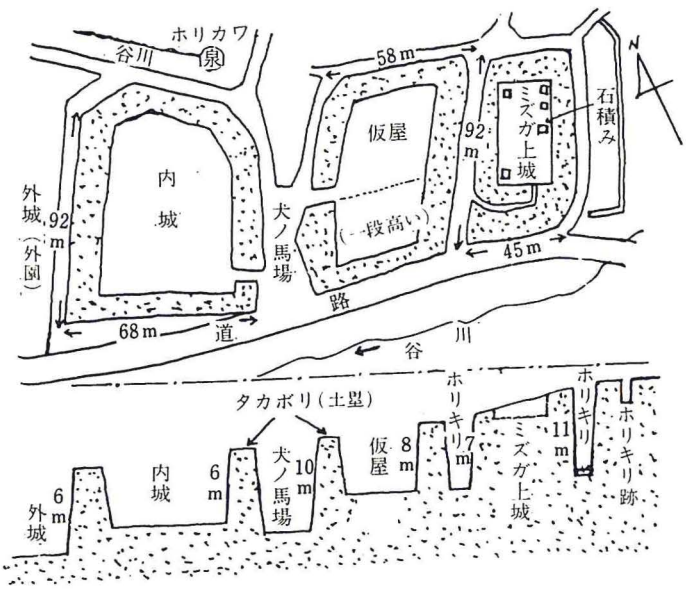


図2 島間城（国府津城の平面と断面）

ころのものとも決めがたい。最近、内城の西南の地点に経一メートル大の団子状礎石らしいものが出土した。周辺を掘るとまだ出るかもしれない。この礎石は今後の検討を要する。

内城は現在柳田忍氏が居住している。内城の北側の泉を殿の川というように、内城は島間支配者の居館であった。幕末に中島郷舎ができて明治に入ると青年会舎となり、明治五年、島間小学校になった。やがて、島間小は仮屋へ移り、さらに今のコーブシ畠の地へ移転した。柳田氏は島間小の跡を払い下げてもらったのである。土塁は、門の北側を少し切り崩してあけてあるが、全体としてはよく保存されている。内城の内側は、柳田氏の家と菜園、ビニールハウスなどがある。土塁の上には、苦竹や木が生えている。

内城の土塁の外周の長さは、東面五九メートル、西面九二メートル、南面六八メートル、北面四七メートルで、合計二六六メートル、内城門口の土塁幅は向かって右一三メートル、左一〇メートル、土塁の西面外側の高さ約六メートル、東面内側の高さ五メートル余。

仮屋には、現在、日高公司氏が居住している、藩政時代の役所跡で、日高氏の門口も昔の仮屋の門口そのままを利用しているが、氏も最近、北西面の土塁を崩して道をつけた。全体の保存景観に大きな変化はないが、こうした蚕食は今後は止めるべきであろう。仮屋の内側は、日高氏の家屋と菜園がある。仮屋のあるころは、外から門に向かって左方の内側に仮屋があり、右側は少し高くなっていて、建物はなく、訓練地みたいな平坦地であったという。そこには今、日高氏の家があり、左方は畑である。土塁の上には、三連廓とも椎の大木が多い。かつて内城の居住者が土塁の黒色土より下を試掘したとき椎の実の炭火したものが一升くらい出土したことがあり、それは縄文期における食糧目的の椎の実と思われるが、歴史時代に入ってからのこの土塁上の椎の木は、椎の実採取のための栽培樹木であろう。椎の木はガジュマルやアコーみたいには急に伸びない点も考慮されたにちがいない、しかし、とくに仮屋のタカボリ（土塁）に何本も生えている椎の木は三人抱えほどもあって、七、八〇〇年は優に経ているかと思われるような大木である。ミズガ上城の椎の木も同様の大木であった。

仮屋の東面外側の長さは九二メートル、西面一〇三メートル、南面三九メートル、北面五四メートルで、外周の合計二八八メートル、仮屋の門口のタカボリの幅は向かって右側一七メートル、左一一メートル。タカボリの西面外側の高さ約一〇メートル、北面内側の高さ八メートルくらい。犬之馬場は昔犬追う物を行った所で練兵場。

ミズガ上城は、古老によると、島間城の中でもとくにここを上妻城と呼ぶ地で、河東不凡氏の所有地。氏は、幼いころより、父母からここには入ってはならない。入ると祟ると教えられてきた。また、「ここは上妻という殿様がいた場所で西之表と交替した。そのような地だから入ってはいけない」とも教えられた。

所有者の河東氏もめったに入らぬ聖地であったので、島間の人びとも、場所は目の前にありながらも、ただ、山でもあり、入口もなく、しかも一〇メートルもあるホリキリ（空掘り）のためそのホリキリの道は毎日何人も通っても誰一人、実情を知る人はなかったという。河東氏によると、氏が台湾から持ってきたポンカンを十数本植えてあったので、たまに見に行ったが、気持ちのよくない場所であったらしい。ほかに椎の大木や苦竹なども生えていた。東面壁上には、逢莱竹もひとかたまり生えている。逢莱竹は、必ず人が植えたものであり、火縄やカゴ・ザルなどを作ったり、薪の束をくくる紐にしたりする生活竹である。

ところが老人会でゲートボール場を設けるために、ミズガ上城の東面のホリキリを埋めて、その東隣にコートを設けようということになった。これを聞いた河東不凡氏は驚いた。氏はかねて上妻城保存について考えていたので、直ちに老人会に対し、「ホリキリは埋めないでくれ。代わりに、自分の所有地がミズガ上城にあるからそこを開いてもよい」と申し出た。こうしてゲートボール場はミズガ上城にできることになった。先にゲートボール場を作ろうとした場所も実は図のようなホリキリ跡があったのだが、少し整地した過程で、惜しいことにそれは消失した。

現在、ミズガ上城にはゲートボール場が開かれ、入口には上妻城についての解説文も提示されているが、ここに初めて入った老人たちは皆驚いた。八〇歳の老人も一回も入ったことのない、城廓の上の山中に、ひろびろとしたコートが出現したのである。椎の木などの立木を刈り、ブルを入れて平坦地に整備した点では、若干、遺跡破壊ともいえるが、カラボリの埋没を救い、そのためミズガ上城の外周を保持し、かつ次に述べる、出土品を得たこと、しかもそれを河東氏がたいせつに保存し、出土状況を注意していたことは、大きな功績というべきである。ミズガ上城は、表面は人々に解放されたが、大局的には何ら損傷されずにすんだ。

出土品について述べる前に、東面外周の長さ六八メートル、西面九二メートル、南面四五メートル、北面三四メートルで、北面の土塁の高さ一〇・八メートル、東面の高さ一一メートル。仮屋との間のホリキリは現在四メートル幅の道であるが、以前は下部は一・五メートル幅であった。その道の南口はふさがれてよく通れない所であった。また、北面のホリキリ道も今二・五メートル幅であるが、昔は一・五メートル幅であった。そしてミズガ上城は周囲の土手だけがあって、出入口のない地であった。もっとも河東氏はそんな土手についた一・五メートル幅の急な道らしい所を通って、ポンカンを見に行った。このように周囲をきちっと、掘り切って、土塁城を築きながらここだけ出入口を無視していて、しかも整地されていることは、建設当初からめったに入らぬ聖地で、時おり、重要な祭りを執行する場所であったといえよう。ミズガ上城は、「見ズガ上城」であろうと思う。泉とは関係がなく、水ヶ上城ではない。三連廓の一番上方にある城で、上城であるが、禁忌を伴い「見ズガ上城」といったものであろう。もっともこの名称は、不凡氏が父母から教えられた名称で、他の人はいわなかった。他の人は、一般に上妻城といった。仮屋に住んでいた伝承者の西田善三氏は、昭和三四年ごろ、筆者に、「この上に、めったに入らない上妻城があるが、いつでも案内しよう」といわれたことがある。それからすると、三連廓の中で、ミズガ上城をとくに上妻城といって重要視していたわけである。

(2) ミズガ上城（見ズガ上城）

この城廓については概観はのべたが、次に出土品の分析を行い、見ズガ上城の機能について考えてみよう。

① **竈形石積遺構** ミズガ上城から出土した石積みＡＢＣＤＥは図3の形であった。いずれも、地中に、ほぼ同じ深さの位置にあった。ＡＣＤは東面切り込みのａに沿い、ＢＥは西面の切り込みｂに沿っていた。ａは高さおよそ一五〇センチ、ｂは三〇センチ。ＡＢＣＤＥは地表より一二〇～一五〇センチの深さにその基底部があった。

五例に共通することは、基底部はヤマイシと称する自然石の三つ組みであること。三つ組みは、竈の形であり、適当な幅に組み

合わせて鉄釜あるいは土鍋を置いて煮沸したことが考えられるけれども（とくにCDE）、鉄器や土器の出土を全く見ない点から実際に竈として使ったか疑わしい。

ゲートボール場の工事で掘り下げた現段階では、他に礎石などは何も出土していない。したがってこの地に大きな建物はなかったといえよう。掘建小屋はあったかもしれないが、その柱穴などは見つかっていない。このような地に竈を築く目的は祭祀関係としか考えられない。それも長時間滞在して祭祀を行うために、人里のけがれを知らない浄火を必要としたあととも考えられる。

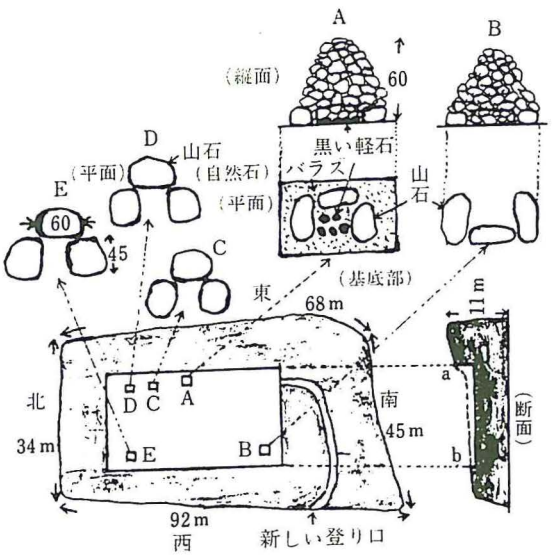
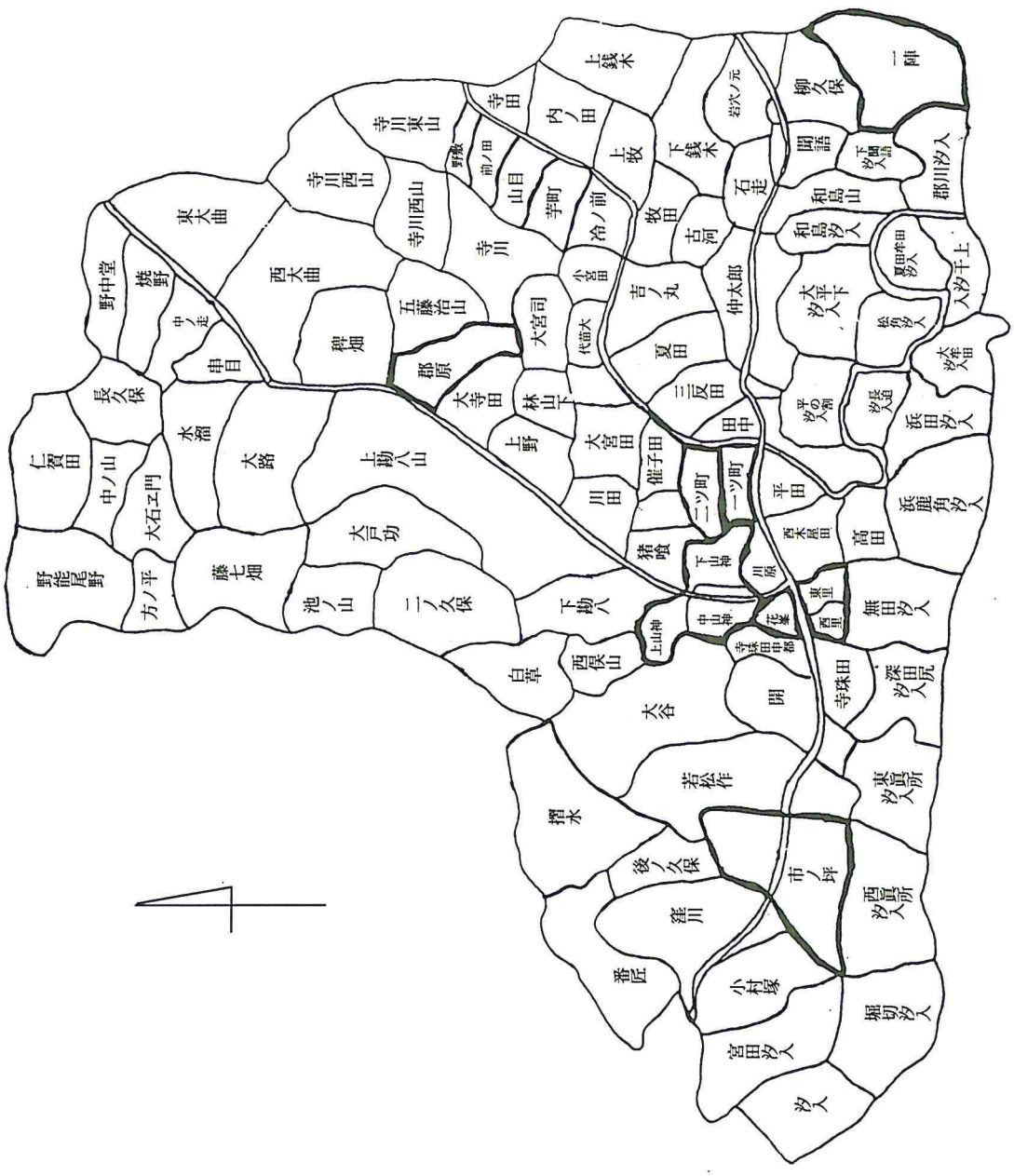
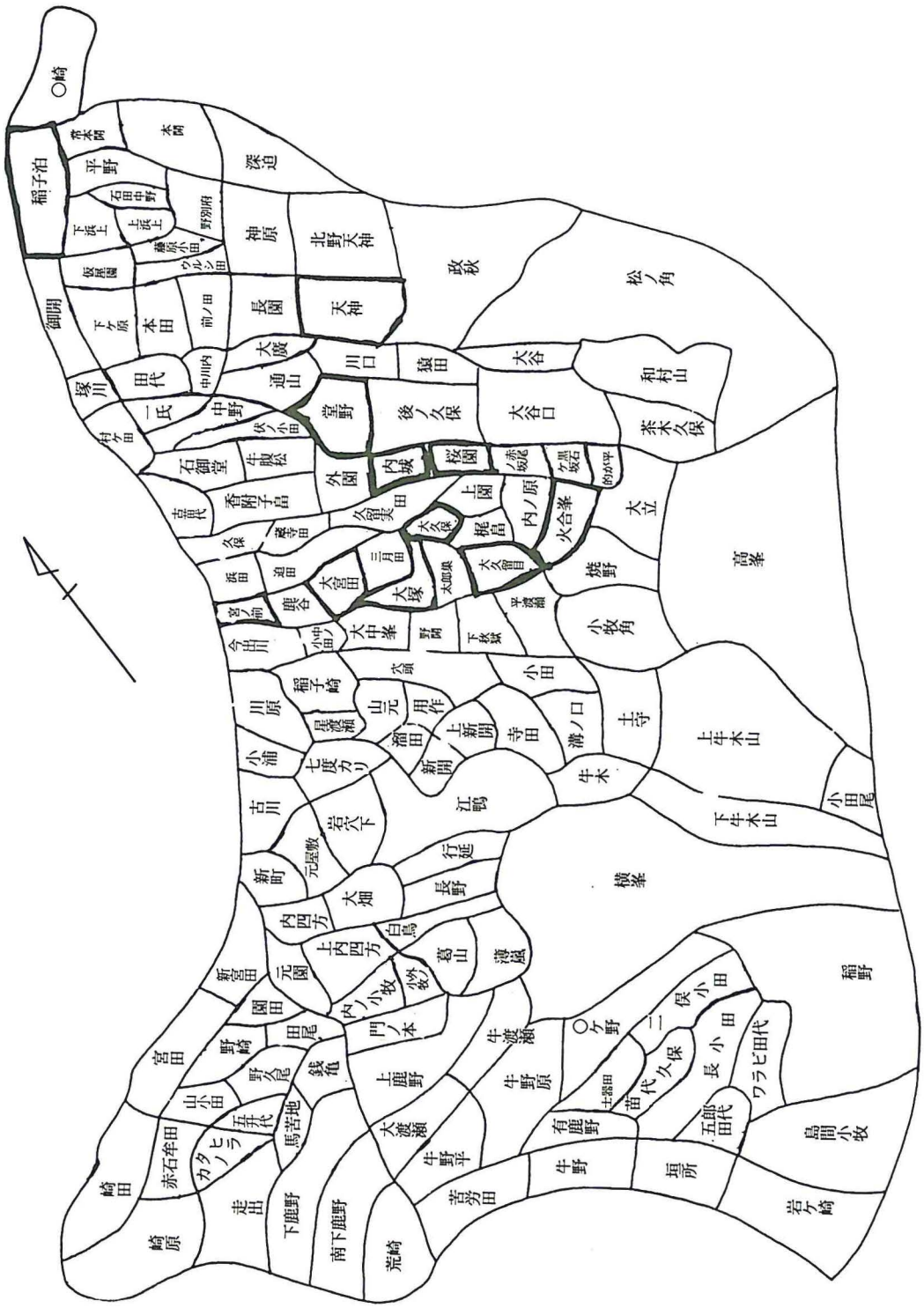


図3. ミズガウエジョウ出土竈形積み石遺構

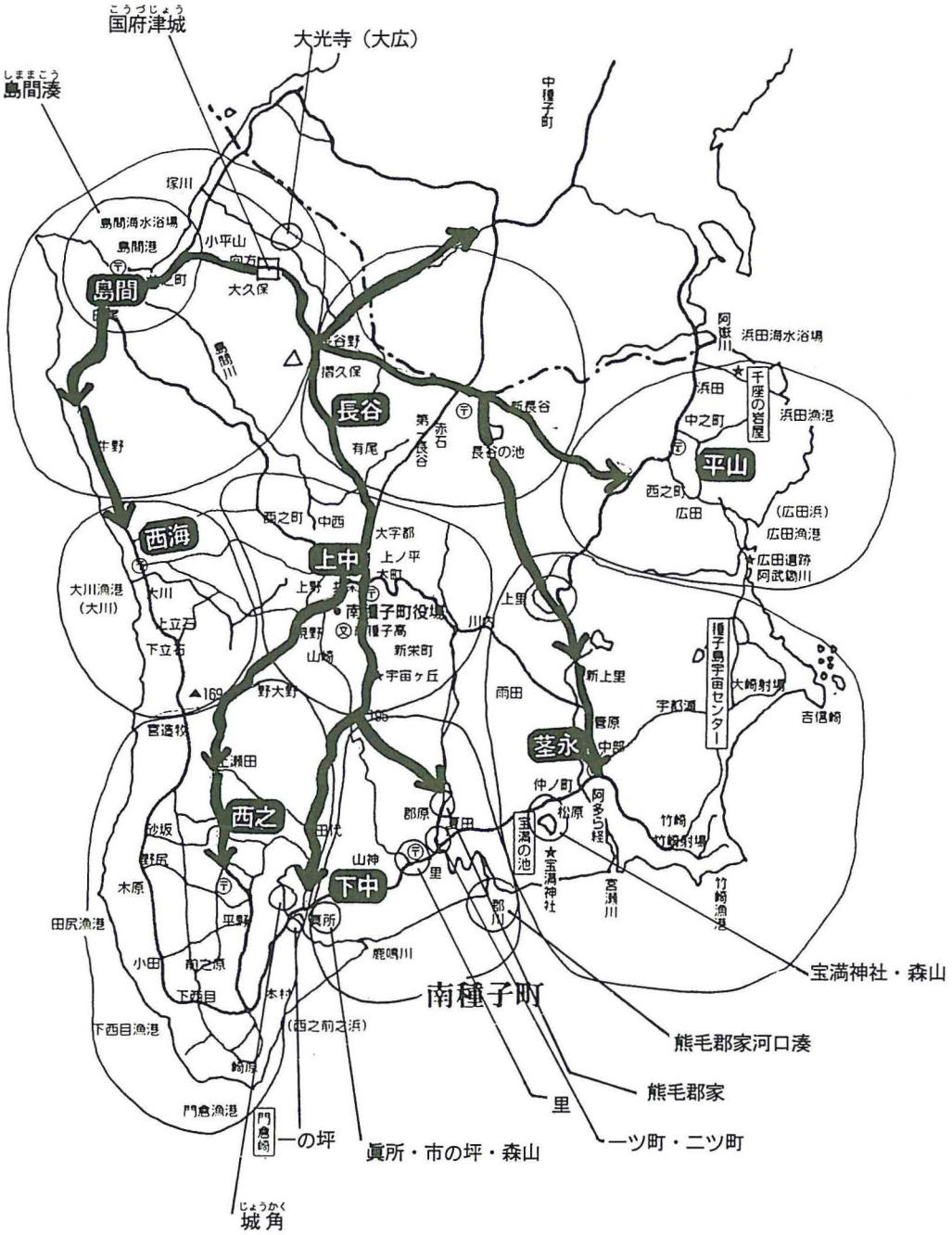
第４図：中之下（下中）の小字図
（市之坪、東眞所、東里、西里、一ツ町、二ツ町、花輪、山神に注意）



第５図：島間の小字図
（内城、島間野、桜園、火合峰、大久留田、大塚、大宮田、岡之前、天神に注意）



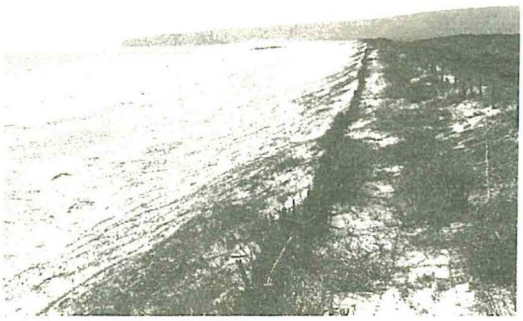
第６図：国府津城（島間城）と各村落
および水田地帯との連絡（長谷野台地経由の道）



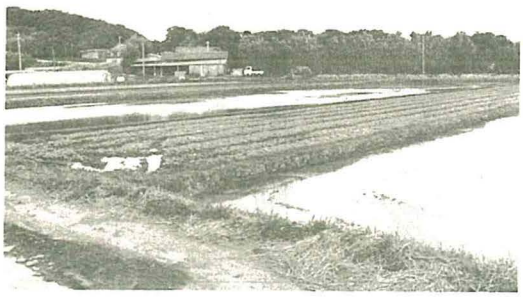
多褹国府・国分寺関係（Ⅰ～Ⅵ、撮影　下野敏見）

想定―（1）南種子町下中（しもなか）「里（さと）」（国府）（2）南種子町下中「真所（まどころ）」（国府）

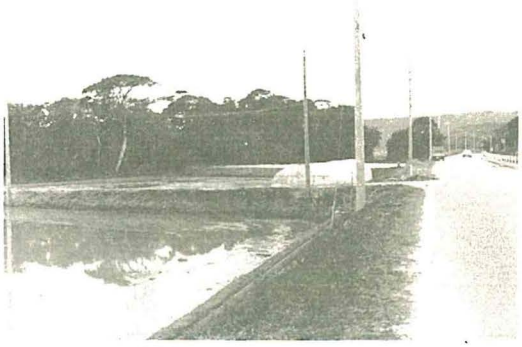
①下中海岸。黒潮直撃の浜には砂止めの垣をする。
前方は魚見の鼻。そのかなたに竹崎が見える。



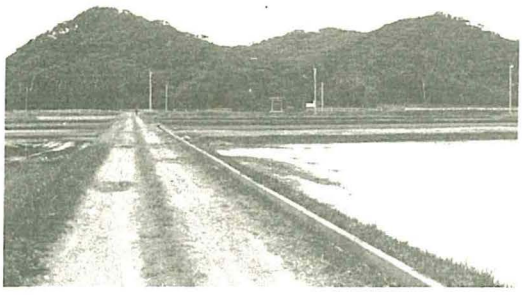
②下中～西之の海岸。鉄砲伝来の浜。
向こうの岬は門倉岬。砂止めの垣が一直線に走る。



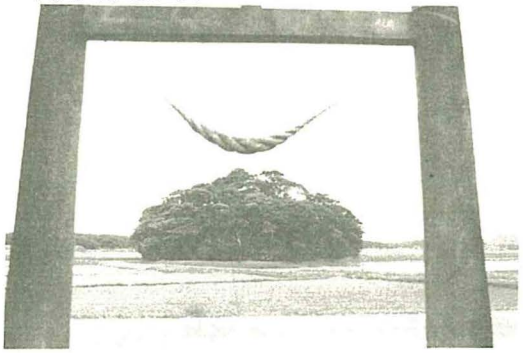
③下中の里村落（琉球竹林で囲まれている）を望む。
左は花峰（鼻峰に由来か）。



④森の中は真所（まどころ）村落。
この水田から車の見える向こうまでふくめて
「市の坪」という。



⑤真所八幡宮（にはんぐう）を望む。七つが森の一つに鎮まり、
前を二番堰の溝川が流れる。



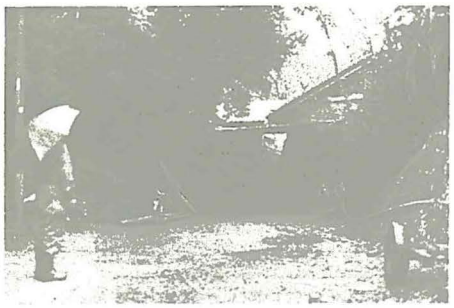
⑥森山。真所八幡宮の前にある。
森の左下は神田。森の手前一帯は「市の坪」字。

多褹国府・国分寺関係Ⅱ

（ミズガ上城・仮屋・内城・大塚山・森山・市之坪・真所）

①「ミズガ上城」ポールの右より積石出土

②左は「ミズガ上城」、右後は「仮屋」、人物は河東不凡氏

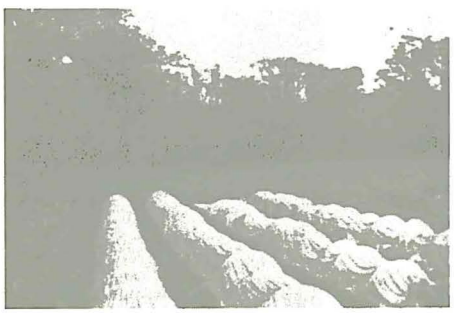


③「仮屋」の正面口

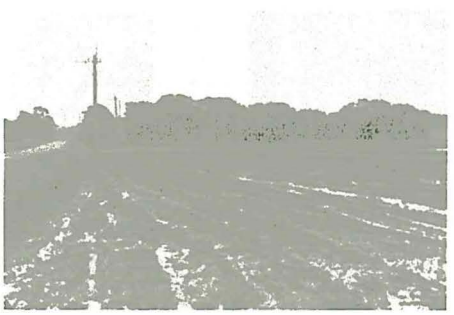
④「内城」北西面角地の巴状道路

⑤「内城」内部

⑥大塚山（島間大久保）



⑦島間城の仮屋園

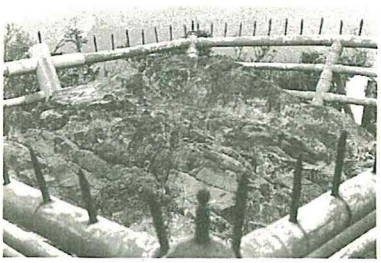


⑧「真所」村落、手前は「市の坪」（下中）

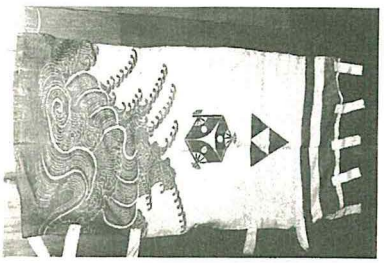
多褹国府・国分寺関係Ⅲ

金峰山護摩壇、対馬天道信仰、日足日扇紋、ミズガ上城、大光寺礎石

①天道信仰の積石塔（対馬竜良山の天道（天童）法師入定地）

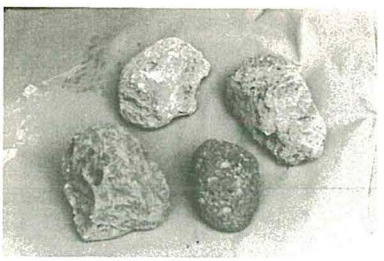


②金峰山（薩摩）のさされ岩（護摩壇）



③上妻氏の「日足日扇」の幕紋

④「ミズガ上城」出土（A）



⑤「ミズガ上城」出土の軽石（A）

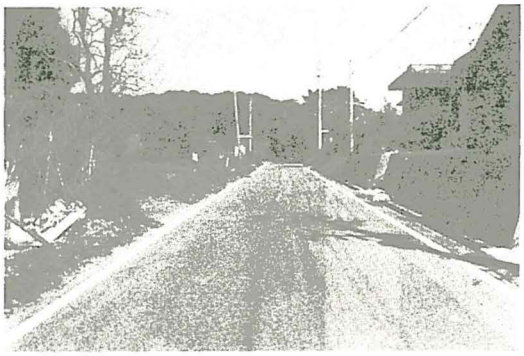
⑥礎石（大光寺跡）

⑦後世に割った礎石（大光寺跡）

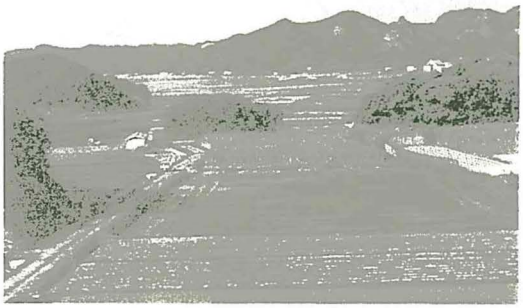
⑧後世に割った礎石の廓（大光寺跡）

多褶国府・国分寺関係Ⅳ

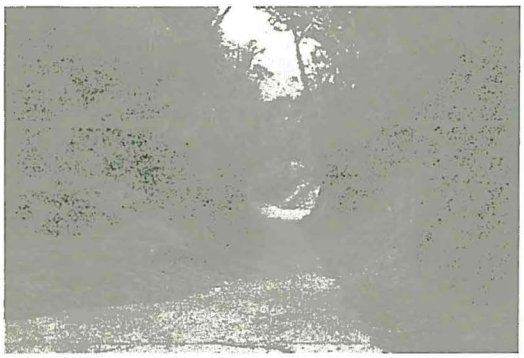
想定－（1）南種子町「上里（かみざと）」（国府）、（2）南種子町　島間「上方（うえほう）」（国府）



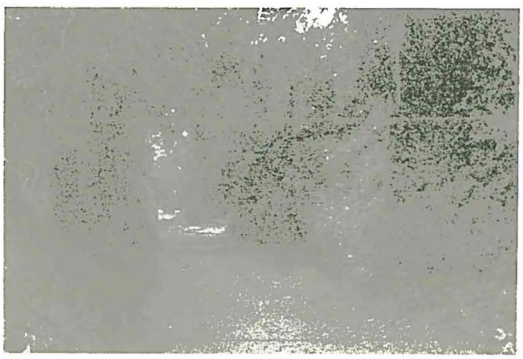
①上里の村落。向こうの山は上里（かみざと）城。有留家をはじめ旧士族居住村落で、茎永水田を管理していた。やや高台にある村落。



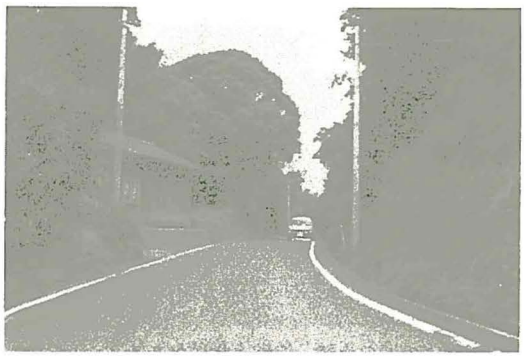
②お田の森。茎永平野を望む前方中央の森がそれで、宝満神社の神田があり、赤米を栽培している。



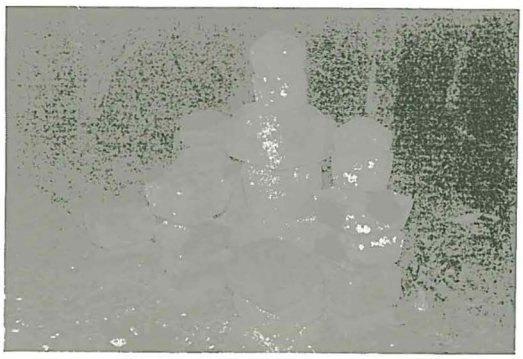
③島間城。左はミズガウエジョウ（見ずが上城）、右は仮屋の土塁。



④島間城。左の壁は仮屋の土塁。



⑤島間城の犬之馬場。左は内城壁、右は仮屋壁。この道は掘りの切り道で、上部は土塁になっている。



⑥大塚山の石塔、五百有余年前、法華改宗に反対して刑死したという大蔵さまの墓だという。

多褝国府・国分寺関係Ⅴ

想定－西之表市西之表「本城」（国府）　（2）西之表市西之表「榕城」（国府）

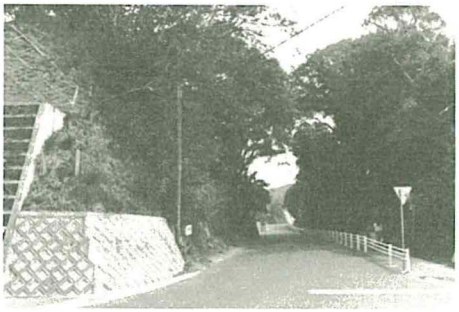
①本城（左）。北側入口。

②「井の上」の井戸。すぐ上に種子島氏の次男家があり、また内城、上の城に近い。

③本城（右）。南側入口。

④内城の土塁。榕城中学校校庭。

⑤内城の土塁。人物は中世城郭研究家の山崎勇三氏。

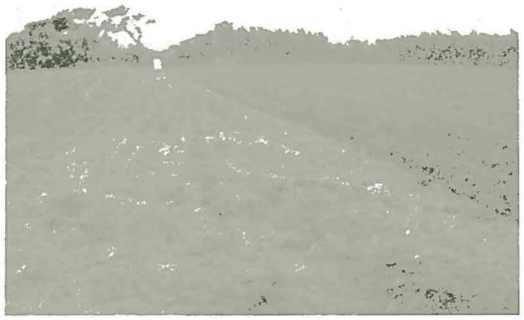


⑥榕城の犬之馬場。左の土塁は内城。右は種子島氏次男家。この道路は堀り切り道である。

⑦右は上の城の土壁。榕城小学校がある。左は内城で、榕城中学校がある。

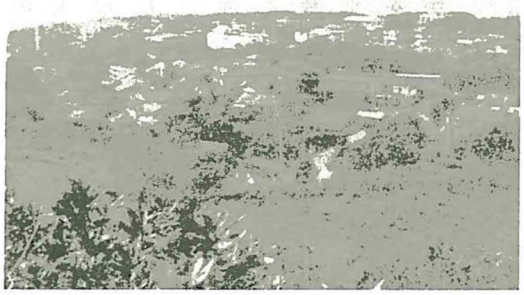
多褝国府・国分寺関係Ⅵ

想定一西之表市西之表「城」(国府)、(2) 西之表市西之表「石之峯」(国府)

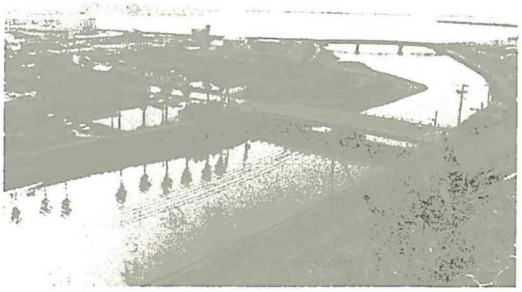


①城之内。五連廓の山城で、甲女川の上にあり、西之表の榕城湾を一望に見おろせる。

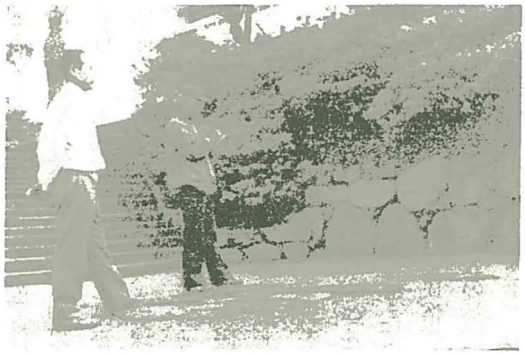
②城から城之内を望む。右方の峯に城之内がある。



③宝永山より、西之表の台地を望む。山と海岸の中間の台地で、本城(左上方)、内城(左側、見えない)がつづく。



④甲女川。川の左方は砂浜であったが戦後、市街地に。沖の防波堤も戦後。左の岬は湊泊。昔はこの川を船がさかのぼって、城の下まできた。



⑤「石之峯」城入口。S字型の道がつき、踊り場のまわりは礎石ににた巨石を積み上げてある。人物は種子島宗教研究者で、「種子島を語る会」主宰の高重義好氏(右)。左は中世城廓研究会の山崎勇三氏。

⑥林の上にそびえるのは熊毛支庁の建物。そこは昔の石之峯城の地。

ABは、他と少し違う。とくにAはバラス（指先ほどの浜の小石）を敷きつめた上に三つ石を組み、その中央にこぶし大の黒い軽石五個を置いてあった。この軽石はシラス系のものではない。浜に寄った石を拾ってきたもので、聖石であろう。その上に、大小のヤマイシをたくさん積んだ形であった。その石は長さ三〇センチ、幅一五センチくらいのものが標準であるが、焼けて赤くなったものや火熱によって割れたものがいくつも見られる。このことは、ABで実際に火を焚いた証拠になる。石を焼いて根栽作物や動物肉のムシ焼きを作ることは可能だが、ホリキリをめぐらしたこの地にわざわざ持ってきて、祭祀以外そのような調理を行うこともあるまい。とすれば、この火は、火を焚くこと自体が目的であり、祭祀の中心をなしていたと見ることができる。

したがって、Aがこの火を焚く祭りの中心で、Bはその補助、CDEはさらにその補助もしくは簡単な浄火調理用の竈と考えられる。そして真中の平地に人々が参集し、見守っていたのである。そこに小さい掘建小屋があったかなかったかはこの際は枝葉の問題である。Aは東向きである。東天を排して祭祀は執行されたのである。

② **石積み**　自然石をピラミッド形に積んだ祭祀遺跡として、対馬の竜良山（たてらざん）の表八丁角にある天童法師の入定地を示す石積みが知られている。この天童信仰は、天道信仰ともいわれ、古代の太陽崇拝に立脚している。しかも、ピラミッド形を造形し、望眺うるわしい竜良山の麓に設けてあるのでも分かるように、やはり古代の山岳信仰を背景にしている。つまり太陽崇拝と山岳信仰の複合であり、わが国の古代信仰の原形である。同形態の石積み信仰は、対馬の佐護や壱岐にも見られ、これらの島が多襞と同じく太宰府管内であり、ともに国としてあったことを改めて注目しなければならない。天道信仰は、対馬の豆酘（つつ）にあっては神事用の赤米俵そのものを「天道様」と称し、太陽崇拝が稲作と結びついている。

③ **天道信仰**　この信仰の南日本波及は広く、琉球圏では太陽をティダといい、天道信仰が古い時代に南下したことを示す。トカラ列島では、天道弊をこしらえて水芋を供え、太陽と芋が結びついている。大隅では天道を拝む祭祀遺跡が岡の頂上にある。鹿児島市川上でも村落の上の見晴らしのよい所で東天を拝し、天道祭りを行う。種子島では、一月一五日のカシワガユを炊いて天道に供えるが、そのとき、天道の箸という柳箸を添えておく。天道信仰はこのように、古く、広範に分布している民俗である。

太陽信仰は、火の信仰に連なる。琉球の火の神信仰も太陽崇拝と結ぶものである。種子島の塩屋牧（製塩村落）の火の神は、太陽神天照大神を祭神とする塩釜神社に祀ってあって火の神と太陽神は疑いもなく同一神と解されている。ミズガ上城の石積みは、そこで火を焚き、太陽神を祀る、すなわち古い天道信仰の祭祀が展開された跡であると考えられる。

④ **護摩壇**　火を焚いて祀るのに、ほかに密教の護摩壇があるが、修験道の場合、高山の頂に護摩壇がある例がある。薩摩の修験霊山である金峰山の山頂には、サザレ石と称する護摩壇があり、串木野市の冠岳にも同様の護摩壇がある。

修験道は種子島にも古くから波及していた。第一〇代島主幡時（はたとき）（一五世紀）の修験道傾倒ぶりは有名だが、それよりも早く、上妻家真（一三世紀初）は増田に蔵王権現を祀り、修験道に通じていた。ところが、上妻氏は口碑に島間の上妻城を運営し、種子島を支配していたが、種子島氏の入島に際し、その臣下となった。そ

のとき、増田村五〇町歩を種子島氏よりもらって、増田村に居住することになったという。今問題にしている城跡を上妻城というので、ミズガ上城の祭祀遺跡は、上妻氏が設けた護摩壇であり、ミズガ上城は修験秘法を験ずる秘密の場所であったとなると、たいへんつごうがよいのだが、次に上妻氏について検討してみよう。

⑤ 上妻（こうづま）氏　この姓は現在種子島に広く分布し、それだけでも家系が古いことを立証している。その本家は、西之表市小牧と納曾の二カ所にあって、どちらも自家が本家だと伝えてきている。

その系図によると、藤原鎌足に発し、隆宗の代、筑後の国司となって下向し、上妻郡に居住し、以来上妻姓を名のり、「日足日扇」をもって旗幕の紋となす、とある。『種子島家譜』（上妻氏編纂）によると、鎌倉時代の初め、種子島の地頭大浦口氏（在鎌倉）に代わって、上妻氏が代官となって種子島に赴任し、支配していた、とある。そして前記のように、まもなく種子島氏が島主となり、上妻氏はその臣として増田村に住むことになる。小牧の系図にはこのように記されてあるが、納曾の系図には、政長の代にて下野国から筑後国へ下向し、上妻郡を領し、上妻姓を名のるようになった。そして、政真の代（建久年間）に、大浦口氏に代わってその年貢運送のために来島し、やがて政真は種子島氏の臣となり、代々住吉村へ居住することになった、とある。両者は、名前と領地（増田と住吉）の違いはあるとしても、大体符牒が合っている。ここでは両者の正統性を比較する必要はない。増田にも住吉にも現に上妻氏の足跡はあって、深い関係があることは事実だ。

ここでもっとも注目しなければならないのは、上妻氏が島間にいた記載が系図に見当たらないことだ。もし、島主代として島間にいて居城を構えていたならば、その居城たる上妻城は、種子島氏入島時代りっぱな城であったはずだから、たとえ系図は後年に記入したとしても、やはり堂々と記載されるべきである。城趾とともにもっとも記憶されてよいはずの島間在館記事が双方とも洩れているのはいったいどういうわけか。

筆者は、上妻氏は建仁年中島間に住んでいなかったと思う。当時は赤尾木をはじめ北部の開発が進んでいたので、赤尾木にいたと思う。もしも上妻氏が島間に居城しておれば、また、上妻城を管理しておれば、その墓所がどこかにあるはずである。ところがどこにも見当たらないし、河東不凡氏に尋ねてもそのような所はないといわれる。上妻氏が島主代をした年数は、『種子島家譜』および『二十人家伝記』等の記載によると、わずか数年である。この短い期間にあの島嶼にしては壮大な上妻城を築城できたであろうか。また、上妻氏が築城したとすれば、鎌倉時代が開始され、世は安定に向かうというときに、何ゆえであったろうか。また、年貢輸送官の義務も持ちながら、多数の人民を使役して、あれほどの運営をする余裕と力があったであろうか。これらはいずれも答えは否である。すなわち上妻氏は上妻城とは無関係なのである。ましてやその運営とは何のかかわりもないのである。なお、島間には、上妻姓の子孫もいない。

ではなぜ、島間城を上妻城というか。これは、考えられるのはただ一つ国府津城が訛ったものである、といえよう。後世、上妻氏は種子島氏の重要な家臣として、『種子島家譜』や『懐中島記』などの記録にも参与し、中枢的役割を果たした。そうした上妻氏のコーヅマとコーヅとが重なり合っていつしか、コーヅマジョウ（上妻城）というようになったのであると思う。

上妻氏の紋「日足日扇」の日足は朝日を表し、日扇は太陽を招

く趣旨で、太陽信仰を意味し、国司にふさわしく、日の御子的出自をも示唆するが、ミズガ上城の竈形石積み遺構とは何の関係もなく、上妻氏の修験道の護摩壇とも無関係なのである。こうなると、いよいよ古代の天道信仰にその由緒を求めるのが妥当であろう。修験道の護摩壇とはいえないが、石積みの炉で火を焚いて祀るという点において、護摩壇の古い形を見せているともいえよう。この祭祀を執行したのは、「国司」（後年の嶋司）ではなかったろうか。

国司は祠社（総社）の祭祀を管掌し、国内の神々を勧請して祀ったのだが、多褹国にあっては、ミズガ上城に祭場を設け、それを執行したと考えられる。多褹国の神々は『薩摩旧記』（太宰府符案）によると、熊毛郡（種子島全部）国玉大明神、五（立）国玉大明神、海子大明神、菅男大明神、海男大明神、稲男大明神、上社大明神、辟大明神、高屋大明神、下浦大明神、雄大明神、江良貴大明神、屎世大明神、神玉大明神、平世大明神、新島大明神、沖之比瀬大明神、子奈義比之瀬大明神、豊鍬明神、真長明神、愛雄明神、以世明神、妻明神、笠明神、談志明神、揚田明神、粟屎峯明神、大佐吉明神、瀬明神、永上明神（以上三〇神）となっていて、他に、馭謨郡（屋久島）一三神がある。ミズガ上城は、これらの神々の総社であったと考えられる。多褹国におけるその祭祀方法は、天道祭りとも深く関与していて、火を焚いて祀ったのではなかろうか。

なお、国師僧は、国庁内に仏舎を設置し、最勝会など営んだが、最初はそれもミズガ上城で執行されたと考えられる。

⑥ 国祷会　種子島家の菩提寺の本源寺で行う行事に、国祷会というのがある。一月一一日の夕刻から一三日の早朝まで、徹夜の読経が行われ、島の平穏を祈念する。温座祈念ともいう。島津藩主の寺の場合ならともかく、一島の島主の行事になぜ「国」の文字を冠するか。この行事は、本土の法華宗の寺にはないものといわれ、全島の僧侶が集まり、激しい口調で読経する。島主家からも参加し、島主の刀を供え、三三灯を灯して祈念するもので、正月の初祈祷であるが、この行事は古くからあって、律宗時代より引き継ぐものだという。筆者には、この国祷会と国府津城のミズガ上城における国師僧の多褹国安泰を祈念する行事とが重なって見えてくるのである。国祷会は、律宗よりもさらに古い国分寺仏教さらにはもっと古い国府寺（仏舎）仏教に起源を持つ行事なのではないかと思う。

⑦ 河東氏　種子島氏始祖信基の曾孫信時の子孫で、時永の時代から島間河東家の系図は明らかである。その子時宣は慶長一七年に死去している。河東氏は上妻氏が種子島氏と交替し臣下になったので、代わって、河東氏がやってきて、島間を支配したのだという説があることは、前にも記した。だが、系図記事は右の状況だし、河東氏の宅地も三連廓の城内にはない。もし、館の主として赴任するならば当然、内城に居館すべきであろう。ところが、幕末、中島郷舎ができていた。それ以前は明らかでないが、河東家の館でないことは確かである。河東本家は、仮屋の外の北側の平坦地にあって、藩政時代以来の庭園・池水を誇っている。河東氏は明治初年まで島間の庄屋役など勤めていた。河東氏がなぜ居住しなかったか。それは、外来の者が住めない事情があったとしか思えない。その事情とは、「見ズガ上城」は禁断の聖地、仮屋は役所、内城は中島郷舎が存在したように公的集会地もしくは島主宿泊地として使用され、個人が住む地ではなかったと考えられる。こ

のことは、やはり、遠く古い国府津城の誇り高い伝統がそうさせたのではあるまいか。

河東不凡氏の父貞千代氏は、毎朝、神棚を拝んだあと、縁側に出て坐り、東天を向き、拍手してオテントーサマを拝んだという。この天道信仰は、ミズガ上城の遺構に直接結びつくものではなくて、先に各地の天道信仰の事例をあげたように、一事例として、しかも国府津城下の一般的事例として参考にすべきであろう。

河東氏は上妻氏に代わって島間にやってきたのではなく、上妻氏のいない（本来上妻氏とは無関係の）コーヅジョウの地に赴任し、業務を仮屋で執行したのである。ここに上妻城説とともに上妻氏・河東氏交替説が生まれ出たと思われる。

⑧ 天神信仰　古代、天神地祇を祀ったが、天神信仰は島間にもあった証拠に、国府津城の北東、塚川を一つへだてた小平山村落の上の台地状の畑に、「天神」、「北野天神」の字名が残っている。この地は、見晴らしのよい所で、雷神に由来する天神を祀るには格好の地である。ミズガ上城における祭祀は天道信仰を中心に総社を祀るとはいえ、天神地祇を祀るのは古代官僚の祭祀義務であるので、合わせて祀ったものと思われる。そしてのち、天神北野天神は、国庁の丑寅の方角で、見晴らしがよい小平山の上の台地に祀ることにしたのであろう。天神の下の塚川のほとりには、大光寺という律宗の寺があった。両者は近くに、上下の位置にあって、丑寅の方角から国庁を護りつつ、雷神を鎮め、あるいは人心を教導して、種子島を鎮護したのであった。なお、窪徳忠氏が指摘されているように（『中国文化と南島』）琉球の火の神信仰に道教の影響があるように、ミズガ上城における三つ石組み遺構の祭祀に道教の影響があることが考えられる。これは今後の課題である。

(3) 国府津城

以上、島間城すなわち、上妻城は第一に史料吟味上から、第二に城の実態、とくにミズガ上城の出土品から、第三にその呼称から、国府津城であると結論するものである。もっともこの三連廓の城は、西之表市の榕城や南九州の中世山城とよく似た形式であり、それだけにその起源を中世に求め、とくに倭寇はなやかなりしころに求めることも可能であろう。しかし私はたとえ中世に関連が深い城であってもその原形はもっと遡り、古代に求めることができると思っている。三連廓のうち内城はその形態などから見て比較的に新しくても他の二廓は相当古い起源をもつと考える。つまり、国府津城の系統をふむ城であると思うのである。

(1) 国府津城と種子島氏　国府津城と上妻氏の関係は認められないが、種子島氏は上妻氏に対して一貫して全幅の信頼をおいていたことは、『種子島家譜』その他の文献が立証する。島主が野間伏之前を通過するときは、上妻氏勧請の古房蔵王権現を伏し拝んだという。『二十人家伝記』によると、島主は島間村や住吉村で越年する習わしがあったらしく、そのときは近臣二十人衆がお供して越年した。あとで述べるが、住吉にも仮屋はあったので、島主はそこに滞在した。島間では当然、国府津城に宿泊したであろう。一般に島内各地では島主は仮屋に泊まるのであるが、島間の場合は仮屋と内城と両方あるので、仮屋は政務執行所とし、内城を居館としたであろう。島主の別荘居館であったので、庄屋の河東氏といえども内城に居住することはできず、河東本家は仮屋の外北隣に構え、分家はその隣りの通称ヒキヂ字（築城時の引地）の所などに居住させたのである。

ところで、島主は、なぜ、島間・住吉で越年する習いがあったのか。これについては住吉の場合、上妻氏拝領地であったので、その

縁によるとも考えられるが、島間はなぜか。これは新参者の肥後氏系島主が多禰国の中心地国府津城に一泊し、新年を迎えることによって、王朝の正統な支配資格を一身に獲得する儀礼行為であったと考えられる。王朝と種子島氏を仲介する存在が上妻氏である。もともと筑後国司系の上妻氏は、南九州・薩南諸島一帯を実力で支配しつつあった肥後氏系島主にとっては、配下に組み入れつつも敬意を払わざるを得ない存在であったといえよう。いっぽう、上妻氏は常にナンバー2の地位を保つことにおいて安泰を得るという賢い家筋であり、かくて、その子孫は全島に繁栄したのである。

種子島氏の島間村下向の意義は右に述べたとおりであるが、その儀礼行為の中心として、元朝の島間岬からの屋久島宮之浦岳遥拝があったと考えられる。中・近世初期ころにおける島主のこの慣行が、益救神社文書の島間岬より政庁官人遥拝云々の記録となったものであろう。しかし、古代政庁官人と中・近世初期島主の姿が重なることは、もし島主がこれを知っていたならば本望であり、島間越年の目的が達成されたことを喜んだであろう。住吉村越年の目的もやはり同じで、島間村に行けない場合、住吉岬あたりから屋久島を遥拝したのではなかったか。そのために住吉越年をしたのであろう。

(2) 立地と営城　図2に見るように、国府津城は高い土塁壁を持つ方形の廓が東西に三連並び、それぞれ機能分化している。そして断面図にみるように、東高西低の斜面地を利用し、土を掘り、ホリキリ溝を造り、その土と内側の土でタカボリ（土塁）を築いたものである。

三連廓を包み込む周辺地全体が外城であり、南北には深い谷が東西に刻まれ、天然の要害となっている。内城の北隣のトノノカワをはじめたくさんの泉が湧出し、水には困らない地である。山腹の標高七〇～一〇〇メートルくらいの地に立脚した山城的平城で、防備に心を配った造営である。不凡氏によると、もとは仮屋から北隣のガロー（伽藍）山に通ずる地下間道があったという。ガロー山の先には図1に見るように、二条の堀切り跡がある。これも防備用であろう。ミズガ上城から仮屋へ、仮屋から内城への北側の道路は三つ巴状に交叉していた。これは魔祓いの呪術と防敵の趣旨であろう。また北陸の道は、深堀りになっていて、しかも道幅が狭く、馬に荷を負わせるとやっと通れたという。これも防敵の用意であろう。こう見ると、この城はまず軍事目的に造られていることが分かる。それは攻撃ではなくて防禦のためである。

国府津城の機能の一つを今述べたが、もう一つの機能は、津口の監視であるのはいうまでもない。国府津城から細道が番屋峰と火合ノ峰に通じていたことは先にも記した。第三の機能は政務を執ることである。三連廓のうち高地に位置するミズガ上城は先に検討したように祭祀を営む場所で、聖地。次の仮屋は政庁で、官人の執務場所。仮屋の南半分が一段高いのは、ここに政庁があった印ではないかと思う。藩政時代の仮屋の建物は北半分の一段低い地にあった。内城は官人の居館。〇・四ヘクタールほどの内城には、現在一軒あるが、国司・国師僧・博士・医師など、五家族くらいは居住可能であったと思う。仮屋に番役として住む者もあったろう。その他は、外城に居住していたにちがいない。ただし、内城は、土塁上の大木などがミズガ上城や仮屋に比し、小さいことやホリなどの形などから、前二廓よりも後からできたことも考えられる。犬之馬場という名称は鎌倉時代の犬追物にちなむ。ところで、『続日本紀』に「多禰嶋印一面を給う」とあるが、これが発見されると国府論争は飛躍する。国府赤尾木移転説をとると、島間にあることは考えられないが、それ

でも、紛失、何らかの理由により、島間で見つかる可能性もないわけではない。その場所は仮屋がもっとも蓋然性が高い。

全国の国府は、条理性施行の水田の近くの低い台地に多い。しかし種子島では、当時の島内諸豪族や南島各地の夷族の服属状況を考えると、どうしても防備を考えないわけにはいかない。また、朝廷としては、唐に対する防衛上、南島の警備をおろそかにするわけにはいかない。ここに、島間国府津城のような周辺の地形を巧みに生かした城が津口からやや離れた所に出現したのだと思われる。国府津城は、津城であるが、当時、ほかに国府はなく、この軍衙的・居館的津城が多褹国府であったと考える。『続日本紀』に「元明天皇元年（七一五）、蝦夷および南嶋七十七人に位を授く」とあるが、八世紀初頭、朝廷のこの政策を考えるならば、東北の多賀柵のような軍衙的・居館的築城方針が貫かれ、それが地形の狭い種子島にあっては、島間国府津城のような形態として実現したと考えられる。

(3) 築城年代と背景　多褹国の出発点の七〇二年から七一四年の多褹嶋印を給うまでの一二年間がもっとも基礎固めの時期で、国府津城の構想と着工はこのころに行われたと思われる。七三三年の多褹国内の大量の授位はただごとではなく、島内行政のエポックを画するもので、背景に考えられることは、第一に薩隅にさきがけての班田制の実施であり、もう一つは国府津城の完成である。

もし、三連廓の国府津城を同時に造ったとすると、すべて人力で深さ一〇メートルもある空掘や高掘をめぐらして築くには、相当な人数を必要とする。たとえ、内城を除くミズガ上城、仮屋だけを築城したとしても、当時の人口がいくらか分からないが、一六八四年に八一〇〇人いたことから推して、多くみても三〇〇〇人くらいはいたであろうか。このうちから壮丁が徴用されて築城するとなると、一人当たりかなりな日数の労働と年数を必要としよう。したがって、この築城は何カ年かにわたり行われたであろう。それは、西之・下中、おそらく茎永も含めての条理制施行の工事人夫と前後のつながりがあったにちがいない。多褹国の津口をしっかり押さえた上で現地に工事事務所を設けて指導したであろう。こうした点から、条理制施行と築城の両方に巧みに人民を振り分けて完成を急いだであろう。条理制水田と築城地があまり遠くなく、長谷野を介して二、三里の近距離であることは労働配置に有利である。もっとも、七〇二年の薩摩・多褹が朝廷の命に逆らった一件は、六二九年の田部連の派遣以来の班田制実施への反抗と見なされるから、開田の工事はその反抗鎮圧後も続けられていたであろう。したがって、七三三年の大量授位は条理完成、築城完成の双方の論功行賞であったという見方ができ、このときをもって、多褹国は安定し、完全に統轄できたといえよう。

(二) 多褹国分寺

多褹国分寺は、建立の詔以前の国府寺（仏舎）と詔以後の国分寺に分けてみる必要がある。前者は七〇二年ころから七四一年ころまで、後者は七四一年ころから正式には八二四年の多褹国停止まで。しかし、嶋分寺は八五五年以降までも存続した。

(1) 国府寺（仏舎）

国府津城内にあったとすれば前述のごとくミズガ上城しか考えられない。そこはまた国師が司祭する総社であり、天道祭地でもあった。

(2) 国分寺

国分寺・国分尼寺の詔がくだり、仏舎は国庁から分離し、付近の好所を選び、国分寺として建立された。では、国分寺はいったいど

こにあったか。

第一に考えられるのは、ミズガ上城の東隣、現在の豊受神社、霧島神社、向方公民館のある地すなわち藩政時代法華宗の本妙寺があった桜園の地である。『海中島記』（元禄二年）によると、本妙寺は、「板葺社壇（一間四面）、拝殿（一一間四面）、仏祖一堂（五間四面）、客殿（四間、三間之尺）」、茅葺庫裏（三間二間三尺）とあって、一反五畝歩くらいの地に五棟建っていた。この地は、七四一年の詔にあるような、造塔の寺は国華であるから、必ず好所を選ぶべきこと、という条件にもかなっている。仰ぎ見るような地はここをおいて他にはない。

しかし、いずれにしても多褹国分寺の伝統を継承していると思われる律宗寺の大光寺（字「大広」）はここにはなく、国庁から約一キロ丑寅の方角の低平地にある。国分寺の系統をひく寺に「大光寺」の名称がよくあるが、その字名も「大広」の地にあった大光寺は島間国府津および島間国分寺設置説の一つの有力な根拠である。桜園に国分寺があったとすれば、その時期は別問題としてもなぜ谷間状の低平地に移ったか。あるいは最初から字大広に国分寺を造ったか。いずれにしても、最終的に大広に設置したと思われる理由は、第一に島の強い台風を避けるためであろう。第二に封戸として小平山農民を与えたのではないか。小平山の字名には「開」の文字がいくつも見えるが、耕地は直接には近世の開墾地としても、村落自体はもともと律令制村落として開かれた所ではないか。第三に、大広の地は水利の便がよい。第四に、実はこれが第一の理由ともいえるが、丑寅の方向から国庁を守護する地であること。第五に人家から適当に離れていて、清流があり、四反歩の平地があり、清浄な地域であるということ。こうした理由から、(イ)桜園の過程をへて大広に国分寺を造ったか、(ロ)桜園をへずに最初から大広に建立したか、(ハ)桜園だけに終始し、大広に大光寺は嶋分寺廃止後の律寺か、などが考えられる。これらを考える前に現地を調べてみよう。

過日、河東不凡氏ならびに老人会のかたがたの案内で「大広」字に行ってみた。国府津城から丑寅の方角一キロばかりの所で、屋久島・硫黄島などを望む見晴らしのよい台地を少しくだった塚川のほとりで、四反歩ばかりの田の真中に、寺跡という塚がある。もっとも田は休耕田で竹ヤブになってしまい、道は消えて、だいぶ苦労して降りた。塚は、一二メートル×八メートルの楕円形の盛土で高さ二メートル。玉シダや椿が生えている。二〇余メートル先を、川幅五メートルの塚川が流れている。長谷野の滝から落ちてくるきれいな谷川であるが、西岸の川岸が高く、水が溢れることはなく、田に冠水することもない。田は水ハケがよくて、付近はもとは居住に適した地であったことが分かる。寺の庭を田にしたのである。塚川の名の起こりはこの塚に由来すると思われ、経塚の類であろう。将来、発掘されれば律宗時代の謎がいくつか解けるであろう。

塚のまわりには礎石がいくつもころがっていて、大方、田の脇の石垣用に割った跡が見られ、五一×五六×一〇センチ、六五×七三×二二センチなどの大きさである。島内の民家の礎石と較べると大きいが、筆者が見た壱岐国分寺跡礎石と較べると厚みが足らない、礎石はたくさんあったようで、田の石垣に納まったのが多い。前期日高善三氏は、この石を割って田の土手を築こうとするとき、石の砕片が目に入って失明したといい、これは寺の祟りだと受け止めていた。

塚川を下ると海は近い。寺は普通は台地にあるのに、大光寺は、台地にはさまれた谷川の近くの低平地にある。この理由の第一は防風

のためである。層塔のごときものは、発見できなかったが、防風を意識している点や礎石から見て、島にしては相当大きな伽藍がいくつもあったと考えられる。種子島の律寺は、法華改宗の際、ほとんど旧名をもって旧地にひきつづいて存在したのに、大光寺はなぜ廃止し、新しく本妙寺を称したか。これは、大光寺の出自に問題がありそうで、①国府津城時代の仏教から律宗へとひきつづいた寺であったので、その関連を断ち切って宗旨をかえる以上、思い切って寺名、場所を変更したのかもしれない。②律宗は僧侶仏教であるが法華宗は大衆仏教だから、谷底から人里へ移ったということもあろう。③法華改宗時の往時は隆錯という律僧であるが、彼は桜園の地が右記(イ)または(ハ)であることを知っていて復帰し、人びとを納得させたのではなかったか。

これらのことと符牒を合わせるものに大蔵様の伝説がある。大蔵様は、神から仏へ改めなかったので捕らえられ、オグルメ屋敷の上の山に半分埋められ、そばの道を通る人ごとに竹鋸で首をひいて処刑された、と。その悲鳴の聞こえた範囲の家では盆に拝まねばならないといい、今もオグルメの前の大塚山の頂で祀っている。

この話にはいくつかの要点がある。一つは、神から仏への転換への抵抗、も一つは大塚山での祖霊祭。そこで、島間上方の村落について素描すると、まず向方（士族）と大久保（農民）の二村落からなり、三連廓の国府津城は向方にあるが、大塚山は大久保にある。大塚山の下には、大宮田・宮之前・三月田などの字名があり、御山、さらに宮松原神社があって、神に関係の深い農民集団であることが分かる。大久保村落の中にはオグルメ（芋車梅、機織り集団か）、カジバタケ（梶栽培農民）、クロイシザカ（黒曜石加工集団か）などの職能集団や農民が住んでいて、古代からの国庁付属集団の伝統があったのではないか。こうした村落であったので神から仏への転換に抵抗し、その代表者が殺され、その祖霊祭を子孫たちが催しているのではないか。大塚山は、古くは上方（大久保・向方）全体の祖霊を祀る祭場であったと思われる。国庁官人の霊もここで祀ったであろう。現在の上方の墓地は一二カ所もあって、一族ごとに場所を違えていて、大きな共同墓地はない。そのことは、昔はアキホウに埋葬し、特定の墓地はなかったという種子島各村落の伝承と一致する。こうした状況下にあって、全体の祖霊祭だけは年一回、大塚山で盛大に執行したのである。

隆錯は、こうした律令系農民に対し、改宗を納得させるために、国分寺ゆかりの桜園への移転を決意したと考えられる。大蔵様の抵抗は、律宗から法華宗への転換時期といわれるが、あるいは国分寺仏教から律宗への転換期とも考えられる。もう一つ、中世に侵入してきた武家勢力（その代表は上妻氏、続いて種子島氏）に対する朝廷勢力への抵抗があり得るが、いずれにしても、律令系農民の新支配勢力への抵抗と見られる。

農民たちの信仰の象徴として存在する宮松原神社についても触れる必要がある。上方の海岸近くの御山に昔から祀っているサンゴ礁塊を神体とする神がそれで、人の丈ほどもある大きな石塊が松林の中にムキ出しになり、周辺には参拝者が手向ける丸い小石が山積みになっている。この神は、住吉、熊毛入道が祀ったなどといい、非仏教的で、浜山にある点から海神的要素が強い。そばには、漁民の祀る恵比須神があるが、最近は宮松原の神よりそちらのほうが社殿もりっぱで、信仰が盛んである。宮松原神社から一〇〇メートルの所からは弥生後期の壺片が多数出土した。一帯は古くからの居住地であったわけだ。宮松原では四方祭りという行事が行われてきた。島

間中の一年間の邪霊を祓い、平穏であることを祈るのだという。こうした行事は島内でも島間だけに残存していて、国府津城時代の格調高い祭祀風潮を思わせずにはおかない。

海辺近くの御山で、サンゴ礁塊に象徴する海の神を祀る習いは、律令農民に編成されていくはるか以前からの土着の神祭りであったようだ。大久保村落農民たちの信仰の根は深く、このような神を基層にしつつ、国府津城時代の神祭り、さらには当時の仏教習俗が複合して、その精神風土を構成しているのである。大塚山における古い祖霊祭は、宮松原神社の四方祭りとともに精神風土の左右の極であり、大蔵様の伝説は、この風土と新来の武家的支配との葛藤の象徴である。

(3) 国分尼寺

島間に国分尼寺があったという史料も伝承もない。しかし、当時の中央の政策が意外に早く多褹国までも達していることを他の史料で見るとき、国分尼寺もやはり設置されたと考えられる。それでは、その場所はいったいどこか。

上方の内で寺にちなむ字名や地名は、堂ノ野・上ン寺・下ン寺・門ノ原・大塚・桜園・大広・ガローである。このうち、ガローは堂ノ野にあって、泉のそばの森であり、僧侶が名づけた伽藍神という山の神を祀ってある。ガローの位置は寺にふさわしい土地ではないので、尼寺の存在は否定せざるを得ない。ガローは島内各地に多い崇り神であるが、水田近くに多い点から開田と関連づけられるので、条理制のころ、森を祀ってそこを開田し、仏舎にちなみ伽藍の名称をつけて拝んだのかもしれない。上方でほかに尼寺として考えられるのは、第一に桜園の地。先に国分寺移転地として上げた所。もし、国分寺がはじめから大広の地に設定されたならば桜園であろう。しかし、そうでなかったら。桜園から谷川一つへだてた上ン寺の地がふさわしい。そこには山中に礎石らしいものもあるといい、今後の検討を要する。門ノ原は居住地域であり、大塚山はやはり祖霊祭場であろう。大塚山は官人の葬地であった可能性もある。下ン寺は、法華宗僧坊であろう。

三、結び

以上、歴史の問題を解くに当たって、民間伝承の資料を史料解釈の補助として使用し、民俗学的手法を加えて検討してみた。この種子島版邪馬臺国論争の決着は容易につくものではなく、今後も種々論ぜられるだろう。ここでは、平山氏をはじめ先学諸氏に導かれつつ、私が二〇数年来の調査と思考の中から到達した現段階の見解を示した。紙数の関係で、多褹国後半から停止後の期間における赤尾木移転について、また移転後の嶋府・嶋分寺の所在地の検討については触れ得なかった。これは後日書きたいと思っている。

(1) まとめ

多褹国府は、南種子町島間上方の向方村落に現存する上妻城（島間城）すなわち三連廓土塁積みの国府津城で、文字通り津城であった（港は島間港および稲子泊）。ミズガ上城、仮屋の二連廓はもっとも早く築城され、内城はややおくれて築城されたようである。前者は七〇二年から七三三年の間にでき上がったと考えられる。ミズガ上城は、国師の総社を祀る聖地であり、また国師僧の仏舎も置かれていた。それは掘立式舎屋であった。その地点は表層より一・五～一メートルほど下である。仮屋は国師政庁であった。内城は、居館である。仮屋・内城とも、当時の表層は一・五～一メートルほど下に埋没している。したがって今後発掘すると、礎石や柱穴、その他

の品物が出土すると思われる。七一四年、朝廷下賜の「多褹嶋印」は仮屋から出土する可能性があるが、内城も注意しなければならない。

他国の国府は条理制水田を控えた小高い台地上に一辺六町以下の正方形の区画で仕切られた国庁があり、その中に国衙があったが、水田が狭く、それに適した広い地も乏しい種子島では、いきなり国衙を設けたと考えられる。朝廷では東北と南島を夷狄視したので、東北の柵同様の感覚で対処した。したがって、南島防衙の先端の柵としての多褹国府の国衙は、軍衙としての態勢を整えた。すなわち、島間の国府津城は軍衙だった。

島間の地に軍衙を設けた理由は、唐に対する防衙上、南島夷狄への対処上、南島航海の目標および山岳信仰の対象である益救島重視上、坊津～宮之浦～島間の海上交通上、南種子の条理制水田管理上、長谷野台地のマキ経営上などがあげられる。

多褹国分寺は、七四一年から七五五年までの間に島間の桜園（本妙寺跡）に建立され、のち大広に移転したか、または最初から大広に大光寺として建立された。その理由は、桜園は人びとが仰ぎ見るによい地であり、大広は国府津城を丑寅の方角より鎮護し、かつ清浄、台風の心配のいらない地であり、伽藍建設地として最適。そして上の台地にはのち天神を祀った。

国分尼寺は、桜園（本妙寺跡）または上ン寺の地であったと思われる。多褹国分寺および国分尼寺は、経済力と地形上から他国と異なり、小規模であった。それは国府が軍衙のみの小規模なものであったのと同様であった。

(2) 嶋府・嶋分寺の移転

多褹国停止の前後の一時期、嶋府・嶋分寺は赤尾木へ移転した可能性が大きい。理由は、七三八年の島民得度僧の出現や七四二年擬郡司承認など、島民がしだいに政教に進出したが、以後一世紀の間にはこの傾向はさらに進展するとともに、島全体の開発と統合に関心を移行していったこと、次に七六〇～七七〇年の間の左遷国司たちは、本土をより目近に望む北部の地を注目したにちがいないこと、八〇七年の隠田記事は北部多褹の開発の進展を物語ること、南嶋の夷狄の心配の不要、薩摩・大隅の政情安定、大隅の発展に伴う国分～山川・根占、志布志・大泊航路が開発され、赤尾木・浦田・庄司浦・住吉と結合し、坊津～宮之浦～島間航路よりも便利であったこと、赤尾木周辺および後背地が比較的に広大であったことなどである。なお、種子島の民俗は、赤尾木のある北部よりも南部のそれが古い様相を示すが、それは民俗周圏論的に見ると、文化は北部から流入して南部へ伝播したということであり、古い時代においてもこのような状況であったことが考えられる。すなわち、古代においても文化の中心はやはり赤尾木（西之表）であったということだ。また、北端の大字を国上（くにがみ）ということも北部重視の傾向を読み取れる。

以上のような理由によって、多褹国府（嶋府）・国（嶋）分寺の赤尾木移転説を主張するのである。

赤尾木における嶋府・嶋分寺・尼寺についての位置はここに現段階での予想地を記しておくと、嶋府は本城（もとじょう）、嶋分寺は慈遠寺（お坊を含む）の地、尼寺は大会寺の地（屋久田）。これは平山武章氏、高重義好氏の西之表説と一致する。この移転後の赤尾木（西之表）国府・国分寺の論功は、別の機会に発表したい。

多褹国府および国分寺問題は、筆者にとっては永年の宿題であり、いつかは解決しなければならないと思い続けてきたが、ここにおいてやっと解決の入口に立った感じである。これから、移転先についてはもとより、その政治的・経済的背景なども解きほぐしていかな

ければならない。さらに、これは筆者の任ではないが、発掘によって層塔や礎石、多禰嶋印などを見つけ出して確実に証明しなければならない。

最後に、現地で各種の資料を見せてくださり、大そうお世話になった河東不凡氏をはじめ平山武章氏・上妻紀夫氏・高重義好氏に感謝申し上げる。

なお、先般、隼人研究会例会で発表された藤井重壽氏の見解は、河東不凡氏の現地資料に立脚しているとはいえ、古代史全体からの展望においてすぐれたものであり、筆者にとっては参考になる点が多かったことを記し、感謝申し上げたい。

本文に使用した史料は、原典ならびに池辺弥「南島古代史料集成」(『伝承文化』第二号、昭和三六年、東京)を参照した。

〔付記〕

本稿では、あらゆることがらから多禰国初期国衙を島間に求めたのであるが、その証拠は「大光寺」の存在であり、次に国府津城の遺構である。その後、国衙は西之表に移転し、やがて国も廃されて島府となった。そして、中世に至り、大浦口氏の代官として赴任した収税官の上妻氏は、南種子町東南部の山あいにひろがる茎永や下中・平山、西之などの南種子穀倉地帯を、その上方にある長谷野台地を経由することによって島間と一気に結ぶことが可能で、しかも海上交通に便がよいという理由で島間に再び目をつけ、島間上方の地を南部の根拠地として支配したことも考えられる。先に上妻氏の島間とのかかわりは全くないと否定したのであるが、そこに居住しなくてもその配下の支配のもとで、かつての国府津城が整備され、そして中世の三連廓の山城ができたということはあり得よう。そういうわけでその城廓を上妻城と呼んだということも考えられる。

本稿は「多禰国府・国分寺考」と題して『隼人族の生活と文化』(一九九三年、雄山閣出版)に掲載したものの再録である。本稿の内容についてはその後も考えつづけているので若干書き直したい部分もあるが、南種子町の民俗についてまとめた本書に収録したのは、南種子町民俗ならびに南種子町の歴史と民俗に関心を持つ方々に読んでもらいご批判していただくためである。なお、その後の筆者の考えおよび国衙(国庁)が西之表に移転したあとの多禰国府・国分寺の状況についての考えは「多禰国考――国府・国分寺・郡家・その他――」と題して角田文衛先生の『新修国分寺の研究』補遺編(一九九五年刊予定・京都市平安博物館内古代学協会)に書いたので関心のある方はぜひ参照していただきたい。

南種子町の昔話・伝説・世間話

――宮里重治さん・大脇彦次さん・日高スミエさんを訪ねて――

鹿児島大学教授　下野敏見

一、はじめに

南種子町は種子島昔話の宝庫で、これまでにもたくさんの方々の口伝の面白い昔話を記録し、『種子島の民話』Ⅰ・Ⅱ（未来社刊）や『種子島の昔話』Ⅰ（三弥井書店刊）で紹介してきたが、今回は、新しい昔話伝承者を紹介したいと思う。

それは、茎永仲之町にお住まいの宮里重治さん（明治三九年三月二八日生）と、西之野尻にお住まいの大脇彦次さん（明治三八年五月二五日生）、西之田代にお住まいの日高スミエさん（大正一〇年七月一〇日生）の三人である。

宮里重治さんは、父は姶良郡姶良町帖佐の生まれで、宮里吉蔵氏といった。祖父は宮里伝兵衛といい、ヤリの名人で西南戦争に参加した。重治氏の母は茎永の馬場家本家の生れだが、重治氏は吉蔵のあとをついで宮里重治といっている。氏の話のレパートリーは広く、チンチンドリの話（これは後日紹介する予定）や三人の軽業師にまつわる「地獄の三人」の話、千年狸などの話のほかに民俗全般にくわしく、貴重な人材である。昔話の多くは近所にいた岩坪四郎さん（大正年間に八〇歳ぐらいで亡くなった）や母の馬場サトさんから小学校の頃聞いたという。サトさんから聞いた話は「シンブーと師匠」であった。私は十数年前より何回も氏宅を訪れていろいろな話を聞いた。氏はある年は今は珍しい「サス」（刺し桿）を作ってくださった。

大脇彦次さんは民俗の中でも特に海のことにくわしい方。昔話や伝説、世間話もよく知っておられる。氏が語った話に、炭焼小五郎の昔話や相撲取りのこと、フカに食われた話、エベスの話、船おろしなどがある。氏の話は祖父の大脇彦志さんから聞いたもの中心に、近所の方の話や自分の体験談などが多い。大脇彦次さんのお宅で小机を囲みながら聞いたのは、昭和五九年の八月一九日のことで、その時は大林太良先生もいっしょであった。大林先生はその時ちょうど宝満神社の神稲の赤

米伝承の関係の調査に見えていた渡部忠世先生を中心とする調査団の一員として中種子町野間に旅宿されていた。自分も一行の一員に加えていただき、案内の役などを仰せつかり、大林先生といっしょに大脇さんの所に口頭伝承を中心とした民俗あれこれを聞きに行ったというワケであって、忘れられない一コマである。

日高スミエさんは、鉄砲伝来の門倉岬に近い田代にご主人の日高実雄さん（大正八年三月二〇日生）と住んでおられる。実雄さんは南種子町で組織されている「地名研究会」のメンバーであり、茎永の岩坪香さんたちと研究活動をされ、田代を中心とした資料をまとめて研究されている方。実は私は実雄さんに話を聞くべく田代に赴いたのであるが、そばにおられる奥さんのスミエさんが昔話の伝承者であるとわかって、奥さんの話を聞くことに努めたのであった。実雄さんは民俗全般にくわしい方で、あとで田代の案内などしていただいた。昔話の伝承は、昔は（昭和三〇年代までは）、種子島のあちこちの古老が知っていて、一村落に一、二名もしくは三、四名も伝承者がいたものであるが、スミエさんの話を聞いた昭和六四年頃は世代が一つ変ってしまって、なかなか見つからない状況になっていた。その意味で、スミエさんは右の二人と共に貴重な存在であるといえよう。

日高スミエさんの昔話は、短気は損気、人柱、息子、猿聟、蛇むかし、カラスとタカ、注連縄（しめなわ）の話、ヌレヨメジョウなど多彩である。スミエさんは、七人兄弟の長女であったが、幼い頃下中の真所に住んでいた羽生伝十郎（明治二五年四月生）は板の間にゴザを敷いて縄をなったり、ゾーリをつくりながら、昔話を話してくれたという。それはジロ（火代、いろり）の近くでもあった。聞く話は、「ウン、ソイジェ、チャー（又はウン、ソイカラ）」と相槌を打って聞くものであった。

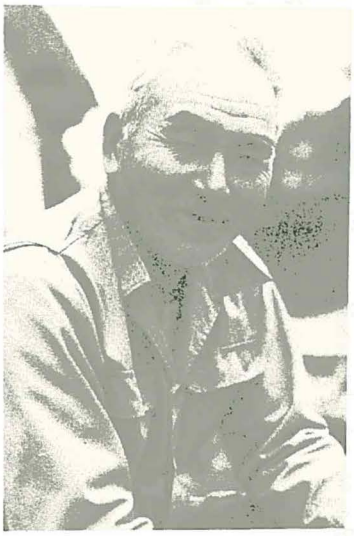
昔話の発端句は、「ナニーがムカシナー」といい、結末句は「ゲナゲナ」といって結ぶものであった。スミエさんの母は河内の人で、チヨといった。父の伝十郎の父は、即ちスミエさんの祖父は羽生藤之進といい、伝十郎が一三才の時、三八才で亡くなった人。祖母の名はマツ。スミエさんの昔話や口頭伝承一般はこの直系の父、母、祖父母に負うものが多いようである。

本稿収録の昔話の調査はすべて録音によるものであり、それを文字化したものであり、方言そのままに記してあるので、多少読みづらいかもしれない。忠実に原稿化したものである。中種子町、南種子町の方言は「して」というような場合、「しちぇ」となるのが一つの特徴である。

文中の「　」の中で話者にいろいろ質問しているのは下野である。日高スミエさんの場合、夫の実雄さんが発言した部分は、「実雄」さんと冒頭に記しておいた。何も記してないのは下野かスミエさんの発言である。

宮里重治さんの民話をきく学生たち。向うの眼鏡は山本譲司さん、右隣から老泉、得田、松岡、瀬戸口、児玉の皆さん。後向きは宮下春幸先生（昭和59年）

日高スミエさん（田代の自宅で。平成3年）



面白い話はにっこり笑って語る（宮里重治さん）

話の筋を描写しながら淡々と語る

少し悲しい話は沈んだ表情で語る

忘れかけた話を思い出しながら語る（左は下野）

宮里さんの奥さんにいろいろ聞く鹿大学生の児玉仁美さん

二、宮里重治昔話集（六話）

（一）、サマは三年みやまの奥に

あるところに、毎日猟に行って暮らしている人がおったそうじゃなあ。

年ごろになっちぇ、嫁をもろうたそうじゃ。もろうちぇも、昼は猟に行たちぇ、夜になると、また出ちぇ行くそうじゃ。バキーをもろうちぇからもなあ。毎晩、毎晩出ちぇ行くたてーや。

そいじぇまあ、不思議に思うちぇ、この男に嫁ぇ来ちぇから、一(ひと)ようさも家ぇ泊らんじぃ、夜も昼もやまぁ行くが、妙なことじゃ。どこに行くもんじゃろうか、と、ある晩、あとをつけちぇ、行たちぇみたたてーや。

そうしたとこいが、ずうっと山奥ぃ行たちぇ、二、三里も行たところに、かやぶきの家があったそうじゃなあ。嫁が、そうっとのぞいちぇ見たとこいが、家の中に、お母さんときれいな娘がおったちゅうわ。やっぱり、と思うちぇ、じぃっと、聞いていたところが、その山の娘がなあ、（あんたちゅうことを、わあのちゅうから種子島じゃあなぁ）

「わがと、おらんばじゃ、と。じゃがしかし、どうせぇば、家ぇ、やしのうちぇる女子(おなご)を戻しがなんどうか、」

と、こういうとこいじぇ。まあそら、男がいうにはなあ。

「よか、と。あの女子(おなご)は、嫁ぇくる時、だあじぃたこうしちぇる三味線の持っちぇ来ちぇる、と。だれにも見せもせん、貸しもせんじぃ、だいじにしちぇる、と。それを借りぃ行たちぇこい、と。もし、貸さん、ちゅうた時は、嫁はもどすから」

と、こういうちぇ、山の娘をば、自分の家ぇ、その女の所に、遊びにやるとこいじゃてー。

そうっしぇまあ、山の娘がいうに、

「こうっしぇその、三味線の借りぃ来たが、かあちぇくりゃでけんじゃろうか。」

と。ところが、その女は、

「何の、えんりょはいらんから、どうぞ、持っちぇ行けばよかが」

となあ、気やすうに、貸ぁちぇくれたと。そいから、山奥に帰ったとこいが、

「何ちゅうちぇ、いうたか」と。

「早う持っちぇ行っこっちゃ、」というちぇ、心やすうに、なんのいやな顔もせんじぃ貸ぁちぇくれた、と、こういうたそうじゃ。

そうしたら、こんだあ、琴を持っちぇる、と、なあ。よか琴をばや。そりょうば、借りちぇこんか、ちゅうちぇ。

「貸すろうかなあ」というとこいじゃ。じゃばっちぇ、一応、行たちぇ見ちぇ、

「貸さん」ちゅうた時にゃあ、戻すから、とその男が、いうとこいじぇ。またあくる日、行たちぇ、こんどはその、

「たいへんよか琴を持っちぇるちゅうじゃあなっか。貸ぁちぇくれんか」

と山の娘が言うとこいがなあ。

「持っちぇる。何のことはなか、貸すから」

というちぇ、心やすう、また貸ぁちぇくれたとそら。また山ぁ行たちぇから、こがんこがんいうた、と。何の悪かつらつきもせんじぃ貸あちぇくれた、というちぇ。

「妙じゃなあ」

というちぇ。こんだあその、

「きれいな花を持っちぇる。そりょうもろうちぇこんか。くれんちゅうた時ゃあ、こんどこそ戻すから」

というちぇ、またそら、次の日、山の女子が行たたてーや。そうしたとこいが、その女子がいうたとこいがなあ、歌よみょうしたてーや。

〽三味も貸す貸す琴貸した上に、
その上とのじょも貸ぁた、
なんの惜しかろうか白菊の花

というちぇ、その、白菊の花じゃったてーそら。そしちぇ、一番よかとこをポキと折ちぇくれたてーや、そらなあ。きれいな花うなあ。

そいじぇその花うもろうちぇ、また山さなぁ、山の女子が戻っちぇ、男(おとけ)ぇいうちぇ、

「もう、なんのいやなつらつきもせんじぃ、心安う、早う持っちぇ行っこっちゃ」

ちゅうちぇ、一番よか白菊の花(はの)うくれたと。

男は、

「ええ、妙じゃなあ、おいが、夜も昼も山ぁばっかり行たちぇっちぇも、三味線も、大事な琴も貸すし、花も心安うくれた、と。どうっしぇも、あの女子ぁ、魔男を持っちぇるに違いなか、と。嫁(よめ)うとっちぇから、一(ひと)ようさも泊らんじぃ、山ぁばっかり、夜も昼も行くちゅうに、ひとつも腹もたてじぃ、妙なことじゃ。どうっしぇも魔男を持っちぇっと。こんだあその男が、ぬしが行たちぇ、とりおさえちぇ、そっしぇそのバキーを、もでーちぇ（戻して）くいからというちぇ、来たたてー。

北風の吹く、寒か晩じゃったたてーや。風がビュービュー吹く、なあ。

そいから、家ぇもどっちぇ、ようっと壁ぇ耳ょうば傾けちぇ、聞いちぇっちぇ。いっときしちぇったところが、戸がザーッと開(あ)ぁたとや。そいから男が、

「そら、男が、いまきたとこじゃけい」

と、こう思うちぇ、ようっとそらまあ、見ちぇったとや。そうしたとこいが、バキーが山奥の方を眺めちぇなあ、

〽わしがとのじょは　深山(みやま)の奥に
　さぞや寒かろ　つめたかんろう

ちゅうちぇなあ、歌(うと)うたとそら。そいから、戸をガツッとつめちぇ、寝床(ねどけ)ぇ入るとき、

〽わしがとのじょは深山(みやま)の奥に三年
　わたしゃこの座にただ一人

と歌うちぇ、寝たとそら。えー、これだけまあ、こがんしぇ山ぁばかり通うちぇも、こがあな人間の出来(でけ)た女子が、おるもんじゃける。こら日本一じゃ、と。もう山ぁ行くもんじゃあなかと、こういうとこいじゃてー。

そいから、庭の戸口(とぐち)ょう、あくるあくる、

〽もう行かんよ深山(みやま)の奥にゃ
　われにましたる妻はなか

と歌うちぇ入っちぇきたとやそら。そいからまあ、仲良う暮ぁちぇじゃったちゅう話じゃ。

そいからまあ、男は、よせー（外に）そのどがあなきれいな、よか女子を持っちぇっちぇも、立派な心を持っちぇ、その家ぇしっかりおれば、必ずあとさなぁは戻っちぇくいもんじゃちゅう話やなあ。

そいじぇ、そいから世間の人は、
〽二度と行くなよ深山(みやま)の奥にゃ
　もとにましたる花はなか
ちゅうちぇ。げなげな。

（宮里さん）
「歌がへたじゃもんじゃからなあ、こら歌あはならんとやなあ。種子島の草切り節ゃあなあ。聞いたことがあんどうが、お前も。草きり節ゃあ、知っちょんどおが」
〽三味線も貸す貸す、琴(こと)貸した上に
　その上、とのじょも貸した
　何が惜しかろ白菊花が。

（宮里さんが歌ってくれた）

（二）嫁とり問答

むかし、あるところに、きれいなよかよめじょうがおったとやなあそら。
そいじぇ、だれもその女子が欲しゅうっしぇなあ。通うちぇ行くこたぁ行くばっちぇ、その女子が出てこんもんじゃから、外から戸をトントントン、とたたくわけじゃ。
そうすると、内からその女子が、トントントンとたたいちぇ、
「鳴る戸の外に立つ人は」
ちゅうちぇ、いうばっちぇ、その返答がでけんじぃ、戻るわけじゃとやなあ。
そいじぇ、その女子をば、えも、もらわんわけや。また、ある人が、
「こんだぁわれ、おいが行たちぇ、どうっしぇも、もらわんばじゃ、よか女子じゃ」
と、行たちぇ、また戸をたたくばっちぇ、なんとも返答がでけんじぃおったいば、

昔は、馬がおったからそら。その馬の水をいっかけられちぇ、なあそら。内から。

「困ったもんじゃ」

と思うちぇ、こんだあ師匠さんのとこれぇ行たちぇ、

「どうっしぇもまあ、何とかよか返答はなかろうか」

と聞きぃ行たとや。

「ええ、そら、みやすかことじゃからや、トントンと鳴る戸の外に立つ人は、ちゅうた時ゃあ、思い思いにかどに立て、と、こういえばよかが」

と教えられちぇ。こんど行た時ゃあ、忘れちぇなあそら、そいじぇもう、

「師匠さん、あんまりよかよめじょうじゃもんじゃから、胸がタンタンしちぇ、もう、何ちゅうたか忘れちぇきた」と。

「んー、バカもおいもんじゃなあ、わあも忘れちぇ」

というちぇ、そいからこんだぁ、こよみぃ書ぁちぇくれたとやなあそら。

「どうっしぇも、わがぁにゃあ、書ぁちぇくれんばいけんけらぁ」

ちゅうちぇ。また次の晩に行たちぇ、外から庭ン戸をば、トントンとたたぁたとや。ツンと考え出しがならんじぃ、その書ぁたものを見たところが、あわてちょいもんじゃから、書ぁたとを見らんじぃ、そのこよみを見ちぇ、ね、うし、とら、う、たつ、み、うま、ひつじ、さる、とり、いぬ、い、とこういうたとや。

「んー、馬鹿者」

ちゅうちぇ、また馬ン水をいっかけられちぇなあ。いや、まあ、とんと困ったもんじゃ、どうせぇばよかろうか、ちゅうちぇ、そいから、又、たいてー、師匠さんがちえをくれちぇ。また、あくる晩、行たちぇ、また戸をたたーちぇ。そうしたいば、

「トントンと鳴る戸の外に立つ人は」

ちゅうたから、

「思い思いにかどに立つ」

ちゅうたところが、女子が出て来ちぇや、
「え、こらよか、わざいはばしか男じゃけらあ」
と、まあ、話ょうしちぇ、話が進うじぇ、まあ、夫婦になっちぇ、よかくらしょうしたという話よ。

（三）増田周ケサじょうの話

明治以前はそら、百姓はみょうじがなかわけじゃからなあ。ただ名前ばかりじゃから。明治五年になっちぇから、みょうじをもろうちぇるわけじゃからなあ。そいじぇまあ、
増田の仲之町ちゅうとこいじぇ、周之丞（しゅうのじょう）ちゅう人の娘ぇ、ケサじょうちゅう人が、おったわけよなあ。そいじゃから、周ケサじょうというたわけよなあ。
仲之町ちゅう部落におったと。となりの村は向井町ちゅうとこじゃからなあ。そいじぇ、同じ増田じぇも、向井町の人は裕福じゃったとや。どういうわけかというと、向井町ちゅうところは、牧場は持っちぇるし、海岸が近っから、塩炊（た）きをしちぇ、生活がよかったわけよなあ。
仲ン町はそら、牧場はなし、塩炊きがなしまあ、貧しかったちゅうわけやなあ。そこじぇ、村の役人にいろいろと願いをたいてーすぃばっちぇ、全くそいが通うじぇんじぃなあ。つうじぇんもんじゃから、周ケサじょうちゅう人が十六才の時なあ、弟の休七（きゅうしち）ちゅう人と種子島様あ、殿様んとこれぇ、おねがいに行たわけじゃとや。まあ、
「となりの村はこうこうじぇ、大へんくらしがよかが、仲之町は、牧場もなければ塩炊くところもなかと。それぇ、凶年が来ちぇ、米はでけんし、とんと困っちぇると。じゃから、牧場を分譲しちぇくれんか」
ちゅうちぇ願いをしたたてー。そうしたとこいが、種子島様がそら、ずっと調べがあっちぇ、実状を見ちぇ、
「なるほど」というちぇその、牧場を分譲しちぇもろうたわけ。そいじぇも、どうっしぇも生活がようならんわけじぇ、こんどはその、その時代、あのハジの木を植えちぇ、ハジの実じぇローソクを作っちぇなあ。
ローソクは、ハジの実を製造しちぇ作っとじゃから。そいじぇ、ハジをしょうれいしちぇ、そらもう、ハジの実は大へんきびしかわけよなあそら。ヤミがでけんわけ。
そいじぇそら、こんど検査ぁ来たわけよ。野間から役人が来ちぇ。野間がそら一番、中種子じゃあよかとこいじゃからな

あ。その役人が、どうっしぇもその周ケサじょうの歌をば聞かんばじゃからちゅうちぇ。

なかなかその周ケサちゅうは、美人じぇもあるし、声もよし、歌もよし、三味線もひくし、愛きょうもよし、そのいえば十二方ちゅうふうな女子(おなご)じゃったとやなあ。

きれいな女子じぇ、歌が上手じゃったとや。そいじぇ、歌うば聞かんばじゃからちゅうちぇ、野間から来ちぇる役人が、行たちぇ見たたてーや。そうしたとこいが、周ケサの家が忌中じゃったてーやそら。

おじきが死んだかどうかじぇ、そいじぇもう、どうっしぇもまあ、こんどだけは、のがあちぇくれぇと、こがんこがんじゃからというばっちぇそら。そいからもう、

「行きゃあならんから」

というばっちぇよ、なかなかその殿様のいう事あ、何じぇも聞かんばの世の中じゃろうがなあ。とんと困っちぇや。

こんだあその、母がなあ、お母さんがよ、

「まあ行たちぇ、用をすまぁちぇこい」

というちぇ、なぐさめちぇやったけらぁなあ。

そいじぇ、歌が上手じゃから、歌を歌わせたとやなあ。そうしたいば、

〽増田がらかよ　湯水(ゆみず)がよかよ
　焼酎は飲まずに　歌おどり
　大くそひっつぼ　ハぜげんさ

と、はやぁちぇ歌うたとや、そらなあ。

大くそひっつぼハぜげんさ、というたと。そうしたところがもう、その野間からきた役人がそらもう、

「こら、大へんなこっちゃ」

ともう、青うなり、黄うなりしちぇ、もう、立っちぇもいちぇもおらんようなとこいじゃったとや、なあそら。

そいじぇ、二番のところを歌うとき、

「いま、ケサじょう、大くそひっつぼ、ハぜげんさと囃(はやし)を歌うたが、わあの一人歌うたとか。」

「いや、みんなここの人ぁ歌うとじゃ、囃ょうすっとじゃ」と。

「そら、どういうことか」と。なあ。

ローソクのカスの事をばクソというから、今年ぁ、ハジの実が豊作じぇ、ローソクのクソが大へんたまった、と。そいじぇ、ひっつぼというのは、ローソクのカスを入れた壺をひっつぼというとじゃと、いうたとこいが、こんどは、うっちぇ、かわっちぇ、

「そういうことじゃったか。そらもう、わざいな、よかことじゃったける。こら悪かった」

というちぇ。ほんとうは、ケサじょうは皮肉をいうたとじゃばっちぇ、そら、びんたがよか女子じゃもんじゃから、とんちがきぃちぇ、そういうふうな解説をしたわけじゃとや。

また、とにかく増田は税金が高(た)っかとこじゃったとやなあ。

〽増田まえの浦はこくの高いところ、
　前のせまちがせばまれば

という歌を、又そこじぇ歌うちぇ、税金の安うしちぇもろうたわけじゃとや。

そいじぇ、ローソクのクソとカスとじぇ、いえば、悪口をいうちぇも、税金の下げちぇもろうたちゅうこてーなったわけや。ほんとうはそら、殿様は知らんわけやなあ。そいじぇ、そいから後は、周ケサじょうは、大へん頭のよか女子じぇ、とんちのきく女子じぇ、そのローソクのクソーば、こんど周ケサじょうにしちぇ歌うたとよ。

〽増田周ケサジョウは
　ひったくそ見やれない
　まわりゃ六尺、ア、大きなものよ、
　七まがり

そいじぇ種子島じゃあ、欲の深か人をば、ひっつぼちゅうたり、かすくらあちゅうちぇいうわけよなあ。かすのごたらあ、ちゅう、ローソクのすめたカスのことやなあ。ちゅう言葉が残っちぇるわけや。そいが増田周ケサじょうのいうた話よ。

（この話は母（馬場サト）から聞いた）

（四）正直は一生の宝

むかし、あるところに大へん貧乏な男がおったとやなぁ。貧乏者が。もう、今日食う物も、働かんばなか男がおったとや。佐吉ちゅう名の男じゃったちゅう。

その佐吉の兄は、村一番の長者じゃったとや。長者じゃばっちぇ、欲の深か男じゃっちぇ、その、母は病気じぇ三年も寝床ぇ、寝ちぇるばっちぇや、長男の分限者ぅ、全くみらんじぃ、その佐吉が、今日も今日もかせいじぇまあ、生活をばしちぇきょうったとや。

そいから、年のくれになっちぇ、母がそら寝床からや、

「佐吉、正月が来る、と。じゃからまあ、正月だけはや、白か飯ょうば炊ぁちぇ、神様ぁもあげちぇ、そっしぇ、年ょうとらんばじゃから、兄じょうがとこれぇ、まあ、借りぃ行かんか、と。米ょう二合、味噌ぅごき一杯ぁ、借りぃ行かんか」と。

「どうじゃろうかなぁ、貸すじゃろうか、貸さんじゃろうか」

行こうごたぁなかばっちぇ、母がめっそう行たちぇこいちゅうもんじゃから、行たたてー。

兄ょうじゃ人ぁそら、下男下女ゃぁ使うちぇそらもう、何人ちゅうちぇ使うちぇもう、きれいにしちぇったちゅうからなあ。

そいじぇ、兄じょうがとこれぇ行たちぇ、坐っちぇ、兄じょうはそらもう、金の座布団の二重ぇ置ぇちぇ、長火鉢ぃそらもう、おじぃも、ばきぃも前ぇ坐っちぇじゃったちゅうから。佐吉ゃぁもう、もじもじしちぇ、えもいいださんとや。そいじぇ、兄じょうが、

「佐吉、わごう何ょうしかぁ来たか」

ちゅうちぇ、いうたとや。

「母が、正月ぃまあ、神様ぁもまあ、白か飯ょう炊ぁちぇ、あげちぇ、正月だけはまあ、白か飯じぇ、としょうとらんばじゃから、ぜひまあ、米ょう二ン合、味噌ぅごき一杯ぁ貸ぁちぇくれんかというちぇ、来た」

と、いうたところが、

「んー、佐吉、わぁの働きが足らんからじゃ。貸すもなぁなか。そがぁなその、から不精者ぇにゃあ」

というちぇ。

佐吉ゃあそら、働くたばっちぇなあ。田も畠も、ぬしぃにゃぁくれちぇらんもんじゃから、とんと困っちぇっとじゃてー。
そいから貸さんもんじゃから、家さなぁ戻っちぇ、いろりのはたぁ坐っちぇおったとよ。
昔ゃあ、太か火ぃしげちゅうちぇ、太かとをくべちょるもんじゃったからなあ。そりょう、つくじりつくじり、こうしちぇいもんじゃから、よこざから、母が、
「佐吉、どうじゃったかい」
ちゅえば、ようっとしちぇ、最初ぁ、何も、え もいわんじぃ、いっときしちぇから、こがんこがん兄じょうはいうた、と。
「えー、めずらしいもんじゃ」となあ。同じ子じゃが、あしこ、物お持っちぇっちぇも母を、ひとつもみらんじぃ、まあ、何もくれんとか、と。佐吉がこんだけ難儀をしちぇっちぇも知らんとか。困った男じゃ、と。いうちぇ、そいじぇそら、
「そいじゃあ仕様がなっから、佐吉よ、明日は、焚き物の拾うちぇ、町ぃ売りぃ行たちぇ、そいじぇ、米と味噌を買うちぇ、そいじぇ年ょうとろうから」
というちぇ、あくる日は、人の馬ぅ貸っちぇ山ぁ、木を拾ぁに行たちぇなあ。
(種子島じゃあ、あの、かたひらぁ二束ずつ四束おおせたとを、四把荷ちゅうからなあ) 四把、拾うちぇ負うせちぇ、町じゅう売っちぇあるくたてーや。三十日じゃったちゅうからそら。そうしたとこいが、もう、
「正月準備ゃあしたから、もういらん」
ちゅうちぇ、どけぇ行たちぇも、買うちぇくるる人ぁおらんとや。
「情なかもんじゃなあ。こんだけしちぇも買うちぇくるる人ぁ、おらんもんじゃける、世の中ちゅうは、こがんもんかなぁ」
ちゅうちぇ、とんとあきれちぇ、こんどまあ家さなあ戻りぃうったったとや。
そうしたいば、大きな川があっちぇ、橋がかかっちぇったとや。もう、腹がきりわぁちぇたまらんから、焚き物をば馬から下れぇちぇ、川ン中さなぁ投ンこうじぇやったとやそら、そいから戻っちぇきちぇ、
「佐吉、どうじゃったか」と。
「おら、一生懸命はまっちぇ、よか木を拾うちぇ売っちぇ歩くばっちぇ、もう正月の準備ゃぁしちぇる。いらん、ちゅうちぇ、どけぇ行たちぇも買うちぇくるる人ぁおらんじぃ、腹がきりわくもんじゃから、残念じぇならんじぃ、あの川のらん

かんばしからや、投ンこうじぇきた」
ちゅうたいば、
「んー、佐吉、わあも馬鹿じゃなあ。ほんとうにまあ、馬のお礼なっとか、いわんばじゃったてー、まあ」
というちぇ、そいから、からいものおかゆじぇ、としょうとっちぇ、じゃったとやそら。
まあ、一日も休むことがでけんからなあ、食い物がなっから。またあくる日、働っこったてー、裏の畠ぇおっちぇなあ。
そうしたところが、きれいーな女子が二人来ちぇなあ、
「佐吉さんの家ゃあこっか」というちぇ。
「そうじゃ」というちぇ。
そいじぇ行たちぇ見たところが、縫う針もなければ糸もなし、稲わらじぇ破れたところをくぶっちぇる着物を着ちぇ、働っこったとやそら、かまようしちぇ、今の世の中と違うからや、昔ゃあなあ。そうしたとこいが、
「佐吉さん、おまやぁ、その、去年な、正月ぃその、水神様に焚き物をくれたける。水神の神様が大へん喜びぃなっちぇ、そいじぇその、ほうびをくるっからつれちぇ来い、というちぇ来たもんじゃ、」と。
「いや、おら、こがあなかまえじぇ行きゃあならん、と。しょせん、そがあな神様のとこれぇ行きゃあならん」と。
「いや、水神の神様ぅなあよ、正月ぃその焚き物をくれた人ぁ、佐吉が一人じゃ、と。なかなか良か男じゃ、と。正直な男じゃ。じゃから、どうっしぇもほうびょうくれんばじゃから、」ちゅうちぇ。
「行きゃあならん」
ちゅうちぇ、たいてー。そうしたところが、その女子の人がいうところが、そいじゃあ、ぬしどんが着物を貸すからや、行こうというちぇ、だまかぁちぇ、つれちぇ行くとこれぇなっちぇ、そのみちみち、いうとこいが、
「佐吉さん、おまやあその、水神様が、焚物のほうびに、そのお礼によ、持っちぇるものをば二品くるいちゅうちぇいうから、そん時ゃあ、亭主柱ぁかかっちぇる打ち出の小槌ちゅうをくれぇ、と言え、」
と、こういうたと。そうしぇーば、その小槌はそら、米の倉が三つといえば三つ、五つといえば五つ、かあらけ（瓦）の家が出ちぇこいちゅえば出ちぇくるもんじゃったとや、なあそら。
そいからその、もう一つある、と。庭の隅ぃ黒か犬が坐っちぇいから、あの犬をばくれぇと、こういえと。

その犬な、どがあな犬かちゅえば、あずきょう一升煮ちぇ食わすれば、金を三升ひる、ちゅう犬じゃったてーそら。
そいからまあ、水神の神様のとこれぇ着いちぇ、あがったとや。
「まあ、これぇ来い」
と、まあ、神様がいうとこいがなあ、
「佐吉、わごう、わざいよか男じゃ、と。正直なほんとうによか男じゃ、と。まあ、上ぇ上がれ」
というちぇまあ、あがらしちぇ、
「三千世界に、おれぇその、正月に焚き物をくれた人ぁおまえが一人じゃ、と。そのお礼に何じぇもくるい、と。二品くるいから、のぞみの物をいうちぇみれ」
というちぇ。あれをいうことか、いわんことか、と思うちぇ、恐る恐る、
「あの亭主柱ぁかかっちぇる打ち出の小槌がほしか」と。
「ええ、そうか、と。そらもう命から一番目のものじゃばっちぇ、くるっちゅうたからくれよう」
というちぇ、そりょうもろうちぇ、そいから、
「まひとつじゃ」と。そいじぇ、
「庭の隅ぃ坐っちぇる黒か犬がほしか」
というたところが、
「ええ、そうか、と。そいじゃあもう、くるっというた以上くるいから。この犬は、あずきょうば一升煮ちぇ食わすれば、金の（を）三升ひる犬じゃから、大事いせぇ」
というちぇ、それももろうちぇ、そいじぇ、家ぇ戻っちぇ、そいじぇ母ぁ、こがんこがんじゃったと。
「えー、そらまあよかったなあ」
ちゅうちぇ、そいじぇまあ、最初、塀のつぃーた屋敷がほしか、ちゅうちぇいうたいば、そいが出ちぇきちぇ。
「きれいな家が出ちぇこい」
ちゅうたいば、家が出ちぇ来ちぇ、米倉も何も、ずらーっと出ちぇもう、たちまちのうちぃ分限者ぁなったとや、なあそら、佐吉は。

そいじぇもう、ひょうばんもするごとなっちぇ、殿様もそりょう聞いちぇ、
「えー、正直な人ちゅうはよかもんじゃける、と。大へんなよか男じゃける」
というちぇ、まあ、おほめぇなっちぇ。そいから欲の深か兄じょうが、
「佐吉ちゃあ、わざい急に分限者ぁなっちぇ、大へんなもんじゃ。米倉も六つも七つも、田も畠も、よかとこばっかり持っちょる。どうしたこっちゃんろうか」
と、行たちぇみろう、ちゅうちぇ来たとや。そうしたいばこがんこがんじゃ、と。
「おれぇも、その打ち出の小槌を貸さんか。」
「わがぁ、貸しがないか、と。わごう去年の正月は、正月前ぇ、母が米二ン合、みそをごき一杯ぁ、貸せちゅうちぇも貸さんじゃったろうが、わあが貸しがないもんか、貸さん」
と、こういうばっちぇ、正直な男じゃもんじぇだまされちぇ、貸ぁとやそら、なあ。三日の余裕をくれちぇ貸ぁちぇ。
兄じょうは欲の深かもんじゃから、米倉をいえばよかったてー、その、小めくら出ちぇこい、ちゅうちぇ、早口ぃうっちゅうたとよそら。そうしたとこいが、そのザッツやそら、めっくうが何百人ちゅうちぇ出ちぇ来ちぇ。
そうしたいば、今も昔も人間の殺すわけぇいかんろうが、食わせんばじゃろうがそら。たちまちの間ぁ財産がへっちぇ行くとやそら。
そいからそらまあ、佐吉は戻しぃこんもんじゃから、行たちぇみたとこいが、
「わあのそがん言うもんじゃから、いうたとこいが、もう、こんだけの小っかめっくうのつれが出ちぇきちぇよ、困ったもんじゃ」と。
「われまあ兄じょう、馬鹿じゃけりゃあ、米倉ちゅえばよかったてー、小めくらちゅうからそら、めっくうが出たとや。かねちぇ欲の深か人ぁ、そがぁなもんじゃから」
ちゅうちぇ、そうしたいば兄じょうは、小槌ょうば叩き割っちぇ火ぃくべちぇ。
佐吉は仕様なしぃ、その灰を持っちぇ戻っちぇったいば、また兄じょうが来ちぇ、犬のば貸せちゅうちぇ、
「んにゃ、わごうだいじな小槌も叩き割っちぇ焼ぁちぇくれた。わがぁ貸ぁたちゅうちぇ、ろくなこたぁなか。もう貸さん。わごう銭も米も多かもんじゃから、」

ちゅうちぇ。そいじぇも「貸せ」ちゅうちぇ、「貸さん」「貸せ」。
とうとうまた正直な佐吉ゃあ負けちぇ、兄じょうに貸すこてーなったとや。
弟の佐吉が、あずきを一升食ゎすれば、三升ひるちゅうたから、と思うちぇ、こんだあ、
「おら三升食ゎっしぇ、そうしぇーば九升金のひるから」
と思うちぇ、あずきょう煮ちぇ、三升食ゎしたてーや。
そうしたいば腹うひぃかぶっちぇ死んじぇなあ。犬な。ハハハハ……。
そいじぇもう、もともこもなかごとなっちぇなあもう。兄じょうは日増ぃもう、食うか食ゎんかのごとなっちぇしもうちぇ、佐吉の方は、殿様ぁ知れちぇ、お姫様うば殿様がくれちぇ、大へんよか暮しょうするようになったちゅう話。げなげな。

（この話は梶原義兵衛（松原の人）岩坪助市（中部）から聞いたが、自分の母からも聞いた。十二、三才の頃であった。）

（五）、こわい霊屋

むかし、あるところに死人があっちぇなあ。その墓が、とっても恐ろしゅうっしぇ、夜はゆうれいになっちぇ出っとか、まあ、泣く声がすっとかいうちぇ、その墓のきどぉ、通る人がおらんじゃったとやなあ。
そいから、ある男がなあ、
「わんたちが、あの霊屋ぁ行たちぇ、旗をば打ちつけちぇこいば、焼酎一升、にわとり一羽おごる」
と、こういうとこじゃったてー。
そいじぇも、誰も、墓の口まで行くばっちぇ、恐ろしゅういう人じゃもんじゃから、え も行く人がおらんじゃったとや。
こんだあ、ある男がその、
「おいが行く、と。みやすうかことじゃ」
というちぇ、金づちと、釘ょう持っちぇ行たちぇそら。風のぶんぶん吹く晩になあ。そうしたとこいが、打ちつけちぇ。
打ちつくいこたぁ打ちつけたから、
「えー」と思うちぇ、

「えいことぉした」と戻ろうとしたとこいが、霊屋が、ザザザザーッとついちぇ来たとや。そうしたとこいが、その男ぁ、舌ぅ噛み切っちぇ死んだたてーや。その人がなあ。そいじぇその、行たちぇ見たところがなぁよ、その男ぁよ、自分の着物の裾を打ちつけちぇったてーや。霊屋ぁ。ちゅう話よ。

（この話は内地から来た人にきいた）

（六）塩はなぜ辛いか

「宮里さん、さっき題だけいわれた「塩はなぜ辛いか」という話をして下さい。」

「あるところに、むかし、兄弟がおり申したちゅうなあ。そいじぇ、いつもの通り、兄さんの方は欲が深か人じゃったごたっとなあ。そいじぇ、貧乏者じゃったちゅうわ。どっちも。あまんまりその、兄ぃさんも良か暮しはしちょらんかったとじゃあなっかなあ。

そいじぇ、じゃがその弟の子が年がまあ、こうきたから（適齢期になったから）、これにまあ嫁をとっちぇくれぇば、どうしぇも財産のくれんばじゃから、財産がなくなる、と。これをどっかまあ、ようせぇ（養子に）、やらんばじゃがと、こうまあ、いつも考えちょっとこいじゃったけりゃあ。兄さんがなあ、そら。

そうしたとこいが、弟は、はばしかもんじゃから、何も無しぃおっちぇ、日稼ぎぃばかり行きょうったたちゅうばっちぇなあ。今日も今日も。そっしぇ、女子を見しけちぇ、取っちぇ、その女子の家のサシょうば借っちぇ住もうじぇったてーや。

そうしたとこいが、そこはまあ、塩も不自由なところじゃし、えー、正月が来ちぇ、正月ぃなればその、米の粉が、どうっしぇも無からんばいけん所じぇ、ダンゴをしちぇ上げんばいけんじぃ、餅米の粉じぇ団子をしちぇ上ぐい所じゃっちぇそら。そいじぇ、塩も無かもんじゃから、兄じょうが所ぇ、借りぃ行たとやそら。

そいじぇまあ、こがんこがんことじゃから、

「粉をば、貸ぁちぇくれはならんか」

ちゅうちぇ。そうしたとこいが、

「わぁもその、何も無しぃおっちぇ（よ）、女子ぁ養うちぇ（よ）、そうっしぇその、何となっとか（と）、おいもその、どんと（たくさん）無っから貸さん（と）。貸すものは無か。」

と、こういうちぇ言うとこいじゃったとそら。

そうしたとこいが、もう、しょうが無っから、そのう、部落いっぱあ、ぐりぃっと歩ぃちぇも、貸す人ぁ、居らんとこじゃっとや。

「どうっしぇも、おれぇ貸す人ぁ居らんから、どうっしぇも、部落の人ぁ全部、おいが貧乏者じゃことを知っちょいから、なさん（返さない）と思うもんじゃから、貸さんとじゃあ無っかなあ」

と思うちぇ、今度ぁもう、山う越えちぇ、何うの村ぁ行たちぇ借らんばじゃ、と思うちぇ。そうっしぇもう、日は暮るる、山を越えちぇ行こうったとこいが、そけぇその、白毛の生うったじぃさんが、柴うばよりょうったちゅうなあ。木の柴うば。そいじぇ、

「じいさんこら、こうこういう理由じぇ、行こうったいば、夜になったが、どうすればよかろうか」

とたずねちぇみたちゅうなあ。

そうしたとこいが、じいさんが言うには、

「ここをばその、まっすぐ行けば寺があっ（と）。寺の後ぇ、洞くつがあっ（と）。そけぇその、小人がもう、たくさんおっ（と）。そけぇその、石臼をば持っちぇっと。よか石臼をばなあ。じゃから、それをばどうかしちぇ、わごう（あなたが）、わけちぇもろうちぇ来い。」

と、こういうとこいじゃったちゅうわや。

「それは、わざぃよか宝の物じゃから」

と言うちぇ、そいじぇ、

「わがぁにゃあ、麦まんじゅうをくるいから」

ちゅうちぇ、麦まんじゅうをもろうちぇ、手にさげちぇ、そいじぇ行たちぇ見たれば寺があっちぇ、その裏ぁ行たちぇみたれば、ほんとうにそら洞くつの中ぁ、小人がもう、ぐんずんぐんずんしちぇ、ぎゃんとおったちゅうわそら。

そしちぇ、麦まんじゅうを持っちぇったところが、欲しゅうっしぇたまらんじぃ小人が、

「どめぇ（私たちに）、くれんか」

「ばかなことをいうな、これはもう命ぃかえられんよかもんじゃ（と）、わんたちぃ（あなたたちに）、くれがなるもんか（と）。じゃがしかし、わんたちゃあ、石臼を持っちょっちゅうじゃあなかか（と）。それとならばかえてもよかが（と）。」

「あれと代えがなるもんか（と）。あいこさぁ、どんが宝物じゃ。」

と言うちぇ、いろいろと話をするばっちぇ、麦饅頭が欲しゅうっしぇたまらんとこいじゃてーや、小人がそら。

そいじぇ、とうとうまあ、替ゆいとこれぇなっちぇ、替えたとやそら。そしたいば、よいこうじぇ、小人たちは麦まんじゅうを食うちぇ。そっしその弟あ、石臼をかるうちぇ、来た道ょうずうっと行きょうったいば、そのじいさんが居ったてーや。

「どうじゃったか」

といえば、

「とうとうあのまんじゅうとかえちぇきた」

という話じぇ、

「ええ、わごう、えーことをした。よか物を持っちぇ来たけりゃあ」というちぇから、

「下におろせ」

というちぇ、石臼を下におかせちぇから、

「これを石に廻しちぇ、粉が出ちぇ来いといえば粉が出るし、そしちぇ、お金が出ちぇ来いといえば、大判小判が出ちぇくいとじゃから、止むっときゃあ、左さなあ廻わさんばいかん。」

と、そのじいさんから習うちぇ、そいじ戻ったいばもう、ようめしどき（夕ごはん時）過ぎじゃったちゅうからそら、そしたいばもう、バキィ（奥さん）は居っちぇ、

「今頃その、正月ぁ来っちゅうに、粉も見しけちゅえこんじぃ、何をしょうったか（と）。わぁのごたる人ぁ、もうおろうごともなか」

というちぇ、大げんくゎをしたとやなあ。バキィがおこっとこじゃったとよ。

「待て（と）まあ、おいが良か物を持っちぇ来たから、そけぇ（そこに）ごぞう（ゴザを）敷け（と）。」

しぶしぶそら、バキィがごぞう敷いたとや。そけぇ石臼をえーちぇ、右さなあ廻あちぇ、粉が出ちぇこい、ちゅえば、ぞ

うぞう出ちぇ来ちぇ、塩が出ちぇこいちゅえば塩が出ちぇくい、銭が出ちぇこいちゅえば、銭が出ちぇくいちゅう。

たちまちの間ぁそら、ぶげんしゃあなったとや。その男が。そいからずうっとこうしょうったとこいが、こんだぁ、兄じょうが、そんとぉきいちぇ、

「わごう、どうっしぇその、そがんお金持ちぃなっちぇ、分限者ぁなったか（と）。田も畠もあっちぇ、良か馬もそら出ちぇ来ちぇ。」

「わあの、あの、粉う貸さんじゃったから、こがんこがんじぇ、こがあな物う貰うちぇ来ちぇ、そいじぇじゃ」

というたいば、こんだあ兄じょうが、

「おれぇ、そりょう貸さんか」と。

「いや、わがあにゃあ絶対貸さん（と）。もう死ぬちゅうちぇも貸さん（と）。」

こういうことじゃったけいから。そうしたいば、しぶしぶ兄じょうは戻った。そうしちぇけなあぶら、祝あをせんばじゃ、ちゅうちぇ祝あをしたとじゃてーや。ほうしちぇ、たいちぇー、歌酒盛りをしちぇ、そいからそのどうっしぇもその兄じょうが、

「あの弟のわろうを、どうかししぇまあ、盗まんばじゃが」

と思うばっちぇよそら、昔の家ぁ、よこ座ちゅうちぇ、なんどちゅうちぇ、あったわけじゃからなあ物を置くとこいが、味噌もないも、米もないもなあ、昔ゃあ。

そいじぇ、その弟がそのどうっしぇも、みやげぇその、菓子ょうば持たせんばじゃと思うちぇ、臼をば廻あちぇ、菓子ょうば出ちぇこいちゅうちぇ、廻あたいば、どーんどん菓子が出ちぇ来ちぇ、みんなぁくばっちぇ、そいから焼酎は呑む、戻る人ぁ戻っちぇしもうちぇよ、そいじぇまあ、とんと安堵をしちぇ、ようっとまあ寝ちぇ、寝しずまったとき、

「どうっしぇも、今のうちじゃ、今のうちぃ盗まんばいけん、」

と思うちぇ、寝しずまったとき盗うじぇなあ、そら、兄じょうが。そいじぇ、かるうちぇ出たとや。

どっかまあ、人の知らんとこいじぇ、塩はまあその無か不自由なとこいじゃったちゅうから。そいじぇ、そりょうかるうちぇ、行っこうったとこいが、海岸に出ちぇなあ、そけぇ舟が一艘おったとや。

それぇ乗っちぇ、海の上ぢゅうの塩を舟いっぱい取っちぇ戻っちぇこんばじゃと思うちぇ、沖さなあ出ちぇ、

「塩よ出ちぇ来い」
ちゅうちぇ、右さなあ廻あたとこいがもう、塩がどうんどん出ちぇ来たとよ、そら。
それがもう止まらんじぃそら、舟がもう沈もうごとなっちぇも出ちぇくったてーや。
とうとう、舟もろともにその兄じょうも沈ずもうっちぇ、そいじぇその、今なおその石臼が廻っちょっちぇ、海の水は塩が辛らかちゅう話。ハハハハ……。
「なるほど、ハハハ……」
「まだ廻いおったちゅうどぉ、ハハハ……そいじぇ辛かたっちゅうから。ハッハッハハ……」
「これは誰から聞きましたか」
「忘れたよもう。そがんたぁもう」
「いつごろ聞きましたか、子供の頃？」
「子供の頃やなあ、小学校二、三年の頃の話じゃから」
「ありがとうございました。もう他に、こういう話は、ありませんか」
「もう先生、次々忘れちぇなあよ、もう、なかなか、年をとっちぇ、思い出さんとよ」「ですかなあ」

三、大脇彦次昔話・世間話集（九話）

（一）、相撲とりの話（1）

今の西海に大川という橋があるんですよ。あそこは、下立石、上立石、中ン塩屋というてずっと続いているんですよ。
むかし、下立石に関取りといわれるなかなかの相撲上手がいたそうですよ。ある夜、その男が、中ン塩屋という所に、西海の大川橋を通って行きょうったと。ところが、少し夜が更けておったか知らんけど、突然ガラッパが出てきてね、その人の名を言うて、
「オイ、相撲をとろう」
というんだそうですよ。

「よし、とろう」
ということになって、ところがその相撲とりがいうには、
「オレは、中ン塩屋という所に行ってな、用事を済ましてこんにゃならん。どうしても取るならば、帰えりにとろう」
と約束をしたそうです。そのがわ太郎とね。
中ン塩屋で用事を済ませた男は、夜の一時頃になって帰えりながら、考えるには、
がわ太郎はその、必ずケツを抜くと。だから、これぇくそ、ケツを抜かれちゃあならんと。ところで昔は、男の人はみんなまわしをしめているもんじゃった。
それで、六尺六寸の長いまわしを二重にまわして、後にこうまわしてねじこんで、その時、このケツにねぇ、これ位の石をしっかりはさんだと。そして後にしっかりねじこんだあと、いよいよ、来ることは来るが、と思って待っておった。そのがわ太郎をな。
するとその時、フワッと生ぬるい風と共にピシャッと音がして、がわ太郎が現れたそうじゃ。
とっさに男は身構えたのだが、そのとき、カッパと契約をしようと思いついて、
「けっしてオレの尻にかまわんこと」
と、そいからまた、がわたの方は、
「必ず、この皿にかまわないこと」
と、こういう、まあ、契約をしたらしい。
ところが、「さあ、とろう」ということになって始めたところが、むかしぃ、はや、尻にかもうとった、と。がわたが。
「おや、このしんごは石しんごじゃ」
と、こうがわたが言うたそうじゃ。
そして、とって投げても、投げても、またはい上って来ちゃあまたとり組むのですが、どういうものか、なかなか勝負がつかない。その時がわ太郎が、川上の方を向いて、何とかいう大きな声を出してなあ、手招きをしたそうですよ。ところが、何十匹でかあろう、何百匹でかあろう、ずらずらーっと出て来て、とり組みがあったそうですよ。
そいでその相撲とりは、

「こら、かなわない。このままではたいへんだ。いつまでも勝負はつかん」
と思って、こんどは、あの橋げためがけて、そのがわたの顔やら、後の足やらつかんで、パッと投げつけた、と。
何回かたたきつけるうちに、そのがわたが、
「こらいけん」
と思うたか、こんどは川の上の方へのぼってしもうたそうです。そしてがわたは、目を打ち切っちぇ、片目になっちぇったということで、そのいわくで現在まで、あの川に住んでいるうなぎも、川えびも、さかなも、全部、今だに片目だということです。

(二)、相撲とりの話 (2)

下中にですね、下中ちゅうと、花峯ですよ。そこにものすごい大関とりがおったそうです。
兄弟おって、二人とも評判の相撲とりだったそうですよ。
その人が、招魂祭の時、大関をしてね、その祝いの帰りにね、馬に乗ってね。
ところで、こうめごうの橋というて、大きな橋が下中にありますよ。その橋の上をね」敏「こうめごうの橋ですか」
彦「はい、こうめごうの橋です」
敏「どこですか。下中のどこに」
彦「下中の郡原の下から、茎永に行くところの、あの橋ですよ」
敏「あれは、こうめごうの橋というの、こうり川でなくて」
彦「はい、こうり川橋と今はついている。こうめごうの橋と言ったものじゃ、昔は」
敏「大林先生、西之表の川を甲女川(こうめごぁ)というんですよ。これは、こうは国府の国府(こふ)にあるんじゃないかという説があるんです。で、下中には、こうり川という川があるんです。ところが、橋をこうめごうの橋というんです。おもしろいですね」
敏「では、先の話を続けて下さい」
ところがね、そこをその、昔は馬に乗って通うもんじゃったから。その招魂祭は、こっちから三里ぐらいの道じゃったから、そこをその帰えりにね、呑んだいきに、そういう大関とりでしょうがなあ、兄弟、馬に乗って、その橋を通る時にねぇ、

「この方に、かのうもんがあれば出て来い」と、こういう声をかけて、捨て口を打って来たそうですよ。
その時に、その川の神というかなあ、がわたというかなあ、聞いておったらしい。
「われっそ、ああいう大きな捨て口を吐いて行くか、いつか、どこかでおさえてやる」
と、始終たくらんでおったらしいなぁ。
ところがある時、この門倉崎ですよ。門倉岬に、魚釣りに出かけたそうです。兄弟で、あっちの瀬とこっちの瀬に分れて釣っていたそうです。ところが、
「もう、そろそろ帰えろう」
ということになって、兄が早く海に飛びこんだ、と。ところが、途中まで来てから、その兄貴が沈みかかったそうです。それで、
「こら大変じゃ」
というところで、弟が飛びこんで助けんとした、と。ところが、そこに行きつくか、行きつかないうちに、下からそびっこまれたそうじゃ。
ああいう捨て口を吐いて行くから、川の神というか、がわたというか、ね。とうとう、命をうばわれたという話じゃったそうですよ。

(三)、佛教廃止

あのう、佛教廃止の時代の話ですが、それはきびしかったそうです。或る坊さんのかしらの人がね、佛像を抱いて逃げ廻って、さるきょうったらしいですな。
その時、逃げ廻る途中にですねぇ、……この部落に、九郎太という人がおったですよ。
「何ですか」
「くろうだという人」
「それは名前?、苗字?」
「いや、大脇九郎太という人」

「あ、四郎、五郎の九郎太ですね」

はあ、夫婦でね。そのじいさん、ばあさんな、私のじいさんは知らぬが、ばあさんは覚えとる。

その九郎太の家に、その坊さんが泊ったわけ。あくる日はもうその家を出たそうだが、ところがこんどそら、あとを追うて来た、今の刑事でしょう、その人が、その九郎太という人に、

「おまえの家に泊ったろうが」と。

「はいとまりました。だが、行先は分かりません」

と、こういうたそうです。本当に行先は知らなかったわけ。

ところが、この先の中西目というところに行って、刑事がいうには、

「こうした人が来なかったか。通らなかったか。見た人はいないか」

と調べて歩いたそうじゃ。でも分からない。

では、この中西目と、ここの間にかくれているかもしれない、ということで探しにやってきたそうです。

そこに、えびすの谷といって、ものすごい谷、いや、谷というよりも大山ですよ。そこを探しに行ったが、なかなか見つからなかったらしい。しかし、その坊さんは、大きな大木の根に、自分の下駄を踏みそろえて、自分は大きなかずらで大木に身を巻きつけて、全然見えないようにしていたそうじゃ。

「たしかに、この木に上っている筈じゃ。おりてこーい」

といっても、なかなかおりてこない。そこで下の方から、矢を持って、放ち、何本も何本も射かけたそうです。

そして、矢が当り落ちて来る時に、坊さんが見たらその刑事はヤイロウという人と、もう一人だったそうです。

「わたしを射たのは、ヤイローともう一人、ここに逃げたことは、九郎太が教えたとじゃろう。お前らの家は、七代めつぼうになれ」

と言いながら坊さんは、落ちてきて、おナワになって、そして、その後、一代、二代、三代、今四代目かなあ、今だにその家は栄えんそうじゃ。

(四)、兄と弟

むかし、大へん貧乏な家に生れて、兄弟がおった、と。両親とも早く亡くなり、おばあさんと三人で暮しておったそうじゃ。

兄貴は大へんかしこい人でしたが、弟の方はちょっと脳が足らんじぃ馬鹿じゃったちゅう。

昔は、年の暮れになると、山にワナちゅうもんをかけて、小鳥をとって年のようさのごちそうにするもんじゃった。

ところで、年のようさの前の日に、兄が弟に、

「お前は山に行って、ワナを見ちぇ来い。鳥がかかっちぇるかもじゃから」

というちぇやったところが、あのけんけん鳥ね、キジが足をきびっちぇなあ、バタバタ、バタバタはねくりょうったらしか。

ところが弟は、

「年のようさもくるのに、かわいそうじゃ」

というとこいで、それを放してやったらしい。そのキジをなあ。そして家に帰えると、兄が、

「ワナはどうじゃったか。としのようさにも、さかなもなんもなかが」

というとこいじぇ。

「あのう、キジがかかっちょったばっちぇ、ごうらしなげぇ、と思うちぇ、放ぁちぇやっとう」

というたそうじゃ。そこで兄貴が、

「それを放しちぇ来いちゅうがあいもんか。その近辺におるもなぁ、何でも打ち殺れぇちぇかたげちぇ来いもんじゃ」

と、まあ、いうたらしか。

弟が山に行くと、あいにく自分のばあさんが、ワナのちょっと先で、たきもんを取りょうった、と。それを、その馬鹿な弟のことじゃから、兄さんが何でもかんでも、そのへんに射るものを打ち殺れぇちぇこいというた、というとこいで、自分のばあさんのナタを引き取り、ころりんとたたっ殺しちぇなあ、かたげちぇ帰って来た、と。

「何という馬鹿なことを、お前は」

「兄さんが、そこら近辺にいるものは何でもかんでもたたっ殺しちぇこいというたから、ばあさんじゃが、仕様なしい、かたげちぇ来たとじゃ。何か、文句があいか」

と、こう、弟がいうたそうじゃなあ。

「こらもう、どうしもならん。悲しんでいても、仕様がないから、葬式をせんばじゃ」と兄はそういったものの、葬式をするにも何もない、と。米もいる、金もいる、と。どうしたものかと考えたあげく、長者どんの家に米をぬすみに行こう、ということになったそうです。

昔の長者どんは、米を何十俵も何百俵もとる人じぇ、家のつし（天井）に、米をずうっとあげておるものじゃった。その米を兄弟でぬすみに行こうと、としのようさに、行ったわけじゃ。

昔はカマゲとか、くぶきと言うてねー。それに米を入れて、天井にずっと並べちぇった。そして、くぶきや、カマゲの両上を縫うて、両方のとぎった所をなあ、みみというもんじゃったからなあ。そのみみを持って運ぶもんじゃったからよ。

そこでそら、兄貴は天井にのぼる、弟は下におったわけで、そいじぇ、兄貴がおろすから、弟はそのくぶきのとがったところをつかまえて、じいっと、わからないように落とそう、こう、まあ、兄貴が弟に言いつけたわけ。

「わかった。そうしよう」

と相談がかたまって、兄はつしにのぼった、と。そして、カマゲを、こうして下に下ろした、と。おろすときに、弟に、

「みみをしっかりにぎれよ、必ず落とすじゃないぞ。しっかりにぎれよ」と。

「はい。みみをにぎった」

というとこいで、弟どんは、くぶきのみみをにぎればよかったのに、自分のみみをしっかりとにぎってなあ。そして、

「いいか」「よか」「にぎったか」「にぎった」。もう、自分の耳をしっかりにぎっちょいとこいじゃ。しっかりにぎったというから、兄は手をはなぁたところが、そのまま、ドシーンと落ちたわけや。

ところが長者が目が覚めちぇ、

「こら、なにごとか」

と、びっくりして起きて見たれば、兄弟がぬすみにはいっちょいとこいじゃ。そいじぇ、

「何故（なにゆえ）に、盗みにはいったか」

と長者が聞けば、その兄貴が、実は、かようかようで、悪かとは思うたばっちぇか、ぬすみにはいったものじゃ、と、ことわりをいうたわけよ。

その長者どんも、ことの分かった人で、

「そういうことじゃったか。そいじゃあ、いいから、米もくれてやる。だから、とむらいもしてやれ」と、こういうて米も持たせてやった、と。こういう、ちょっと面白い話じゃ。

(五)、フカの話 (1)

これは、わしらのこまい頃、二年生位の時じゃあなかったかなあ。

ある人が、この沖に魚つりに行ったわけ。干潮の時は、この石があがっておった、と。ところが、潮が満てきたら、その石がかぶってきたと。その人は自分のすね のところまで潮がきても、あんまり魚が喰ろうからなあ、なかなかやめられずに、まだまだ釣っていたそうじゃ。

ところが、大きなフカがやってきてなぁ。釣った魚を、こう、浮かしておるもんじゃから、そのにおいと、つないでおるその魚から出る血のにおいをかずんでくる奴じゃから。大きなフカがやってきて、それで、もう、泳ぐにも泳がれず、潮は満てくるし、どうしもならん、と。

何とかして、おかに泳ぎつかんにゃならんというとこいで、十いくら釣っていた魚を、力いっぱいに、四方万方に投げちらかしてね。そして、陸に向って、一生懸命泳いだ、と。

ところが、その投げる魚の影を見て、フカがその魚を取るあいだに、一生懸命泳いで、やっと陸に着こうとした時、その頃、昔は陸に塩製造があるもんじゃったとなあ。あお塩の製造をしておった、と。そこに友達がおったわけよ。その魚釣りに行った人の友達が。ところが、どういうものか、薄情な友達じゃったらしく、助けようともせず、小屋の中にひっこんでしもうて。塩製造をしておるからなあ。

でも、いっこう上ってこん、と。こらどういうことか、と、出て見たところが、こんどはその海の、その上ったきわ にねぇ、真赤に色どってしもうて倒れちょった、と。

こら大変じゃ、と、こういって走り寄って見たれば、フカは、人間より二間ぐらい陸にはね上っちぇったそうじゃ。その時、すぐに仇をとればよかったのに、潮が満て来て、そのフカは、あの海に、とうとう仇も取らずに、沖さなぁ、泳いで行ったそうじゃ。

フカという奴は、足をね、ぐるっと丸ごとには呑まない奴で、パクッとくわえて、くわえたとたんに、くりっとまわって

ね、ひと口にすたっと噛み切る奴。
そしてそら、その人は、命はとりとめたが、足はもう、スネから下は、ただ骨だけ残って、そいで、三年くらい生きちぇったかなあ。
わしどんが、二年生くらいの時じぇなかったかなあ。

(六)、フカの話 (2)

えーと、十五、六年になるかなあ。
ある男が、魚突きぃ行たちぇった、と。ちょっと、五ひろくらいしか立たんとこれぇなあ。ホゴというおいしい魚じゃ。それが入っちぇ、突きょうったそうじゃ。
砂坂の浦の、ひょっと沖に、沖なかせという、いい穴があるんですわ。それに入って突きょうったと。ところが、突けば突くしこ魚がやって来てなあ。そいからその男は、フカからとられちゃあならん、というとこいじぇ、何回かもぐって、ようやくそびき出してなあ。
あのう、わしらよりそうとう海にすんだ（もぐった）奴じゃがなあ。その魚をフカからとられちゃあならん、ちゅうとこいじぇ、折角、そのホコで突いた魚をねぇ、これをそのホコままにぎって、こう、空さなぁ上がりょうったわけ。ところが、フカは人間にくるのじゃあなくて、その魚を見かけて、こうして上って来ょうるじゃろうがなあ。そしたら、眼鏡を、一眼というあの眼鏡ともに、そこから、ここをこうかぶってねぇ、がぶっとやられたわけ。それでねぇ、二十何針か縫うちぇじゃったちゅうがねぇ。
そいで、陸には、すみ手が、まあ、何人か上がっちぇったそうじゃ。ところが、何か、もう、バシャバシャ、バシャバシャと、はねり出した、と。何事かと見ていたところが、大きなフカが、もう、はっと、陸の波打ちぎわまで来て、ガシャガシャしていたそうじゃ。ところが、海がもう色んでしもうて、人間の血で。そいから何事かと、陸におるすみ手が立ち上って見たれば、
「もう、オラ、フカからやられて」
こういうて、バタッとそこの海に倒れてしもうたそうじゃ。

「こらぁ、大へんじゃ」
というとこいで、上中の医者を呼びに行たところが、
「ここじゃあ、治療はでけん」
と、早く、戸板にのせて、今、呼んだ医者のところに運んで治療してねぇ。そして、やっと元気になって、そしてその人は浜津脇に養子に行たちぇっと、こういうことじゃ。そして去年かなあ、今年かなあ、死亡したらしい。

(七)、ケンゴーの足あと

むかし、むかし、種子島は、屋久島の東の方にあったそうじゃなあ。屋久島のうしろにあったのかしらんけどなあ。
それを、ケンゴゥ様が、屋久島と種子島をひっつけんがために、背中にかるうて来ょうった、と。ところが、その網が切れてしまって、種子島はここに坐ったもんだ、と。
なぜそういうかといえば、屋久島には、右の足あとがあるそうで、種子島には、砂坂に今だにありますよ。大きな足あとがなあ。ほんとに人間の足型が。
「二尺位ある?」
「いや、そんなにはない。こういう平(ひら)たな石になあ、右の足型があるらしか」

(八)、ゆずり葉のいわれ

あのねぇ、或る人が大蛇から追われたそうじゃ。いわば鬼じゃなぁ。鬼から追われたと。
それで、一生懸命に逃げていると、大きな池があり、池のほとりににゆずりの木があったので、その人は、天の助けとばかり、その木に走りのぼったそうじゃ。すると、
「ばじょう、おりて来んか」
と、下から鬼が言うわけよ、なあ。
「おりて来んと、この木を切り倒す」
と、鬼は、その木を切り始めたそうじゃ。そこじぇ、切っても、切れば、切るときにその木にのぼっちぇるその人が、

「ゆずり葉、たおるんな。正月三日には祝うよ」
と、こういう文句をいうわけよ。そうすれば、もう、いくら切ってもまたもとのように、ぱちっとつながったということじゃ。
そして、末代までも、危険な場所や、危険なことを払うと、まあ、こういうのがゆずり葉の文句じゃらしか。

（九）、ポルトガル人と鉄砲

むかし、種子島にまだ鉄砲がない時代の話じゃがなあ。
門倉岬の鼻に、みさき神社という神社が昔からあったらしいよ。その門倉岬を沖から見れば、ずうっと突き出しているから、それを的にしてねぇ、ポルトガル人が鉄砲で打ちょうったそうですよ。演習をせんがためにねぇ。
ところが、いなか武士（ざむらい）が。（その、ほんとうの殿様は西之表におったわけ）。あの西村というあの人でしょうよ。そいが、種子島弁でなあ、
「門倉は大へんな事になる、と。やがて、黒土ぃなってしもう、と。どんどん鉄砲を打ちかけて来た。やがてあの軍艦がこっちにあがってくれば、種子島は黒土ぃなる」
と、西之表の種子島さんに報告をしたわけ。
「そらっ」
というとこいで、西之表から武士（さむらい）のしが何十人と来たらしかなぁ。
そして、お岬の神主がね、それも神の祭りをするホイさんが、いくらお願いをしても、その岬に向（み）いて打つ鉄砲はやまなかった、と。
そこでこんどは、その神を扱っておる主さんじゃなあ。ホイじゃあなかよ。神主が、
「これだけお願いしても、神や仏の力はないものじゃろうか」
と、こういって、線香をあげて願いをしてもきかなかったそうじゃ。
そして、神仏（かみほとけ）の力はないものかと、こんどは本殿に行って線香をたいたらしいなあ。ところがどういうものか、白鳩がぱっと出て来て、そのあげた線香を口にくわえて、船に向（み）ぃて飛んで行った、と。そして、その線香を火薬庫に落したそうじ

ゃ。

すると、それと同時に船が大火災を起したと。それで、船におることができず、陸をめがけて、ずうっと泳いで来た、と。何十人という人が泳いで来たそうですよ。

それを、種子島のいなか武士が切ったわけよ。あがって来れば切り、あがって来れば切りしてなぁ。そうして、ポルトガル人を一人残したわけ。それが鉄砲を作るその人じゃったわけよなぁ。それを西之表さなぁつれて行ったということよ。

ところで、殺された人達は、本村の浜にまつり、せんにんごまといって、今だに、もりっとした石こずみのその森があるわけじゃ。

つれて行かれたその一人のポルトガル人はよく聞いてみると鉄砲鍛冶じゃった。それで鉄砲の作り方を習わんがために、八板金兵衛という人の娘をば嫁にくるるから、鉄砲を教えてくれぇ、といって教えてもらった、と。

やがて、ポルトガル人は国に帰えることになり、その娘も仕方なく、泣く泣くもその男につけてやったそうじゃ。ところが親にしてみれば、今の世の中とはちがい、いつ帰ってくるか、こないかの想いじゃったろうわい。

ところがちょうど三年たってから、娘だけが親げんぞうに来たわけじゃ。すると親は、

「これをまた向うにやるのは偲びない。いっそのことこの娘を死んだことにしよう」

と、新しい墓を作ったわけ。

嫁がなかなか帰って来んから、夫が迎えに来た、と。しかし、親達は、

「娘は死んだ」と。

「ほんとに死んだのか」と。

「ほんとうじゃ、娘の墓はこれじゃ」

と、新しい墓を見せたわけよ、なあ。

「どうしても、死んだとは思わん」

と、ポルトガル人は信用しないでなあ。

「では、本当に死んだもんなれば、私に掘らせてみてくれぇ。掘ってたしかむる」

というとこいじゃ。そこで女の方が、日本の法律として、絶対に新しい墓を掘ることはできないという規則になっておるか

ら、というけれども、
「それを曲げてなんとか証拠を見せてくれぇ」
というたそうじゃ。それでも、
「それは法律上できない」
というて、ようやく泣く泣く帰ったそうじゃ。
その罰というか、想いというか、その昔のしは、バタバタと倒れてしもうたわけや。倒れたということは、資産なんかもなくなってしもうたそうじゃ。と、まあ、こういういわれがあるわけよ。
これは、誰から聞くともなく、昔からのいい伝えがあるわけや。

四、日高スミエ昔話・世間話集（十二話）

（一）、短気は損気・七つ子の川どり・昔話の伝承について

「おくさん、ちょっとお伺い申す。アナーザというのはどこですか」
「昔の台所でござり申すなあ。もうそこへんにゃござり申さんで、こがん所（とこれ）ぇなっちょり申した。昔、わたしたちのちっかころはなあ、ただ、土の所に、もう壁もござい申さんじゃや、あのう、雨が眞上から降らんごと、もらんごとしちぇいばっかりじぇござんしちぇなあ、竹をば、あの、シロの、あれじぇのうた、あれじぇ、あのう、おうじぇ、作っちぇいもんじぇござり申したと」
「何竹を使ってですか」
「あのう、め竹を使うちぇ」
「め竹？」
「はい。あれの、これ位い大きいやつじぇよ。ほっしぇ、編んじぇれば、ずいぶん古かてぇなれば、わたしたちん、そうじぇござい申すなぁ。わたしが、まだ小学校に上らん前の話じぇござり申すから。そうし申すと、こ時々、太かとが、しぜんにその縄が手じぇのうたとじぇござい申すどうが、太かったいすれば、そっから、わたしゃあ、そん足をこのへんまで入

れちぇ、このへんのいやという程すりむいたことをば覚えちぇり申すがや、今、考ぇちぇみれば、ほんと不潔なものじぇござり申したなあ。その、使うた水は、サアーッとそん床ん上ぇそら捨て申すからなあ。そうすればこの、下ん方がや、そんセメントかなんかじぇしちぇいわけじゃござり申さんがや、そこをば堀っちぇ、そこがいっぱいになった時ゃあ、あのう、畑さなあ汲み出あたい、どうしたいするもんじぇござり申したと」

「わたしたちが、ただその、深うはなかったばっちぇ、わたしがまだ学校に上らんうちぃ、タタキィし申したから。そいじぇ、やれやれ、あんとが無かごとなっちぇよかった、と思うもんじぇござり申したや」

「そうですか。め竹とは、なよ竹とはちがいますかなぁ」

「はい、なえ竹ちぃ申すなあ。はい」

「にが竹とは、又、別ですか」

「はい、にが竹は、こっちん人は、大名ちゅちぇ言い申すから」

「大名なあ」

「はい、あんとは、炊いちぇ食べるとにごうござり申すからなあ」

「め竹は食べますか」

「はい、ふつう、なえ竹ちゅうとも、あのう、ちったぁにがみがござり申すばっちぇよ、あのう、にが竹ちゅうとは、ものすごくにごうして食べられ申さんどぉ」

「め竹とにが竹は似てい申すなあ」

「はい、葉っぱがちょっと大きゅうござい申すとよなあ」

「どっちが」

「あのう、そのにがかとが。はい」

「そうですか、なるほど」

「そいじぇ、そんたぁあんまり、どこじぇもござい申さんどぉ。あのう、あっちの本村とかおじゃい申した？」

「はい」

「種子島生れの種子島育ちじぇござい申すもんじゃから、いっこうもう、何というみちも知り申さんじぃ、ご無礼さまじ

ぇござり申す」
「いいえ、いいえ、すみません」
「あすこの、何か集荷場に出ちぇくっ所ぇ、あっとじぇござい申すとかなあ」
「はあ、その庭先の？」
「はい、その大名竹ちゅうとが。そいじぇ、あっちの山の向う側にも、あっとこいじぇござり申したがなあ、わたしたちが小さい頃は」
「奥さんは、オトギ話をお父さんから聞いたことはなかったですか」
「聞き申したばっちぇ。くる日もくる日も毎日、父親からじぇござり申すどうが」
「それは奥さん、しもうた。わたしはなあ、その頃、昔話をたずねて、歩いたんです。そして、本村の山田藏太郎さんから、たくさん聞いたんですけどお父さんが知っておられることを知っておれば、何回でも来るのでした」
「ええ、もういつも、くる日もくる日も。そいからそいじゃあ。あんたぇちゃあ、ちゅうちぇ、あたしがあんまり聞くもんじゃから、のちぃにゃあもう、母親が、うるさか、子供ちゅうは、いつまじぇも起きちぇらんもんじゃ、ちゅうちぇ、早う寝れ、ちゅうぐらいによ、聞き申したと」
「どんな話を聞かれましたか」
「あのう、なんか、七つのお祝いの話なんかも聞き申したどぉ」
「それをちょっと話して下さい」
「わたしゃあ、あんまり記憶ぃござい申さんばっちぇよ、あのう」
「或る貧しい百姓がなあ、あのう、生活がどうにもならんもんじゃから、そいからその妊娠した奥さんな置いたまんまじぇ、それにその白髪の生えたおじいさんといっしょに、どっか出らったとか、行たとじぇござい申すとやそら。そうしたとこいが、あのう、いくらかお金をば、こうきりつめちぇ、もどっちぇ来ょうったとじぇござい申すちゅうばっちぇ、そしたとこいが、「よか話をば聞いちぇきたが、知っちぇいが、買わんか、ちゅうちぇその、白毛の生えたじいさんが言うたとじぇござい ますとや。そうしたとこいが、
「どがあな話じゃろうか」

ちゅうたいば、
「おまやぁ、聞いちぇっちぇ、ぜったい損なせん話じゃ」
ちゅうちぇ、いうたとじぇござい申すとやそら。三両しかなかっとでござり申すちゅうから。そのうち一両出あちぇ買うたとじぇござり申すとや。そしたとこいがなぁ、あのう、
「短気は損気ちゅう話じゃ」
と、いい申したとや。そしたら家に帰っちぇ、夜ふけちぇから帰っちぇ来ちぇ見たれば、その、奥さんが、白かタオルをかぶっちぇる人をば、抱ぁちぇ寝ちぇるごたるもんじゃから、てっきり浮気をしちぇると思うちぇ、打ち殺そうかと思うたばっちぇか、
「待てよ、短気は損気ちゅう話を聞いちぇった」
と思うちぇ、その、火打ち石じぇござい申すなあ。あいじぇその、火をつけちぇ見たいば、そしたとこいが、自分の父親が、年寄りじぇその、あたたまり申さんからなあ、それじぇ、若い嫁じょうがそら、抱あちぇ、寝ちぇったとじゃったけりゃあ。
「ああ、こらよか話を買うちょった」
ちゅうちぇ、いうちぇ。
そがあな話とかや、あのう、いつも貧乏な百姓の話ばっかいじぇござんすとやなあ。ハハハハハ……。
こんどは、奥さんが臨月じぇ、早う帰っちぇこい、という便りがござい申したもんじゃから、もどっちぇ来ょうったいば、もう、とうとう日が暮れちぇ、まっくらじぇ、帰へられんじぃ、あのう、なんか、こっちの人は、タブの木ちぃ申すやなあ、あのう、太かこう大木になる、ほんとうは何という木か存じ上げんばっちぇ、
「こけぇ、泊っちぇ行かんば、仕方がなっから」と思うちぇ、
「ひと晩の宿を、貸ぁちぇおくらり申せ」
と頼うだいば、そしちぇ、頼うじぇ、そけぇ泊っちぇおり申したたてーや。そしたとこいが、あのう、赤ちゃんの生れた時、すぐ泣く声をばいが泣き ちゅうちぇ言い申すちゅうなあ。そうしたいばその、ほかの木の精たちがその、
「タブの木どん、タブの木どん、今日はどことかいろうに、子が生るいからいが泣き 聞きぃ行こうやぁ」
ちゅうちぇ言い申したてーや。そうしたとこいが、あのう、

「今日は、お客さんが居いから行きゃあならんから、おまえたちゃあ、行たちぇ、聞いちぇおじゃい申せ。帰へりぃにゃあ、聞かせちぇおくらり申せ」
ちゅうちぇそら、言うたとじぇござい申すそうなどう。そしたとこいが、帰へりぃなぁ、
「今、戻りょうらぁよ」
ちゅうたいば、
「どがあな言うたかよ」
ちゅうたいば、
「七ツかわいろう、七ツかわいろう」
ちゅうたちゅうちぇ。
「七ツかわいろう、ちゅうた時ゃあ、なっとせぇばよかろうかいなぁ」
というたとこいが、そら、男の子が生れたとじぇござい申すちゅうから。そしたとこいが、
「七ツになったとき、川のどことかいろうの淵ぃ、その子が持ちきるいだけの餅を、かるわせちぇやれば、そしちぇ、その餅を一つ一つ、川ン神様ぁ上げ申す、ちゅうちぇ川ン中ぁ、投げ込うじぇしまえば、災難が逃れるかもしれん」
ちゅうちぇ言うたとじぇござい申すちゅう。そうしたいば、その人は、
「これは、わが子のことをば言うちょるとじゃける。よかことをば聞いた」
ちゅうちぇ、そのことをば、ぎゃんと覚えちょっちぇ、七ツぃなったとき、そがんしちぇやったいば、その子はその、川ぁおぼれちぇ死ぬいこともなし、そもそもその時のそいが始まりじぇ、今頃の人ぁそら、三才の時じゃの、男の子は五才じゃの、女の子は七才じゃのちゅうちぇ言い申すからなあ、それの、そもそもの始まりゃあ、そのものがたりにあるとじゃ、ちゅちぇいい申すとや。
そのほか、いろいろ聞き申したばっちぇか昔のことじぇござい申すもんじゃからや、忘れちぇおったりし申すがや。

「おばさん、お父さんの名前は何とおっしゃいますか」
「わたしの旧姓は羽生じぇござい申すからなあ。伝十郎ちゅうちぇいい申すと」

「どんな字を書きますか」
「でんは伝える。十と。そいから郎」
「ははあ、いつ生れですか」
「えーと。明治二十五年生れでござい申す」
「何月何日」
「五月ちゅうことは覚えちょり申すばっちぇ、何日ちゅう事ぁ忘れ申したやちゃあ」
「奥さんの名前はヒサさんですか」
「いいや、私はスミエじぇござい申す」
「はい、スミエさんですね。スミエさんはいつお生れですか」
「大正十年の七月十日じぇござい申す」
「お母さんは何とおっしゃるの」
「あのう、チヨじぇござい申す」
「チヨさん。チヨさんは何年生れですか」
「三十年じぇござい申すどぉ。三十年の五月ちゅう事は覚えちぇおり申すばっちぇなあ」
「いつ話してくれました。お父さんは、伝十郎さんは。地炉のはたですか」
「はい。そけぇ、いつも。ここの人はヒーシゲちぃ申したとなあ。こんな大きい木を、あのう、燃やしながら、そけぇ、私は七人きょうだいの長女じぇござい申すから、私とか妹とか、七つ違いの弟がおり申すから、その弟と、その下ンとは抱ぁちぇ聞き申したばっちぇよ。もうその四番(よばん)めんとになれば、私より十才下じぇござり申すから、そいじゃから、その間のことじぇござい申すもんじゃからよ、やっぱり、今ぁなっちぇみれば、書きとめちぇおればよかったなあ、と思(おめ)ぇ申すばっちぇよ、もう、とっぴょうしもつき申さんなよ、なあこら。ハハハ……」
「ええ、よか話なあ。いくつぐらい聞き申した。全部で。何種類ぐらい。五十は聞いたでしょう。五十種類は」
「五十種類。そんなたくさんじぇござい申したかなあ。あんまり記憶にござい申さんばっちぇかや。まあ、どうっしぇも二十か三十かは聞き申したどう、なあ」

「はあ、そんなに」

「はい、父親がそら、とにかく三十八才じぇ死んじぇその、数えの三十八才じぇ亡くなり申したちゅうから、私の祖父は。そんとき、数えの十三じぇござり申したちゅうから、先も申し上げた通り、そいじぇ、こんど数えの十五才の三月ちぃ申したかなあ、そんとき、その父の母が亡くなり申しちぇ、そっしぇ、大正十年に亡くなったちゅうちぇ、あのう、書ぁちぇり申すから、その、祖父に連れられちぇ、そのう、なんか、あのう、娘の子のなんか嫁ぎ先に引き取られたとじぇござり申すちゅうから、そいじぇ、その子も、この田代さなぁ来ちぇ住みぃうったっちぇから、小いさかワラ葺きの家を作っちぇもろうちぇ、別居じぇござい申したてー。その祖父と、その妹がおり申したから、その妹と祖父とは、そのおば達といっしょに住んじぇ、そいじゃから、そがんなっちぇからはあんまりじいからは、話は聞かんじゃった、といい申したどう」

「つまり伝十郎さんは、じいさんから聞いたわけ」

「はい」

「伝十郎さんのお父さんから」

「いいえ」

「あの、お母さんの嫁ぎ先から」

「そうじゃなしぃ。自分の。女の子ばかり四代続いちぇ、四代養子を迎え申した、たてーや。そっしぇその五代目に生れたとがうちの父じぇ、その祖父というひとは、何処からかどっか下中かじぇあいごとござい申すどぉ。私の父はあの、八幡様のあっちんとこじぇござい申したから」

「要するに伝十郎さんのお父さんから聞いたとですか」

「いいや。そん人はその、先も申し上げたように、父親が数えの十三才の時に亡くなり申したから、そいじゃからもう、そがぁな話はせんじぃ、いっつもその四代養子をしちぇ、五代目に生れたとじゃから、その祖父にあたる人がものすごく可愛がっちぇ、その人から聞いたとじゃごとござい申すどぉ」

「祖父にあたる人」

「はい」

「祖父というのは」

「父親じゃあなしぃ、母親の父」
「あ、眞所の」
「はい」
「なるほど。眞所はお母さんが嫁いできたところ」
「いいや。父親が眞所生れじぇござい申すと」
「お父さんが眞所の人」
「はい。私の母親は、あのうなんか、上中の下さなぁ行く所ぇ、河内ちゅう所がござり申すからなぁ。あすこから嫁いじぇ来た人じぇござい申すから」
「眞所のじぃさんから聞いたということですか、お父さんは」
「はい。そいじぇ、いっつも、私たちの学校にも上らん小さい頃は、あのう八幡様のお祭りがあるちゅえば参詣に行かんばじゃ、今日はお田植じゃまた、ちゅうちぇいうもんじゃから、学校に上がるまじゃあ、いっつも、私ゃあ、ついちぇ行き申したと。そいじぇあの。」
「そうですかぁ」
「はい。そいじぇ、あの、太鼓をたたく時ガマオイジョウちゅうちぇ言うもんじゃ、ちゅうちぇ聞いちぇおり申したと。太鼓をたたきながら、苗かぎりというときには、踏ん込み踏ん込み植えちぇ、というちぇ、ちょうどそこばかり覚えちぇり申すと。」
「やあ、ありがとうございました」
「いいえ、なんも、恥かしいこっちぇござり申す。もう何も存じ上げ申さんじぃ」
「いえいえ、もう。良い話でございました。ありがとうございました。そいじゃあ、ちょっとどうも。どうもすみません」

(二)、人柱の話

とにかく、その、なんか、ある狩りをせらる人が、その前にその、口いれみちをどういうわけか、ちゅちぇいえばなぁ、その堤防がくずれたとか、井堰がくずれたとかしり申さんばっちぇ、雨期ぃなればその毎年くずるっとじぇござり申したとや。

そっしぇもう、こがんまじぇしちゃあもう、昔ゃぁ貧乏な人が多ござい申したちゅうから、「人柱を立てんばもてんとじゃなかっか」、という話合になり申したとや。そしたいば、

「そいじゃあ、私こそは」ちゅうちぇいうう人がおらんじゃったとじぇござい申すちゅうどぉ。そうしたところがその、さっきいうたその、娘の父親がなあ、この元ゆいを七巻き、巻ぃちょい人が、なってぇしようちゅうちぇ言い出したとじござい申すてーや。ずうっと調べちぇ来たいば、ほかぁにゃあ一人もおらんじぃ、言い出した張本人がその、ほら、七巻き巻ぃちぇり申したてーや。

そいじぇ、とうとうそら、お父さんは人柱ぁなったとじぇござい申すちゅうから。そっしぇ、婚期が来ちぇ、嫁ぇ行たちぇも絶対よけいな事は語らん嫁じゃっちぇ、

「なしかあ、この嫁はこがんあんどうか、まあ、他のことは申し分のなかよか嫁じゃが」

と思うちょり申したとや。

そっしぇ、たまたまその、どういう理由じゃったか、狩りの伴(とも)をしたときなぁ、その雉子が鳴いたときもう、上手じぇござい申したもねーや。そん、あっちじゃった、というところをば射たとこいがその、一発じぇそのしとめたとじぇござい申すてーや、そら。

飛びたっちぇ行くところをば、打つとじぇござい申すちゅうからなあ。そしたとこいが、さっきいうたその、

口ゆえに父はながらの人柱、
雉子も鳴かねば　打たれぬものを

と、こう歌うたとじゃちゅうと、そいじゃから、女というものは、ひと口じゃなしぃ、片口しかしゃべらんもんじゃ、ちゅちぇ、そんとき父親がそんたあもう、四、五年生まじぇ言い申したなあ。

「その歌は何という歌でしたかなあ」

口ゆえに　父はながらの人柱
雉子も鳴かねば　打たれぬものを

ちゅうとじぇござい申すちゅうどう。

「なるほど、えー」

「はい、そいじぇ、そんときゃあ、小っかときゃあ何ちゅうことかあんまり分らんじぃ、人柱ちゅうは、どがんとかなあ、人間のまさか生き埋めぇ、埋めたとじゃあなかとじゃろうがと思うちぇ、小学校に上がる前頃(ごれ)ぇなっちぇ聞いたいば、

「人柱とは、生き埋めにされたとじゃちゅう」と、こういうことを、昔の人は平気じぇやったとじゃろうか。人の命なんか何とも思わんじゃったとかなあ、ちゅうちぇ思うたもんじぇござい申すと。

「これは誰から聞いた話ですか」

「そんたあ父親から聞いたばっちぇ、おそらく、父は祖父に聞いたとじぇござい申すこてーなあ」

「ははあ。また次の話をひとつ」

(三) ヨコザに鎌を持って入らないワケ

あ、そうじゃ、

あの、妊娠した女をばなあ、亡くなったからちゅうちぇ、そのままその土葬、昔は土葬じぇござり申したろうから。土葬にしちぇしまえばなあ、そいがその、ヌレヨメジョウちゅうもねぇなっちぇ出ちぇ来ちぇ、そっしぇそんとは、その、いつでもその、赤ン坊を抱あちぇ、出ちぇくいたてーや。

そいじぇ、あのう、後ろからものを言いかくっとじぇござり申すてーや。そいじぇ、

「この子をいっとき抱あちぇっちぇくれんどうか」

ちゅうちぇ、そいじぇ、抱かさるれば、だんだん、だんだん重とうなっちぇき申すたてーや。そっしぇ、そのあいだに、その、私が身軽になった間に、三千世界を廻っちぇくいから、すぐじゃからちゅうちぇ、抱(だか)さるいたてー。後から来ちぇ、抱かさるいたてーや。

そっしぇ、そんとき、あのう、知らんじぃ後生大事に、それを抱っこしちぇれば、もういつまじぇたっちぇも戻っちぇ来申さんちゅうから、そのお尻をつねっちぇ、泣かせーば、そうしぇーば、あわてちぇその、戻っちぇ来っとじゃちゅう、と。

そうしぇーばなあ、そいじぇその、昔のあの、今はトウミちゅうちぇ、すっとがあり申すからなあら、あがんとをせんじぃ、あのうなんか、豆なんかをば、こうっしぇすっとがあり申したが、あんたあ、何ちゅうたったかなあ、お父ちゃん、

「ミですか」

「はいミちゅうちぇ、こうっしぇすっとがござい申したどうがい。そいの中あ、あの、そいこそもう、ものすごく研いだ鎌をばなあ、入れちぇ、持っちぇ行っちぇその、たち割っちぇ、お腹の赤ちゃんは別に葬むっちぇせんば、ヌレヨメジョウになっちゅうちぇ、そん、そがんすいもんじゃったちゅうちぇ。そっしぇ、この奥のこの寝室はヨコザちゅうちぇ言い申したからなあ、そけぇにゃあ、鎌は絶対に持っちぇ入らんもんじゃ、ちゅうちぇ、そがんいうちぇあのう言うちぇ聞かせ申したと。父親が。

（四）鬼子（1）

「おばさん、歯が生えた何ですか」

歯が生えた子供が生まるい場合がござい申すたちゅうから。そんとは鬼子というちぇ、その、なんか禍の、その、この家に、悪魔じゃちゅうちぇいうちぇ、そいじぇ、そんとを育てちゃあいけんとじゃちゅうちぇ、殺しちぇ、墓あ埋めちぇしもうたとじゃちゅう、ちゅちぇや。

そんたあ、なっとしちぇ殺したとか、首をしめたとか、どうしたとか、そういうこたあ聞いちゃあおり申さんばっちぇ。

「そいだけの話ですね」

「はい」

「これは誰から聞きましたか」

「そんともやっぱり、母じぇござい申したどう、なあ」

（五）、鬼子（2）

この子どもが、母のいとこの子供がよ、三才になっちぇも歯が生えちぇ来申さんじぃなあ。

なっとしたたろうか。腹ン中から歯が生えたちゅう話は、だいてーろーさんの、その、ばあさんが生んだ子は、その、歯が生えちょったちゅうが、生れた時からや、そいじぇか、あの姑女さんが殺しちぇ、あのう、あがんしちぇしたとじゃちゅうが、この子は、なっせ三才になっちぇも、何の罰をかぶっちぇ歯が生うらんたろうか、ちゅちぇ、歯が生えちぇちゅわんじぃ、歯が生うらんちゅちぇいうもんじぇござり申したから、こっちの人はなあ。歯が生うらんとじゃろうかちゅうちぇ、そ

んとき初めちぇ、あたしは、ええ、そがん子も生まるったけりゃあなあ、そがんたあ、歯が生えちょるばかりい、なっとしちぇ、そがん子を殺さんばいけんたろうかい、そがんかわいか子供をば、ちゅちぇ思い申したから。

（六）猿聟の話

貧乏な百姓がおり申しちぇなあ、そっしぇ、もう、つれあいは居られんとじゃったごとござい申すどう。そっしぇ、その娘三人を、種子島ン人あ、あのう、べっぴんさんとはいわんじぃ、よかよめじょうじゃけらあといい申したから。

三人共に、どっちがその、あのう、今の例えなれば、あのう、あやめかかきつばた、ちゅうような、そのきれいな娘さん達じぇござい申したたてーや。

そしたとこいがその、貧乏じぇござい申すもんじゃから、その、くる日もくる日も開墾に一人行たちぇ、娘達をつれちぇ行たちぇもいっこう、役にたち申さんたてーやほら。

そっしぇ、たまたま、あんまりたいそうかったもんじゃから、太か木の根っこをその、おこす時なあ、

「だいか（誰か）まあ、こりょう手伝うちぇくるい人がおれば、娘を三人持っちぇいから、一人をくるいものを。だいか居らんかどうか」

と独り言をいうたいば、そしたとこいが、

「もしもし」

ちゅうちぇいうてくる人がおるから、こっしぇ振り返っちぇみたいば、大きな猿じぇござい申したたてーや。

「今何ちゅうちぇ言うたか」

ちゅうちぇ、その猿が言い申したたてーやそら。あんまり、木の根っこをもう、今日じぇ三日かかったちゅうちぇ。そいじぇも、もう、なかなかおこされんもんじゃから、

「この木の根っこを、こやあちぇくれぇば、娘をば、あのう、くるいものを」

と、今いうたとこいじゃ、ちゅうたいば、

「みやすい御用じゃ、そいじゃあ、すぐこやすから、くれぇ」

ちゅうちぇも、

「なんの、この猿がこさるいもんか」
と思うちぇ、
「うん、そいじゃあ、たのむから」
ちゅうちぇ、自分なだまっちぇ、坐っちぇ見ちょり申したたてーや。そしたらもう、またたくまにこやしちぇしもうちぇ、
「じゃあ、明日つれかぁ来るから」
ちゅうちぇ戻り申したたてーや。その猿と別れ申したたてーやそら。
「どうしょうか、まあ、あのやつと約束をしたが、簡単に掘り起しちぇくるったあ思わんじゃったもんじゃから、あがんことを言うちぇじゃったが」
と思うちぇ、もう、晩ごはんも、お茶ものどを通っちぇ行き申さんじぃ、そっしぇ、しょげちょったところが、その、娘たちが、
「なっしぇ、疲れちょってー、お茶も呑まんじぃ、あのう、ごはんも食べんとか」
ちゅうちぇ、あのう、聞き申したいば、
「実は、かくかく、しかじかの約束をしちぇ来たもんじゃから」
というたとこいが、そうしたところが、長女が先ず怒りだし申しちぇ、そいじぇ、
「こともあろうに、猿の嫁なんかあ行く人が、どけーおいか」
ちゅうちぇもう、
「もう絶対わたしゃあ、行かん」
ちゅうたいば、次女も
「わたしも絶対行かん」
ちゅうちぇ言い申したところが、末っこの妹が、やさしか妹じぇ、まあ、父親がかわいそうになり申したもねぇなあそら、
「じゃあ、姉たちが行かんと言う時ゃあ、わたしが行くばっちぇ、欲しかもんが一つある」
ちゅうちぇ言い申したたてーや。そっしぇそん、
「家にあるもんなればなあ、何じぇも持っちぇ行たちぇよか」

ちゅうちぇ、そいじぇ、
「一体、何が欲しかとか」
ちゅうちぇいうたいば、
「そけぇ、坐っちぇるかめが欲しか」
ちゅうちぇ言い申したたちゅう。そうしたとこいが、こんだあその、何日か、約束の日が来たいば、迎えに来申したたてーや。そうしたとこいがその、こっちのよか道さなあ行かんじぃ、この悪か方の道さなあ、こっちさなあ行こう、ちゅうちぇ言い申すたてーや、その娘が。
そしたいば、猿どんな、嫁どんが言わいことじゃからと思うちぇ、そこを行きょうったいば、途中じぇその、丸太を一本渡しただけの谷川があっとこいじぇござい申したちゅうから、くるっと、かえし申したとじぇござい申すちゅうどお。そしたとこがその、下さなあ落ちたいば、水が、かめん中さなあ、ゴボッっちゅうちぇ、はいっちぇしまあ申したから、沈んじぇ行き申すたてーや。
そいじぇその沈うじぇ行く時ぃなあ、その娘が、
猿さむらいは流れて行くが、
あとに残りし姫は悲しい、
ちゅちぇその歌うたいば、そしたいば、猿も悲しそうな顔をしちぇ、猿もなあ、そいじぇ、手を振っちぇ合図をしちぇ沈うじぇ行たちぇ、そいじぇ家さなあ戻っちぇ、親子四人じぇ、仲良か生活をせらったたちゅうわい、そいじぇおしまい、ちゅうちぇ、ハハハ……、そがんいう話を聞いたとを、思い出し申した。そいから、ヘビの何とかちゅうとも聞いちょり申したばっちぇ、そんたあもう忘れ申した。
「こらよか話ですなあ」

（七）蛇の嫁

その人も三人娘だけじぇ、おる人じぇござい申したてーそら。
そしたいばその年、大かんばつじぇ、田が眞白うひび割れちぇしまあ申しちぇ、行たちぇも無駄じゃたあ思うちぇも、も

う気ぃかかっちぇ仕様のなかもんじゃから、もういつもいつもその、田んぼを見かあ行きょうったとじぇござい申すてーや。

そしたとこいが、あのう、こんだあもう、よじれたごとなっちぇった葉っぱが、褐色にそら変色して来申したたちゅう。そしたとこいが、

「この田が、米が一粒もとれんごとなれば、あの娘達は、もう飢え死にょうさすいより仕方が無かなあ」

ちゅうちぇ、独り言を言い申したたてーや。

そうしたとこいが、小いさか、短かか一尺位のヘビが出ちぇきちぇ、

「この田あ、水がかからんば、飢え死にすっちゅうは、なっちゅうことか」

ちゅうちぇ、

「別に田んぼを持っちょらんとじゃ。じゃから、三人の娘と自分なもう、飢え死にするより仕方がなか」

というちぇいうたいば、

「その娘をば、あの、一人くれぇば、そうしぇーば、あの、明日の朝来ちぇ見れば、稲は、もとのごとなあちぇおくが、くれんか」

ちゅうたいば、まさかそういうことが出来い筈がなか、と思ぇ申したろうからなあ、そいじぇ、

「そいじゃあ、喜うじぇ上げ申すから」

ちゅうちぇ、戻っちぇ、明日ぁ行たちぇ見たれば、たんぼは青々となっちぇ、水がいっぱいたまっちぇおり申したたてーや。

そしたいばもう、「約束じゃ」ちゅうちぇ、早速、娘をもらいにあがり申したたちゅうなあ。そん時ももう、長女の人も、次女の人も、「行かん」ちゅうちぇ、あの、

「蛇の嫁になったちゅうちぇ、聞いたこともなか。そがん約束を、すっちゅうがあいもんか」

ちゅうちぇもう、怒っちぇ、どっか逃げちぇしもうちぇ、そうしたいば末っ子が、約束じゃからちゅうちぇ。

そうしたいば、とうとうヘビが連れかあ来ちぇ、そっしぇ、ついちぇ行きょうったいば、その、野を越え山を越えしちぇ、ずうっと奥に入ったところが、きれいなお城が見えちぇ来申したたてーや。そっしぇ、

「あすこは、何ちゅうとこいじぇござい申すか」

ちゅうちぇ聞いたいば、

「何ちゅうところというちぇなあ」
というちぇ、その、詳しかこたあ、言うちぇ聞かせ申さんじぃ、そしたいば、その門さなあ入っちぇ、その家さなあ、さっさはいっちぇ行き申すたてーや。そっしぇ、
「なんか、親せきかなんかの所かなあ」
と思うちぇり申したいば、そこがそのヘビのお屋敷じぇ、そうしたいば、こんだあその家にはいったとたんに立派な若者になっちぇ、そいじぇ、そこじぇその、しあわせな生活を、金銀サンゴ、いっぱいつまったお部屋もあっちぇ、よか生活をせらったげなげな、ちゅうちぇ聞き申したどう。ハハハ……。
「やあ、いい話ですねぇ、色々知っておられますね」
「毎日聞いたとじぇござり申すばっちぇ、もう忘れちぇ」

（八）カラスとタカ

「モグラやアリやタカ、ツバメ、カラスなどの話は知りませんか」
「ああ、からすとタカが、カラスとタカはもともと眞白い鳥で、空を飛んじぇっ時ゃあ、カラスが飛んじぇっとか、タカが飛んじぇっとか分らんようなちゅうことをば聞き申したばっちぇ。そしたいば、そんとはその見分けがつかんからなあ、二人は、二人じゃあなか二羽は。その、たまたま、なっしぇ二羽、そがんしちぇしたたろうかちゅうたいば、
「話ゃあ聞いちぇけ」ちゅうちぇ、
「カラスとはけんかこそすれ、仲良うする筈がなか」
ちゅうちぇ、わたしがいうたいば、
「だまっちぇっちぇ聞け」
ちゅうから、聞いちょり申したいば、眞白うしちぇ見分けがつかんから、あのう、お互い様ちゅうちぇ、いい をしちぇちゅちぇ言い申すからなあら、そのいい をしちぇ、ちょっと染むってぇしょうちゅうとこれぇなり申したてーやそら。
そしたとこいが、タカは黄色いえのぐちいい申したばっちぇ、黄色じゃあござい申さんどうなあ。そりょうば準備しちぇ、あのう、カラスの方は墨を準備し申したたてーや。そっしぇ、タカには、きれいに念を入れちぇそら染めちぇくれたとじぇ

ござい申すちゅうばっちぇそら、あのう、こんどは、カラスは、染めちぇもらおっとき、もう、いねむりをし始めたもんがもう、いくら起けぇちぇも、もうこんだあせん、ちゅうちぇもすぐまたいねむりをし申すたてーや。あんまり何十回もくり返すもんじゃから、うるそうなっちぇ、頭から、かけたとじぇござい申すちゅう。

そいじぇ、からすは眞黒うなっちぇ、そいじぇ、あの、今頃(いまごら)あ、見申さんばっちぇ、カラスがタカを追っかけちぇ歩くとをば、見かけ申したとやなあ。わたしたちの小(ち)っか頃は。

そいからその、自分はきれいに染めちぇやったとに、あのう、墨を頭からかけちぇ黒うなあた、ちゅうちぇ、怒っちぇ、今だに追っかけちぇっとじゃ、ちゅうちぇ、そんたあ、父親が言い申した。あのう、はだか麦の種をつくいもんじぇござい申したから、そこをつくり行たちぇっちぇなあ、そうしたいば、何とかいう、あのう、いうたいば、

タカは死すとも穂は摘まん、ちゅうちぇ、言うもんじゃちゅうちぇ、あの、言い申したわけよなあ、そしちぇ、わたしが、

「そがん、なんのこてー、タカがまのう穂を摘む筈がなかんどうが。(ちゅうちぇ)、カラスなればなあ、食ぶっちゅうちぇ摘むばっちぇ、タカは食べ物がちごうから、摘まんとじゃ」

ちゅうちぇ、私が言うたいば、あの、

「人間に云いかえればなあ、死ぬっちゅうちぇも、人の物には手を出さんちゅう戒めのことじゃんどう」

と思うちぇっと、父親の話になあ、そいじゃから、そがんおかしか、眞直ぐなことばかいじゃあ、世中は渡っちゃあ行けんとじゃ、ちゅうちぇ、人が言うことの裏と表をちゃんと聞き分けんば、一人前の人間にはならんとじゃんどう、ちゅうちぇ、父親が言うたことを覚えちぇり申す。

「なかなか良か話ですね」

「父親は、何かちゅうちぇ、頭からガミガミ言う方じゃあござい申さんじゃや、ほら、なんとかいう人は、どうじゃったからどうどうじゃ、ちゅうちぇや、そいじゃから、あのう、こうせんばいけんとじゃ、ちゅうちぇ、いつもいうもんじぇござい申したから。そいじぇ、人の気ぃさわいようなこと、人のいわば人格をそぐようなことは言わんもんじゃ、ちゅうちぇ言うから、

「そんたあ、なっとしちぇ分いと」

ちゅうちぇ、まだ小(ち)ちゅうござい申すからなあ、そうしたいば、

「自分が言われちぇ腹の立つようなことを言うちゃあいけんちゅうことじゃ」ちゅうちぇや、そがん言い申したと。

（九）、正直息子

たーたーちゅうことは、何ちゅうことか、ちゅうたいばや、その、親は子のためや、その子は親あなっちぇ、子のためぇなっちぇ行くとを、たーたー、ちゅうもんじゃ、ちゅうちぇや、たーたーのもんじゃから、短かい期間じぇあっちぇも、両親から自分も可愛いがられたとじゃから、そいじゃから、ここが足らんじゃった、すまんじゃった、ちゅうちぇ言う必要はなか、ちゅうちぇ、そがんいうちぇ、そいかろうもう、口はきけんごとなり申したろう、かわいそうに。

「はあ、代代という意味ですね。たーたーは」

「はい」

「あのう、すずめとかですね、いま、鳥を聞きましたけど、この動物全般ですね。そいから正月にちなむ話とかなあ、あるいはお盆にちなむ話はないですか。彼岸でもいいです。正月の門松の由来とか、あるいは正月の何とか、まあ何でもいいです」

「あのう、しめ縄ちゅうちぇ作らあちゃあら、しめ縄を作ったあら、何とかちゅうちぇ、ワラをば、どうか、ちゅうちぇすんどうが。そっしぇ、そん時ぃちゃあ、今は、はさまんばっちぇ、炭をはそうだろうが。あんとのこたあ、知らんどうが父ちゃん」

「はあ、そのことをひとつ。それはどういうこと」

「そんとも、私もよう覚えちゃあおり申さんばっちぇ」

ある正直なその孝行息子の、貧乏ななあ、十七、八の若者が、おったとじぇござい申すどう。そしたとこいが、その、年の晩じぇも、大晦日になっちぇも、何も食べさせちぇよかごっそうがでけんじゃったとじぇ、ござい申すどう。

そしたとこいが、その、炭じぇも焼ぁちぇ、あのう、昔は穴を掘っちぇ、その中あたきもんの入れちぇ、それぇ火をたあちぇ、どうかしたとじゃごとござい申すやなあ。そいじぇ、そがん、小(ち)っか炭じぇも、せめて温(ぬっ)かお茶じぇも湧かあちぇ呑ましょうかと思うちぇ、それをしに行たちぇり申したとこいが、そいがもう大晦日の夕方じぇござい申すちゅうどうほら。

そうしたとこいが、上ぇ、土をのすっちゅうちぇ、その、鍬じぇ起しい行たとこいが、大判小判がぞくぞく出ちぇ来ちぇ、

そいじぇ、この炭を焼かんばなあ、大判小判が出ちぇ来んとじゃったちゅうちぇ、そっしぇ、それをよいこうじぇ（喜んで）、もろうちぇ来ちぇ、そっしぇその炭をば、しめ縄にはさんじぇ、そいじぇしたとが、そもそもの始まりじゃちゅうちぇ、祖父がやなあ、こがんいうもんじゃった、このしめ縄に炭を、こうはさむとじゃ、ちゅうちぇ、そがんいうちぇ、言い申したどう。

なっしぇ、こがん炭を小（ち）ちゅうしちぇ、こがんせんばいかんと、ちゅうちぇ、わたしが聞いたいたいば。

「これは、お父さんから聞きましたか」

「はい、これは父親から聞き申した」

「お父さんは、とうのしんさんから聞いたとでしょうか」

「いいえ、祖父から聞いたとじぇござい申すどう。とうのしんは父親じぇござい申すから。その伝兵衛（でんびょうえ）ちゅう」

「とうのしんのお父さんは何という人」

「そん人あ、知り申さんにゃちゃあ。あっちの、下中の郡原とか夏田とかいう所から養子にきた人じゃ、ちゅうこたあ聞いちょり申すばっちぇ」

（十）、ガローの祟（たたり）り

「初めから話して下さい。どこの場所ですか」

「その、神社のなあ、一番の鳥居のところの、こっちからこう行けば左側にや、田代神社の、あら、どしこばっかいじゃちゅう。道ぃとられたから、もう狭うなったろうなあ。狭かとこいがござい申さあや。そっしぇ、そけぇ、かねちゃあ落花生を植ゆっとじぇござい申すたばっちぇ、あのう、オーギを差あちぇいごとござい申したと。ほいじぇその、そこんとこれぇ、わたし達の小（ち）っか時、こんくらい（これ位）のその、サンタブの木が、何か太か切り株から、出ちぇ来たとじぇござんすどう。

そしたいば、そけぇにゃあ、あんまり行かんとこいじゃ、ちゅうちぇいつも、あのう、いわれちぇおり申したばっちぇ、行たちぇもどうもなかったから、いつも行きょうったわけよ。そうしたとこいが、その、三次郎ちゅう人の姉じゃったちゅうが、まだ小っか頃なあ、その、この三次郎の父親は三助ちゅう人じぇござい申したちゅうから、ほうしたとこいが、そこの

木陰じぇ、むしろを敷いちぇ、きょうだい二人じぇ遊びょうれ、ちゅちぇ、遊ばせちぇ、仕事をしょうり申したたてーや。そしたいばもう、しばらくしたら、なんかのごとなっちぇしもうちぇや、そっしぇ、

「大変なこっちゃ。人のいう通りじゃけりゃあ。おいが土地なんでーや、何者が住みつぃーちぇっとか」

ちゅうちぇ、そいじぇ、人糞のいっぱい、いっぱい持っちぇ来ちぇ、かけ申したたてーや。そしたいば、それっきり、もうそこは、そのようなことはなかようになった所じゃ、ちゅうちぇや。聞き申したばっちぇ、その時そらイラ（毛虫）が死に申したもねーやなあそら。

（十一）、ガロー・ヌレヨメジョウ・ガラッパ

そいからあの、しげるさんの豚小屋の所も何とかいうたとこじゃろうなあら。

むかし、子供の時、行たちゃあいけんとこじゃ、ちゅうちぇ、あんまりうるさくいうから、「なしかあか」ちゅうちぇ聞けば、

「ガロー、ちゅうとこじゃっちぇ、行けば、病気ぃなったり、どうしたりすっとこいじゃ」

ちゅうちぇ。

「ヌレよめじょうが出る所はないですか」

「あら、お父ちゃん、いま言うとうあら、あのう、あすけぇ、ごみ捨すっ所れぇ、そっしぇ、めくらおとしに、あすこの下あ、なあや、あのう、ごがん所れぇまだこがん竹んなか時なあ、あのう、なおやおじさんにゃ、いさおさんのお父さんにゃ。

なおやおじさんが、あのう、昔からその、あっちの谷ぃにゃあ、ヌレヨメジョウが出っとこいじゃちゅうちぇ、言うとこいじゃったてーや。そしたいば、なおやおじさんが、そのタケンコかぎい行たとこいが、あのう、なんか人の降りちぇ来るような気配がしちぇ、そっしぇ、自分の後を過ぎ去ったような感じがすいもんじゃから、ふり返っちぇ見たとこいが、髪ン毛をここまじぇこうした、この位の人がおじっちぇ行っこっちぇ、こっちから声をかけちぇも返事もせんじぃ、下さなあ、おじっちぇ行たちゅうちぇ。あのう、いつもあそこは、走っちぇ通る所じゃっとう子供の時ゃあ。倒れた時も、母親よっか後ぇおっちゃあ大へんじゃ、ヌレヨメジョウが出ちぇ来たぎぃ、と思うちぇ、ほうほうなっちぇ、先ぃ行くとこいじぇござい

申したどう。聞いちぇらんじゃった、あんたは」
（実雄さん）「西のあすこの、前のハナから、下西に行く道路が走ってい申すよなあ、前のハナから、こう西海岸から上ってきて、その道路と交差する所に、牧の神があります。そこが一番出る所だと、小さい頃から聞いていました」
「牧の神はどこの」
「あんたあ、西のじげんじぇ、なんか時々、あの、お祭りがあるもんじゃったろうなあ。どんが小っか頃、今もある筈」
「平野の西ですか」
（実雄さん）「平野の西です。前の原に行く途中、ちょうどこう……」
（スミエさん）「道がこう別れちょいところの、こがん所ぇ、ソテツやなんかがいっぱい生えちょっちぇなあ。もう何十年も通ったことが無っから、わからん。そこもヌレヨメジョウのとこ？　ハハーン」
（実雄さん）「昔、聞いたような気がする」
「さっきのですね、あのう赤ちゃんの腹を切った話、妊娠した女の話ですね、それは、ヌレヨメジョウですか、山姫ですか」
（スミエさん）「その子を切っちぇ出さんばなあ、ヌレヨメジョウになっちゅうちぇ、そいじぇ切っとじゃちゅうちぇ聞き申したがなあ」
「なるほど、はあ、はあ、はあ」
（実雄さん）「死んだ子を、そのまま、身ごもったまま死なせると、その女は、再び出てくるという意味じゃあなかろうか」
「じゃかもなあ」
「ガラッパのことを何といいますか」
「ガラッパちゅうどなあ、ここの人はなあ」
「川の者とはいいませんか」
「ガラッパちゅうちぇいうとなあ」
「ガラッパから尻ンゴはぬかれませんか」
（スミエさん）「昔ゃあ、先生、あのう、せんが渕ちゅうところがござい申すからなあ。あのシカナキ川のずうっともう、あ

の浜ぎわの、あすこへこう、どがんなっちぇっといもう（今は）。こう曲っちぇいとこじゃったどうなあ。いっぺんだけ行たことがあいと」

（実雄さん）「せんが渕ちゅうちぇ、有名なとこやなあ」

（スミエさん）「もうちゃあ、この位のうなぎが、あのう、どうかした時ぃにゃあもう、そいこそ、ぎっしり、ひるねをしちょいとこじぇ、ござい申したちゅうわ、ちゃあ」

「何匹も」

「はい。そいじぇ、そけぇその、今はもう工事をしょうらあ、浅うなり申したろうからなあ。そいじぇ、そがんとこなんだあ、いっぺん父親がつれちぇ行たちぇもろうたから、そん時見たばっちぇ、そがん、うなぎは一匹しか見つかり申さんじゃったばっちぇ、そこの近くにその、馬をつなげばなあ、あのう、ガラッパどんにひっぱり込まれちぇしもうちぇや、そいじぇもう、あんまりつなあじゃあいけん、ちゅうちぇいうところじぇござい申したとやそら。

そうしぇーばもう、西野ぢゅうの一番のあばれ馬を、或る日、どういうもんが、そがんするか、ガラッパじゃんどうから、ちゅうちぇ、そいじぇその、つなあじぇおき申したれば、こんど、逆さまにその、家まじぇ引っぱっちぇ行き申したたちゅう。そうしたとこいが、この皿の水をこぼせば大丈夫じゃちゅうからというちぇそら、そうしたいばそら、馬からたづなじぇ引っぱられたわけじぇござい申すからなあそら、そいじぇ、その間、水はこぼれちょったから、木にこう繋りつけちぇおり申したたてーや。そうしたとこいが、その、そこの下女が、

「こんわろうの、あばれんぼうが、何匹の馬をば喰ちぇしもうたとか」

ちゅうちぇその、馬あやる水をば振ぃかけたとこいが、その手綱じぇぎゃん繋られちょった綱をば切っちぇ、そっしぇ逃げちぇ、そっしぇもう、そこのせんが渕ぃにゃあ、もう、ここにおったぎい、またされたらいけん、ちゅうちぇ、こんだあ、大川の渕さなあ引っこしちぇしもうちぇ、そん時、片目がつぶれちぇり申したたてーや。引っぱらるい時なあ。

そいじぇ、あこへ住ンじぇる、うなぎも、えびもなんも片目になっちぇるとじゃちゅうちぇ、父が言うちぇ聞かせたことを、覚えちょり申すどう。

「ほう。これは面白い」

「そがん、だいが一匹一匹探ぁちぇ見たんどうかい」ちゅうたいばや、

「そがんいうとこいじゃてーや、わごう、いっつも、なっせ、なっせ、だいが見たろうかちゅう、ちゅうちぇ、怒られちぇ。怒られながらもいっきぃい言うちぇ聞かせちぇや」

「それはお父さんから、聞いた話ですか。スミエさんが何才の頃」

「はい、小学校に上がらん時じぇござい申すどう。そけぇ行たちぇ見たとも、わたしが学校へ上がらん時じぇござい申すから」

（十二）、下中・西之の話あれこれ

「たぶんにょ、ワナを掛けかあ行けばなあ、土がなしぃ、ほと木のワナじぇござい申すどう。股あなった木を、先の方を尖んがらがっしぇ、打ち込むとじぇござい申すちゅうから、両方にこう木をこうっしぇ、そうすれば、そいが、入っちぇ行かんとこじゃちゅうちぇ、石ころだけじぇ。たしか、田んぼは、昔は海かなんかじゃっちぇや、そいじぇ、その、石をばこずみ上げちぇ、そいじぇできたとじぇなかろうか、ちゅうちぇ、爺いが言うちゅうちぇ、じゃったがなあ。

そいじぇこんど、構造改善の時なあ、あの近くに、あの磯にあるような、こうかどのつぶれたような石が、いくつも出ちょり申したから」

「それはどこにですか」

「そんたあ分かり申さんにゃちゃあ。構造改善のしたその当時はなあ、あのう、森山のちょっと沖の方に道ができちょり申すからなあ、あすこのところに、ところどころにこうでちょり申したろう。あの、かどのつぶれた石が。あ、やっぱり、父が言うたごと、あのう、磯じゃったたあなっかなあ、と思い申したと。あんとを、拾うちぇ、どっかおけばよかったなあ、父ちゃん」

「浜山は何かいわれがありますか」

「そがんたあ聞き申さんどう、なあ」

「あの下中の小学校の花峯ですね、あのいわれはないですか」

「聞いたことは覚えがござい申さんなあ、やんかみどんの話を聞き申したばっちぇ」

「花峯の花はこの鼻じゃあないかと思いますがね」

「いま使われちょったあその咲く花じゃばっちぇ。じゃかも。あの、お父ちゃん、尻いかけの鼻とかなあ、あがんときゃあ、まつハナとかよ、角ン鼻とかいい申すから。そうかもしれ申さん、ほんとう。なあ」

(実雄さん)「もともとはそうでしょう。鼻ちゅうは、つき出たところをいうから。とこいじぇ、本村の公民館のネキの墓地、そこの墓地のことは詳しくは知らん。小さい時も浜なんか学校からかえる時もあんまりこわいから行くなといわれ、行ってみないもんだから。その通ったちゅうたなっか、あのあら、本村の」

(スミエさん)「その坂道じゃろうがい、そいも小学校の一年生か二年生の時通っちぇ、ここは何よ、ちゅうちぇ、くみさんになあ、名越くみさん。こっしぇのぞいちぇ見たいば、「すみえさんそこを、のぞいちぇ見ちゃあ、いけんとこいじゃろう、だいもそこを、のぞく人はおらんとじゃから、いっきいこい、いっきいこい」、ちゅうちぇ、あのう、どがんとこいか知らんばっちぇ、そこを通っちぇちゃあ、あすこのあら、小川トメオさんちゅうかあら、あすこのとこいさなあ、出ちぇ来たことを覚えちょんどう。

そいからあの、才川先生の家からも、こういっきい、才川先生が泊りぃつれちぇ行たから、あたしを」

「奥さん、ママ子の話は知りませんか。ママ子いじめとかなあ、そいから昔話、あるいは親孝行者の話とか。お盆のしょうろうさんの昔話は知りませんか」

「そがんたあ、きいたことござい申さんなあ、とにかく、あのう、わたしたちは神とうじぇござい申したからなあ、そいじゃから、お盆ちゅうは、本当は、佛のあいじぇござい申すちゅうから、そいじぇか、そのこてーつぃちゃあ」

「あの遠矢の火がありますね。本村の前にも公民館にもあるし、あれの話は少しはまあわたしも聞いてはいますけど」

(スミエさん)「どっかから入っちぇ来ちぇあら、あのこうり坂のあすこんとこれぇも、石が建っちょっちぇじゃっとうあら、田の所ぇ」

(実雄さん)「あんたあ、なんか緊急の場合に、あのう、そこらへんが、あんまりよく分かりませんがよ。やっぱりここは、最近、いろいろ調べたら、そこん所ぇ、田代の上のあっちの方の峯に、あらなんちゅうたかなあ、やおこの峯というのがあって、そっからこう川下のそこの神社の、あすこの公民館の前に行って、そいから、かめんくぼという所に行って、いっぺんかめんくぼから、本村のところへ行くとで…、」

「やほこの峯ですね」

「やほこの峯、やは恐らくかみ代の矢でほこは鉾ですね」
「それはどこにあります」
(実雄さん)「そこの田代の入り口ですね。あの道の。そいじぇそこに碑がないかと思っており申す」
「田代上の入口ですか」
(実雄さん)「上中に行く途中の……、そこからその、公民館の前の田んぼのところを…」
「公民館の前の田の所ですね」
(実雄さん)「はい、田の岸から家の川口のそこにおちて、それからこんど、また、次に矢を飛ばしたのが、さっき言った、先生が行かれたそのカメンコウの頂上ですなあ。そのカメンコウの頂上から、こう、矢を射たのが本村の前のしがらきの川、そこだといわれて、その、いうんですよ。」
「それから、中ン崎ですね」
「中ン崎、次はあのう」
(スミエさん)「あんとうちゃあら、あん石ゃ、みつからんごとなっちょっちゅようっとう、あんたじゃあ、なかったかあら、その石、建っちょった中ン崎の」
「ありますよ。昨日行ったらありましたよ」

以上、南種子町の三人の方の昔話記録を紹介した。ご三人共、頭が大変よく、話が達者である。そして、内容がおもしろい。この話は、学校や、ご家族で読んで、話題の一つにして下さい。方言のまま記してあるので、南種子町方言をよく知らない方は読みづらいかもしれない。でも、ていねいに読まれると、意味が分かればおもしろいはずであり、方言についても馴れることと思います。

地元の方、又はよその人でもこの方言を自由に話される方は、ぜひ、声を出して読んで下さい。又、大人が子供に読んでやったり、逆に子供が大人に読んで上げたりしたらいっそう有意義でしょう。

ご三人のすぐれた伝承者のご健康とご健在を祈ると共に、この昔話が教育に、一家だんらんに、又、親子の対話に役立つことを心から祈ります。(一九九五年一月二日、下野)

伝承者名簿（敬称略）　（各本文末にも掲載させていただいた）　平成6年3月

上　中

氏　名	住　所	生年月日
遠藤正人	本町2223－13	S 5. 3.16
岩坪安昌	本町2234－9	M44.10.27
吉永早志	本町2217－2	S 2. 8.25
松下キクエ	本町	T 7.
有留増芳	河内520	S.18. 4.11
〃トシ	〃	T 5. 1. 1
関田種秋	焼野1823	T. 5. 4. 1
〃ミネ	〃	T11. 5.11
戸川秋雄	焼野1883	T 7. 2.20
〃リツ	〃	T14. 4. 1
迫田ハル	焼野	
善岡義雄	焼野1863	T 7.12. 1
恒吉ミエ	焼野1857	T13. 5.11
日高フジエ	仲西	M36. 2.23
里園フキエ	〃	T13. 8.20
堀之内磐男	仲西3048	T 4. 3.20
河野泉	西之町3342	T13.10.30
〃ツミ	〃	T14.11. 1
原田シズエ	上野2983	S2. 2.15
日高哲則	上野	S27.
〃トモミ	〃	S18. 8.10
大脇藤作	上野2910－3	T 3. 3.18
〃トヨ	〃	T12. 3.10
外園チカ	上野2810	T 9. 9. 1
小脇カツヨ	上野2973	S14.10. 1
田上広喜	大宇都172－21	T 9. 9.26
〃ミヨ		T 7. 3.10
河野律雄	山崎	S23.
古市啓喜	河内	T 8. 1.1
〃美江子	〃	T14.11.7

島　間

氏　名	住　所	生年月日
河東時徹	向方	M40.
柳田駒則	向方	M37.11.15
久保田光枝	大久保	T 8. 1.14
西園ハツエ	大久保2989	T 9. 6. 1
牛野新吉	牛野1470	M39. 8. 1
牛野新助	牛野	
牛野春義	牛野	
牛野春芳	牛野1482	T 7. 3.15
牛野時夫	牛野1476	T15. 3.10
中川紀男	牛野1454－5	S10. 3. 3
〃恵美子	〃	S11. 4. 4
中川スマ	牛野1454	T 5. 2.20
中川美保子	〃	
石野ひかる	牛野	S60.11.12
長小田岩夫	島間1479	S11. 3.10
田中竹千代	島間	T15.10.20
小山	小平山	
野久保キミエ	小平山	S 7. 1. 9
久保田孝男	小平山4224	T15. 3.28
〃良子	〃	S 5. 2.15
中峯たよ子	中之上3911	S33. 1.15
崎田善次	田尾605	T10. 3. 5
峯山秀太郎	田尾269	M39. 6.11
船川文雄	仲之町	M39. 3.15

伝承者名簿（敬称略）　（各本文末にも掲載させていただいた）　平成6年3月

氏名	住所	生年月日
畠元秀二郎	仲之町	S 5. 4.25
山小田キト	仲之町63－2	T 4. 3.10
山下秋哉	島間4373－1	T12. 3. 1
浜上義男	島間4555	S 4. 7.30
鮫島正孝	島間4184	S 4. 3.25

茎永

氏名	住所	生年月日
柳田チエ	松原3771番地	M42. 3.28
向江秋夫	茎永阿惜経3460	M43. 9.24
岩下矢八 〃シズエ	茎永阿惜経3495 〃	T 3. 4. 1
雨田新七	雨田4771	M40. 1.11
雨田幸男	雨田4731	S18. 4.11
山下義勇	竹崎3361	
山下和江	竹崎3376	
山下つる	竹崎3355	T 8. 1. 1
山下しほ	竹崎3357	M40. 3.30
園田辰夫	宇都浦556	T 5. 6.20
大崎蘇市 〃アキ	宇都浦502 〃	M45. 3.26 T 2. 9. 2
田頭利一 〃ミヤ	中部974 〃	S 3. 2.20 S 9. 7.25
松本敬子	中部874	S 5. 7.28
園田キヨ	中之町552	M45. 4.13
梶原ミツ	中之町5番地	M38. 9. 1
迫田スマ	中之町	T 3. 3. 4
石堂キヨ	松原3718	T 3. 3.22
日高ユキエ	松原3716	
岩坪重秋	松原	T 3.

氏名	住所	生年月日
松原三男也	松原	T15.
羽生祐子	上里5562	S 9. 9. 8
有留次男	上里	
羽生三郎	上里	
浦門休作 〃トキエ	上里5640 〃	T 8. 6 T10. 3.30
田崎アキ	菅原	T 5. 3.25
上園繁 〃ミチコ	茎永4887 〃	S 1. 3.15

西之

氏名	住所	生年月日
笹川ちがこ	本村	S 6. 3.21
砂坂実	砂坂	S 7.
砂坂秋義	砂坂	S 9.
砂坂要次郎	砂坂3820	T11. 3.30
砂坂七蔵	砂坂3818	T10.12.21
砂坂福丸	砂坂3817－1	S3. 9.20
日高実雄 〃スミエ	田代314番地 〃	T 8. 3.20 T10. 7.10
徳永トヨ	田代231番地	T 8. 1.25
鮫島宗典 〃エミ子	田代220番地 〃	T11.11.15 S 5. 3.23
日高スミヨ	田代443番地	T11. 3.10
上妻武靖	田代556番地5	T14. 9.15
日高三男	前之原	
鮫島宗英 〃和子	前之原5576 〃	 S 2. 1.25
大脇助次郎	野尻4610番地	T 5. 3.21

伝承者名簿（敬称略）　（各本文末にも掲載させていただいた）　平成6年3月

氏名	住所	生年月日
平石鉄馬	野尻	T14.
〃 静柄	〃	S 3.
小脇忠男	野尻4589	T15. 1. 1
小脇伝	木原	T13. 7. 1
左尾栄子	木原4876－1	S12. 9.29
浜田ルリ	崎原2527	M44. 2.20
浜田藤太郎	崎原7527	M37. 1.30
小川親義	本村8213	T11. 2.16
岩坪スエ	本村8396	T 3. 2.20
日高亨二	下西目6515	T 8. 3.10
西村いずえ	下西目6435	S15.12. 3
徳永アキ	下西目6511－22	T 7. 1.20
日高静一郎	下西目6461	M33. 2.25
植田ツカ	平野1852	M42. 5. 4
河野了	平野	M40.
河野康人	平野	S20.
日高房雄	平野1736	S 8.11.20
〃 美波子	〃	S 8. 3.20
臼元アキ	小田	M43. 9. 8

平山

氏名	住所	生年月日
向井義一	広田2499	S14. 3.30
〃 ようこ	〃	S24. 1. 3
原キヨ	広田2453－1	T 3. 3.28
西田キミ	広田1449	M41. 4. 3
長田茂	広田2486	S 8. 3.31
原和幸	広田	S 5. 3.24
長田清治	広田2489	T14. 3.10
〃 アツ	〃	T 8. 4.10

氏名	住所	生年月日
徳永ヒデ	広田1256	M33. 3.15
向井正夫	仲之町1352	T 9.10.30
鮫島増夫	仲之町1352	M43. 3.31
山田キヨ子	西之町3453	S 9. 5.25
向井シヅエ	水牛3731	T元.11.10
西田カメ	西之町4028	M45. 7.19
西田洋一郎	西之町4005	S11. 7.13
〃 ムツ子	〃	S 8. 8.15
長田助義	浜田531	T12. 3.30
長田トミ子	浜田777	
山野ノリ	浜田774	S 4. 3.30
長田俊信	浜田877－1	S 2. 1.10
〃 ヌイ子	〃	S 2. 9. 1
平山イセ	浜田878	
長田実	浜田758	S 2.10. 5
坂口武志	浜田762－1	T 2. 4. 1
西田正夫	平山1937－2	
中畠ヤス	平山1833	T11. 7.29

下中

氏名	住所	生年月日
羽生繁保	真所	T10.11.10
羽生繁秋	〃	S27.9.23
寺内弥広	里	M.35.7.30
古市栄	郡原	T元.9.20
〃 イワ	〃	T3.2.20

伝承者名簿（敬称略）　（各本文末にも掲載させていただいた）　1990年3月・by Sonoda

地区名	氏　名	生年月日
河内	河野宗得	M40. 5.25
〃	河野ツネ	M42.11. 1
〃	古市啓喜	T 8. 1. 1
〃	古市美江子	T14.11. 7
大宇都	前田恒造	T 1. 8.25
〃	前田フジ	T 7. 3.20
〃	中村甚治	T12. 1. 6
〃	吉川スミ	T 4. 3.20
〃	中村スエ	M43. 2.12
上之平	岩川ミエ	M43. 1.11
〃	河口ノリ	M43. 6.20
〃	山野道雄	T12.11.28
焼野	関田種秋	T 5. 4. 1
上野	日高　伝	M34.11.20
〃	古市エミ	M44. 2.15
〃	古藤ハル	M36. 5. 1
〃	河野森義	M40. 5.23
本町	松下親法	S 8. 9.18
	遠藤友成	
広田	坂口カメ	M43. 1.12
〃	佐藤シナ	M45. 2. 5
〃	山田妙信	S 5. 1.17
〃	徳永　実	T12. 8. 4
〃	徳永道子	S 2. 3.15
〃	徳永ヒデ	M33. 3.15
〃	堂原キク	M35. 3.15
〃	西田キミ	M41. 4. 3
〃	西銘チエ	

地区名	氏　名	生年月日
浜田	山野甚八	M41. 3. 1
〃	長田　実	S 2.10. 5
〃	長田助義	T12. 3.30
〃	長田俊信	S 2. 1.10
〃	山口スマ	M36.10. 5
〃	山口みどり	S41. 9.17
〃	志柿幸政	S10. 4. 1
仲之町	向井二生	S 2. 1. 1
〃	向井喜之夫	T 3. 3.13
〃	向井ナルミ	T10. 3.25
〃	向井タズ子	T15.11.25
〃	今谷チヨ	
西之町	原　新吉	T 4. 3.20
〃	崎田義一郎	S 9.11.24
里	有留新内	M23. 5.25
〃	有留チマ	T10. 3.21
〃	寺内弥六	M35. 7.30
〃	寺内ツヤ	M40. 8.20
〃	寺内弥吉	T10. 3.10
真所	羽生通雄	M33.12.22
郡原	寺川キヨ	T12. 9.20
山神	川畑シナ	M32. 3.10
〃	篠山ミエ	M37. 6.28
〃	遠藤シオ	M40. 2.16
上立石	広浜ハナ	M44. 2.20
〃	広浜タネ	M38. 7. 6
〃	立石久義	M45. 3.20
〃	立石　勲	M40. 9.16

伝承者名簿（敬称略）（各本文末にも掲載させていただいた）

地区名	氏　名	生年月日
上立石	立石ツヤ	T 2. 8.10
下立石	立石彦吉	M34. 5. 1
大川	大川助蔵	M36. 2.10
向方	小山　久	T 7. 1.10
〃	西園政男	M39. 9.18
〃	河東時世知	M40.10.28
牛野	牛野スミ	M43. 6.10
〃	牛野春芳	T 7. 3.15
〃	牛野新志	M39. 8. 1
〃	長小田ミエ	S17. 2. 5
小平山	久保田孝男	T15. 3.28
〃	小山スミ	M43. 1. 5
大久保	河北伊豆	M39. 5.25
〃	久保田留雄	M36. 1.10
〃	岩坪国夫	
〃	西園シゲ	M45. 4.20
田尾	小山田睦子	M45. 1.20
〃	永手作義	M43. 7.20
〃	峯山秀太郎	M39. 6.11
〃	小山田鉄哉	T 3. 3.20
〃	小山田キト	T 3. 3.10
〃	関　ヤエ	T12. 5.15
仲之町	瀬戸口惣栄	T 2. 7.25
〃	川崎昭人	S 4. 3. 8
〃	島元　清	M39. 6.10
〃	船川文雄	M39. 3.15
〃	古市武徳	S12. 2. 1
〃	川元実清	M45. 1.10

地区名	氏　名	生年月日
仲之町	川村矩道	S 5. 3.15
〃	豊島　梓	M40. 1. 2
菅原	真田澤子	M13. 1. 5
〃	田崎丸彦	T 5. 3.29
〃	田崎アキ	T 5. 3.29
上里	羽生千代松	M39. 4. 5
〃	羽生祐子	S 9. 9. 8
〃	浦門キク	M41. 1.28
新上里	上浦ツヤ	M43. 1.11
雨田	雨田新七	M40. 1.11
松原	小川カズ	T 4. 3. 1
〃	石堂ウメ	M45. 2.20
〃	井上恵美	T12. 4. 1
〃	瀬戸山　因	M37.12. 3
〃	瀬戸山ちさ	T 2.11. 6
中之町	宮里重治	M39. 3.28
〃	馬場重則	M35. 4.29
〃	馬場モメ	M37. 4.13
〃	大崎鉄次	M35. 2. 1
〃	大崎アキ	T 2. 9. 2
〃	梶原ミツ	M38. 9. 1
宇都浦	柳田トヨ	M37.11.25
〃	大崎蘇市	M45. 3.26
〃	園田辰夫	T 5. 6.20
〃	園田フユ	T 3. 3.20
〃	園田リメ	M35. 4.25
〃	後迫利春	T 5. 1.12
〃	後迫妙子	T11. 1.20

伝承者名簿（敬称略）（各本文末にも掲載させていただいた）

地区名	氏　名	生年月日
阿多羅経	向江秋夫	M43. 9.24
〃	向江　勝	S 7.12.12
竹崎	山下スエ	M39. 2.10
〃	〃シヲ	M40. 3.30
〃	竹崎荘の御主人	
〃（西之表より）	下村重晴	S31.12.11
〃（西之表より）	瀬下勝宏	S40.10.25
砂坂	砂坂福丸	S 2. 9.20
〃	砂坂為次郎	M37. 4. 1
〃	砂坂岩碩	M43. 2.19
〃	砂坂キヨ	T 1. 8.15
野尻	大脇キク	T10. 8.12
木原	大嵐イチ	M43. 1.10
下西目	日高静一郎	M33. 2.25
前ノ原	日高三男	T 6. 3.10
田代	河野利夫	M38. 3. 8
〃	鮫島ケサ	M34. 8.16
〃	鮫島宗典	T11.11.15
小田	臼元実男	T10. 3.15
〃	小脇一彦	M42. 4.10
〃	小脇ツギ	T 5. 2.25
本村	岩坪未也	M43. 6.20
〃	岩坪スエ	T 3. 2.20
〃	岩坪睦男	S20. 2. 1
〃	中脇ケイコ	S10. 1.12
崎原	大脇平蔵	M34
〃	大脇トミ	M36. 6.20
〃	浜田友衛	T10. 3. 1

地区名	氏　名	生年月日
平野	日高寅夫	T15
〃	上田ツガ	M42. 5. 4
〃	日高留哉	M37. 3.23
〃	植田ツガ	M42. 5. 4
〃	中脇ツル	M39. 4.15
〃	日高矢太郎	M34. 4. 1
〃	徳永重幸	M43. 3.30
〃	大脇市彦	T 3.11.28
〃	徳永　秋	T 1.10. 5
〃	河野　了	M40. 1. 5
〃	河野永源	S20.11.29
〃	河野三枝子	S18. 4.30
本村	浜田ツユ子	S 4. 3.10
〃	大脇ツギ	M40. 2. 1
中種子町		
梶潟	折戸トメ	M39. 4.12
〃	折戸ユキ	S 6. 2.10
〃	八汐重光	S24. 4. 8

編集後記

『南種子町の民俗』がやっとできました。平成二年の三月、学生を中心に卒業生、研究者も加わって上中（かみなか）に一週間程合宿して調査したものをまとめた報告書です。

調査期間中、町ご当局特に教育委員会には大へんお世話になりました。その情況は、本書「『南種子町の民俗』の調査方法と実施」の中に記してあります。

平成二年の調査は民俗の中でも無形民俗を中心に町内各地を回って調査しました。本書では、その結果を、村落組織、漁業、衣食住、人生儀礼、年中行事、信仰、歴史と民俗、口頭伝承の項目に分けて収録しました。学生たちは各人、テーマを設定して、皆で全村落を回ってたくさんの方々から話を聞いたり、実際に見たりしたのですが、南種子町の村落数は多く、しかも伝承している民俗は豊富でありますので、短期間に収録できる量はしれています。本書に収録したものは学生たちが実際に伝承者に会って記録したものであって、この記録から洩れたものも多いと思われます。

又、調査者には初心者もあれば、大学院生のようなベテランもいるというぐあいで、報告にはムラもあるかと思います。それに方言の聞き違いもあるかもしれません。本書は校正を三回いたし、さいごに念校を見ましたので、四回見たことになります。その間に方言等のまちがいは直したつもりですが、もしまだありましたら、ご教示下さい。

ところで、南種子町は種子島の南部を占める町で、西岸は東シナ海に面し、東岸は太平洋を望むという面白い立地をなしています。南端の門倉の岬は、昔からカドクラザキ（門倉崎）といってきましたが、近頃はかっこよくカドクラミサキ（門倉岬）という人がふえています。その地は東シナ海と太平洋の接する南の海めがけてぐいと突っ込んだ形になっていて、右には屋久島が望見でき、左の方は広々とつづく大海原です。ただそれだけですが、スケールの大きい眺望で全国的に見ても屈指の場所ではないかと思います。

しかも、左手前を見ると、岬から白砂青松の浜が湾曲しながら打ちつづく先には宇宙センターの白い塔が見える。そして、眼を閉じて思えば、天文十二年（一五四三）の昔、ポルトガル人を乗せた船が漂着したのはすぐそこの先の小浦であった。鉄砲の伝来で日本史は大きく転回して行った。……今、また、世界の宇宙時代の到来を告げる宇宙センターが目前にある。門倉岬はなんと壮大な夢の岬であろう。岬の先端には、御崎大明神（別名島尾大明神）をまつり、古来、「国土安穏（あんのん）」の踊りを秋祭りに奉納してきた。

南種子町の特色はこれだけにとどまらない。まだまだ、すばらしいものをたくさん秘めている。各地から集っている若い学生たちがこうした誇りある地で一週間をすごし、人びとと歓談しながらその貴重な伝承を記録できたというのは実に幸せなことであった。

さいごに、お忙しい中をいろいろお話を聞かせて下さった伝承者の方々、又、南種子町文化財保護審議委員会の先生方、案内して下さった方々など、たくさんの方々にお世話になりました。ありがとうございました。

平成二年調査時の南種子町教育委員会の社会教育課長の古市正志さん、体育文化係長の立石靖夫さんほか同課の皆さん方に面倒をみてもらいました。又、平成六年調査時には、崎田宏社会教育課長さんならびに同課の皆さんにいろいろと大へんお世話になり、ぶじ調査を終了できました。ここに厚く御礼申し上げます。（下野）

南種子町民俗資料調査報告書Ⅰ

『南種子町の民俗』

平成二年（一九九〇）三月調査
平成七年（一九九五）三月二十五日発行

編集　下野敏見
鹿児島大学法文学部「比較民俗学」研究室内

発行　南種子町教育委員会
鹿児島県熊毛郡南種子町中之上二七九三一一
〒八九一一三七　TEL　〇九九七二一六一一一一一(代)

印刷　種子島新生社印刷
鹿児島県西之表市西之表一六五一六
〒八九一一三一　TEL　〇九九七二一二一〇四七六